獨逸語大講座

第五卷

關口存男監修

Der Große Kursus

der

Deutschen Sprache

Band V.

Gaikokugo Kenkiuscha: Tokio

發音に關する諸種の知識

（一幕二場）

無斷上演を禁せず

關口存男

第一場　教室

【大先生】 エー、今日は少し發音の話をしませう。發音は勿論ドイツ語を習ふ抑々の最初にやるべき事ですが、ドイツ語の發音が割合にやさしいのとそれにもう一つは、格とか變化とか云つた樣な厄介なものが應接間の入口にうんと控へてゐるから、發音の玄關であんまりゆつくりして居ると云ふ譯には行かなかつたので、第一學期の最初では、極くさつと豫備知識を授けたにすぎません。今日はつまりそれを固め、同時に發音に關する一般的法則を特に意識して見ようと云ふわけです。

1. **Silbentrennung**（綴の切り方）　諸君はもう大分色んな事を習つてしまつた後ですから、少し根本的なところから話を起こしても凹たれないでせう。これから話さうとする「綴の切り方」と云ふ奴は、發音問題の根本に横たはつてゐる「綴」(Silbe) といふものに對して注意を喚起せんがための手段でもあり、同時にまた、實際にその必要が起つて來るから一寸述べて置くのです。たとへば手紙を書く際なぞに、行の終に來て、どうしても一字が書き畢へられぬ場合があります。その時に、その一字を隨意な所で中斷して次の行へ移つて宜しいかと云ふに、決してさうではありません。その時には「綴」といふものを尊重しなければならない。一つの綴が上と下とに分かれてしまつては困ります。たとへば Deutsch といふ字を De-utsch なぞと切つてしまつてはいけません。Deutsch は一字であると同時に一綴なんですから、これはもうどうしても二つに切るわけには行かないのです。

ところが若し、Deutsche（ドイツ人の女）だとすると、これは「ドイ」「チェ」と二綴になりますから、書き切れなかつたら Deut-sche と切つて構ひません。

すると Deutſ=che はいけないか？ Deu=tſche ではどうだ？ と云ふ疑問が當然起つて來なくてはなりません。——それらはみんな不可ないので、Deutſche は必ず Deut=ſche と切ります。綴の切り方は、これだから矢張り一通り研究しておかなくてはならないのです。

2. Inlaut（中間子音）について

今述べた Deutſch ですが、單に一綴で Deutſch といふ時には、tſch は Auslaut [尾音] と云ひます。（D. の方は Anlaut [頭音] です。）ところが、Deutſche または Deutſcher 等と二綴字になると、tſch は二つの母音の間に挿まつてゐるから、これを Inlaut [中間音] と呼びます。これは、たとへば g は Anlaut か Inlaut の時には濁音となり、Auslaut の時には清音になると云つた樣な區別をする時に必要な概念です。

一寸斷はつて置きますが、今話してゐるのは「一概念」を含む「一字」についてなんで、たとへば Hausarzt とか erachten とか云つたやうな「複合詞」はまた別です。第一 Hausarzt は Haus=arzt〔はオス・アールツト〕で、〔はオザールツト〕とつづけては讀みません。erachten も er=achten [エル・あハテン] であつて〔エらハテン〕ではありません。それ故、Hausarzt の s も、erachten の r も、全體として見れば中間にあるやうでも、實は Haus または er= の Auslaut なんです。

中間音といふ概念を說明したのは、これが綴を切る時に殊に厄介だからで、これからは、なる可く獨逸人そのものの發音心理の中へ這入つて考へて行きませう。さうでなしに、これは斯う云ふものと思へ！ と云つただけでは、やはり滿足が行かないでせうから。

3. 分綴する Inlaut と分綴せぬ Inlaut

ſch, tſch, ch, pf, x, dt, ph, th, ss, ck, ff, tt, ll 等は、字は二字三字四字に書きますが、發音そのものは、決して前のと後のとを順に發音するのではなく、分けがたい一つの發音です。それに反して x は一字でありながら、實は二つの子音です。また chſ [クス、x と同じ] ft, ſp, rl, tr, ſchw, ſchm, ſchn, mt, rt 等は、字も二つ以上、發音も二つ以上です。

(1) ところが分綴の際には、さうした事にかかはらず、概ね次のやうな分類を行ふことが出來ます。

分綴せぬ中間音	分綴する中間音
ſch*	tſch* = t=ſch
ch*	pf* = p=f
ph	x* = t=s
th	ſp = ſ=p
dt*	ft = ſ=t
x	chſ = ch=ſ
ß	ck* = k=k

殊に * の印をつけたものは、はつきりと覺えて下さい。ck を分けるときに c=k としないで k=k とするのなぞは特に重要です。

Fi=ſcher	漁夫	Dol=met=ſcher	通譯
Bü=cher	書物	Gip=fel	頂上
Pro=phet	豫言者	Kat=ze	猫
Goe=the	ゲーテ	Knoſ=pe	蕾
Stä=dte	都會 (pl.)	Mas=ke	マスク
Ma=xi=mum	最高限度	Ach=ſe	軸
Stra=ße	街	druk=ken	印刷する

(2) 中間音がもし一字であり一音である時には勿論分けられませんから、Fiſcher, Bücher 等の例にならつて、その子音は後の綴の方へつけます。

Blu=me	草花	Ro=ſe	草花

(3) 子音が二つ以上あつて中間音をなしてゐる場合は、すべて Mas=ke, Knoſ=pe 等にならつて、「後に來る母音と直接に結びついて一音をなす子音」のみを後へ殘して、それ以外はすべて前の綴につけます。

Dam=pfer	汽船	Seuf=zer	溜息
at=men	吐息をつく	Kir=ſche	櫻ん坊
Män=ner	男たち	ſeufz=teſt	汝は溜息をした
Tan=te	叔母	Kar=te	カルタ

但し ſt は後の方へつきます。

Ham=ſter	やまねずみ	Fen=ſter	窓
Herb=ſtes	秋(の)	gar=ſtig	厭な

此の點で、たとへば英語の切り方とは主義がちがつてゐます。英語は、語尾その他の文法を尊重して、語源的 (etymologiſch) に切ります。たとへば end-ed (終つた) 等。ドイツ語は en=de=te と切ります。勿論「終る」といふ動詞の語幹は end= (英 end-) で、その後につくのは語尾ですから、意味を考へれば英語の方が合理的かも知れませんが、實際の發音を考へたならばドイツ語の切り方の方が合理的です。

但し、前にも一度云つたやうに、複合詞の際は別です。endete なぞは、たとへ文法的には分解できても、複合詞だとは謂ひません。それに反して、be=trachten 等は立派な複合詞です。

(4) 中間音がサイレントの h である時も、(2) に從ひます。サイレントの h は、氣取つて發音する際なぞには、發音することがある位ですから、取り扱ひ方はやはり普通の子音と同じになるのです。

ru=hen	休む	ſe=hen	見る
Rei=he	列	Mü=he	努力

4. 複合詞 Composita

複合詞は、今まで述べて來たものとは違つて、意味の構造を尊重して、即ち語源的に綴を切ります。また大抵の場合には、發音の方法そのものが既に語源を尊重してなされますから、結局はつまり同じことになるわけです。たとへば Abart (變種) といふ字があります。これは Ab= といふ前綴 (派生を意味す) と、「種類」といふ Art とから出來てゐます。それ故、Abend〔あーベント〕のやうには讀まないで、Ab=art〔あップ・アールト〕と讀み且つ分綴します。Abend は A=bend です。

Ab=ort, m. 便所 〔あップ・オルト〕 (アボルトに非ず)
Stand=ort, m. 所在地 〔シュたント・オルト〕 (シュタンドルトに非ず)
Mittag=eſſen, n. 晝食 〔みッターク・えッセン〕 又は 〔みッターハ・えッセン〕 (みッターゲッセンに非ず)

Dreh=orgel, f. 手廻しオルガン 〔どれー・おルゲル〕 (ドレーホルゲルに非ず)
be=urteilen 判斷する 〔べうルタイレン〕 (ボイルタイレンに非ず)
weg=eilen 急ぎ去る 〔ゐック・アイレン〕 又は 〔ゐヒ・アイレン〕 (ゐガイレンに非ず)
Puls=ader, f. 動脈 〔ぷルス・アーデル〕 (ぷルザーデルに非ず)
Schau=ſpiel, n. 芝居 〔シやオ・シュピール〕 (シやオシュピールに非ず)

5. 獨逸語の母音は一種の破裂音 (Verſchlußlaut) なり

t, k, p の三音には或種の共通性があつて、三つとも破裂音、もしくは爆發音です。t…… と準備をしてゐる間は、口の中が全然沈默して、ta! と云ふと同時に破裂する。d, g, b も略同樣です。

ところが、ドイツ語では、a, o, u 等の母音まで一種の破裂音なのです。たとへば——

an einem Ort. (ある場所に)

これを、たとへば佛蘭西人や英國人に發音させて見ると、——日本人でもよろしい——「アンナイネモルト」とやります。ドイツ語の發音はそれではいけない。「アン・あイネム・オルト」と、a=, ei=, o= の所を一つ一つぷッつりと切つて破裂させなければ不可ません。

英人は、たとへば there is, there are 等の二字を、つないで發音します。「ゼアリズ」「ゼアラー」などと。ドイツ語ではそれはやりません。es ist は「エス・イスト」であつて「エシスト」ではありません。何故さうならないかと云ふと、それは第一母音がすべて破裂音だからです。といふよりはむしろ、ドイツ語の a や o は、その前に何か破裂を意味する子音をつけなければならない所なのです。

だから、たとへば「便所」と云ふ Abort は、極くルーズに發音すれば「あッボルト」に近寄つて聞こえますが、ほんとうは「あッポルト」ではなくて、やはり「あップ・オルト」です。少くともドイツ人の發音意識は、「あッポルト」なぞと言つてゐるつもりではなく、「あップ・オルト」と云つてゐるつもりなのです。

發音意識と、「聞こえ方」との間に一寸した差が生ずると云ふ事は、何處の國語にでもある現象です。たとへば日本語にもそんな事が澤山あります。「澤山あります」の「あります」は、我々の發音意識では arimasu のつもりですが、大抵の人の「あります」は arimas ときこえます。西洋語の s と同じやうに su を發音してゐながら、別に u を一字省いたつもりではないのです。Abort が時とすると「アッボルト」にきこえるのも、つまりはさう云ふ現象なので、そんなのを正式だと思つてはいけません。

6. 例外 但し、Keine Regel ohne Ausnahme (例外なき規則はなし) と云ふ諺がある通り、多少の例外はあります。けれども、反對に考へると、規則があつてこその例外なんで、例外があると云ふ事こそ規則の存する證據です。Keine Regel ohne Ausnahme といふ諺も、讀み樣によつては「例外なくしては規則なし」とも讀めます。變な諺ですね。

たとへば hinein, herein 等は、hin, her の後に ein が附いたのだから、「ヒン・あイン」「ヘル・あイン」と讀みさうだが、これは例外で、hin-, her-, と前置詞の結合は必ず一字として、つづけて讀みます。

herauf	[へらオフ]	hinan	[ヒなん]
herüber	[ヘリゆーベル]	hinab	[ヒなッブ]

その他、たとへば beobachten (觀察する) なぞは、分解すれば be-ob-ach-ten ですが、習慣として、「べおーバハテン」と讀み、「べおーブアハテン」とは讀みません。

7. Bindestrich 繫符 [-] 複合詞を二部分に分けたり、たとへ複合詞でなくても、たとへば On-kel (伯父) 等、單なる一字を二綴に分けたりする時には Trennungszeichen (離符) または Bindestrich (繫符) と名づけられる - の符を用ひます。

此の記號は、必ずしも一行の終で書き切れなかつた時に用ひるばかりではなく、その他にも用法があります。

(1) 一字に續けて書くにしては、餘りに關係が薄弱だと思はれるやうな複合詞を造る時に用ひます。たとへば——

New-Yorker Bankenviertel	紐育の銀行街
Fünf-Tage-Woche	五日一週制度

Kommunisten-Krawall	共產黨騷亂
Ueno-Park	上野公園
Europa-Politik Italiens	伊太利の歐洲政策

では何を一字で書いて何を繫符でつなぐか、と云ふ事は餘程の判斷を要する問題で、五日一週制度なぞも、もし實現されるか、それとも世人がやかましく云ひ出して相當名高くなつたら、恐らくは Fünftagewoche と書くやうになるでせう。

(2) 二字以上の字の共通部分を省略する時にも用ひます。たとへば Kriegs-schiff (軍艦) と Handelsschiff (商船) とを一緒に書くと、

Kriegs- und Handelsschiff.

または、もつと文章の中へ入り込んで、「戰前の時代にも、また戰後の時代にも」と云はうとすれば、

Sowohl in Vor- als auch in Nachkriegszeit.

なぞと云へるわけです。

8. 規定詞について 今述べた Kriegsschiff と Handelsschiff とを並べて考へると、その共通の部分、即ち Schiff, n. (船) といふ字が、その兩方の字の基礎になつてゐます。Kriegs-schiff は「船」の一種であつて、Krieg (戰爭) の一種ではない。

それと反對に Belagerungskrieg (要塞戰) と Stellungskrieg (陣地戰) とを比べて見ると、こんどは Krieg といふ字が兩方の土臺になつてゐます。

Filmpropaganda と云へば、それはフイルムを以てするプロパガンダで、Propagandafilm と云へば、それはプロパガンダ用のフイルムです。

要するに、ドイツ語は、英語や日本語と同じ樣に、基礎詞の方を後に置いて、それを限定する規定詞の方を前につけます。

「あたりまへぢやないか」?——いや、あたりまへぢやありません。それと正反對の場合もあります。たとへば「村田式」と云はうとすれば、System Murata となります。Murata-System とも云ひますが、System Murata と云つた方が謙遜でもあり氣が利いてもゐます。同樣に「村田の場合」は Der Fall Murata です。Murata-Fall とはあまり言ひません。同樣に「第

二號室」は Das Zimmer Nummer zwei です。Zwei-Nummer-Zimmer とは決して云ひません。

これらは先づ特殊な例ですが、極く普通な場合では、たとへば二格の際を考へてごらんなさい。「失業者の洪水」は Die Flut der Arbeitslosen です。Arbeitslosenflut は少し變です。必ずしも日本語通りの順にはなりません。日本語は、一種ゆとりの取れない、拔き差しのならない論理的な語順を持つてゐて、規定詞は必ず前に來るのですが、外國語はさうではありません。

けれども、まあ、二格等の場合を除けて、一字に書く場合だけについて考へると、規定詞は必ず前に來ます。そして、複合詞の性は、基礎となる、即ち最後に來る詞の性に從ひます。

9. **Betonung（アクセント）は規定詞の方にあり** 規定詞と云ふ事がわかると、同時にアクセントの問題もわかります。即ち、複合詞に於ては、アクセントは規定詞の方にあるのです。Ab-ort は「あッブ・オルト」であつて「アッブ・おルト」ではありません。

Ausland	[あオスラント]	外國
Mitschuld	[みットシュルト]	共犯
Anfang	[あンファング]	初
Übermensch	[ゆーベルメンシュ]	超人
Vogelnest	[フォーゲルネスト]	鳥の巢
Wörterbuch	[ゔぉルテルブーフ]	字引
Rundfunk	[るントフンク]	ラヂオ
Flugzeug	[フるークツォイヒ]	飛行機

但し、非分離の前綴に限つて、アクセントを置きません。これは既に諸君の知つてゐる範圍です。

Verstand	[フェルシュたント]	悟性
Vernunft	[フェルぬンフト]	理性
verstehen	[フェルシュてーエン]	理解する

erkennen	[エルけンネン]	認識する
Erkenntnis	[エルけントニス]	認識
betrachten	[ベトらハテン]	觀察する
Betrachtung	[ベトらハトゥング]	觀察
Entwurf	[エントヴルフ]	計畫

分離したりしなかつたりする前綴 hinter-, über- 等については、そのアクセントの在場所と共に既に一度述べた事がありますから、玆では省略します。(第二卷文法 156 頁下の表)

之を要するに、複合詞にあつては、基礎となる單語よりも規定詞となる單語の方を强く發音すべきである。ただ一つの例外は、er-, be-, ver-, ent-, zer- 其他の非分離前綴で、こいつは、意味の力が弱いから、規定詞としては取扱はず、基礎詞の一部として扱ふ——斯う云ふ事になつて來ます。

10. **Einklang（あインクラング） と ein Klang（アイン・クらング）** だから、發音を間違へると、時には飛んでもない事になつて來ます。ドイツ人に向つて「アイン・クらング」と、「ら」に力を入れて發音すれば、ein Klang（一つの響き）だと思ふでせうし、「あインクラング」と、「あ」に力を入れて發音すれば、Einklang（調和）だと思ふでせう。

同樣に、erblich といふ字がありますが、若しこれを「エルブりヒ」と「り」に力を入れて發音すれば、erbleichen〔蒼ざめる〕の過去 erblich だと思はれるでせう。ところが、その外に「世襲の」「親ゆづりの」と云ふ別字があります。併し其の時には、erb- が Erbe（遺產）の省略形で、-lich は形容詞の語尾ですから、「えルブりヒ」と「え」を强く發音しなければなりません。また b は、Auslaut [尾音] になりますから、p の發音になります。

11. **Unglückszeichen [凶兆]**
[Un-glücks]-[zei-chen]
〃 ‿ ′ ‿

Unglück [うングりュック] (不幸) は、それ自身が既に複合詞で、Un- (不) と Glück (幸) との二部分からなつてゐます。Zeichen [ツぁイヒエン] は、複合詞ではないが、-en といふ語尾があるから、Zei- の方にアクセントがあります。此の二つが寄つて「凶兆」といふ Unglücks-zeichen を構成すると、

さあアクセントが大變です。主なるアクセントは Un- にあつて、副のアクセントが zei- にあるといふ事になつて來ます。

辭書なぞでは、それがどう示してあるかと云ふに、大抵の辭書では — や ⏑ 等の印で各綴を現はします。— は長母音のある綴を意味し、⏑ は短母音のある綴を意味します。たとへば、日本語を例に取つて、これをドイツ語式に現はして見ると、

加藤三郎 (Ka-tō-sa-bu-rō) [⏑ — ⏑ ⏑ —]
大山行雄 (Ō-ya-ma-yu-ki-o) [— ⏑ ⏑ ⏑ ⏑ ⏑]
太田幸藏 (Ō-ta-kō-zō) [— ⏑ —. —]

Un-glücks-zei-chen をこれで現はすと [⏑ ⏑ — ⏑] となります。

扨てこれにアクセントの印を入れるのですが、まづ基礎詞の中のアクセント、即ち Zeichen の Zei には ′ を用ひ、規定詞のアクセントには ″ を用ひるのが普通です。即ち ⏑ ⏑ ⏑ ⏑ となります。

時には ‴ や ⁗ が必要になることがあります。たとへば Lebensanschauung (人生觀) といへば、まづ基礎に schauen といふ動詞があります。それは ⏑ ⏑ で現はせます。意味は「見る」です。それから anschauen [⏑ ⏑ ⏑] (觀ずる) といふ複合詞が出來ます。「觀」といふ名詞は Anschauung, f. [⏑ ⏑ ⏑] です。次に、別に Leben [— ⏑] (人生) といふのが規定詞としてこれに附くと、Leben の Le- は Anschauung の An- よりも強い筈ですから、結局 Lebensanschauung [‴ ⏑ ⏑ ⏑ ⏑] となります。それを複數にして、-ung よりも弱い -en をつけると、アクセントが順々に一段づゝ昇つて、Lebensanschauungen [⁗ ⏑ ‴ ″ ′ ⏑] となるわけです。

12. 代名詞主語と定形

Es regnet. (雨が降る)
エス れーグネット

An-, Ab-, Auf-, Ein- 等の分離前綴は必ず強く發音するといふ事も重要ですが、其の他にもう一つ重要なのは、代名詞と、動詞の定形が並ぶ時に、「別に代名詞を强調したい時でなければ」、アクセントは普通定形の方にあると云ふ、此の事です。

英語では、たとへば Yes, I see! と云つた樣な際に、一寸 I の音階が see よりも上るやうに聞こえる事があります。これは、第一「音階」が上るので、

「アクセント」の問題とは直接關係はありませんが、たとへ其の點は假に問題外として考へても、ドイツ語では決してそんな現象はありません。

er kommt は kommt の方を强く發音します。ich will, sie ist, wie gehen 等、みんな同樣で、別に特別な事情がなければ、必ず定形動詞の方を代名詞よりも强く發音します。

もし代名詞の方を强く發音すると、たとへば er kommt を「えール・コムト」と發音すると、「彼奴は來る」即ち、「は」に力が這入つて、他の人間ではなくて、彼「が」來る、もしくは、彼「は」來るが他の人間はどうか知らない、と云つたやうな事になります。

新聞にこんな一口噺が出てゐました。

„Ach, Erich, die Köchin hat gekündigt."

„Aber warum denn?"

„Du bist schuld, sagt sie."

„Wieso ich?"

„Du bist heute am Telefon so grob zu ihr gewesen."

„Die Köchin? O Gott, ich dachte, du warst am Telefon."

「大變よ、エーリヒ、女コックが暇を呉れつて言ひ出してよ。」

「そりや一體どうしてさ。」

「あなたが不可ないのだつて、さう言つてたわよ。」

「俺がどうして。」

「今日電話であの子に何か失禮な事を仰言つたでせう。」

「女中だつたのか? こいつあ不可ん、俺はまた「お前が」掛かつてるのだと思つたんだ。」

エロ味 (das Erotische) たつぷりですね。

du にアクセントを入れて讀ませるためには、この通り Sperrschrift (第二卷文法 176) にする必要があるのです。

13. 否定前綴 un- にアクセントが有るか無いかで, 否定の意が違つて來る

これは既に四卷文法の 398 項で述べましたから省略しますが、試みに字引を開いて un- のところにある形容詞を見渡して、そのアクセントが規定詞 un- にあるのと、基礎詞の主なる綴の方にあるのとが如何に入り亂れてゐるかをごらんなさい。こんな區別がとても覺はつた話ぢやない、と思はれるでせう。けれども、亂雜なやうで

も其の間には、おのづから方針といふものがあるので、その根本にある最も重要な、意味上の區別を 398 項で述べたわけです。

14.

die Heimat	[はイマート]	故郷
die Heirat	[はイラート]	結婚
der Monat	[もーナト]	月(年月の)

獨逸語の字は大抵強く發音する一綴が中心になつて、その「うしろ」へ諸種の語尾がついてゐるものです。その語尾は -en, -er, -e, -el, -ung, -chen. -lein, -in 等、たくさんありますが、少し變つた -at, -eis, -eit, -em, -ut 等になると、うつかりすると根本的な規則の適用を忘れるものです。たとへば、一月二月といふ Monate を「モなート」なぞと發音する間違ひはよくあることです。Arbeit (勞働) なぞも同樣です。次にあげる字には特に注意を要します。

die Gegend	地方	[げーゲント]
die Arbeit	勞働	[あルバイト]
die Ameise	蟻	[あーマイゼ]
das Kleinod	寶	[クらイノート]
die Armut	貧乏	[あルムート]
der Ahorn	楓	[あーホルン]

外來語は、まあ大抵おしまひにアクセントがある事が多いから (たとへば Alphabet アルファベート) 反對に下のやうな、アクセントが獨逸語的なものは注意する必要があります。

Almosen, n.	施物	[あルモーゼン]
Alkoven, m.	側房	[あルコーヴン]
Alkohol, m.	アルコール	[あルコホル]
Publikum, n.	公衆、江湖	[ぷーブリクム]

眞の外來語のむつかしいものについては、これはまた少し系統的に話す必要がありますから、また他の機會にゆづります。

殊に念を入れて置きたいのは Arbeit, Heirat, Ameise, Monat 等で、たとへば Ameise なぞは、用意の無い人に發音させると、判で壓したやうに -mei-

にアクセントを入れて「アまイゼ」と云ひます。また次のやうに、語尾が附く際には殊に注意しなければなりません。

arbeiten	働く	[あルバイテン]
heiraten	娶る	[はイラーテン]
Monate	數個月	[もーナテ]

同時に例外として Kleinod (寶) を記憶して頂きたい。即ち、これは複數になるとアクセントが一綴後の方へずれて、Kleinodien [クライのーディエン] となります。同時に -ien といふ、外來語式な語尾をとつて、それを「イ・エン」と二綴に發音します。

15.

Unterscheidung (ウンテルシやイドウング)	と	Unterschied (うンテルシート)

「區別する」と云ふ動詞は unterscheiden [ウンテルシやイデン] で、-schei- の方にアクセントがありますから、その事實のみで既にこれが非分離動詞だと云ふ事がわかるわけです。ところが、此の動詞の語幹 unterscheid- の後に語尾を附けて、名詞を作ることが出來ます。その方法は——

(1) 不定法の儘を、即ち -en の語尾を用ひると中性名詞が出來る。das Unterscheiden [ウンテルシやイデン]

(2) -ung の語尾をつけると、女性名詞が出來る。die Unterscheidung, f. [ウンテルシやイドウング]

(3) -er の語尾をつけて、人を意味する男性を作る。der Unterscheider [ウンテルシやイデル] (區別する人)

これらはすべて、「語尾をつける」と云ふ點と、「不定法の儘の語幹を變へずに用ひる」と云ふ點で、共通の性質を持つてゐます。要するに、動詞の不定法を基として出來た派生形態です。これらのものは、そのアクセントは、不定法の場合と同じ個所にあります。

ところが、派生形態ではなく、(語源的に古へに遡れば勿論派生したものには違ひありませんが) 現今では、全然獨立した別形態と稱すべきものがあります。それは——

(1) Unterschied [うンテルシート], m. 等の如く、語幹そのものが ei から ie に變り、同時に何等語尾のつかないものがあります。斯ういふ字は殆んど

全部男性です。そして同時に、アクセントが規定詞の方にあります。unter-scheiden の場合とは反對です。つまり此の事實を述べるのが此の項目の主眼です。實際、此の事を知らないと、unterscheiden は「ウンテルシヤイデン」だのに、Unterschied はどうして「ウンテルシート」と發音しないのだらうか？そして Unterschied が「ウンテルシート」なら、Unterscheidung はどうして「ウンテルシヤイド。ング」ではないのか？と云つたやうな疑問が生じ勝ちです。

(2) その次には、やはり語幹が變じて、-e の語尾を取る女性字があります。übergeben (手交する、讓り渡す) は「ユーベルゲーベン」で非分離ですが Übergabe (讓渡) は「ゆーベルガーベ」です。

(3) 次は、一寸厄介になつて、本當は語源的に理解する必要があるのですが、極く實用的に云ふと、動詞の語幹に -t の語尾をつけた女性字がかなりあります。たとへば kommen に對する Kunft, f. [Zukunft, f. 將來、等] kennen, können に對する Kunft, f. (術) mögen に對する Macht, f. (勢) なぞ。——これらも、動詞の不定法とは直接に關係がないものと見なされてしまつて、アクセントは、たとへ不定法が非分離動詞でも、これらの女性字では前の方、即ち規定詞 (前綴) の方へ移つてしまひます。たとへば unterschreiben (署名する) は「ウンテルシュらイベン」と發音しますが Unterschrift (署名) は「ウンテルシュリフト」です。

少し厄介ですから、以上三種の例外中主なるものを表にしておきませう。(玆で初めつから問題になつてゐる厄介な前綴は、wider-, unter-, über-, um- の四つです。(wieder- といふのがもう一つあるわけですが、これには偶然そんな厄介がありません。)

アクセントが語幹に		アクセントが前綴に	
unterscheiden	區別する	Unterschied, m.	區別
unterrichten	授業する	Unterricht, m.	授業
unterschreiben	署名する	Unterschrift, f.	署名
widerstehen	抵抗する	Widerstand, m.	抵抗
umstehen	取り卷く	Umstand, m.	事情
übergeben	渡す	Übergabe, f.	讓渡
überfallen	襲ふ	Überfall, m.	奇襲
überblicken	見渡す	Überblick, m.	概觀

これらは、「非分離」であると同時に、時にはまた字によつて分離することのあるものに限られるので、本當の非分離前綴 ex-, be- 等には決してこんなことはなく、何時如何なる際でも語幹の方にアクセントを置きます。

16. **Komödie** [喜劇]
コめーディエ
(コメディーに非ず!!!)

外國語から來た字の事はどうしても別に改めて詳しく講義しないと無理ですが、アクセントの話が起つて來た序でに、極く必要な事だけ一寸述べておきませう。

外來語 (主としてギリシヤ語ラテン語) に -ie の語尾が非常に多い事は諸君も御存じでせう。

Philosophie	哲學	[フィロゾフぃー]
Soziologie	社會學	[ゾツィオロぎー]
Photographie	寫眞	[フォトグラフぃー]
Enzyklopädie	百科全書	[エンツュクロペデぃー]
Epidemie	流行病	[エピデみー]
Magie	魔法	[マぎー]

これらの -ie はすべて希拉の -ia に相當するのですが、アクセントは、凡て -ie にあります。

ところが、短い綴のものには、さうでなく、-ie のも一つ前の綴にアクセントがあつて、同時に i と e とを別々に「イエ」とわけて發音するのがあります。ドイツ語の發音で、よく間違ふのは、これらの語です。次に、少し澤山例をあげます。初めの方にあるもの程あたりまへの單語ですから、特にはつきりと口調を馴らして下さい。

Familie	家庭	[ファみーリエ]
Linie	線	[りーニエ]
Lilie	百合の花	[りーリエ]
Materie	物質	[マてーリエ]
Komödie	喜劇	[コめーディエ]
Tragödie	悲壯劇	[トラげーディエ]

Historie	歴史	[ヒストーリエ]
Folie	箔（金銀の）	[フォーリエ]
Arterie	動脈	[アルテーリエ]
Bestie	野獣	[ベスティエ]
Ferien, pl.	休暇（長期の）	[フェーリエン]
Arie	歌劇の「アリア」	[あーリエ]
Mumie	木乃伊	[むーミエ]
Glorie	榮光、後光	[グろーリエ]
Statue	立像	[シュたートゥエ]
Prämie	配當金、賞與	[プれーミエ]
Akazie	アカシヤ	[アかーツィエ]
Azalie	躑躅	[アツぁーリエ]
Dahlie	ダリヤ	[だーリエ]
Pinie	傘松	[ぴーニエ]
Päonie	芍藥	[ぺおーニエ]
Petersilie	おらんだせり	[ペーテルじーリエ]
Grazie	(美の女神の名)	[グらーツィエ]
Furie	(復讐、狂亂の女神)	[ふーリエ]
Hostie	聖餅	[ほスティエ]
Xenie	寸鐵諷詩	[クせーニエ]
Injurie	凌辱	[インゆーリエ]
Lappalie	瑣事	[ラッぱーリエ]

Grazie, Furie, Hostie 等の單語は、事實と關係がありますから、單語としては奇異に感ぜられても、案外に重要なものです。

また女の名前 Iphigenie [イフィげーニエ] Amalie [アまーリエ] 等のことは、固有名詞の課で述べたばかりですから、玆では例を省きます。

かう云ふ類型の發音については、-ien [イエン]（「イーン」に非ず）で終る國名、州名に同樣の型があるのを參照して覺えるとわかります。

Italien	伊太利	[いたーリエン]
Spanien	西班牙	[シュぱーニエン]
Armenien	アルメニア	[アルめーニエン]
Albanien	アルバニア	[アルばーニエン]
Sibirien	シベリア	[ジびーリエン]
Asien	亞細亞	[あージエン]
Indien	印度	[いンディエン]
Arabien	アラビヤ	[アらービエン]
Bohemien	ボヘミヤ	[ボへーミエン]

17. **die Polizei 警察**
ポリツあイ

上項で述べた -ie は、要するに英語の -y の語尾に相當するのですが、それと同じもので、現今ではあまり融通の利かない、即ち類例を造ることのできない語尾に -ei といふのがあります。これは必ず -ei の語尾に主なるアクセントがあります。みんな女性です。（Papagei 鸚鵡は男性。）

Polizei, *f.*	警察	[ポリツぁイ]
Bastei, *f.*	堡壘	[バスたイ]
Klerisei, *f.*	坊主連	[クレリざイ]
Wüstenei, *f.*	沙漠、荒地	[ヴゆーステなイ]
Sakristei, *f.*	教會の奥室	[ザクリスたイ]
Schalmei, *f.*	牧笛	[シャルまイ]

國名、州名にも此の語尾があります。つまりは -ien と同じことですが、氣持の上では、少し古めかしくて、俗で、同時に一寸侮蔑のニュアンスがこもつて來ます。

Lombardei	ロンバルヂア	[ロムバルだイ]
Türkei	土耳古	[テュルかイ]
Tschechoslowakai	チエコスロワキア	[チェヒョスロヴかイ]
Mongolei	蒙古	[モンゴらイ]
Mandschurei	滿洲	[マンチュらイ]

支那人は近來とても感情家だから、そのうちに Völkerbund (國際聯盟) へ Mongolei を Mongolien に改めろ、なんて持ち出すかも知れません。

日本 Japan [やーパン] も、怒りたくなつたら、-an といふのは、Turkestan, Afghanistan, Belutschistan, さてはアフリカの Sudan に似てゐるから、Japland か Japanien に改めろ、と云へるわけですね。しかしこれはどうですか。

よく似たのに、動詞の語幹に -erei の語尾をつけるのがあります。つまり英語の poetry なぞといふ -ry に相當します。既成の字以外に、造語するときには、大抵「盛に……をやること」「……三昧」と云つたやうな、少し惡い意味が附け加はります。

Bildhauerei	彫刻	[ビルトハオエらイ]
Malerei	繪畫	[マーレらイ]
Druckerei	印刷所	[ドルッケらイ]
Bäckerei	パン店	[ベッケらイ]
Sophisterei	詭辯三昧	[ゾフィステらイ]

-eln で終る動詞の時には、-elei となります。

Schmeichelei	阿諛	[シュマイヒェらイ]
Liebelei	戯れの戀	[リーベらイ]

lieben ではなく、liebeln (戯れに戀する、輕い氣持で戀する、意識的賞翫的に愛をする)、から來たのが Liebelei です。

要するに、ei の時には、アクセントが -ei 即ち字の一番最後に來ることを覺えてもらひたかつたのです。それは、數詞の課 349 で述べた -erlei の語尾についても、例外はあるが、大體において同じ規則が立てられます。

18. **lebendig (生々した)**
レベンディヒ
(れーベンディヒに非ず)

最後に、一字變な例外があります。leben (れーベン) といふ動詞から來てゐながら、lebendig, Lebendigkeit の二字はアクセントが -en- に移つて、あたかも le- といふ前綴があるかの如き觀を呈してゐます。しかしこれこそ本當の例外です。こんな事は、前に述べた Reinodien と同樣で、他にほとんど類例がありません。

19. **綴の長短**
長は —
短は ⏑

こんどは、アクセントの問題を去つて、綴の長短の問題に移りますが、その前に一寸、これらの問題の根本にある、基礎的な事實に就て一言しておきたいと思ひます。

と云ふのは他でもありません。アクセントは强弱の問題であつて、音の「高低」の問題ではないといふ事です。

換言すれば、强く發音すると云ふ事は必ずしも同時にこれを音階的に高くするといふことではない。ただ大抵の場合は兩者が一致するといふだけの話で、時によつては反對になることがあるのです。否、特にドイツ語では、殊に婦人の發音は、むしろアクセントのあるところを「低音」で「强く」發音し、アクセントの無いところを「輕く、弱く」そして「高音」で發音すると云ふ傾向があるのです。男子もやるにはやりますが、あんまり澤山やると甘つたれた口調になつて、おかしく感ぜられます。婦人と小兒との口調に最も多く現はれます。

要するに、强弱と高低とは全然別個の問題です。日本語には、原則として强弱の區別は存しません。アクセントと云ふことは、嚴密にいふと、日本語にはあてはまらないのです。西洋人の日本語が、どうも一たいに强すぎて變にきこえるのは、アクセントを入れるからで、日本人の西洋語が一たいに少し力弱いのは、アクセントといふものの本質がぴつたりと來ないからです。

西洋語も、梵語、ギリシヤ語、ラテン語時代には、どちらかといふとむしろ日本語的で、「高低」の區別はあつたが、「强弱」の區別は無かつたと謂はれてゐます。極く大局を判斷するための證據にすぎませんが、たとへば、最も「强弱」を古くから持つてゐたらしいドイツ語ですらも、althochdeutsch (古高ドイツ語) の頃、すなはち 900 年頃までは、現今から見ると、母音の非常に多い、一寸まあ日本語みたいな言葉だつたのです。

	althochdeutsch 古高ドツ語	neuhochdeutsch 新高ドツ語（現在の）	
人間	mennisco	Mensch	[めンシュ]
乞食した	betalôta	bettelte	[ベッテルテ]
世界	Worolt	Welt	[ゼルト]
そして	enti	und	[ウント]
	anti		
	unde		
共に	miti	mit	[ミット]
子息	sunu	Sohn	[ゾーン]

今は、男性三格の定冠詞は dem ですが、昔は demu 又は demo でした。女性の der は deru だつたのです。英語の if も ibu と云つてあります。斯う云ふ調子だから、勿論今日のやうな意味に於けるアクセントはなかつたので、やはり他のアーリアン系民族の印度人やギリシヤ人や羅馬人なぞと同じやうに、單に音の「高低」のみがあつたので、アクセントは比較的近代に至つて組織化され、意識され、同時に發達し、かくして現今のやうな、少し神經的、ヒステリカルな歐洲現代語が出來たのだ——これが學者たちの想像です。勿論さうでないといふ人もあるにはありますが、現在日本語のやうな、アクセントなしの語があれば、さういふ點が大問題になつてくるのは當然だらうと思ひます。

「强弱」と「高低」の外に、なほ「長短」といふ區別がはつきりすれば、それで發音の形式的方面は一完結します。

長短の事は、前に ― ◡ の記號を用ひて一寸說明したことがありますが、さて、長短とは一たいどんな現象でせう。

日本語では、たとへば神戸 (Kōbe) と云へば、長い方の Kō は、短かい be の二倍だと謂へます。長さが二倍なのです。これはラテン語ギリシヤ語等と同樣で、その點で西洋の古典語は、現代の西洋人によりは、むしろ日本人の方によくわかります。かう云ふ意味で、「長は短の二倍」として量るのを、古典語學の方では Quantität（量）と云つて、丁度日本の三十一文字と同じやうな詩形論を論ずる時に問題になつてきます。

ところが現代の西洋語はちがひます。殊にドイツ語は、力の强弱がはげしい上に、長短の問題も少しわけがちがふのです。

たとへば die Seele（魂）といふと、[― ◡] となります。See- の綴は、長いと同時に强い。さうすると、See- が -le の二倍だなぞとは云へない。三倍でもよろしい。四倍でもよろしい。何倍でもよろしい。とにかく、比較にならない程長く延びるのです。

20. 長短に關する一般的法則

ではつまりどんな時に長く發音して、どんな時に短かくなるか？

一寸語學上の認識論が間違はないやうに一言斷はつて置きます。我々外國人が必要とするドイツ語の法則と、ドイツ人自身が必要とする法則との間には、非常な差があります。我々は主として「書かれた形」を出發點として、さてこれをどう發音するかが問題になるのですが、ドイツ人はさうではない、彼等は、長いか短いかは、字について知つてゐるのです。それをどう書く可きかが彼等の頭を惱ます點です。

從つて、我々の立場からして之れを實用的に習はんが爲めには、諸種の例外を主としてやつて行く必要があります。といふよりは、斯う云つた方が好いでせう。たとへば dir を「ディール」と長く發音する、と斯う我々は云ひますが、それは便宜上さう云ふので、實はさうではない、「ディール」の發音が先づ先きに存在するので、ドイツ人はそれを dier と書かないで dir と書くのだ、と斯う思はなくてはなりません。

けれども、今も云つたやうに、便宜上我々は印刷されてある文字の方を與へられたものとして、それから出立して法則を立てて行きませう。その方が我々には實用的ですから。

まづ一般的法則を述べると、前に一度說明したことのある Anlaut（頭音）Auslaut（尾音）Inlaut（中間音）といふ三つの概念が必要になつて來ます。くどいが、念のためにもう一度それを思ひ出して下さい。たとへば Mann といふ字で云ふと、

M	a	nn
‖	‖	‖
Anlaut（頭音）	Stammvokal（幹母音）	Auslaut（尾音）

その複數で Männer となると、これは二綴になりますから、nn は尾音ではなく、ä と e との、二つの母音の間に挿まつた子音、即ち中間子音 (Inlaut) と謂ひます。

M	ä	nn	e	r
‖	‖	‖	‖	‖
Anlaut	St.-vokal	Inlaut	Vokal	Auslaut
Stamm (幹)			Endung (語尾)	

けれども、Männer の Männ- だけを問題にする際には、nn を Auslaut (尾音) と云つても好いわけですから、これから廣い意味で Auslaut と云ふ時には、それが Inlaut になつた時も含まれてゐると思つて下さい。

まづ、上に圖示した、「幹」だけ、即ちアクセントのある、(アクセントがあれば同時に意味の重心があります) 個所のみに就て法則を立てると。

1. 語幹にあつては、Auslaut または Inlaut が子音一個なる時は、幹母音は長し。

これが英語とは違ひます。次の例を基礎にして此の法則を確實に銘記しませう。

Scham	シャーム	恥	[シャム]	に非ず!
Rad	ラート	車輪	[ラッド]	に非ず!
Gras	グラース	草	[グラス]	に非ず!
Glas	グラース	硝子	[グラス]	に非ず!
Grab	グラーブ	墓	[グラッブ]	に非ず!
Schaf	シャーフ	羊	[シャフ]	に非ず!
Tag	ターク ターハ	日	[タッグ] [タハ]	に非ず!
Span	シュパーン	木屑	[シュパン]	に非ず!
tun	トゥーン	なす	[トゥン]	に非ず!
Not	ノート	艱難	[ノット]	に非ず!

Inlaut が一字の子音の時も同樣です。たとへば schämen [シェーメン] 恥ぢる、Räder [れーデル] 車輪數個 Tage [たーゲ] 數日、等。

2. 二重母音 au, eu, ei, ie, ai, ui は、すべて長く發音します。au, eu, ei 等は、一寸聞くと短かいやうに思はれるが、さうではありません。

但し a と u との二つから成る「あオ」(「あウ」と「あオ」の中間) au は、日本語で書いた際の最初の假名、即ち au の a の方が長いのではなく、極端に云ふと「あオ——」と、「オー」の方が長いのです。「あ」の方は強いが、短かいのです。

3. Auslaut, Inlaut の h は發音しないかはりに、その前の母音を長くする役目を持つてゐます。たとへば ruhen (休む) [るーエン] 等。要するに、第一に述べた法則がある以上は殆んど要らないものです。けれども、時とすると、意味の違ふ字を形の上でも區別する役目を持つことがあります。

ein Mal	一回	[アイン・まール]
ein Mahl	食事	[アイン・まール]

けれども大抵の場合は、h を入れなくても長く讀むのですから、無用の長物で、單に念のためです。それと、少し字をのばして形を勿體ぶらせたい心理もあるのでせう。

die Zahl	數	[ツァール]
der Stuhl	椅子	[シュトゥール]
die Sohle	蹠	[ぞーレ]
der Fehler	缺點	[フェーレル]

それと同じ意味で同じ母音を重ねるのがあります。たとへば See, *f.* 海、Meer, *n.* 海、Saal, *m.* 廣間。

4. Auslaut 又は Inlaut が二字以上の子音から成る時は、それが tt, ff, mm 等、同子音の重複たると ft, mt, ft, ck, 等、異つた子音の重複たるとを問はず、幹母音は短かく發音する。

Auslaut の場合

Mund	口	[ムント]
Hand	手	[ハント]
Dampf	蒸氣	[ダムプフ]
Herbst	秋	[ヘルブスト]

Kamm	櫛	[カム]
Amt	役、役所	[アムト]
Last	重荷	[ラスト]

Inlaut の場合

fallen	落ちる	[ファルレン]
perlen	したたる	[ペルレン]
necken	なぶる	[ねッケン]
Sattel	鞍	[ざッテル]

これらはよくわかります。

5. 文法上の語尾が附く際、即ち beten (祈る) から du betest または betst が出來る際——かういふ時には betst の Auslaut が -tst だからと云つて be を短かく發音するといふ事はしません。元の形 beten [ベーテン] の be が長い以上は、いつでも長いと思へばよろしい。

21. **例外の場合**

前項に述べた長短の規則は、最初にも斷つておいた通り、アクセントのある綴、即ち「語幹」にのみ適用される通則であつて、語尾の方はまた譯が違ひます。また語尾と同樣に扱ふ可き輕い言葉も違ひます。

(1) 語尾は -bar, -sam [英語の -some の語尾に相當す] 等、特に長く發音する數個の例外を除いて、他はすべて短く發音す。(Auslaut が二個の子音たると一個の子音たるとを問はず。)

seh-en, woll-en 等の不定法の語尾、-er, -es, -em, -en, -e, -el 等名詞の語尾、-ig 等形容詞の語尾、その他すべての語尾がこれに屬します。

但し wunderbar [ヴンデルバール] 不思議な、langsam [らングザーム] 等、-bar, -sam の語尾は例外です。また -lein, -heit, -keit 等の語尾は、母音の性質上長いにきまつてゐますから、これらも例外です。

(2) たとへ語幹であつても、小文字で書くもの、即ち代名詞、副詞、冠詞、前置詞、接續詞等は、それ自身がアクセントの入らない、形式的要素ですから、たとへ Auslaut が一つの子音であつても短かく發音します。

man	[マン]	mit	[ミット]
es	[エス]	das	[ダス]
in	[イン]	an	[アン]
bis	[ビス]	von	[フォン]

けれども、必ずしもさういふ場合ばかりでもない。nun は「ヌン」ではなく「ヌーン」です。また Auslaut の無い字は、強く發音する際の na! [ナ!] 等を例外として、ほとんど長綴ばかりです。

da	[ダー]	du	[ドゥー]
ja	[ヤー]	je	[イェー]
so	[ゾー]	zu	[ツー]

Auslaut が -r の際には一たいに幹母音が長くなる傾向がありますが、小文字で書く字もさうで、冠詞の der 等を除くと、ほとんどみんな長綴です。

dir	[ディール]	mir	[ミール]
für	[フュール]	vor	[フォール]
gar	[ガール]	zwar	[ツヴァール]
er	[エール]	war	[ヴァール]
her	[ヘール]	nur	[ヌール]

これで先づ長短に關する一般の規則は終りました。

22. **Keine Regel ohne Ausnahme**
例外なき規則はなし

そこで一寸復習をして見ます。ようございますか？ Auslaut が二つの子音ならば幹母音は短、Auslaut が一個の子音ならば幹母音は長、わかりましたね？ 試みに質問をして見ます。rot (赤い) これはどう發音しますか？ 小川君！

【小川】 ロート！

【大先生】 よろしい。次は Wort (言葉)——山崎君！

【山崎】 ヴォルト！

【大先生】 よろしい。次は Mark (馬克)——石原君。

【石原】 マルク！

【大先生】 よろしい。次は Ton-film (發聲映畫、トーキー)——岡田君。

【岡田】 トンフィルム！

【大先生】 違ひます。Ton といふ一字だけを取つて考へなければなりません。なるほど一寸見ると o の次に nf と二つの子音があるやうに見えるが、それは Inlaut ではありません。n が Ton の Auslaut, f は film の Anlaut です。

【岡田】 では「とーンフィルム」

【大先生】 よろしい。次は Trost (慰安)——千葉君！

【千葉】 トロスト！

【大先生】 よろしい。次は……

【岡田】 先生、一寸待つて下さい。Trost は「トロースト」ではありませんか？

【大先生】 いや、ft と二つの Auslaut があるから「トロスト」です。短です。

【岡田】 僕はすぐ辭書を開けて見たのですが、辭書には Tröst と長い印がついてゐますよ。そればかりでなく、Trost に關係のある字は、trösten (慰める) といふ動詞も「トれーステン」と長くなつてゐますし、tröstlich (慰安的な) といふ形容詞も長くなつてゐますよ。

【大先生】 そんな事はない。それは辭書の間違ひです。

【小川】 先生、ごらんなさい、此の辭書にもさうなつてゐます！

【大先生】 ……ちやあ其の辭書も違つてゐます。

【小川】 おかしいなあ……辭書が二つも揃つて違ふなんて……

【大先生】 そりやあ、さういふ事もあります。大抵の辭書は何か別な辭書を寫したものなんだから……(鐘が鳴る)……ではこれで終り。(去る)

【學生】 (わいわい騒ぐ) ——幕。

第二場　教授室

【大先生】 (辭書を五六册机の上にひろげて、フーン！フーン！と云ひながら、何だかしきりに感心してゐる。)

【他の大先生】 (這入つて來る) 減俸問題はどうなつたのかね。いよいよ實現されるかね？

【大先生】 減俸も減俸だが、君は一たいドイツ語を教へ始めてから何年になるね。

【他の大先生】 我輩はもはや十五六年になるよ。その功績に對しても、減俸なんて以ての外ぢやないか。

【大先生】 君「慰安」といふドイツ語を知つてるかね。

【他の大先生】 慰安は「トロスト」さ。トロストはトロストだが、あゝ道ふをやめだよ、我々はトロストロースだ。

【大先生】 我輩は減俸案に贊成だね。

【他の大先生】 ななななに何だと？ 減俸案に贊成？ それはまたどうした譯で。

【大先生】 慰安が「トロスト」だなぞと思つてゐるドイツ語の先生は減俸にした方が好いよ。「慰安」がトロストだと思つてゐるだけならまだしも、其の上おまけに十五年間もドイツ語を教へてゐたなんてのに至つては、減俸どころか、馘首したつて構やしない。

【他の大先生】 「トロスト」が違ふかね。

【大先生】 違ふ。

【他の大先生】 どう違ふ。

【大先生】 違ふ。斷然違ふ。

【他の大先生】 「トロスト」でなくつて何だ。

【大先生】 「トロスト」でなくて「トロースト」だ。

【他の大先生】 變な事を言ひ出したぜ。何だか荐りに辭書をひろげて檢べてゐると思つたら、そんな事を檢べてゐたのかい。

【大先生】 僕も實はたつた今教室で學生に教はつて來たばかりなんだ。

【獨逸人の教師】 (這入つて來る) Guten Tag, meine Herren!

【大先生】 Guten Tag!

【他の大先生】 Guten Tag!

【獨逸人】 Ja, was ist denn aber los? Die vielen Wörterbücher……Die Herren in eifrigem Gespräch……! (何か大變な事でも起つたのですか？ 澤山な辭書をひろげて……何かしきりに言ひ合つておいでになるやうですが……)

【大先生】 一寸伺ひますが、Trost の發音は「トロースト」ですか？

【獨逸人】 さうです。外國人はよく間違へます。Post (郵便) や Rost (鏽) とは違つて、長く發音します。

【大先生】 そんな字が澤山ありますか？

【獨逸人】 ありますね。

【大先生】 ノートを取りますから、一つお思ひ出しになれるだけ教へて下さいませんか？

【獨逸人】 さうですねえ。必ずしも凡てではないかも知れませんが、思ひ出してみませう。-st の語尾のものには特に多いやうですね。

23. Trōst 的な例外

Nüstern, *pl.* 馬の鼻孔	Küchlein, *n.* 雛
Knūst, *m.* パンの皮	Wūst, *m.* 混沌
Trōst, *m.* 慰安	wüst, *a.* 荒蓼たる
Īste, *m.* エストランド人	düster, *a.* 陰慘な
Schūster, *m.* 靴屋	Jōst, [人名]
hūsten, *v.* 咳する	Ōbst, *n.* 果物
pūsten, *v* 息を吹く	Pāpst, *m.* 羅馬法王
prūsten, *v.* 噴き出す	Prōbst, *m.* 僧院の院主
nebst, [前置詞] ...と共に	Ōstern, *pl.* イースター祭
benebst, (同上)	Rüster, *f.* 楡の樹
Klōster, *n.* 修道院	Österreich, *n.* 墺國

或るものは、よくその關係のある字を考へて見ればわかります。たとへば靴が Schuh だから、靴屋といふ Schuster も長いと云つたやうに。

それから、wüst といふ形容詞が長綴ならば、それと關係のある字は凡て長い。たとへば Wüste, *f.* (沙漠) と云つたやうに。

その次に、-rt, -rd, -rz 等、r を先に立てた Auslaut を持つた字には、かなり澤山の例外があります。たとへば、Wert (價値) は「ヱールト」であつて、「ヱルト」ではありません。

Wert, *m.* 價値	Art, *f.* 種類
Bart, *m.* ひげ	Herd, *m.* かまど

Arzt, *m.* 醫者	zart, *a.* 纖細な
Erz, *n.* 青銅	Erde, *f.* 土地、地球
Schwert, *n.* 劍	Harz, *m.* (山名)
Geburt, *f.* 誕生	werden, [助動詞]
Herde, *f.* 畜群	Schärte, *f.* 刃の缺け目
Behörde, *f.* 官衙	Förde, *f.* フヨールド
Schwärte, *f.* 古本	Quarz, *m.* 石英
Arsch, *m.* 臀	Ars, *m.* 臀
Pferd, *n.* 馬	erst, *a.* 第一の
Gebärde, *f.* 身ごなし	Börse, *f.* 取引所
erzen, (er と呼ぶ事)	Börde, *f.* 沃地
Harz, *n.* 樹脂	Gerhard, (人名)

Erz (青銅、鑛) なぞは、同じ綴の前綴 erz- (英語で archbishop なぞといふ arch-, archi- に相當する) と綴の長短で區別されます。

Obst, *n.* (果物) は、「オブスト」といふ人もあります。また Frankfurt (フランクフルト) 等に現れてゐる、英語の -ford に當る Furt (淺瀬、渉場) は、短くも長くも發音します。

次に並べる字も、大部分は、他の單語から推して知れるものですが、それでも日本人の方はよくまちがへて短かく發音します。

Mōnd, *m.* 太陰、月	regnen 雨ふる
Mōnat, *m.* (暦の) 月	segnen 祝福する
Mōntag, *m.* 月曜	begegnen 出會ふ
Jagd, *f.* 狩獵	Gegner, *m.* 相手
Magd, *f.* 下女	Lügner, *m.* 嘘つき
Wuchs, *m.* 成長、身の丈	atmen 息する
Krebs, *m.* かはゑび、癌	widrig, *a.* いやな
Kebsweib, *n.* 妾	Gemälde, *n.* 繪畫

ſtēts 常に	hōch, *a.* 高き
berēdt, *a.* 雄辯なる	höchſtens 高々
Wāgner, *m.* 車造り(の職人)	nächſt, *a.* 次の
Ādler, *m.* 鷲	Märchen, *n.* 童話
Vögt, *m.* 代官 (人名の Voigt も同樣に發音す)	

だから人名の Wagner を、樂聖「ワグネル」といふのは誤りで、樂聖ワーグネルと云はなければなりません。人名と云へば、新敎を拓いた Luther は、「ルーテル」ではなくて「ルッテル」です。これもよく日本人が間違へます。また哲學者の Schopenhauer を「ショペンハウエル」といふのも間違ひで、これは「ショーペンハウエル」でなければなりません。

【他の大先生】 それ位の事はどうでも好ささうですがねえ。

【獨逸人】 そんな事があるものですか。たとへば Goethe を「ゲテ」「ゲッテ」なぞと云つたらずゐぶんおかしいでせうからね。

【他の大先生】 さう云へばさうですな。

【獨逸人】 その次に注意しなければならないのは -ch の Auslaut (又は Inlaut) ですね。これは、-ck と同樣に、二個の子音から成つてゐますが、たとへば das Buch 等の樣に、幹母音を長くする事もあり、また der Spruch (格言) 等、短母音の事もあります。

【大先生】 なるほどねえ。たとへば「言語」はシュプらーヒェですからねえ。(Sprache)

【獨逸人】 それがまた違ひます。Spra- までではよろしいが -che の發音は所謂 Achlaut で、「ヒェ」ではなくて「ヘ」です。つまり「シュプらーヘ」です。

【大先生】 なるほどね。幹母音が a-, o-, u- の際の尾音 ch は Ichlaut ではなかつたな。知つてゐるんだけど、つい間違へつちまつて……

【獨逸人】 では -ch の前で長い母音になる字を書いてみませう。

Būch, *n.* 本	ſūchen 探す
Flūch, *m.* 呪	nāch [前置詞]
Tūch, *n.* 巾	brāch 休耕の
Kūchen, *m.* 菓子	Schmāch, *f.* 恥辱

wūchern はびこる	rūchlōs, *a.* 無賴の
hōch, *a.* 高き	rūchbār, *a.* 噂になつた
Brūch, *m.* 沼澤地	Sprāche, *f.* 言語
Brāche, *f.* 休耕田	Geſprāch, *n.* 談話

ſūchen が長ならば beſuchen, verſuchen 等もみんなさうです。

其の次には、-ß の尾音、中間音を持つた幹母音ですが、これは、複數その他で語尾が附いた際を考へれば長短がわかります。bloß, *a.* (裸の) といふ形容詞は、たとへば ein bloßer Körper (裸體) と書いて、ein bloſſer Körper とは書きません。では bloß は「ブロッス」ではなくて「ブロース」です。また Fuß (足) は des Fußes (足の) と云つて、des Fuſſes とは書きません。ではこれも「フース」です。ところが Faß, *n.* (樽) は複數が Fäſſe です。では發音は「ファス」です。「河」の Fluß も同樣です。次にあげるものには特に注意を要します。

長い場合	短い場合
Klōß, *m.* 團子 [*pl.* Klöße]	Vöß 人名 [*2.* Voſſens]
Fūß, *m.* 足 [*pl.* Füße]	Küß, *m.* 接吻 [*pl.* Küſſe]
Grūß, *m.* 挨拶 [*pl.* Grüße]	Nüß, *f.* 胡桃 [*pl.* Nüſſe]
Māß, *n.* 量 [*pl.* Māße]	Fäß, 樽 [*pl.* Fäſſer]
Rūß, *m.* 煤 [*2.* Rūßes]	Flüß, *m.* 河 [*pl.* Flüſſe]
Frāß, *m.* 餌 [*pl.* Frāße]	Bäß, *m.* ベース(音) [*pl.* Bäſſe]
āß 食つた [wir āßen]	bläß, *a.* 青ざめた [blaſſ-es 等]
Schōß, *m.* 膝 [*pl.* Schöße]	Schöß, *m.* 嫩枝 [Schoſſe]
Stōß, *m.* 突く事 [*pl.* Stöße]	Röß, *n.* 駒 [*pl.* Roſſe]
Spāß, *m.* 冗談 [*pl.* Späße]	däß (接續詞)
Flōß, *m. n.* 筏 [*pl.* Flöße]	Güß, *m.* 鑄る事 [Güſſe]
grōß 大な [großes 等]	näß, *a.* 濕つた [naſſ-es 等]
ſüß, *a.* 甘き [ſüß-es 等]	Schüß, *m.* 一發 [Schüſſe]

長い方がむしろ例外です。短い方のはもつと澤山あります。要するに a, o, u の幹母音に注意すれば好いので、其の點一寸 -ch の場合と似てゐます。

【大先生】 長と短の兩方ともあるのもあるやうですね。たとへば Ost, *m.* Osten, *m.* (東) は、人によつて「おーステン」と云つたり「おステン」と言つたりするぢやありませんか。

【獨逸人】 さうですねえ。元來長い筈かも知れないが近來どんどんと短く發音して、むしろ其の方が正しくなつて行きつつあるものが澤山ありますね。「東の」と云ふ形容詞 östlich は、もう「えーストリヒ」と云ふ者はあまり居ないやうですし、また nach も nah (近き) も長い筈だが Nachbar (隣人) は、もう發音がルーズになつて「なハバール」といふのが普通になつてゐます。また hoch (高い) は長いが Hochzeit, *f.* (婚禮) の hoch は短です。Stadt, *f.* (市) の複數 Städte も、Stätte (場所) と區別して長く發音すべきですが、「シュテッテ」だつて構ひません。Urteil, *n.* (判斷) も、Ur- といふ前綴を考へると「うール」のやうだが、實際は「うルタイル」「うワタイル」です。もつと變なのは「鯨」(英 whale) といふ Walfisch, *m.* です。Wal, *m.* (鯨) は「ヴール」だのに、その次に Fisch を附けて云ふ時には、これもルーズになつて「わルフィッシュ」と云ひます。「身の丈」といふ Wuchs, *m.* も、長いのが本當だが、「ヴックス」とも云ひます。前に申上げた Geburt, *f.* (出産) ですね、これも、たとへば、「何處で生れた、何處産の」といふ gebürtig は「ゲビゅールティヒ」でなくて「ゲビゅルティヒ」です。また、それとは反對に、Faß *n.* (樽) は短綴だが、前に Ge- のついた Gefäß, *n.* (容器) は長くなると云つた樣な場合もあります。Gesäß, *n.* (お尻) に似てゐるからですかね。譯は知りませんが。

【大先生】 さあ厄介な事になつて來たぞ。これからはうつかり發音もできなくなつちやつた。

【獨逸人】 そんなに心配なさる程でもありません。唯今私が申し上げてゐるものが先づ不規則の中の大部分で、他は極く普通使はれない特殊な單語になります。

【大先生】 そんなら安心だ。では唯今伺つたのをよくおぼえて置きませう。その他にまだありませんか?

【獨逸人】 唯今申し上げたのは、長短の兩方あるもの、または次に語尾その他の語幹が附いたためにルーズになつて短かくなつて行く傾向ですが、最後に一寸注目を要するのは -sch, -tsch の尾音 (又は中間音) です。これは、必ずではありませんが、長い幹母音の字が相當にあります。

Brätsche, *f.* 中音提琴	hätscheln 甘やかす
Lätsch, *m.* だらしない男	lätschen 足を引摺る
Kartätsche, *f.* 霰彈 (ばら丸)	nütschen (乳を) 吸ふ
Kladderadätsch! (崩れ落ちる音)	knütschen 抱きしめる
Lätsche, *f.* 矮松	wätscheln よちよち歩く
Rüsche, *f.* 襞緣	Böschung, *f.* 斜面
wüsch, waschen (洗ふ) の過去	

wusch と同じ樣なのでは、動詞の三要形の不規則なものの中には、よく過去形が長いことがあります。dreschen (打禾する) の過去 drasch (これは drosch とも云ひます) wachsen (生える) に對する wuchs (ヴークス) (これも wuchs ヴックスでもよろしい) sitzen (坐る) に對する saß, essen (喰ふ) に對する aß, fressen (啖ふ——動物に就て云ふ) に對する fraß, vergessen (忘れる) に對する vergaß……

【大先生】 それ位なことは私だつて知つてゐますよ。

【獨逸人】 そいつは失禮。なるほど、これらはみんな wir saßen (我々が坐つてゐた) sie aßen (彼等が食べた) 等で現れて來るから、まさか wir saßen だとでも思はない以上は間違はない譯ですね。——長い綴と云へば、語尾になる a, o, u ですね。たとへば Propaganda の -da です。これはよく日本人のかたが短かく發音するので耳觸りになります。平常の會話ではさうよくはわからないから、まあどうでもよろしいが、少し大きな聲ではつきり發音するとなると、やはりおしまひの -da は「ダー」とはつきり言はなくてはいけません。アクセントは入れないで長くです。

それから、たとへば Berlin (伯林) の發音ですが、よく「ベルリン」と「ベ」にアクセントを入れて「リン」を短かく云ふ日本人がゐますが、これは非常にいけません。日本語を話しておいでになる時はまあどうだつて好いと云つた樣なものですが、ドイツ語の中ではやはり正しく「ベルリーン」と言はなければ不可ません。伯林ばかりではありません。ドイツの北部には -in の語尾の町の名が澤山ありますが、それらはみんな長綴でアクセントを置くのです。

Berlin	伯林 [ベルリーン]
Stettin	シュテッティーン

Kollin	コルりーン
Wollin	ヴルりーン

地名と云へば、かういふ地名もよく發音法が誤まられます。

Drēsden	どれースデン
Mēcklenburg	めークレンブルヒ
Pēgnitz	ペーグニッツ
Schwēdt	シュゔート
Schlēswig	シュれースヴヒ
Ēstland	えーストラント
Tēplitz	てープリッツ
Quēdlinburg	クえ‥ドリンブルク

【大先生】 固有名詞で思ひ出しましたが、劇作家の Wedekind といふのがありますね、あれは一たいどう發音するのですか。

【獨逸人】 Wedekind [ゔーデキント] です。これも Wagner や Schopenhauer と同樣によく短かく發音され勝ちです。つまり短かく發音するのが日本人の癖なんですかね。

【大先生】 さうかも知れませんね、いやどうも有難たうムいました。その他何か我々がよく間違へる發音でお氣附きになる事はありませんか。

24. Ichlaut と Achlaut

【獨逸人】 さうですねえ、よく考へて見ると大分ありますよ。たとへば貴方がさつき Sprache を「シュプらーヒュ」と仰言いましたね。これはよくある間違ひです。a, o, u の次に ch が尾音としてある時には、即ち Bach, doch, Tuch 等の際にはまさか Ichlaut に發音する人はゐませんが、これが中間音になつて、次に語尾がつくと云ふとよく間違へます。たとへば Kuchen (お菓子) は「くーへン」です。「くーヒュン」ではありません。「くーヒュン」と云ふと Kuhchen 即ち「小さな牝牛」と云つた樣に聞こえます。Kuhchen の際は Kuh, f. (牝牛) が語幹で、その後へ -chen (ヒュン) といふ縮小名詞の語尾が附いたのだから「くーヒュン」ですが、お菓子といふ Kuchen は、英語の cake と同

じ語源で、元つから一つの字です。Ku- の次に尾音としての -ch が附いてゐて、その後へ -en の語尾が附いてゐるのです。

machen	爲す	[まッへン]	[まッヒェン、に非ず]
besuchen	訪問する	[べずーへン]	[べずーヒェン、に非ず]
lachen	笑ふ	[らッへン]	[らッヒェン、に非ず]
Sache	事柄	[ざッへ]	[ざッヒェ、に非ず]
Woche	週	[ゔッへ]	[ゔッヒェ、に非ず]

勿論變音符がついた ä, ö, ü 等が幹母音の際にはちがひます。さうなると、e-, i- 及び 子音の後に來る ch と同じ樣に Ichlaut として發音します。

Gespräch	談話	[ゲシュプれーヒ]
wöchentlich	毎週	[ゔッヒェントリヒ]
Bücher, *pl.*	書物	[びゅーヒェル]

25. Friedrich [フりードリヒ] と friedlich [フりートリヒ]

その次によくある間違ひは、dr, dl, gl, gr, br, bl 等の中間音の、d, g, b を d, g, b に讀むべき所を t, k, p に讀んだり、或ひはその反對をやつたりすることです。

まづドイツ語の發音法をよく知らない人の間違ひから申しますと、たとへば friedlich (平和な) といふ形容詞を、それが Fried-e (平和) といふ名詞と -lich といふ語尾とから成つてゐるといふ事に氣が附かないで、(たとへ氣が附いたにしても、Fried の尾音 d を t に發音すると云ふ事實を忘れて) 「フりードリヒ」と「ド」を濁つて讀む間違ひがあります。けれどもこんな間違ひは、まさか先生方にはありません。

ところが其の事實を知つてゐる人たちは、こんどは凡てをそれで行くものだから、こんどは反對の過ちを犯します。即ち Friedrich といふ人名なぞを、「フりートリヒ」と發音します。これは明かに誤です。なるほど語源的に分解して行けば Friedrich だつて矢張り Fried- と -rich との二部分に別れるのですが、今ではもう -rich なんてものは、一つの意味を持つた語尾とは考へません。それを用ひて造語するなんて事もできません。要するに Friedrich といふ人名は、もう分解して考へない一つのまとまつた字なんです。だから

-dr- は Kuchen の -ch と同様に Inlaut (中間音) として扱ひ、friedlich の -d のやうに Fried- といふ語幹の Auslaut とは考へません。friedlich の際は、荒つぽく云へば dl は Inlaut ですが、語感ではちやんと d を Auslaut に、l を次の -lich の Anlaut (頭音) に考へるのです。

故に -lich といふ語尾が附く際には、その前の g, b, d は k, p, t に發音します。

unbeweglich	不動の	[ウンベゼークリヒ]
lieblich	可愛い	[りーブリヒ]
ländlich	田舍風の	[れントリヒ]

本當を云ふと、たとへば beweglich なぞと、g 等の前の e が長い時には、beweg- と g にさしかかる時には濁音で、それが -glich と續く時に k になるのです。けれどもこれはまあ餘程ドイツ人の發音心理が呑み込めないと、さう簡單には合點できないかも知れません。

一たいに我々ドイツ人の g, b, d は、どつちかと云ふと k, p, t に近いので、たとへば佛人のやうな、日本人のやうな、はつきりした g, b, d の發音のできるドイツ人は十人のうち五六名しかゐないかも知れません。たとへば Krieg (戰爭) が一寸 Grieg のやうにきこえる、反對に ach Gott! (やれやれマア!) が Ach Kott! にきこえる。Goethe がこんな話をしてゐます。(エッケルマンの日記 1824 年 5 月 5 日) 或る時 Goethe が Jena へ行つたら、見も知らぬ青年が會ひにきて、初めの中は一たい何の用で來たのだか譯がわからなかつたが、さて歸る間際になつて、「實は一寸おねがひがあるのですが……」と切り出して、Goethe に代つて說敎をさせて呉れと云ひ出した。Goethe は別に坊さんではないから、說敎なぞするわけはないがと、よく考へて見ると、なるほど! Jena には Koethe (けーテ) といふ僧がゐた。青年はつまり Koethe と Goethe とを間違へたのです。字を見ないで言葉だけで話してゐるとよくこんな事があります。勿論地方にもよりますが。

-lich の際は前に述べた通りですが、-rich, -drig, -grig, -brig 等は、すべて g, b, d を濁らなければなりません。第一 -ig といふのは形容詞の語尾なんで、別に -rig といふ語尾があるわけではありませんから、その前の d, b, g は、語幹の Auslaut ではありません。Friedrich の dr と同樣 Inlaut です。

niedrig	低き	[にードリヒ]
klebrig	ねばついた	[クれーブリヒ]
hungrig	腹の減つた	[ふングリヒ]

もつとも hungrig の gr の g は、鼻に掛かつた ɡ です。それは ng と、n の次に來る時は凡てさうなんです。

26. **Nibelungen 等の -ng.** この鼻音の -ng は、ちやんと日本語にあるにも拘らず、よく日本人の方は間違へます。(第一卷 37 の (4) を見よ)——

27. **ewiglich** えーギクリヒ

-ig の語尾について一つ注意しなければならない事があります。これは必ずしも嚴重に守られてはゐませんが、次にまた -lich の語尾が附く時には、-ig は Auslaut として「イヒ」と云ふべき筈ですが、これを「イック」と讀みます。少し g の掛かつた k だと思へば宜しい。ewig (えーギヒ)「永久の」wonnig (ゼンニヒ)「幸福な」等は、それ自身は勿論必ず Ichlaut でなければいけませんが、(これを -ik のやうに發音するのは、たとへばフランス人のドイツ語とか、猶太人のドイツ語とかに限ります) その次に -lich が附くと、Ichlaut の重複を避けて g を濁音がかつた k に發音します。この規則はたとへば mannigfaltig (種々の) 等にも適用することがあります。

28. **ew'ge** えーギエ

それからもう一つ。-ig の語尾に、格語尾が附いて ewige, einzigen, weniger 等になると、アクセントの無い i は省略して 'g になることがあります。殊に詩文なぞでは。さうすると g の發音が、オランダ語や低地ドイツの g に近くなる。即ち先づ j と同じことになるのです。だから ew'ge は「えーギエ」となります。

普通の ewige の場合でも、もう、ge の發音は、所によつては「えーギヒ」または「えーギイェー」またはそれらの中間の發音になるのです。つまり Gott といふ際の g よりは軟かくなるのです。——たとへば伯林地方なぞでは、g をすべて j のやうに發音します。よく伯林人の惡口に言はれることですが

Gut gebratene Gans mit goldenen Gabeln gegessen.

ユート・イェブらーテネ・ヤンス・ミット・よルデネン・やーベルン・イェイえッセン

（よく焙つた鵞鳥を金のフォークで食つた）

【大先生】「べえべえ言葉が止んだなら、金でも三百つん出すべえ」つてえ奴ですな。ついでに一寸伺つて置きますが、たとへば der Vater と云ふ際の -er の語尾ですねえ。こいつは元來「エル」でなければならない筈だが、あなた方ドイツ人の中で、これを「フぁーテル」と正しく仰言る人は百人に一人もゐないやうですが、これは一たいどうした譯でせう。

29. **Vater** フぁーター

【獨逸人】 さあ、こいつは最も實際的な、しかも一寸厄介な問題ですねえ。なるほど必ずしも「フぁーテル」と日本人の方がお考へになるやうに -er をひびかせはしません。しかし決して r を省いてゐるつもりではありませんがね。

【大先生】 だつて殆んど「フぁーター」ときこえるぢやありませんか。

【獨逸人】 さうですかねえ。なるほどさう云へばさうですねえ。しかしまさか Soda（ゾーダー）「ソーダ」といふ時の a ぢやあありませんね。——つまり我々の r の發音法は、あなた方のとは少しちがふのです。あなた方は捲き舌で、舌を震動させて rrrr！とおやりになる。我々のは喉の聲帶に近い邊を震はせるのです。つまり Zungen-r（舌のエル）ではなくて Kehlkopf-r（喉頭のエル）なんです。佛蘭西人の大部分もそれです。此の喉頭の r を發音するためには、必然的に口が開きます。だから「アー」に近い音が出るのです。また此の喉の r は、よつぽど力を入れないと震動を起しません。大抵の場合は、かすれて Nebelaut の出來損ひのやうな音になつてしまひます。結局 a のやうな事になつてしまふのですね。

【大先生】 では Vater（フぁーター）Mutter（むッタ）と云つて構はないのですね。

【獨逸人】 さうですとも、それがあんまり露骨に「あー」とならないで、一寸 a と o との間位で輕くひびきされすれば、むしろ普通の會話では全部「むッタ」「フぁータ」「ブるーダ」でなければいけない位です。その方が實際の發音に近くなります。もつともドイツ人の中にだつて、ずゐぶん頑迷な人が

あつて、必ず「エル」と云はなければ承知しない人もありますが、それはあんまり實用的ではありません。英語の方では -er を「ア」に近くやつてそれで英人の發音に近いとされてゐるのですから、ドイツ語だつてそれで好い筈です。

ただドイツ人には er が「エル」だといふ意識が英人よりも強く働いてゐます。だから、たとへば、綴り方をやつたり、一字をはつきり言つたりする時には V-a-t-e-r（フぁーテル）とはつきり r を發音します。

【大先生】 けれども詳しく云ふと、-er を「ア」に近くひびかせる場合と、e をはつきり發音して其の次に輕く「ア」を加へて「エア」と云ふ際とがありますね。

【獨逸人】 さうです。つまり er（彼）とか wer（誰）とか werden（成る）とか云ふ場合の er は、語幹の -er なんで、唯今までお話したのは語尾の -er です。

【大先生】 では語尾の -er を「エア」と云つては絶對に間違ひですか？

【獨逸人】 絶對に間違ひですね。反對に、Werther なぞの語幹まで「ヴータ」と云ふのも絶對にいけません。

【大先生】 けれども、あなたが今 Werther をはつきりと正式に發音なすつた時には、私にはどうも「ゼーアテア」ときこえましたよ。ねえ君、君はどうだつた。

【他の大先生】（居眠つてゐて答へない。）

【大先生】（笑つて） いやだよ此の男は。

【獨逸人】 はつはつは！それは多分例の喉頭の r があなた方にはさうきこえるのでせう。ではもう一度發音してみませう。Werrrtherrrr！どうです。

【大先生】 なるほどねえ。こんどは r が顫えたな。するとつまり斯う云ふ譯ですね、r の發音が第一喉で行はれたのだから、どうしても口を a, 又は o に近く開けなくてはならない。ところが喉の r は必ずしも完全顫動はしない。そこで、大抵の場合は a, o に近い音だけが殘つてしまふといふわけですね。

【獨逸人】 さうですさうです。それが語尾の際にはもつとルーズになつて、ついでに前の e まで一緒になつて「ア」ときこえるのです。けれども Werther の Wer- なぞ、力を入れる綴は決して「ヴー」ではなく、はつきりと「ゼール」です。それが「ゼーア」ときこえるのは、これは半分はドイツ人の責任で（r が顫えない場合）半分は聞く人の耳の方の責任です。

【大先生】 では ver», er» 等の前綴はどうです。

【獨逸人】 それも語尾と同樣で、或ひは全然「ファ」「アー」のやうに「聞こえる」かも知れませんね。少くとも「フェア」「エア」にはきこえるでせう。

【大先生】 er» を「アー」なんて言ふ事はない事はわかりますが、ver» なぞは全然「ファ」ときこえる事がありますね。では我々も「ファ」と言つて構はないでせうね。

【獨逸人】 さあ……それはその人の技倆一つですね。

【大先生】 と申しますと？

【獨逸人】 ver» が「ファ」のやうになるのは、我々でもよほど速口で饒舌つてゐる時の事ですから、極くゆつくりとしか饒舌れない人が ver» を「ファ」と云つたら、ちよつと變になりますね。

【大先生】 なるほどね。さう云へば日本語にでもさう云ふ事がありますよ。たとへば東京人は「僕のうちへ」を「僕ンチ」なんて云ひますが、それはよつぽど江戸つ兒辯がすらすらと話せる人にして初めて云へる省略で、四五日前に田舍から來た人なぞが此の「ボクンチ」をはつきりと「ボクンチ」とやつたら、ずゐぶん變でせうからね。

【獨逸人】 なるほど、何處でも似た事はあるものですね。

【大先生】 その外、母音子音の各々について心得る可き事が澤山ありますか？

【獨逸人】 ありますね。さういふ細かい話になつたら、とても一時間や二時間では話しきれません。實地について練習して頂くよりしかたがありませんね。

【大先生】 どうも有難うございました。まあこれだけ伺つておけば大いに役に立ちます。後はまた日をかへて教へて頂きませう。(鐘が鳴る) おや、もう鐘だ。

【獨逸人】 (起つ) So. Und nun an die Arbeit!

【大先生】 (他の大先生をゆり起こして) おいおい、鐘が鳴つたよ。

【他の大先生】 (眼をさまして) 君たちの話は面白くない話だねえ。さて、また教室へ行つて學生と一緒に面白く遊んで來よう、と。(出掛けようとする。)

【大先生】 (留めて) おい君、一寸待つた。外でもないがね、一寸君の智慧を借りたいんだ。

【他の大先生】 Sehr gern!

【大先生】 よせよ、ドイツ人がゐなくなると急にドイツ語を饒舌り出す奴

だ。——實はねえ、Trost の一件だがね、Trost は短い綴だと思つて話してゐると、學生の奴、辭書を見てゐやがつて、先生「トロースト」ぢやありませんかと云つて抗議を申し込みやがつたもんだから、僕は斷然さうぢやないと云つて頑張つてしまつたんだ。今これからまた同じ教室へ出掛けなくつちやあならんのだが、……何とかならないものかね。

【他の大先生】 何とかならないものかつて、つまり君はどう云ふ風になりたいんだ。

【大先生】 どう云ふ風につて……つまり結局は我輩に理があつたと云つた樣な事にさ。

【他の大先生】 それは無理だね。ドイツ語の辭書を片つ端から燒いてしまふか、それとも學生の辭書を全部取り上げてしまふか、——いや、それだけぢや駄目だ、第一ドイツ人を全部殺してしまはなくつちや駄目だ。

【大先生】 まつたくねえ。さうするとまた第二次の世界大戰 (Weltkrieg) が起るね。しかしまあ、我輩としては出來ることなら、血を見ずに濟ませたいね。其の他に何か方法はないかね。

【他の大先生】 ぢやあもう簡單に此の一時間をお休みにしちまふんだ。

【大先生】 さうすると問題はまた此の次の時間に延びるきりだ。

【他の大先生】 そのうちには彼等だつて忘れてしまふよ。

【大先生】 忘れるもんか。忘れてならない事はどんどん忘れるが、忘れて好い樣な事は決して忘れないから。

【他の大先生】 ぢやあ、まあ教室へ行つて、風向きを見て、どうなりと適宜にやり給へ。

【大先生】 多少妥協して、我輩の方も正しかつたが、辭書の方もまんざら間違つてはゐなかつた……と云つた樣な邊で折り合ひは附かないものかな。

【他の大先生】 つまり Trost の綴は、長いと云へば長いとも云へるし、短いと云へば短いとも云へる、結局觀方の問題だ、と云つた樣にね。

【大先生】 それもあんまりだが、……まあ好い、何とか適當にごまかして來よう。さよなら。

第三場　教　室

【大先生】 此の時間は讀本を讀みます。讀本を開けて。

【生徒の一人】 先生、發音の話の續きはしないのですか？

【大先生】 それはまた此の次にします。では五十三頁。田川君、讀んで。

【小川】 先生、Trost の問題はどうなりました。

【大先生】 Trost の問題？ そんな事はまあどうでも好い。田川君、はやく讀んで。

【田川】 Die Bürger warfen, an aller Rettung verzweifelnd, den Feuerbrand in ihre Häuser und töteten sich und die Ihrigen mit eigener Hand, um den verhaßten Gegnern die Rache und Beute zu entziehen: das war wenigstens ihr letzter Trost……先生、これは「トロスト」ですか「トロースト」ですか。

【大先生】 ん……辭書では普通「トロースト」となつてゐるやうですがね。

【小川】 實際はどうなんですか？

【大先生】 實際は……まあ大抵の場合「トロースト」と言つてはゐますがね。

【小川】 言はない事もあるのですか？

【大先生】 いや、そんな事は滅多にありません。

【小川】 でも、たまにはあるのですか？

【大先生】 たまには……あるでせう。

【小川】 どう云ふ時にですか？

【大先生】 ……どう云ふ時につて……つまり間違へた時さ、わつはつはつは！

【皆】 (笑ふ) ——幕。

Augustus

Ein Märchen von Hermann Hesse

1.

In der Mostackerstraße wohnte eine junge Frau, die hatte durch ein Unglück bald nach der Hochzeit ihren Mann verloren, und jetzt saß sie arm und verlassen in ihrer kleinen Stube und wartete auf ihr Kind, das keinen Vater haben sollte. Und weil sie so ganz allein war, so verweilten immer alle ihre Gedanken bei dem erwarteten Kinde, und es gab nichts Schönes und Herrliches und Beneidenswertes, das sie nicht für dieses Kind ausgedacht und gewünscht und geträumt hätte. Ein steinernes Haus mit Spiegelscheiben und einem Springbrunnen im Garten schien ihr für den Kleinen gerade gut genug, und was seine Zukunft anging, so mußte er mindestens ein Professor oder König werden.

譯。 Augustus アウグストゥス。 ヘルマン・ヘッセ作童話。

In der Mostackerstraße モスタッケル街に eine junge Frau 一人の若い婦人が wohnte, 住んでゐた。 die[1] 同女は durch ein Unglück 或る不幸のために bald nach der Hochzeit 結婚後間もなく ihren Mann 彼女の夫を hatte[2] verloren, 失つたのであつた。 und jetzt そして今は sie 彼女は arm und verlassen 貧しく、且つ見捨てられて in ihrer kleinen Stube 彼女の小さな部屋の中に saß 坐し und そして das keinen Vater haben sollte[3] 父親といふものが持てない廻り合せになつた所の auf[4] ihr Kind 彼女の子供を wartete 待つてゐた。 Und ところが sie 彼女は so ganz allein さう云ふ風に全然獨りきり war であつた weil ので、so それで alle ihre Gedanken すべての彼女の想ひは immer いつも bei dem erwarteten Kinde 期待せられてゐる子供の許に [のみ] verweilten 徘徊してゐた。 und そして für dieses Kind [およそ] 此の子供のため

に sie 彼女が nicht ausgedacht und gewünscht und geträumt hätte[5] 案出し、希望し、夢想しなかつた das ところの es gab[6] nichts[7] Schönes und Herrliches und Beneidenswertes, 如何なる美しきこと、素晴らしきこと、羨むべきこともなかつた[程完全な空想を造り上げた]。 Ein steinernes Haus mit Spiegelscheiben und [mit] einem Springbrunnen im Garten 窓硝子附きの、そして庭に噴水のある石造りの家が für den Kleinen 此の兒にとつて gerade ちようど gut genug[8] 似合はしい [と] ihr 彼女には schien 思はれた。 und それから was seine Zukunft anging,[9] so 子供の將來に關しては er 此の兒は mindestens 少くとも ein Professor 教授 oder かそれとも König 國王に werden 成ら. mußte[10] なければならないと云ふ譯であつた。

註。【1】此の die は關係代名詞ではない。 それはその次の文章の構造でわかる。 即ち、定形の hatte がすぐ後に來てゐる。——此の die は、指示代名詞の die (第二卷 178) である。 die の代りに sie と云つてもよろしい。 けれども、童話の書き出しには、der, die, das, の指示代名詞を用ひるのが例になつてゐて、

Es war einmal ein König, der hatte keinen Sohn.

昔ある所に一人の王樣がありました、その王樣には子息がありませんでした。

なぞと云ふのが慣例になつてゐるから、作者はその口調をまねて、抑々の最初から童話的氣分をそそつたのである。——【2】hatte verloren と、普通の過去 (verlor) を用ひないで過去完了を用ひたところに注目を要する。 何故かと云ふに、此の話の書き起こしてある時には「既に失つてしまつてゐた」のであつて (hatte verloren) その時にはじめて「失つた」(verlor) のではない。 詳細は文法第二卷 110 及び 111.——失ふの三要形は、verlieren, verlor, verloren.——【3】「……の筈である」の意の助動詞 sollen の過去である。 即ち、sollte (筈であつた) に拘泥して譯すれば、「父親といふものが持てない筈であつたところの」となる。 生れぬ先にすでに父親を持たないことに運命づけられてゐた、といふ意。——【4】「或ものを待つ」ことを auf etwas warten と云つて、單に etwas warten と云はない。 四格を使つて、etwas warten または、相手が人間なら einen warten (或人を warten する) といふと、warten の意味がすつかり變つて來て、それは、英語の waiter (給仕人、ボーイ) と

いふ字に現れてゐる wait, 即ち「お給仕をする」とか、「世話をする」とか「御用を承はるために愼しみ畏んで控へてゐる」といふ意味になる。——【5】hätte は、第三卷第二十九講で述べた、haben の第二式接續法である。「夢想しない」といふ概念は、やがてはそれを打ち消さんがために、一寸假に作り上げた事實であるから、さう云ふ際には第二式接續法を用ひる。 第二式接續法は、第三卷の 219 頁の表に見えてゐる第四段目に該當するので、「事實は全くそれに反す」と書いてあるのが即ち之れである。 その文章を書く人が、即ち作者が、全然その反對の事實を信じてゐる時に、最も好んで此の第二式接續法が用ひられるのである。——【6】es gab は es gibt といふ非人稱的熟語の過去である。 忘れた人は第三卷 272 を一寸讀んで頂きたい。——【7】nichts Schönes といふ云ひ方については、第二卷 185 項。——【8】gut genug は、文字通りには「充分よろしい」。——gerade gut genug は、うんと意譯すれば、「ちようどマア好い加減なところだらう」「それならまあ大體辛抱できる」——つまり、我兒のことにかけてはすぐに己惚れたがる母親の氣持を滑稽化したわけである。——genug (充分) といふ副詞は、必ず形容詞または他の副詞の後につけられる。 時には名詞の後へ附けてもよろしい。 たとへば Sie ist nicht Weib genug, um sich ganz in meine Lage einzufühlen. (彼女はすつかりわたしの氣持になつて考へてみられるだけの女らしさを持つてゐない。) なぞと云ふ。——【9】angehen (關する) の用法は、次の例で推定して貰ひたい。 すべて文章の中に一寸挿入される形である。

「私に關しては」の言ひかた。

1.	angehen.	Was mich angeht.
2.	betreffen.	Was mich betrifft.
3.	anbetreffen.	Was mich anbetrifft.
4.	belangen.	Was mich belangt.
5.	anlangen.	Was mich anlangt.
6.	anbelangen.	Was mich anbelangt.
7.		Mich anlangend.
8.		Für mich.
9.		Ich für meinen Teil.
10.		Soviel mich angeht.

ずゐぶん云ひ方がある。 だから如何によく用ひられる形式かといふ事がわかる。——此の文句の中に用ひられてゐる was は、一種の省略形で、完全

に云ふとすれば、um daran zu denken, was seine Zukunft anging（彼の將來に關することを考へるとすれば）となる。anging と angehen の過去形を使つたのは、物語の中だから過去にしたのである。それと同時にまた、次の註に述べる事實とも關係してゐる。——【10】此の mußte の使ひかたに細心の考察を加へて頂きたい。これはドイツ語だけの問題ではなく、西洋語全部に關する一般的な用法です。即ち、「少くとも教授か、それとも國王にならなければならなかつた」といふ「ならなかつた」は、決して此の童話を書きつつある作者その者の意見ではない。作者が假にお母さんの身になつて見て、いはばつまり「お母さんの名に於て」芝居をしてゐるのである。言ひ換へれば、「……なければならなかつた」といふ文句は、作者がお母さんの役に扮した文句である。小說ではかうした文句が盛に出て來る。それは、主人公の考へた事を傳へるたびに一々「……と彼女は考へた」と繰りかへす必要をなくするための手段であつたのが、多く用ひられるうちに、ある獨特な面白さを帶びるやうになつてしまつたのである。普通の荒つぽい文法書では、こんな微妙な事は一々分解して說明されないから、まだはつきりした名前がない。私はこれを假に扮役的過去と呼んでおく。必ずしも過去だけではなく、現在を用ひる場合もあるが、一ばん多いのは、また我々日本人に一番珍らしいのは過去の場合だから、特に「過去」と名稱をつけたのである。學問的に嚴重であらんがためには、むしろ「扮役的直接法」(Indicativus mimicus) と名づけた方がよろしい。——一寸此の過去の用法を例で示して見ると、たとへば、私は、彼女のところへお土產を持つて出掛けると『好いかたねえ』と呼ばれ、何も持たずに出掛けると『またうるさいのが來た』と云はれた……これを扮役の直接法で表現すると、「私は、彼女のところへお土產を持つて出掛けると『好い方』であり、持たないで出掛けると『また例のうるさいの』であつた。」

扮役的過去
Praeteritum mimicum.

2.

Neben der armen Frau Elisabeth wohnte ein alter Mann, den man nur selten ausgehen sah, und dann war er ein kleines, graues Kerlchen mit einer Trottelmütze und einem grünen Regenschirm, dessen Stangen noch aus Fischbein gemacht waren wie in der alten Zeit. Die Kinder hatten Angst vor ihm, und die Großen meinten, er werde schon Gründe

haben sich so sehr zurückzuziehen. Oft wurde er lange Zeit von niemand gesehen, aber am Abend hörte man zuweilen aus seinem kleinen, baufälligen Hause eine feine Musik wie von sehr vielen kleinen, zarten Instrumenten erklingen. Dann fragten Kinder, wenn sie dort vorübergingen, ihre Mütter, ob da drinnen die Engel oder vielleicht die Nixen sängen, aber die Mütter wußten nichts davon und sagten: „Nein, nein, das muß eine Spieldose sein."

譯。der armen Frau Elisabeth 此の哀れな婦人エリザベートの Neben 隣りに ein alter Mann 一人の老人が wohnte 住んでゐた [が] den 同老人が ausgehen 外出するのは man nur selten sah, ほんの稀にしか見られなかつた、und dann 而して er 彼は ein kleines, graues[1] Kerlchen[2] 小さな白髮の男で mit einer Trottelmütze[3] 房附頭巾を被り und そして [mit] einem grünen Regenschirm 一つの綠色の雨傘を持つて war ゐた、[そして] dessen 此の雨傘の Stangen[4] 骨は noch 尙ほ wie in der alten Zeit 昔時に於けるが如く aus Fischbein[5] 鯨髯で gemacht waren 造られてゐた。Die Kinder 子供達は hatten Angst[6] vor ihm, 彼を恐れてゐた und そして die Großen[7] 大人達は、[此の老人が] so sehr 其んなに sich zurückzuziehen [世間から] 引つ込んでゐるのは schon[8] 屹度 er werde[9] Gründe haben 理由があるのだらう [と] meinten, 言つてゐた。Oft 屢屢 er 此の老人は lange Zeit 長い間 wurde von niemand gesehen 誰からも見られない事があつた、aber 併し am Abend 夕方に zuweilen 時時 aus seinem kleinen baufälligen Hause 渠の小さな崩壞しさうな家から wie[10] von sehr vielen kleinen, zarten[11] Instrumeten 甚だ數多くの小さな微妙な樂器の [音樂] の如き eine feine Musik 美しい音樂が erklingen[12] 響いて來るのが hörte man 聞えた。Dann さう云ふ時には Kinder 子供達は wenn sie dort vorübergingen, 彼等が其所を通りすがつた時、da drinnen 其の家の中で die Engel 天使達 oder か或は vielleicht ひよつとしたら die Nixen[15] 人魚達が ob sängen[14] 歌つてゐるのでせうか [と] ihre Mütter 自分等の母親 [達] に fragten[13] 尋ねた、aber けれども die Mütter 母親達は davon 其れに就いては wußten

nichts 何も知らなかつた und そして sagten: 言つた、„Nein, nein, いやいや、das muß[17] eine Spieldose[16] sein.“「あれは [屹度] 音樂入りの時計に相違ないよ」[と]。

註。【1】 Grau (灰色の) は、此處では、白髮の、の意。灰色だからと云つて決して所謂胡麻鹽頭 (meliertes Haar) ではない。 Wer zeitig grau wird, lebt lang. (早く白髮頭になるものは長生する) といふ諺でもわかる。 また Mancher wird grau, aber nicht weis. (白髮の爺になるのは大勢ゐるが、同時に賢明になるのは少い) は weis(e) (かしこい) と weiß (白い) とに掛けた語呂洒落。——【2】 Kerlchen は Kerl (男) の縮小名詞。 Kerl は Karl (人名) と同語源の字で、多少侮蔑的な意を含み、つまり「あの男なんか」といふ際の「男」。——【3】 Trottelmütze = Troddelmütze. Troddel は房(フサ)で、Mütze は英語の cap. (英語の hat は der Hut) つまりサンタクロース (Weihnachtsmann, od. Sankt Nikolaus) の冠つてゐるやうな房附頭巾で、古めかしい、民衆的な、且つ子供に親しい印象を與へるもの。 元來子供が冠るもの。——【4】 Stange. (竿) は、此處で Stangen と複數に用ひてあるのでもわかる通り、傘の柄 (der Schaft) ではなくて、骨である。——【5】 Fischbein (魚骨) と云ふのは、鯨の上顎の髯であつて、非常に彈力に富んでゐるので、傘の骨組や、婦人のコルセットや、昔風のぱつと擴げたスカート等の臺に用ひたものであるが、近頃は鋼鐵といふ便利なものが普及してあまり用ひなくなつてしまつた。——【6】 vor ihm. 文字通りには、「彼を前にして」である。 sich fürchten (恐れる) Respekt haben (畏縮する) fliehen (逃げる) 等、多少たりとも相手に近づくのを嫌ふ意味の文句は vor を支配する。——【7】 die Großen は die Erwachsenen (大人) と同じ。——【8】 schon. 「屹度、」「大丈夫」といふ schon の使ひ方がある。「云はなくても既にわかつてゐる」と云ふ「既に」と思へば好い。 das ist schon richtig それは「もう」間違ひない。——【9】 werde. — werden は必ずしも未來の助動詞ではなく、斯う云ふ風に「だらう」といふ想像の意に用ひられる事もある。——【10】 wie. これが所謂前置的接續詞である。 (309, 310, 311 參照) 故に次のやうに組み立てて考へて見ると關係がはつきりする。 eine feine Musik wie eine Musik von sehr vielen kleinen etc. Instrumenten ——【11】 zart. (デリケートな) の發音は長い。 ツァールト。 (ツアルトに非ず) ——【12】 erklingen hören 及び一寸前の ausgehen sehen 等の組み合せに就ては第三卷 253 參照。——【13】 fragen は四格支配。 (第四卷 422 參照) ——【14】 fängen. 接續法第二式。 この際は間接話法。 なぜ第一式の fingen を使はないかに就ては第三卷 210 (2) (3) 參照。——【15】 Nixe, *f.* (人魚) 所謂 Meerweib で、上半身が女で下半

身が魚の怪物、丁度あのギリシヤの英雄 Odysseus を誘惑しかかつた Sirenen といふ歌の上手な女怪共と同じやうに、北歐の Nixen も非常に魅力ある聲で歌ふとされてゐる。——【16】 Spieldose, *f.* Dose は元來は箱の事で、これは Spieluhr 卽ち音樂入りの時計です。——【17】 muß sein. Müssen は、屹度かうに違ひない、といふ理論上の歸結を意味する用法。

3.

Dieser kleine Mann, welcher von den Nachbarn als Herr Binßwanger angeredet wurde, hatte mit der Frau Elisabeth eine sonderbare Art von Freundschaft. Sie sprachen nämlich nie miteinander, aber der kleine, alte Herr Binßwanger grüßte jedesmal auf das freundlichste, wenn er am Fenster seiner Nachbarin vorüberkam, und sie nickte ihm wieder dankbar zu und hatte ihn gern, und beide dachten: Wenn es mir einmal ganz elend gehen sollte, dann will ich gewiß im Nachbarhaus um Rat vorsprechen. Und wenn es dunkel zu werden anfing und die Frau Elisabeth allein an ihrem Fenster saß und um ihren toten Liebsten trauerte oder an ihr kleines Kindlein dachte und ins Träumen geriet, dann machte der Herr Binßwanger leise einen Fensterflügel auf, und aus seiner dunkeln Stube kam leis und silbern eine tröstliche Musik geflossen wie Mondlicht aus einem Wolkenspalt. Hinwieder hatte der Nachbar an seinem hintern Fenster einige alte Geranienstöcke stehen, die er immer zu gießen vergaß und welche doch immer grün und voll Blumen waren und nie ein welkes Blatt zeigten, weil sie jeden Tag in aller Frühe von Frau Elisabeth begossen und gepflegt wurden.

譯。 von den Nachbarn 近所の人達から Herr Binßwanger ビンスヴァンゲル氏 als と angeredet[1] wurde 呼ばれてゐた welcher 所の Dieser kleine Mann 此の小さな男は、mit der Frau Elisabeth エリザベート夫

人に對して eine sonderbare Art[2] von Freundschaft 一種不思議な友情を hatte 持つてゐた。 nämlich[3] と云ふのは Sie 彼等は miteinander お互に sprachen nie 話をした事は一度も無かつた aber が併し der kleine, alte Herr Binßwanger 此の小さな年老いたビンスヴァンゲル氏は er 彼が seiner Nachbarin 彼の隣人(女)の am Fenster 窓の傍を vorüberkam 通る wenn 時には jedesmal 何時も auf[4] das freundlichste 極めて愛想よく grüßte 挨拶をするのであつた、und そして sie 彼女の方でも dankbar [彼の好意を] 感謝して nickte[6] ihm wieder[5] zu[6] 彼に挨拶を返すのであつた、und そして hatte ihn gern[7] [彼女は] 彼が好きであつた、und そして beide 兩方で dachten: 考へてゐた、Wenn es mir einmal ganz elend gehen[8] sollte[9] 若し何時か自分が全く途方に暮れる樣な事でもあつたら、dann さうしたら、ich 私は gewiß 必ず im Nachbarhaus 隣りの家で um[10] Rat 智慧を借りるために will vorsprechen[11] 訪ねて行かう [と考へてゐた]。 Und そして es dunkel zu werden anfing 暗くなり始めて und そして die Frau Elisabeth エリザベート夫人が allein 唯一人で an ihrem Fenster[12] 彼女の窓の傍に saß 坐し、und そして um ihren toten Liebsten[13] 彼女の死んだ最愛の夫を trauerte[14] 悼み oder 或は an ihr kleines Kindlein [間もなく生れる] 彼女の小さな子供の事を dachte 考へ und そして ins Träumen geriet[15] 夢想に落入つてゐた wenn 時には、dann さう云ふ時には der Herr Binßwanger ビンスヴァンゲル氏が leise 靜かに einen Fensterflügel 窓の扉を machte auf, 開き und そして aus seiner dunkeln Stube 彼の暗い部屋から leis[16] und silbern 靜かに且つ銀色に eine tröstliche[17] Musik 慰める樣な音樂が [恰も] Mondlicht 月光が aus einem Wolkenspalt 雲の裂目から [流れ出る] wie 樣に kam geflossen 流れて來るのであつた。 Hinwieder[18] それから亦、der Nachbar 此の隣人は an seinem hintern Fenster 彼の家の裏の窓の傍に einige alte Geranienstöcke[19] 數株の古いヂェラニウムを hatte stehen 置いてゐた [が]、die 其れに zu gießen 水をやるのを er immer vergaß 彼は何時も忘れてゐた、und そして doch それにも拘らず welche そのヂェラニウムは immer 何時も grün und voll[20] Blumen waren [葉は] 綠で花が一杯咲いてゐて und そして ein welkes Blatt 一枚の枯葉 nie zeigten も見せた事はなかつた、weil 其の故は sie 此等のヂェラニウムは jeden Tag[21] 毎日 in aller[22] Frühe 早朝に von Frau Elisabeth

エリーザベト夫人に依つて begoßen[23] und gepflegt wurden 水をかけられ且つ手入れをされてゐた [からであつた]。

註。【1】 anreden. 話し掛ける、呼び掛ける、即ち呼ぶこと。——【2】 Art. (種類) [發音アールト] Art の用法には二種ある。 近代式の建築ならば、日本語通り eine Baute von moderner Art でもよし、反對にして eine moderne Art von Bauten でもよい。 此處は後者。——【3】 nämlich (即ち、といふのは) は接續詞。 何故文の先頭に來ないかと云ふ問題に關しては第四卷 306. 【4】 auf das freundlichste の auf das は單なる形式。 (第三卷 227)——【5】 wieder. wieder には二つの意がある。「再び」「即ち二度目に」の意と、「……してかへす」といふ、方向の反對を指す場合とである。 (英語の前綴 re- も同樣の區別を持つてゐる。) 此處は後者で、ihrerseits (彼女の側でも) の意。——【6】 zunicken. 日本人なら頭を下げるが、毛唐は決して「下げる」といふ程は下げない。 一寸顎でしやくつて微笑むのが會釋である。 さうかと云つて決して横柄なのではない。——【7】 einen gern haben. (或人を好む) または einen lieb haben は熟語。——【8】 es geht mir elend. 非人稱の熟語。 Wie geht es Ihnen? (近況如何? 英語の How do you do?) Danke, es geht mir gut. (Thank you, I am very well.) 第三卷 271 參照。——【9】 sollte については第三卷 218, 249.——【10】 um Rat. (策を求めて、妙案を求めに) um には、或物を求めて、の意がある。 ich bitte Sie um Hilfe. (私は君に助けを求めて願ふ) der Kampf ums Recht (權利鬪爭、即ち權利を求めての爭ひ) der Kampf um Rom. (ローマ爭奪戰)——【11】 vorsprechen. 人の所へ出掛けて行く事。 vor- なる前綴には、「現れる」の意がある。 即ち「語り現れる」または「現れ語る」の意。 車を乘りつける、または玄關に廻す、といふ vorfahren の vor- にも非常に似てゐる。 從つて、一寸立寄ると云つた方が正しい。——【12】 ihrem Fenster. 此の一見餘計に思はれる ihrem については、第四卷 417 に詳しき說明あり。——【13】 der Liebste. (愛人、良人) 妻が良人を呼ぶ時、良人が妻を呼ぶ時には Liebster! Liebste! (最愛の者よ) と云ふから、それをすぐ名詞的に用ひて、「良人」の意を出したもの。——【14】 um einen trauern (或人の亡きを悼む) 「喪」の事を die Trauer といふ。——【15】 geriet. = geraten, geriet, geraten. 陷入る。——【16】 leis = leise——【17】 tröstlich = 發音トれースストリヒ (ö の長い所に注意)——【18】 hinwieder = auch.——【19】 Geranien-stock, m. = Geranium (英語のジレーニアム、普通ヂラニウムと呼んでゐるもの、天竺あふひ?) -ium に終る字の複數は -ien になる、そして必ず中性。 Stock, m. は、ステッキではなく、「株」の事。 たとへば、Rose は、草でもなく、樹でもなく、株であるから

Rosenstock（バラの樹）といふ。その他 Weinstock（葡萄）も同じ。——【20】 voll は、此際は前置詞で、二格支配。 voller とも、voll von（三格支配）ともいふ。——【21】 jeden Tag が四格になる譯は第四卷 326.——【22】 in aller Frühe（あらゆる早朝に於て、即ち非常に早くから）ganz früh といふに同じ。in aller Eile（大急ぎで）in allem Ernst（大眞面目で）in aller Stille（極くそつと）等と同じ形式。——【23】 begießen, begoß, begossen.（前出の gießen, goß, gegossen 水をかける、と同じ。）

4.

Als es nun gegen den Herbst ging und einmal ein rauher, windiger Regenabend und kein Mensch in der Mostackerstraße zu sehen war, da merkte die arme Frau, daß ihre Stunde gekommen sei, und es wurde ihr angst, weil sie ganz allein war. Beim Einbruch der Nacht aber kam eine alte Frau mit einer Handlaterne gegangen, trat in das Haus und kochte Wasser und legte Leinwand zurecht und tat alles, was getan werden muß, wenn ein Kind zur Welt kommen soll. Frau Elizabeth ließ alles still geschehen, und erst als das Kindlein da war und in neuen feinen Windeln seinen ersten Erdenschlaf zu schlummern begann, fragte sie die alte Frau, woher sie denn käme.

譯。 nun 扨て es[1] gegen den Herbst ging 秋が近くなり und そして einmal 或時 ein rauher, windiger Regenabend 凄まじいそして風の吹きしく雨降る夕暮で und そして in der Mostackerstraße モスタッケル街には kein Mensch zu[2] sehen war 人影一つ見受けられなかつた Als 時に、da 其の時 die arme Frau その哀れな婦人は daß ihre Stunde[3] gekommen sei 來るべき時が迫つて來た事を merkte 知つた、und そして sie ganz allein war 彼女は全く一人ぼつちであつた weil ので es wurde ihr angst 彼女は［非常に］心配になつた。 aber 併し Beim Einbruch[4] der Nacht 夜になりかけた時に eine alte Frau 一人の老婆が mit einer Handlaterne 提灯を持つて kam[5] gegangen やつて來た、［そして］ trat

in das Haus 家の中へは入つて來た und そして kochte[6] Wasser お湯を沸かし und そして legte Leinwand zurecht[7] 亞麻布をきちんと揃へ und そして wenn ein Kind zur Welt kommen soll 子供が此の世へ生れる時に was getan werden muß 爲さねば［準備されねば］ならぬ事 alles 總てを tat 行つた。 Frau Elisabeth エリーザベト夫人は alles 總てを ließ[8] still geschehen, 爲すがまゝに默つてさせた、und そして das Kindlein da[9] war［いよいよ］赤坊が生れ und そして in neuen feinen Windeln 新らしい綺麗な襁褓の中で seinen ersten Erdenschlaf[10] 彼の最初の此の世の眠りを zu schlummern begann 眠り始めた als 時に erst 始めて sie 彼女(エリーザベト)は die alte Frau その老婆に woher sie denn käme[11] 一體彼女(老婆)は何處から來たのか fragte と尋ねた。

註。【1】 es geht gegen Herbst.（それが秋に向つて行く、即ち秋近くなる）は、es といふ主語でわかる通り、非人稱の熟語である。——【2】 zu sehen war.＝zu sehen sein（見る可くある、即ち見受けられる、の意。）此の zu を伴ふ不定法については第四卷 291 の (1) 參照。——【1】 ihre Stunde ist gekommen.（彼女の時が來た）は、いよいよ來るべき苦の時が來た、即ち產が迫つた、の意。また、時には、惡人が遂にその報ひを受けなければならぬ時刻に逢着したと云つた樣な際にも、「汝の天運は盡きたぞ」と云ふ意味で Deine Stunde hat geschlagen.（汝の時は打つたぞ）と云ふ事がある。いづれにしても、最後の時が迫つたと云ふ事である。——【4】 Einbruch は die Nacht bricht ein, または bricht herein（夜が到來した）の einbrechen を名詞にしたものである。——【5】 ……kam gegangen.（やつて來た。）gegangen は殆んど餘計なもので、日本語の「やつて」が全然無意味なのと好一對をなしてゐる。gegangen といふ過去分詞の形が kommen に附せられる文法的關係については第四卷 372.——【6】 日本語では「湯を沸す」と云ふが、ドイツ語は合理的で、水を煮ると云ふ。「湯」なら沸さなくても好いはずだが、その「湯を」は、所謂結果的補足語になる。（第四卷 424 を見れば、それがドイツ語にもある形式だといふ事がわかる。）——【7】 zurechtlegen（置き揃へる）zurecht- といふ前綴は、正しく、きちんと、の意。子供が生れる時には、まづ Windeln, *pl.*（お襁褓）が要る、Wäsche（肌着その他）が要ると云つたやうに大變な用事がある。此の、何處の女とも知れぬ stockfremdes Weib（全然見知らぬ女）が Hebamme（產婆）の役をつとめて呉れるのが先づ mystisch（神秘的）である。——【8】 geschehen lassen（行はれしめる）即ち、するが儘にさせて置く事。geschehen には、getan werden（なされる）の意がある。たとへば召使に向つ

て、あれをしろと命ずると、召使は es soll geschehen (それは行はれるでありませう、即ち、致しておきませう) と答へる。——【9】 da sein. (顔が見える、姿が見える) はよく kommen の現在完了の代りに使ふ。——【10】 Erdenschlaf schlummern については第四巻 425.「所謂 inneres Objekt」の項參照。——【11】 käme. (kommen 接續法第二式現在) これは決して過去形ではない。直說法ならば Woher kommen Sie? または wo kommen Sie her? と云ふところである。日本語でならば「何處からおいでになりましたか」といふ所を、ドイツ語では「何處から來ますか」と現在形で問ふ習慣がある。Woher sind Sie gekommen? といへば、日本語の感じではちつともおかしく無いが、ドイツ語ではおかしいので、こんなのを稱して japanisches Deutsch といふのである。

5.

„Der Herr Binßtwanger hat mich geschickt," sagte die Alte, und darüber schlief die müde Frau ein, und als sie am Morgen wieder erwachte, da war Milch für sie gekocht und alles in der Stube war sauber aufgeräumt, und neben ihr lag der kleine Sohn und schrie, weil er Hunger hatte; aber die alte Frau war fort. Die Mutter nahm ihren Kleinen an die Brust und freute sich, daß er so hübsch und kräftig war. Sie dachte an seinen toten Vater, der ihn nicht mehr hatte sehen können, und bekam Tränen in die Augen, und sie herzte das kleine Waisenkind und mußte wieder lächeln, und darüber schlief sie samt dem Büblein wieder ein, und als sie aufwachte, war wieder Milch und eine Suppe gekocht und das Kind in neue Windeln gebunden.

譯。 „Der Herr Binßtwanger あのビンスヴァンゲル樣が mich 私を hat geschickt," 寄越したのです、[と] die Alte 老婆は sagte 言つた、und そして darüber[1] それを聞いて die müde Frau 疲勞した彼の女は schlief ein 眠りに就いた、und そして sie 彼女(エリーザベト)が am Morgen 朝になつて wieder 再び erwachte 目覺めた als 時に、da その時 Milch

牛乳が für sie 彼女のために war gekocht 溫められて und そして stand[2] bereit ちやんと準備されてあつた、und そして alles in der Stube 部屋の中の總ての物は sauber きれいに war aufgeräumt かたづけてあつた、und そして neben ihr 彼女の傍には der kleine Sohn 小さな男の兒が lag 横はり und そして schrie,[3] 泣いてゐた、weil 何故なれば er 彼は Hunger hatte; お腹が空いてゐたから。aber 併し die alte Frau 老婆は war fort.[4] すでに去つてゐた。 Die Mutter 母親は ihren Kleinen 彼女の赤坊を nahm an die Brust 胸に抱いた und そして daß er so hübsch und kräftig war[5] その赤子が大變美しくて强壯である事を freute sich 喜んだ。 Sie 彼女は、ihn 此の子を nicht mehr hatte[6] sehen können[7] 最早見る事が出來なくなつてゐた der 所の an seinen toten Vater 此の子の死んだ父親の事を dachte 考へた und そして bekam Tränen in die Augen, 眼に涙を浮べた、und そして sie 彼女は das kleine Waisenkind その小さな孤兒を herzte 抱き締めた und そして wieder 又しても mußte lächeln, 微笑まずには居られなかつた、und darüber そして然る後直ぐに sie 彼女は samt dem Büblein[8] その小さな男の兒と一緒に wieder 再び schlief ein 眠りに落ちた、und そして sie 彼女が aufwachte 目を覺ました als 時には、wieder 又しても Milch und eine Suppe 牛乳とスープとが war gekocht 溫められてあつた und そして das Kind 子供は in neue Windeln 新らしい襁褓の中へ [war] gebunden 包まれてあつた。

註。【1】 darüber は文字通り英語の thereupon. Darauf ともいふ。「その後すぐに」といふ意味ではあるが、「それを聞いて」といふ樣な時に好んで用ひられる。 damit (それを以て) が、mit diesen Worten (斯く云ひ終つて) の代りに用ひられるのと同じ譯で、大抵人間の話す言葉に關係があるのである。——【2】 stehen といふ字は都合の好い字で、何でも宜しい、物がちやんと其の位置を占めて定着した樣に儼然と動かずに居る事を指す。 Die Sterne stehen am Himmel. (星が天に輝いてゐる) Das steht in der Zeitung. (それは新聞に出てゐる) Es steht fest. (それは確固たる事實である) 等。 bereit stehen は、「ちやんと」準備されて置いてある、の意。——【3】 英語でも子供が泣くのは weep とは云はない、cry といふ。 ドイツ語でも weinen ではなく、schreien (叫ぶ) である。——【4】 fort は fortgegangen の意。 前綴だけでわかる際にはよく動詞そのものを省く。 結局、前綴が形容詞であるかのや

うな感じを與へる。 Das Feuer ist aus. (火は消えた) Der Laden ist noch auf. (店はまだ開いてゐる) Das Glück ist hin. (幸福は去りぬ) Der Ring ist entzwei. (指環は眞二つにこはれた)——【5】 此の war は、日本語の感じからは ist でもよささうに思はれる。 ところが、主文章が freute sich (欣んだ) と過去になつてゐるから、daß 以下の動詞である war は、やはり過去でなければならない。 時稱の一致 (consecutio temporum) とは此の事である。——【6】 hatte の一寸變な位置については第三卷 259.——【7】 können は不定法ではなく過去分詞である。(第三卷 256)——【8】 Büblein は Bube (男の兒) の縮小形。 男の兒は Knabe (俗語 Bube) 女の兒は Mädchen, *n.* (俗語 Mädel) といふのが普通である。 一寸した序でに、男兒が生れたのだと云ふ事を知らせたわけである。

6.

Bald aber war die Mutter wieder gesund und stark und konnte für sich und den kleinen Augustus selber sorgen, und da kam ihr der Gedanke, daß nun der Sohn getauft werden müsse und daß sie keinen Paten für ihn habe. Da ging sie gegen Abend, als es dämmerte und aus dem Nachbarhäuschen wieder die süße Musik klang, zu dem Herrn Binßwanger hinüber. Sie klopfte schüchtern an die dunkle Türe, da rief er freundlich „Herein!" und kam ihr entgegen, die Musik aber war plötzlich zu Ende, und im Zimmer stand eine kleine alte Tischlampe vor einem Buch, und alles war wie bei andern Leuten.

„Ich bin zu Euch gekommen," sagte Frau Elisabeth, „um Euch zu danken, weil Ihr mir die gute Frau geschickt habt. Ich will sie auch gerne bezahlen, wenn ich nur erst wieder arbeiten und etwas verdienen kann. Aber jetzt habe ich eine andere Sorge. Der Bub muß getauft werden und soll Augustus heißen, wie sein Vater geheißen hat; aber ich kenne niemand und weiß keinen Paten für ihn."

譯。 aber 併し乍ら Bald 間もなく die Mutter その母親は wieder 再び gesund und stark 健康で且つ丈夫に war なつた und そして für[1] sich und den kleinen Augustus 自分並びにその小さなアウグストゥスの事を selber 自分で konnte sorgen 世話する事が出來[るやうになつ]た、und da すると daß nun der Sohn getauft werden müsse もう此の息子が洗禮を受けなければならない und 而も daß sie keinen Paten[2] für ihn habe 彼女はその息子の教父[となるべき人]を持たない[と云ふ] der Gedanke 考へが kam ihr 彼女[の心]に起つた。 Da そこで sie 彼女は gegen Abend, 夕方、 es dämmerte[3] 薄暗くなり und そして aus dem Nachbarhäuschen 隣りの家から wieder 又もや die süße Musik 快い音樂が klang 響いて來た als 時に zu dem Herrn Binßwanger ビンスヴァンゲル氏の所へ ging hinüber.[4] 出掛けて行つた。 Sie 彼女は schüchtern おづおづと an die dunkle Türe[5] 暗い扉を klopfte 叩いた、da すると er 彼(ビンスヴァンゲル氏)は freundlich 愛想よく „Herein!" 「おはいり」、rief と呼んだ、und そして kam ihr entgegen, 彼女を出迎へた、aber 併し die Musik 音樂は plötzlich 突然 war zu Ende[6] 終つた(止んだ)、そして im Zimmer 部屋の中には eine kleine alte Tischlampe 一つの小さな古い臺ランプが vor einem Buch 一冊の本の前に stand 立つてゐた、und そして alles war wie bei andern Leuten.[7] 總て[の樣子]が普通の人の家と變つてゐなかつた。

Frau Elisabeth エリーザベト夫人は sagte 言つた、Ihr[8] 貴方が mir 私の所へ die gute Frau 親切な婦人を geschickt habt 寄越して下すつた weil から um Euch zu danken 貴方に御禮を言ふために Ich 私は zu Euch 貴方の所へ bin gekommen 來たのです。 Ich 私は auch 亦 wenn ich nur erst[10] wieder arbeiten und etwas verdienen kann 私がとにかく再び働く事が出來、そして幾らか(何かを)儲ける事が出來[る樣になり]さへすれば、sie[9] あの女に gerne 喜んで will bezahlen 支拂ひをする積りです。 Aber けれども jetzt 今 ich 私は habe eine andere Sorge 別の心配があるのです。 Der Bub[11] [私の]男の兒は muß getauft werden 洗禮を受けなければなりません[し]、und そして wie sein Vater geheißen hat 此の子の父が命名されたのと同じく soll[12] Augustus heißen アウグストゥスと命名したいのです。 aber けれども ich 私は kenne niemand 誰も知人がなく und そして weiß[13] keinen Paten für ihn 此の子の教父[となるべき人]の心當りがないのです。

註。【1】 für は sorgen（心配する、面倒を見る）の支配する前置詞である。Ich will dafür sorgen.（私が引き請けました）等。——【2】 Pate, *m.* [弱]（名親）といふものは必ずなくてはならない。それが基教の規則である。つまり、肉を與へた肉親の外に、宗旨を與へる靈父、または教父、教母を必要とするのである。——【3】 es dämmert. 非人稱動詞である。——【4】 hinüber- なる前綴は、向ふ側へ、の意。hinübergehen は、出掛けて行くとでも云へば宜しい。——【5】 Türe, *f.*（扉）は Tür と同形。——【6】 zu Ende sein（終る）といふ熟語。——【7】 alles war wie bei andern Leuten. すべてが他の人々の家に於けると同然であつた。即ち、ちつともあたり前の人間の家と變つたところはなかつた。——一寸風變りな男の事だから、未亡人は何か大變變つた所でもあるやうに思つてやつて來たに相違ない。bei は、或人の「家」或人の「許」といふ「家」または「許」である。但し人間以外の意味の名詞の前に來るとまた違つて來る。——【8】 敬稱代名詞は、現今は「彼等」といふ sie を大書して Sie（あなた）と云ふが、昔は「汝等」といふ ihr を大書して Ihr と云つたものである。（Euch はその三格）もつと昔には「彼」「彼女」といふ er, sie を大書して Er（汝）Sie（汝）を使つた事があるが、これは敬稱とは云へない、むしろ相手を見下した言葉であつた。今は絶對に使はない。——【9】 bezahlen（支拂ふ）は人間を四格に用ひる。或人に支拂ふ、ではなく、或人を支拂ふ、と云ふ。從つて「お前の給料の方が高いな」と云ふ時には du bist besser bezahlt.（汝の方がよりよく支拂はれてゐる）と du を主語にして受身で云へるわけである。——【10】 nur erst（ただまづ）は「とにかく……しさへすれば」と云ふ熟語。——【11】 Bub は Bube の省略。——【12】 sollen が wollen の逆であることは、第三卷 249 に於て詳しく述べた。これがその好例である。Augustus と名乘らせようと思ふ、と云ふ譯は其處から出て來るのである。——【13】 ich weiß keinen.（私は誰も心當りがない）の wissen は、前の kennen とは用法が違ふ。一の熟語と思へばよろしい。wissen にすぐ人間の四格をつけると云ふ事は、「その人を知る」といふ意味に於ては決してしない事で、「心當りがある」と云ふ時に限られるのである。知るといふ際には必ず kennen.

7.

„Ja, das habe ich auch gedacht," sagte der Nachbar und strich an seinem grauen Bart herunter. „Es wäre schon gut, wenn er einen guten und reichen Paten bekäme, der für ihn sorgen kann, wenn es Euch einmal schlecht gehen sollte. Aber

ich bin auch nur ein alter, einsamer Mann und habe wenig Freunde, darum kann ich Euch niemand raten, wenn Ihr nicht etwa mich selber zum Paten nehmen wollt."

Darüber war die arme Mutter froh und dankte dem kleinen Mann und nahm ihn zum Paten. Am nächsten Sonntag trugen sie den Kleinen in die Kirche und ließen ihn taufen, und dabei erschien auch die alte Frau wieder und schenkte ihm einen Taler, und als die Mutter das nicht annehmen wollte, da sagte die alte Frau: „Nehmet nur, ich bin alt und habe, was ich brauche. Vielleicht bringt ihm der Taler Glück. Dem Herrn Binßwanger habe ich gern einmal einen Gefallen getan, wir sind alte Freunde."

譯。 Ja, 成る程、das 其の事は habe ich auch gedacht 私も考へてゐました、[と] der Nachbar 隣人は sagte 言つて und そして an seinem grauen Bart[1] 彼の白髮の髯を strich herunter. 撫で下ろした。wenn es Euch einmal[4] schlecht gehen[5] sollte 若しも貴方が[將來]何時か不幸に陷る樣な事があるとすれば、für ihn sorgen kann 彼(アウグストゥス)のために心配して呉れる事の出來る der ところの einen guten und reichen Paten 親切なそして富裕な教父を wenn er bekäme 若し彼が得たら Es wäre[2] schon[3] gut 勿論結構でせう。Aber けれども ich bin auch nur ein alter, einsamer Mann 私も亦、年老いた孤獨な男に過ぎません[し] und そして habe wenig[6] Freunde, 殆ど友人も持たないのです、darum ですから wenn Ihr nicht etwa[7] mich selber zum Paten nehmen wollt 若し貴女が私自身を教父にしたいとお望みになるのでもない限り、ich 私は Euch 貴女に kann niemand raten 誰をも推薦する事が出來ないのです。

Darüber[8] それを聞いて die arme Mutter 此の哀れな母親は war froh 喜んだ und そして dankte dem kleinen Mann その小さな男に感謝し und そして nahm ihn zum Paten. 彼に教父になつて貰つた。Am nächsten Sonntag 次の日曜日に sie 彼等は den Kleinen その赤坊を in die Kirche 教會へ trugen 抱いて行き und そして ließen ihn taufen, 其の子に洗禮を行つて貰つた、und ところが dabei 其の際に die alte

Frau [例の]老女 auch も亦 wieder 再び erschien 現はれ und そして ihm その子に einen Taler[9] 一つのターレル銀貨を schenkte 贈つた、und die Mutter 母親が das 其れを nicht annehmen wollte 受けとるまいとした als 時に、da 其の時 die alte Frau 老女は sagte 言つた、Nehmet[10] nur, まあ取つて置いて下さい、ich bin alt 私は年老いてゐます und そして was ich brauche[11] 私に必要なだけのものは habe 持つてゐます。Vielleicht 多分 der Taler そのターレル銀貨が ihm その子に Glück[12] 幸運を bringt 齎らしませう。Dem Herrn Binßwanger ビンスヴァンゲルさんには einmal 何時か habe ich gern einen Gefallen getan[13] 私は好意を示したいと思つてゐたのです、wir sind alte[14] Freunde. 私達は舊くからの友達なのです。

註。【1】 Bart, *m.* [ひげ] の發音はバールトと a が長い。——【2】 wäre (接續法第二式の約束法的用法) の用法については第三卷 212 以下參照。——【3】 schon の用法は、既に註 2 の 8 で述べた通り、「申すまでもなく」「勿論」の意である。——【4】 einmal (いつか、他日) は einst とも云ふ。——【5】 es geht mir schlecht. (私は廻り合せがよくない) といふ非人稱熟語。——【6】 wenig が準否定詞で、「少し」(ein wenig, 英語の a few) の意味でない事に關しては、第四卷 397.——【7】 etwa (ひよつと) は wenn……nicht etwa (もし……でもしない限りは) といふ成句を構成してゐる。etwa は etwas (something) とは全然別物である。——【8】 此の darüber も、それを聞いて、の意。(前出)——【9】 Taler といへば一圓五六十錢に當る銀貨であるが、洗禮の際には、Taufbecken (洗禮盤) の中へ錢 (Geldstück) を入れて贈るのが例になつてゐて、此のお金のことを Taufpfennig, Patengeld, Einbindepfennig, もつと荒つぽくは Waschpfennig なぞと云ふ。つまり日本の香奠と同じやうに、一種の强制的習慣で、時にはうんと奮發する人があると、er hat dem Kinde einen großen Pfennig eingebunden なぞと云ふ。einbinden といふのは、恐らくは子供の身體にでも結びつけてやるからであらう。その贈物を一名 Eingebinde とも云ふ。同時に數珠 (Rosenkranz) を水の中に入れ、或ひは、女の兒であると、糸紡ぎの道具なぞを入れてやる習慣がある。——【10】 nehmet は nehmen の Ihr に對する命令法。du で話す際には nimm! になる。次についてゐる nur は、命令法に附けるお定りの字で、大した意味はない。nimm nur! (まあ取つてお置き) nimm doch! (さあお取り) doch は nur より少し强くなる。——【11】 brauchen は英語の need, want で、gebrauchen (to use) と混同すべからず。ich habe, was ich brauche は、何も不

自由はない、の意。——【12】 Taufpfennig なるものは、其の子供が將來お金に事缺かぬやうにと云ふ緣起を祝つて贈るものであるから、こんな事を云つたのである。此の一句は要するに誰でも云ふおざなりである。——【13】 einem einen Gefallen tun (或人に好意を示す) は熟語である。それから、此處の一文にはよく注意して貰ひたい。大意は、つまり「ビンスヴァンゲルさんには何時か一度好意を示したいと思つてゐたのですから」といふ事であるが、別に「それに其の機會が未だに見つからぬ」といふのではなく、現に見つかつたのであるから、約束法を使はなくても好いのであるが、約束法で hätte ich…… と云つても間違ひではない。且つ詳しく云ふと、habe ich gern einmal einen Gefallen tun wollen と wollen の過去分詞を使ふのが合理的であるけれども、gern (好んで) といふ副詞が這入つて來ると、wollen の意味は充分出るから、單に getan と云つてしまふわけである。他の場合で云ふと、Sie hätten das besser nicht tun sollen (あなたはそんな事はなさらない方が好かつたのでせうがね) では、besser といふ批評的副詞 (第四卷 330) で sollen の意が充分に表はしてあるから、sollen を省いて Sie hätten das besser nicht getan と云ふのが普通である。また、「それはすぐなされる事ができる」は das kann bald getan sein とは云はないで、Das ist bald getan と云ふ。斯う云ふ助動詞の省略は到る處で行はれる。——【14】 alter Freund の alt は年寄りの意ではなく、舊いの意である。

8.

Da gingen sie miteinander heim, und Frau Elisabeth kochte für ihre Gäste Kaffee, und der Nachbar hatte einen Kuchen mitgebracht, daß es ein richtiger Taufschmaus wurde. Als sie aber getrunken und gegessen hatten und das Kindlein längst eingeschlafen war, da sagte Herr Binßwanger bescheiden: „Jetzt bin ich also der Pate des kleinen Augustus und möchte ihm gern ein Königsschloß und einen Sack voll Goldstücke schenken, aber das habe ich nicht, ich kann ihm nur einen Taler neben den der Frau Gevatterin legen. Indessen, was ich für ihn tun kann, das soll geschehen. Frau Elisabeth, Ihr habt Eurem Buben gewiß schon viel Schönes und Gutes gewünscht. Besinnt Euch jetzt, was Euch das Beste für ihn zu sein scheint,

so will ich dafür sorgen, daß es wahr werde. Ihr habt einen Wunsch für Euren Jungen frei, welchen Ihr wollt, aber nur einen, überlegt Euch den wohl, und wenn Ihr heut abend meine kleine Spieldose spielen hört, dann müßt Ihr den Wunsch Eurem Kleinen ins linke Ohr sagen, so wird er in Erfüllung gehen."

譯。 Da それから sie 彼等は miteinander 一緒に gingen heim,[1] 家へ歸つた、und そして Frau Elisabeth エリーザベト夫人は für ihre Gäste 彼女のお客達のために kochte Kaffee 珈琲を沸かした、und そして der Nachbar 隣人[ビンスヴァンゲル氏]は einen Kuchen お菓子を hatte mitgebracht, 携へて來た daß[2] ので ein richtiger[3] Taufschmaus[4] 本當の洗禮の祝宴に es wurde. なつた。 aber 所が sie 彼等が getrunken und gegessen hatten 飲んだり食つたりしてしまつた Als 時に und そして das Kindlein その赤坊が längst とつくに eingeschlafen war 眠つてしまつてゐた[時に]、da その時 Herr Binßwanger ビンスヴァンゲル氏は bescheiden 愼しみ深く(謙遜に) sagte 言つた: also ではいよいよ Jetzt 今や ich 私は der Pate des kleinen Augustus 小さいアウグストゥスの教父 bin になりました und そして[出來る事なら] ihm 此の子に ein Königsschloß[5] 王城 und とそれから einen Sack voll Goldstücke 金貨の一杯入つた袋とを möchte gern schenken, 贈りたいのです、aber けれども das さう云ふものは habe ich nicht, 私は持つてゐません、ich 私は ihm 彼に nur 唯 einen Taler 一つのターレル銀貨を neben den[6] der Frau Gevatterin[7] 教母さんの其れ(Taler)の傍へ kann legen 附け加へてやる事が出來る[だけに過ぎない]のです。 Indessen,[8] けれども、ich 私が für ihn 此の子のために tun kann 爲し得る[だけの] was 事は das soll geschehen.[9] [私は]それを致しませう。 Frau Elisabeth エリーザベトさん、Ihr 貴女は Eurem Buben 貴女の息子のために gewiß 屹度 schon 既に viel Schönes[10] und Gutes 澤山の美しい事や良い事を habt gewünscht. お望みになりました[でせう]。 das Beste für ihn 彼のために最もよいもの zu sein である[と] euch 貴女に scheint 思はれる was 事を jetzt これから Besinnt[11] Euch 篤とお考へなさい、so さ

うしたら ich 私は daß es wahr werde[13] それが實現する樣に dafür[12] そのために will sorgen 盡力致しませう。 Ihr 貴女は Ihr wollt 貴女がお望みになる welchen ところの einen Wunsch für Euren Jungen 貴女の息子のための一つの願ひを habt frei[14] 選擇御自由です、aber けれども nur einen, 唯一つだけです、den[16] その願ひを wohl 篤と überlegt Euch[15] 熟考なさい、und そして heut[17] abend 今晩 meine kleine Spieldose 私の小さな音樂入時計が spielen 鳴るのが wenn Ihr hört, 聞えたら、dann 其の時 Ihr 貴女は den Wunsch その願ひを Eurem Kleinen[18] ins linke Ohr 貴女の赤ちやんの左の耳の中へ müßt sagen 言はなければなりません、so さうすれば er 其の願ひは wird in Erfüllung gehen.[19] 實現するでせう。

註。【1】 heim- といふ前綴は zurück, nach Hause と同意で、英語の home と同語源。——【2】 daß は sodaß の意。 daß 以下の文章は所謂後續的副文章(第四卷 300)であるから、日本語では、後で譯する必要がある。——【3】 richtiger Taufschmaus. richtig は、正しい、まともな、で、此處では「本當の」または「人なみの」「世間並みの」の意——【4】 ドイツでは、子供が生れた時の行事が色々とあるが、此の Taufschmaus はその最も重要な部分である。 飲んだり食つたり (Schlemmerei) は獨逸人の最も嗜む所で、その他結婚式に婚禮の祝宴 (Hochzeitsmahl) を張つて牛や豚を澤山殺す量に於ては恐らく萬國に冠絕する所であり、また人が死ねば Leichenschmaus (お葬式の宴) を張つて、これもうんと食つたり飲んだりする。 田舍ほどひどいさうで、中世紀以降に於て、誕生、結婚、葬儀等の宴を簡單にせよといふ教會の宣旨 (Erlaß) が何度も出てゐるところを見ると、古來からの根强い習慣なのであらう。——【5】 王城を贈りたいの何のと云ふのは勿論冗談である。けれども此の冗談の持つてゐる味は、「城」といふ意味にあるので、ドイツ人は期せずして Luftschlösser (空中樓閣) (蜃氣樓) と云つたやうな事を考へ、spanische Schlösser, böhmische Schösser (西班牙の城、ボヘミヤの城) なぞと云つたやうな滑稽な文句を想像する。 嘘ばかりで一向信用ならない、實在性に乏しいことをいふのである。 あの人は別莊を作つたさうだ、なぞと云ふ當てにならない話を聞くと、それは多分ボヘミヤの城だらうなぞと云つて冷かす。 此處では別にそんなつもりでもないが、ビンスヴンゲルさんが、多少のユーモアを以て、自分自身の貧乏を皮肉りながら、一寸さう云つた事を想像するやうな云ひ廻し方をしてゐるのが面白いのである。——【6】 den=denjenigen. (指示代名詞、第二卷 178. 180 を見よ。)——【7】 Gevatter, Gevatterin は Pate,

Patin (名附親、教父教母) と同じ。——【8】 indessen は丁度英語の however. ——【9】 das soll geschehen = das will ich tun. [註 4 の 8] それは爲される可きである、卽ち、私はそれを致しませう。——【10】 Schönes, Gutes の形については第二卷 185.——【11】 sich besinnen (考へる) は überlegen, nachdenken と同じ。 篤と熟考すること。——【12】 dafür の für は前に出た如く、次の sorgen の支配する前置詞で、da- といふのは、次の daß 以下の文章を受ける。——【13】 直接法なら wird で、werde は第一式接續法である。(第三卷 209)——【14】 einen Wunsch frei haben. 「自由に持つ」といふのは、選擇の自由を有すること。——【15】 Euch は三格。 sich überlegen (自分のために熟考する) といふ、三格の再歸代名詞を支配する再歸動詞と考へても好いわけである。——【16】 此の den も、冠詞ではなく、指示代名詞である。——【17】 heut は heute の省略形。——【18】 Eurem Kleinen (あなたの赤ちやんに) と云ふ三格の用法については第四卷 416 を見よ。——【19】 in Erfüllung gehen (實現する) は熟語。 in の次に冠詞がない故、熟語である事はすぐにわかる可き筈である。 (第三卷 244 を見よ。)

9.

Damit nahm er schnell Abschied, und die Gevatterin ging mit ihm weg, und Frau Elisabeth blieb allein und ganz verwundert zurück, und wenn die beiden Taler nicht in der Wiege gelegen und der Kuchen auf dem Tisch gestanden hätte, so hätte sie alles für einen Traum gehalten. Da setzte sie sich neben die Wiege und wiegte ihr Kind und sann und dachte sich schöne Wünsche aus. Zuerst wollte sie ihn reich werden lassen oder schön, oder gewaltig stark, oder gescheit und klug, aber überall war ein Bedenken dabei, und schließlich dachte sie: Ach, es ist ja doch nur ein Scherz von dem alten Männlein gewesen.

譯。 Damit[1] かう言つて er 彼は schnell 直ぐに nahm Abschied, 別れを告げた、und そして die Gevatterin 教母も mit ihm 彼と一緒に ging weg, 立ち去つた、 und そして Frau Elisabeth エリーザベト夫人は allein 唯一人 und そして ganz verwundert 全く驚ろきあきれて blieb zurück, あとに取り殘された、 und そして wenn もしも die beiden[2]

Taler 二つのターレル銀貨が nicht in der Wiege gelegen[3] 搖籃の中に横たはつてゐず und そして der Kuchen 御菓子が [nicht] auf dem Tisch gestanden[4] hätte, 食卓の上にのつてゐなかつたならば、 so さうしたら sie 彼女は alles 總てを für einen Traum 夢 [であつた] と hätte gehalten[5] 思つたであらう。 Da そこで sie 彼女は neben die[6] Wiege 搖籃の傍へ setzte sich 坐した und そして ihr Kind 彼女の子供を wiegte 搖り動かし und そして sann 熟考し und そして schöne Wünsche [樣々の] 美しい希望を dachte sich aus.[7] 考へ出した。 Zuerst 初めに sie 彼女は ihn 彼(息子)を wollte reich werden lassen 金持ちにして貰はうと思つた、 oder 或は schön 美しく oder 或は gewaltig stark 非常に强く oder gescheit und klug,[8] 怜悧で賢く [して貰はうと思つた]、 aber 併し乍ら überall どれにもこれにも ein Bedenken[9] 不安が war dabei,[10] 附き纏つてゐた、 und そして schließlich 終に dachte sie: 彼女は考へた。 Ach, やれやれ es 此れは ja[11] 確かに doch[12] 矢張り von[13] dem alten Männlein[14] あのおぢいさんの [言つた] nur ein Scherz ほんの冗談に過ぎな ist gewesen かつたのだ、[と考へた]。

註。【1】 damit が mit diesen Worten (斯く云ひつつ) の意を持つ事は、前に darüber (これを聞いて、又は斯く話し合つて、又は斯く考へた後) を說明する際に述べて置いた。——【2】 beide (兩方の) は、時として單に zwei といふ代りに用ひる。但しそれは二つきりしか無いものに關して云ふのである。 彼は二人の友達を持つてゐた、なぞといふ時に使つてはならない。——【3】 gelegen は liegen の過去分詞で、legen (置く) の過去分詞ではない。——【4】 stehen には、時とすると sein といふ意味だけしか無い事がある。此處がその好い例で、gestanden = gewesen.——【5】 etwas für etwas halten (to take something for something) は第二卷以來盛に出て來た筈の熟語である。 漢語の「以て云々と爲す」卽ち、「以爲く」といふのに似てゐる。——【6】 neben は、四格を支配すれば方向を指す。 (第三卷 236)——【7】 ausdenken (考へ出す) に三格の sich (自分のために) がついてゐる。 この三格も所謂 Dativ des Interesses (利害關係の三格) の一種である。——【8】 gescheit も klug も共に「利口」といふ意で、別に何の差もない。 かう云ふ風に、二語を以て一想を表はすものを Hendiadyoin [ヘンデイアデュオイン] (二語一想) と呼ぶ。 klar und deutlich (明瞭に) fix und fertig (用意萬端整うて) Wind und Wetter (風雨) Spiel und Scherz (一場の戲れ)

二語一想
Hendiadyoin.

等いづれも二語一想である。それが名詞の際には冠詞が無いのを以て特徴とする。——【9】 Bedenken. 一寸考へさせられる樣な事、即ち心配である。bedenklich [形] は、心配な、氣遣はしき。——【10】 dabei sein (その側にある、即ち附き纏ふ。)——【11】 ja は、副詞的に用ひられると、「確かに」の意。つまり文章全體に勢がつくのである。 das ist falsch は「それは誤りだ」 das ist ja falsch は「それは明かに誤りさ」——【12】 doch は「矢張り」——【13】 此の von の用法はちよつと解りにくいかも知れない。全體の意味は、「やれやれ、これはまあ矢張りあの御老人が一寸冗談を仰せになつたのだらう」——von の用法を類似の例で示すと、das ist sehr nett von dir. それは君としては大變親切 (nett) なやり方だ。つまり von は或人の自分に對する仕打、やり口、に就て云ふのである。——【14】 Männlein または Männchen. -lein, -chen の縮少語尾は、小さい意味を持つてゐるが、同時にまた、親しい、慣々しい氣持をも表はすのである。たとへば Elisabeth に對する縮少形 Lisbethchen は、日本語でなら、「何々チヤン」と云つたやうな稱呼である。

10.

Es war schon dunkel geworden, und sie wäre beinahe sitzend bei der Wiege eingeschlafen, müde von der Bewirtung und von den Sorgen und den vielen Wünschen, da klang vom Nachbarhause herüber eine feine, sanfte Musik, so zart und köstlich, wie sie noch von keiner Spieldose gehört worden ist. Bei diesem Klang besann sich Frau Elizabeth und kam zu sich, und jetzt glaubte sie wieder an den Nachbar Binßwanger und sein Patengeschenk, und je mehr sie sich besann und je mehr sie wünschen wollte, desto mehr geriet ihr alles in den Gedanken durcheinander, daß sie sich für nichts entscheiden konnte. Sie wurde ganz bekümmert und hatte Tränen in den Augen, da klang die Musik leiser und schwächer, und sie dachte, wenn sie jetzt im Augenblick ihren Wunsch nicht täte, so wäre es zu spät und alles verloren.

譯。 Es war schon dunkel geworden, [邊りは] 既に暗くなつてゐた。und そして müde[2] von der Bewirtung[3] und von den Sorgen und den vielen Wünschen,[4] [お客の]接待やら心配やら澤山の願望やらに疲れて、sie wäre[1] beinahe sitzend bei der Wiege eingeschlafen, [若しも次の事が起らなかつたなら]彼女は搖籠の傍に坐したまゝ殆ど眠り込んでしまふ所であつた、da すると vom Nachbarhause 隣りの家から eine feine, sanfte Musik, 美しい柔和な音樂が、wie sie[7] noch von keiner Spieldose gehört worden ist 未だ[嘗て]如何なる音樂入時計からも聞かれた事のない樣な so zart und köstlich[6] 其れほど物優しく且つ氣持の好い[音樂が]、klang herüber[5] 鳴り響いて來た。 Bei[8] diesem Klang 此音響[を聞く]と同時に Frau Elisabeth エリーザベト夫人は besann[9] sich ハッと思つた und そして kam zu sich, 我れに歸つた、und そして jetzt 今や sie 彼女は wieder 再び an[10] den Nachbar Binßwanger und sein Patengeschenk[11] 隣人ビンスヴァンゲルと彼の敎父としての贈物とを glaubte 信じた、 und そして je mehr sie sich besann[12] 彼女が反省すればする程 und そして je mehr sie wünschen wollte, 彼女の願望が多くなればなる程、desto[13] mehr 益々以て ihr[14] in den Gedanken 彼女の心の中では alles 總ての事が geriet durcheinander,[15] 混亂に陷つてしまつた、daß[16] そのために sie sich für[17] nichts entscheiden konnte. 彼女は何に決定する事も出來ないのであつた。 Sie 彼女は ganz bekümmert[18] 全く心配に wurde なつた und そして in den Augen 眼に hatte Tränen 涙を浮べた、da すると die Musik 音樂は klang leiser[19] und schwächer, 響きが段々微かに段々弱くなつた、 und それで sie dachte 彼女は考へた、wenn 若し sie 彼女が jetzt 今 im Augenblick 此の瞬間に ihren Wunsch 彼女の願ひを nicht täte,[20] 爲なかつたら、so さうしたら wäre es zu spät[21] [既に]時期を失して und そして [wäre] alles verloren.[22] 總ては取り返しがつかないであらう [と考へた]。

註。【1】 wäre は約束法、即ち所謂約束法的語法 (第三卷 212) の結論部である。「若し……であつたとしたら」といふ前提の方が省かれてゐる。——【2】 müde von…… は「云々のために疲れて」——此の形容詞を基礎とする客語句は、第四卷の 371 に說明した分詞を基礎とする副詞句に相當すると思へば宜しい。——【3】 Bewirtung [接待] は、bewirten (或人をもてなす) といふ動詞から作つた名詞。——【4】 此の、澤山の願のために疲れると云ふの

が面白い。人間はそんなもので、我々でも、たとへば、一萬圓やるから之れを一晩で使つて見ろと云はれたら、隨分考へくたびれるに違ひない。——【5】 vom Nachbarhause herüber の herüber は、前置詞の追加詞（第三卷 240）といふもので、von……herüber（……からこちらの方に向つて）といふ形式である。——【6】 zart（もの優しい）と köſtlich（好い氣持の）の二つの形容詞は、前の Muſik に掛かる、所謂附加的形容詞である。形容詞を名詞の後に置く用法に就ては、第四卷 413.——【7】 wie ſie に就ては第二卷 173「wie と人代名詞で表はす關係文」の項を見よ。——【8】 bei と云ふ前置詞は時によつて色んな意味になるが、それは其の次に來る名詞の種類によつて判斷できる。

bei の 意味の見わけ方

名詞には具體名詞（家、石、町、壁）人名詞（父、母、友達）時間の經過のある事件名詞（祭、戰、試驗、音、讀書）空間をも時間をも占めぬ抽象名詞（性質、意味、寒さ、智識、美）の四大別を設けることが出來るから、それに從つて bei の意味を示すと、

(1) 具體名詞と共には「……の傍」bei der Schule 學校の側 beim Stuhl 椅子の側に

(2) 人名詞と共には「……の許で」「……の家で」—— bei mir 私の宅に bei meinem Vater 私の父の許に

(3) 事件名詞と共には「……の際に」—— beim Schreiben 書く時に beim Examen 試驗の際に beim Krieg 戰爭の際に

(4) 純抽象名詞と共には「……にも拘らず」bei ſeiner Weisheit 彼の賢明さにも拘らず bei dieſer Hitze 此の暑さにも拘らず

(5) 唯一つ、「……に懸けて」誓ふといふ時には次にどんな名詞が來ても構はない。bei meinem Schwert! 私の劍にかけて！ bei Gott! 神に懸けて！ bei meiner Ehre! 私の名譽に懸けて！

此の場合は第三の「……の際に」「……と同時に」の意。——【9】 ſich beſinnen は「はっ」と思ふ事。つまりその次の zu ſich kommen と同意である。——【10】 或人を信ずることを an einen glauben といふ。an は glauben の支配する前置詞である。——【11】 Patengeſchenk（教父としての贈物）といふのは、前出の、何でも願を掛ければ實現させてやると云ふ約束の事である。——【12】 此の ſich beſinnen は、反省するといふ意味では前の ſich beſinnen と同じであるが、前後でわかる通り、考へをめぐらすこと、即ち ſinnen と同意。——【13】 deſto は je と對立する、所謂對照的接續詞である。（第四卷 307, 308）——【14】 ihr alles（彼女の凡てが）ではなく ihr（彼女には）alles（凡てが）である。即ち ihr は物主代名詞ではなく、人代名詞の三格である。その用法については特に第四卷 416 を見よ。——【15】 durcheinander-geraten

（入り亂れる）gegeneinander-geraten（衝突する）等。geraten は陷るの意。——【16】 此の daß も ſodaß の意。——【17】 此の für の用法に關しては第三卷 239 前置詞使用上の細則の項の (8) を見よ。——【18】 此の bekümmert は前に würde があるから一寸受働形のやうに見えるがさうではない。過去分詞ではなくて單なる形容詞である。（第四卷 375 過去分詞の純形容詞化の項）從つて wurde は、「成る」といふ werden の過去。——【19】 leiſer と ſchwächer は leiſe（かすかな）ſchwach（弱い）の比較級。immer leiſer,（段々かすかに）immer ſchwächer（段々弱く）の意。（第三卷 225 の 1 に immer の說明あり。）——【20】 täte は tun, tat, getan（爲す）の接續法第二式。次の wäre と共に約束法的語法をなしてゐる。（第三卷 214）——【21】 zu ſpät（英語の too late）もう晩い、間に合はぬ。——ドイツ語の zu は、英語の to にもあたれば too にもあたるわけである。但し too（餘りに）の意の時には、發音法がちがつて、音階が一寸高まる。——【22】 verloren（失はれた、駄目）は verlieren（失ふ）の過去分詞。意味は英語の lost だが、語としては forlorn に當る。たとへば forlorn hope（決死隊）等。verlorene Mühe（無駄骨折り）verlorene Liebe（失戀）verlorener Sohn（見限られた息子）等の成語がある。要するに、駄目になつて取り返しがつかないことを verloren（失はれた）といふのである。

11.

Da ſeufzte ſie auf und bog ſich zu ihrem Knaben hinunter und flüſterte ihm ins linke Ohr: „Mein Söhnlein, ich wünſche dir — ich wünſche dir —," und als die ſchöne Muſik ſchon ganz am Verklingen war, erſchrak ſie und ſagte ſchnell: „Ich wünſche dir, daß alle Menſchen dich liebhaben müſſen."

Die Töne waren jetzt verklungen, und es war totenſtill in dem dunklen Zimmer. Sie aber warf ſich über die Wiege und weinte und war voll Angſt und Bangigkeit und rief: „Ach, nun habe ich dir das Beſte gewünſcht, was ich weiß, und doch iſt es vielleicht nicht das Richtige geweſen. Und wenn auch alle, alle Menſchen dich liebhaben werden, ſo kann doch niemand mehr dich ſo liebhaben wie deine Mutter."

譯。 Da 其の時 sie 彼女は seufzte auf[1] ぽつと溜息をついた und そして zu ihrem Knaben 彼女の息子の方へ bog[2] sich hinunter 身をかゞめ und そして ihm ins linke Ohr 息子の左の耳の中へ flüsterte 囁いた、„Mein Söhnlein,「私の坊や、 ich wünsche dir —— 私はおまへのために願ひます —— ich wünsche dir ——," 私はおまへのために願ひます ——、」[と囁いた、] und そして die schöne Musik その美しい音樂が schon 既に ganz am[3] Verklingen war 將に鳴り止むばかりになつた als 時に、sie 彼女は erschrak ハッと驚いた und そして sagte schnell: 急いで言つた: „Ich「私は daß alle Menschen dich liebhaben[4] müssen. 總ての人間がおまへを愛さねばならない [と云ふ] 事を dir お前のために wünsche 願ひます。」[と言つた]。

Die Töne[5] 音 [樂] は jetzt もう waren verklungen, 鳴り止んでしまつてゐた、 und そして in dem dunklen Zimmer 暗い室の中は es war totenstill[6] 寂寞と靜まりかへつてゐた。 aber [所で] 一方 Sie 彼女は über die Wiege 搖籃の上に warf sich 軀を投げかけて und そして weinte 泣いてゐた und そして war voll[7] Angst und Bangigkeit[8] 不安と憂慮とで一杯になつてゐた und そして rief: 叫んだ、„Ach, 噫、nun もう ich 私は was[9] ich weiß 私が知る限りの das Beste 最も良いものを dir おまへのために habe gewünscht 願つたのです、und doch[10] それでも ist es vielleicht nicht das Richtige[11] gewesen.[12] それはひよつとすると正鵠を得たものではなかつたかも知れません。 Und そして wenn auch[13] 假令 alle, alle Menschen 總ての、あらゆる人間が dich おまへを liebhaben werden, 愛しようとも、so doch それでも niemand mehr[14] 誰一人として kann dich so liebhaben wie deine Mutter." おまへの母親 [がおまへを愛する] 程におまへを愛する事は出來ないのです。」[と叫んだ。]

註。【1】 aufseufzen (ぽつと溜息をつく) seufzen は溜息をつくこと。 此の auf の妙味は一種獨特である。 aufatmen (ぽつと息をはく、胸を撫で下す。) aufleben (生氣を恢復する、よみがへる) aufblitzen (ぱつと明るくなる)—— auf には、急に樂になると同時に、結ぼれてゐたものが一時に解け寛ろぐ意味がある。——【2】 biegen, bog, gebogen (曲げる) sich hinunterbiegen (上體を下へかゞめる)——【3】 an といふ前置詞は、際どく接する、である。 am

Verklingen は、als die Musik schon nahe daran war, zu verklingen 又は im begriff war, zu verklingen (將に響止まんとするの刹那にあつた時) の意。 nahe daran sein または imbegriff sein といふ熟語は英語の to be on the point of である。——【4】 liebhaben は前に一度出た gern haben と同じ。 たとへば Liebhaber, *m.* は、女なぞの崇拜者、戀人、である。 また時には Dilettant (所謂愛好家、ファン) の意にも用ひる。 Liebhabertheater は素人芝居。——【5】 Ton, *m.* (音) は Klang (響き) Schall (音響) と同じものであるが、一番普通な字である。 Tonkunst (音樂) Tonfilm (トーキー) 等。——【6】 totenstill (シーンと靜まりかへつた) は分解すれば Toten (死人たちのやうに) still (靜かな) ことである。 mausstill (廿日鼠のやうに靜か) は、ひつそりとした事。——【7】 voll は二格支配の前置詞とされてゐるが、次に來る名詞には冠詞をつけない。 むしろ無格 (Nennform) 支配と云つた方が好いのである。——【8】 Angst und Bangigkeit も所謂二語一想 (Hendiadyoin)——【9】 was は不定關係代名詞で、前の das Beste を先行詞としてゐる。「凡そ」私の知る限りの、の意。 不定關係代名詞 wer, was 等は大抵「凡そ」.....「する限りの」といへば云ひ表はされる。——【10】 und doch (英語の and yet) それでもやはり。——【11】 das Richtige 正しきもの、即ち正鵠を得たもの、機宜に適したもの。——【12】 前に、適當な副詞があれば話法の助動詞が略されるといふ話をして置いたが、此處もそれで、vielleicht (ひよつとすると) があるから、本當は mag.....nicht das Richtige gewesen sein. (肯綮に中つたものではなかつたかも知れぬ) といふ mögen を略したのである。——【13】 wenn auch (もし.....ても) については第四卷 299.——【14】 この mehr は、「より以上」の mehr でもなければ、「もはや」誰も、の mehr でもない。 niemand mehr (誰も) といふ、單に否定詞を强めるだけの意味しかないのである。 其他の例は、たとへば「決して」を nimmer と云へば好いところを、nimmermehr と云ふ。 これも決して「もはや決して」ではなく、單に「決して」である。 たとへば父が娘に向つて、Heirate diesen Burschen! (此の若者と結婚しろ) と云ふと、娘はびつくりして Nimmermehr! (滅相もない) と答へる。

12.

Augustus wuchs nun heran wie andre Kinder, er war ein hübscher, blonder Knabe mit hellen, mutigen Augen, den die Mutter verwöhnte und der überall wohlgelitten war. Frau

Elisabeth merkte schon bald, daß ihr Tauftagswunsch sich an dem Kind erfülle, denn kaum war der Kleine so alt, daß er gehen konnte und auf die Gasse und zu andern Leuten kam, so fand ihn jedermann so hübsch und keck und klug wie selten ein Kind, und jedermann gab ihm die Hand, sah ihm in die Augen und zeigte ihm seine Gunst. Junge Mütter lächelten ihm zu, und alte Weiblein schenkten ihm Äpfel, und wenn er irgendwo eine Unart verübte, glaubte niemand, daß er es gewesen sei, oder wenn es nicht zu leugnen war, zuckte man die Achseln und sagte: „Man kann dem netten Kerlchen wahrhaftig nichts übelnehmen."

譯。 nun 扨て Augustus アウグストゥスは wie andre Kinder 他の子供達と同じ樣に wuchs heran[1] 段々大きくなつた、 er 彼は mit hellen,[3] mutigen Augen 淡色の元氣ある眼をした ein hübscher, blonder[2] Knabe 美しい、金髮の少年 war であつた、[そして] den 此の子を die Mutter 母親は verwöhnte[4] 甘やかした und そして der 此の子は überall 到る處で wohlgelitten[5] war. 可愛がられた。 Frau Elisabeth エリーザベト夫人は schon bald 間もなく、 ihr Tauftagswunsch 彼女の洗禮の日の願ひが an[6] dem Kinde 子供の身に sich erfülle 實現してゐる daß 事を merkte 認めた、 denn と云ふのは der Kleine その子供が、 er gehen konnte 歩く事が出來[る樣になり] und そして auf die Gasse[9] 街路の上へ und 又 zu andern Leuten 他所の人達[の所]へ kam [歩いて]行く war so alt,[8] daß 程の年齡になる kaum[7] so や否や、 jedermann 誰も彼もが ihn 其の子供を wie[11] selten ein Kind [そんなに美しく勇敢で怜悧な]子供を[見るのは]稀である程 so hübsch und keck und klug それ程美しくそして勇敢でそして怜悧であると fand[10] 思つた und そして jedermann 誰も彼もが gab ihm die Hand, 彼に握手をし、 sah ihm in die Augen 彼の眼を眺め und そして zeigte ihm seine Gunst. 彼に好意を示すのであつた。 Junge Mütter 若い母親達は lächelten ihm zu[12] 微笑みかけた、 und そして alte Weiblein お婆さん達は ihm 彼に Äpfel 林檎を schenkten 與へた、 und そして wenn er irgendwo eine

Unart verübte,[13] 若し彼が何處かで惡戲を行つても daß er es[14] gewesen sei, 彼が犯人であつた[と] glaubte niemand 思ふ人は無かつた、 oder 或は wenn es nicht zu leugnen[15] war, [彼の仕業である事が明らかで]それを否定すべくもない場合には、 zuckte man die Achseln[16] 人々は肩をすくめて und そして sagte: 言つた: „Man kann dem netten[17] Kerlchen wahrhaftig[18] nichts übelnehmen." 「本當にどんな事でもあの良い子に[對して]惡く取るわけには行かない。」[と云ふのであつた。]

註。【1】 heranwachsen (追々大きくなる) の前綴。これは wie andre Kinder の次に來ても好いのであるが、口調を重んじて規則を犯したのである。——【2】 blond (金髮の)——西洋人は、髮の毛の色によつて、blond 型と、braun (褐色) 型とに分ける。南方人は髮が黑いから braun なのが多く、北歐人には blond な、時には aschblond (灰色) なのが多い。北歐人の美人、美男の理想は blonde Haare, blaue Augen (金髮青眼) である。一たいに blond は詩的な型とされてゐる。——【3】 hell [淡色の] は dunkel [濃色の] の反對。——【4】 verwöhnen, verhätscheln [甘やかす] 甘つたれ兒のことを Mutterkind, Muttersöhnchen と云ふも宜なる哉。——【5】 wohl leiden は gern leiden mögen (第三卷 247 の 4 に此の熟語の詳しき說明あり。) 過去分詞 wohlgelitten は wohlgeliebt の意。——【6】 an dem Kind は、此の小供の身に、小供の身の上に。——【7】 此の kaum の用法については第四卷 300 の文例 1 を見よ。少し下の so fand ihn の so と對比して意味をなす。——【8】 so alt, daß…… は「……云々である程の年になつた」即ちやつと云々の年に達した事をいふので、決して非常に年を取つた事を云ふのではない。 Warten Sie solange, bis ich zurückkomme! は「私が歸つてくるまで、そんなに長く待つて下さい」ではなく、ただ其の間だけの意である。——【9】 Gasse, *f.* 街、は、小さな町筋を云ふ。本通りは Straße である。 Gasse (英 lane) Straße (street)——【10】 einen so und so finden (或人を云々と見出す、即ち或人を云々であると思ふ、評價する) といふ熟語。——【11】 wie selten ein Kind は一つの省略された形と見る事が出來る。 ein Kind は四格で、wie man selten ein Kind so hübsch findet である。ところが日本語では第一そんな事すらも言はない。「稀に經驗する程……云々であると思つた」と考へればわかる。その「稀に經驗する程」が長く延ばされて、「人が稀に一人の子供を左樣に云々に見出す程」と前にある通りを繰り返したのである。既に此の繰り返しが全然日本語には無い所へ持つて來て、それがまた省略された形になつてゐるので一寸困難なのである。同じ樣な例をあげて見る。(第四卷 405)

Die beiden Eheleute reisten in einer so düsteren Stimmung, wie je (または nie) ein Mann mit einer Frau.

二人の夫婦は、凡そ曾て一人の男が一人の女と［旅行した時の例には見出せないほど］左樣に陰氣な氣持の裡に旅行した。

要するに此の種の文章に共通な點は、「例が無いほど」と云ふ意味になる事と、selten, je, nie 等の副詞がある事と、それから動詞が省かれるといふ此の三點である。——【12】 zulächeln.（或人に微笑み掛ける）zu- の意味は此の場合に明瞭にわかる。 zuwinken（或人の方に向つて會釋する）zuschicken（或人に或物を送つて寄越す）zu- はつまり「……掛ける」「……つける」「……て寄越す」の語尾にあたる。——【13】 verüben は單に「なす」といふ意味だけしかない。「爲す」「行ふ」と云ふ動詞は、その伴ふ名詞によつて色々ある。 日本語でも「抵抗を」と云へば「試みる」と決まつてをり、「對策を」といへば「講ずる」と決まつてゐる。 Abbitte tun（謝る）Halt machen（停止する）Widerstand leisten（抵抗する）Gerechtigkeit üben（正義を行ふ）Wache halten（立番する）Entschluß fassen（決心する）Sorge tragen（心配する）Wucher treiben（暴利を貪る）これらの動詞はみな熟語として決まつてゐる故、勝手に作るわけには行かない。——【14】 「それが彼である」「それは私です」等は er ist es, ich bin es または es を 's に略して er ist's, ich bin's といふ。 es と云ふのは、惡事を働いたところの「其の者」の謂である。——【15】 nicht zu leugnen sein（否む可くない、否む可からず）第四卷 291.——【16】 die Achseln zucken（英 to shrug one's shoulders）兩肩をキュツと縮めて上へ上げる表情。近頃は活動（Kino）で西洋人の動作をよく見るから、若い人々には說明する必要もあるまい。日本人なら苦笑ひして一笑に附するといふ時にする Gebärde (gesture) である。 一たい日本人は何につけても笑ふ人種であるが、西洋人には笑ひの代りにかう云ふ沈默の表情があるのだらう。——【17】 新しい時代の獨逸語は語彙もかなり違つて來てゐて、此の nett なぞは其の最も特徵的な單語である。 要するに gut または schön といふ意である。「好い氣持の」と云へば略その概念がわかる。 Das ist sehr nett von ihm.（私は彼に謝する、の意）ein nettes Büchlein（一寸感じの好い書物） ganz nett!（とても好い）——【18】 wahrhaftig（まつたく、本當に、實際）——wirklich と同意。文語體では wahrlich（洵に）といふ。 Ich will euch wahrlich sagen 我まことに汝等に告げん。

13.

Es kamen Leute, die auf den schönen Knaben aufmerksam geworden waren, zu seiner Mutter, und sie, die niemand ge-

kannt und früher nur wenig Näharbeit ins Haus bekommen hatte, wurde jetzt als die Mutter des Augustus wohlbekannt und hatte mehr Gönner, als sie sich je gewünscht hätte. Es ging ihr gut und dem Jungen auch, und wohin sie miteinander kamen, da freute sich die Nachbarschaft, grüßte und sah den Glücklichen nach.

譯。［扨て］ auf den schönen Knaben 此の美しい少年に aufmerksam[2] geworden waren 注目するやうになつた die ところの Leute 人々は zu seiner Mutter 彼の母親のところへ Es[1] kamen［やつて］來た、und そして［sie, die］ niemand gekannt［hatte］ 誰をも知らなかつた［ところの彼女］ und そして früher 以前には nur wenig Näharbeit ins Haus[3] bekommen hatte 針仕事をほんの僅かしか家へ貰へなかつた die ところの sie 彼女は jetzt 今や als die Mutter des Augustus[4] アウグストゥスの母として wurde wohlbekannt 有名になつた und そして als sie sich[6] je[7] gewünscht hätte およそ彼女が自分のために願つたであらうよりも mehr Gönner[5] ヨリ多くの贔負の人々を hatte 持［つやうになつた］。 Es ging[8] ihr gut 彼女は暮し向きがよくなつた und そして［es ging］ dem Jungen auch［gut］ 子供も亦具合がよかつた、 und そして wohin[9] sie miteinander kamen, 彼等［二人］が何處へ一緒に行つても、da さうすると die Nachbarschaft[10] 近隣の人達は freute sich 喜んだ、［そして］ grüßte 挨拶をし und そして den Glücklichen[11] 此の幸福な母子を sah nach. 見送るのであつた。

註。【1】 es は單なる文法上の主語で、意味上の主語は次の Leute.（第三卷 273）——【2】 auf etwas aufmerksam werden（或物に對して注意深くなる、即ち或物に注目する事）かう云ふ熟語では、たとへば werden（なる）等の意味に拘泥して考へると全體の意味が變になる。——【3】 ins Haus bekommen は、外へ出掛けて仕事するのではなく、自宅でするのだからさう云ふのである。——【4】 二格の語尾を省く。（第四卷 355 の (4) を見よ。）——【5】 Gönner は所謂パトロン、または保護者で、つまり贔負にしてくれる人のこと。 故に「人氣」「愛顧」のことを die Gunst と云ふ。 Augustus はつまり皆の Günstling（寵兒）になつたのである。——【6】 sich は三格。sich wünschen

で、自分のために願ふ。——【7】 je は「曾て」「およそ」。 その否定は nie「決して」である。——【8】 es geht ihr gut. (彼女は景氣よし) 此の非人稱句は必ずしも健康狀態にのみ關して云はれるのではなく、一般に運命、境遇に關しても用ひられる。——【9】 wohin sie auch…… と auch を入れて考へて見る。 所謂認容文である。(第四卷 299 の 3 を見よ)——【10】 Nachbarschaft, *f.* (近隣、向ふ三軒兩隣) これは die Nachbarn (近所の人たち) と、人間の複數を用ひる代りである。-schaft の語尾は斯う云ふ風に或種の集合名詞を作る。 die Mannschaft (乘組員、人員) die Herrschaft, Herrschaften (お客たち、または召使から見た家の人々) die Dienerschaft (召使一同) die Lehrerschaft (教員一同) -schaft にはつまり das Personal (人員、一同、一行、團體) の意がある。 けれどもそれの定動詞は複數にしないから、集合名詞 (Kollektivum) でありながら集合名詞扱ひをしないわけである。——【11】 den Glücklichen (複數三格) 幸福な母子、といふ代りである。(第四卷 427) 三格になるのは、動詞 nachsehen (見送る) が三格支配故。

> 集合名詞
> Kollektivum
> ——
> -schaft の語尾について

14.

Das Schönste hatte Augustus nebenan bei seinem Paten: der rief ihn zuweilen am Abend in sein Häuschen, da war es dunkel, und nur im schwarzen Kaminloch brannte eine kleine, rote Flamme, und der kleine, alte Mann zog das Kind zu sich auf ein Fell am Boden und sah mit ihm in die stille Flamme und erzählte ihm lange Geschichten. Aber manchmal, wenn so eine lange Geschichte zu Ende und der Kleine ganz schläfrig geworden war und in der dunklen Stille mit halboffenen Augen nach dem Feuer schaute, dann kam aus der Dunkelheit eine süße, vielstimmige Musik hervorgeklungen, und wenn die beiden ihr lange und verschwiegen zugehört hatten, dann geschah es oft, daß unversehens die ganze Stube voll kleiner glänzender Kinder war, die flogen mit hellen, goldenen Flügeln in Kreisen

hin und wieder und wie in schönen Tänzen kunstvoll umeinander und in Paaren, und dazu sangen sie, und es klang hundertfach voll Freude und heiterer Schönheit zusammen. Das war das Schönste, was Augustus je gehört und gesehen hatte, und wenn er später an seine Kindheit dachte, so war es die stille, finstere Stube des alten Paten und die rote Flamme im Kamin mit der Musik und mit dem festlichen, goldenen Zauberflug der Engelwesen, die ihm in der Erinnerung wieder emporstieg und Heimweh machte.

譯。 Augustus アウグストゥスは nebenan[2] bei seinem Paten すぐ隣の彼の教父の家に Das Schönste[1] hatte 一等好い事があつた、[卽ち] der[3] 此の教父は ihn 彼を zuweilen 時々 am[4] Abend 晩に in sein[5] Häuschen 自分の家の中に rief 呼ぶのであつた、da 家の中は war es dunkel, 暗かつた、und そして nur im schwarzen Kaminloch[6] 唯黑い壁暖爐の中にのみ eine kleine, rote Flamme 小さな紅い焰が brannte[7] 燃えてゐた、und そして der kleine, alte Mann その小さな老人は das Kind 此の子供を zu sich 自分の方へ auf ein Fell am Boden[8] 床に[敷いて] ある毛皮の上へ zog 引き寄せた und そして mit ihm 彼と一緒に in die stille Flamme 靜かな焰の中を sah 眺め und そして ihm 彼に lange Geschichten 長いお話を erzählte 物語つ[て聞かせ]た。 Aber ところが manchmal 往々にして、 so[9] eine lange Geschichte さう云ふ長いお話が zu Ende [war] 終りになり und そして der Kleine 子供が ganz schläfrig geworden war 全く睡くなつてしまひ und そして in der dunklen Stille 暗い靜寂の中で mit halboffenen Augen 眼を半分開いて nach dem Feuer 火の方を schaute 眺めてゐた wenn 時に、dann さう云ふ時に aus der Dunkelheit 暗闇の中から eine süße, vielstimmige Musik 快い多音の音樂が kam hervorgeklungen,[10] 響いて來るのであつた、und そして die beiden 二人が lange 長い間 und そして verschwiegen 默つて ihr その音樂に zugehört hatten 聽き入つてゐた wenn 時に、dann さう云ふ時に oft 屢々 geschah[11] es [次の樣な事が] 起つた、daß それは卽ち unversehens 不意に die ganze Stube 部屋中が voll[12] kleiner glän-

zender Kinder war 小さな輝やく子供達で一杯になつて、die[13] その子供達は nit hellen, goldenen Flügeln キラキラする金の翼を以て in Kreisen[14] 環を描いて hin und wieder[15] 彼方此方と [flogen 飛び廻はり] und そして wie in schönen Tänzen 美しい舞踏をするやうに umeinander[16] お互ひに相手の周圍を廻つて und そして in Paaren 組を作つて kunstvoll 巧妙に flogen 飛ぶのであつた und そして dazu[17] それと同時に sangen sie, 彼等は歌ふのであつた、und そして voll Freude und heiterer Schönheit 喜悅と晴れやかな美しさに滿ちて hundertfach[19] 千態萬容に es klang[18] zusammen 交響するのであつた。 Das それは、Augustus アウグストゥスが je[20] [およそ] 嘗て gehört und gesehen hatte 聞いたり見たりした was ところの das Schönste 最も愉快な事 war であつた、und そして wenn er später an seine Kindheit dachte, 彼が後になつて自分の幼年時代に就いて考へると云ふと、so さうすると ihm in der Erinnerung 彼の回想の中に wieder 再び emporstieg 浮び上がつて來て und そして [ihm] Heimweh[25] machte[26] 彼に懐郷病を起させた die ところの es[21] それは des alten Paten 年老いた教父の die stille, finstere Stube 靜かな眞暗な部屋 und 及び die rote Flamme im Kamin 壁暖爐の中の紅い焰 mit der Musik 並びに [あの] 音樂 und mit dem festlichen,[22] goldenen Zauberflug[23] der Engelwesen[24] 並びに天使達の賑やかな金色の不思議な飛翔 war であつた。

註。【1】 das Schönste は四格。(schön は美しいではなく、單に「好い」「面白い」の意。)——【2】 neben-an (すぐ脇で、すぐ隣で) nebenan と bei seinem Paten との配語の順序に關しては第四卷 317.——【3】 der は、指示代名詞で、er と云つても好い所だが、男性名詞が二個 (Augustus と Pate と) あるから、最近に述べた方のものだと云ふ點に念を入れるために態々 der と云つたのである。 かう云ふ時には dieser (英語の the latter 後者) と云つても宜しい。(dieser に關しては第二卷 182)——【4】 am Abend (晩に) am Morgen (朝に) am Tage (日中) 但し in der Nacht (夜中)——その他 am Sonntag (日曜に) am Mittwoch (水曜に) am Anfang (當初に) am Ende (終に) am ersten Dezember (十二月一日に) 等、時間關係の副詞的規定には an を用ひる句が多い。——【5】 in の次の四格に注意。家の中で、ではなく、家の中へ [呼び入れた] である。——【6】 der Kamin [發音、カみーン] は壁煖爐で、der Ofen は普通のストーヴである。Loch (穴) は、その口のことで

ある。——【7】 brennen, brannte, gebrannt は、所謂混合變化の動詞 (第二卷 108 の最後の注意 2 を見よ。) で、nennen, nannte, genannt (名づける) rennen, rannte, gerannt (走る) 等も同樣である。——【8】 zu sich auf ein Fell am Boden の配語については、前述の第四卷 317 の規則を適用して考へよ。——【9】 so ein [英語 such a] so eine lange Geschichte (さう云ふ長い話) と eine so lange Geschichte (そんなに長い話) とはちがふ。——【10】 kam .....hervorgeklungen. 此の過去分詞の意味については第四卷 372.——【11】 es geschieht, daß..... (.....といふ事が起る、即ち會々さういふことがある。)——【12】 voll の二格支配は斯う云ふ時にははつきりと出るわけである。——【13】 die は指示代名詞。關係代名詞でない事は次にすぐ定形が來てゐるのでわかる。——【14】 in Kreisen (環を描いて) の in は「中で」ではない。「.....をなして」「.....を形作つて」である。次に出て來る in Paaren (組を組んで) も同樣。 その他の例は in der Gestalt eines Menschen (人間の形をなして) in Stücken (別々に、ばらで) in Strömen (流れをなして) in Massen (群をなして) これらは凡て kreisförmig, paarweise, stückweise, stromweise 等、-förmig (.....形に) -weise (.....式に) といふのと同じ。——【15】 hin und wieder = hin und her. (英 to and fro)——【16】 umeinander = einer um den andern お互同志相手の周圍をめぐつて。(flogen 飛んだ、に掛かる)——【17】 dazu = dabei (それと同時に) dazu には伴奏 (begleiten) する意味がある。 Er geigt und singt dazu (彼は提琴を彈じ同時に歌を唱ふ) Er schlummert nun im Meeresgrund und die Wellen murmeln ein Wiegenlied dazu. (彼は今や海底に眠り、浪が子守唄をつぶやいてゐる。)

Da drunten fließt der blaue
Stadtgraben in stiller Ruh';
Ein Knabe fährt im Kahne,
Und angelt und pfeift **dazu.** (Heine)

見下ろす下は外濠の
靜かな流れが青ずんで
小舟に乘つた少年が
口笛吹いて釣をする。 (ハイネ)

——【18】 es klingt zusammen. (交響する) 普通の動詞を非人稱化したもの。(第三卷 270)——【19】 hundertfach (百重に) 千態萬容に。-fach なる語尾に關しては第四卷 348 を見よ。——【20】 je (およそ嘗て) は was と云ふ不定

關係代名詞の意を補ふためのもの。——【21】 es はずつと後の die と云ふ關係代名詞の先行詞である。此の種の構文については第三卷 279 を見よ。——【22】 festlich (賑やかな) は Fest, *n.* (祭) から來てゐる。同じ祭でも die Feier (儀式の方を指す) と das Fest (後の宴會、餘興を含む) とは區別する。feierlich (物々しい、もつたい振つた、或ひは森閑とした) と festlich (賑やかな、お祭氣分の) とはむしろ全然反對である。——【23】 Zauber は魔法の事。從つて「不思議なもの」は直ぐ Zauber- で造語する。日本は Zauberreich (仙境、お伽噺の國) であるとか、Zauberland であるとか云ふのもそれである。——【24】 Wesen, *n.* (本質、本體) といふのは、つまり所謂「存在」である。詳しく云へば「存在すること」ではなく「存在物」である。たとへば Lebewesen (生物) Doppelwesen (中間物) Teufelswesen (惡魔的存在) Frauenwesen (婦女子) 等。Gott ist das vollkommenste Wesen, das überhaupt existiert. (神は凡そ有りとあらゆる最も完全なる存在である) なぞと云ふ時の Wesen がそれである。輕蔑的に用ひると Existenz とも云ふ。たとへば dunkle, verdächtige Existenzen (行動不明にして不審の廉ある分子) 等。——玆では Engelwesen は Teufelswesen, Frauenwesen 等と同樣、單に die Engel と云ふのとちつとも違はない。(因みに wesen といふ動詞は sein と同意で、gewesen にその跡をとどめてゐる。)——【25】 Heimweh, *n.* (懷鄕病) 英語の homesickness である。-weh は「苦痛」で、Schmerz, *m.* と同意。Zahnweh, Kopfweh, 等。——【26】 machen は verursachen (惹起する) の意。つまり Augustus に里心を生ぜしめたのである。

15.

Indessen wurde der Knabe größer, und jetzt gab es für seine Mutter zuweilen Stunden, wo sie traurig war und an jene Taufnacht zurückdenken mußte. Augustus lief fröhlich in den Nachbargassen umher und war überall willkommen, er bekam Nüsse und Birnen, Kuchen und Spielsachen geschenkt, man gab ihm zu essen und zu trinken, ließ ihn auf dem Knie reiten und in den Gärten Blumen pflücken, und oft kam er erst spät am Abend wieder heim und schob die Suppe der Mutter widerwillig beiseite. Wenn sie dann betrübt war und weinte, fand er es langweilig und ging mürrisch in sein Bettlein;

und wenn sie ihn einmal schalt und strafte, schrie er heftig und beklagte sich, daß alle Leute lieb und nett mit ihm seien, bloß seine Mutter nicht. Da hatte sie oft betrübte Stunden, und manchmal erzürnte sie sich ernstlich über ihren Jungen, aber wenn er nachher schlafend in seinen Kissen lag und auf dem unschuldigen Kindergesicht ihr Kerzenlicht schimmerte, dann verging alle Härte in ihrem Herzen, und sie küßte ihn vorsichtig, daß er nicht erwache. Es war ihre eigene Schuld, daß alle Leute den Augustus gern hatten, und sie dachte manchmal mit Trauer und beinahe mit einem Schrecken, daß es vielleicht besser gewesen wäre, sie hätte jenen Wunsch niemals getan.

譯。Indessen 兎角する中に der Knabe 此の少年は wurde größer, 段々大きくなつた、und そして jetzt 今や für seine Mutter 彼の母親にとつては、sie traurig war 彼女が悲しくなつた[ところの時間] und そして an jene Taufnacht あの洗禮の日の夜の事を zurückdenken mußte[3] 回顧せずには居られなかつた wo ところの Stunden[2] 瞬間が zuweilen 時々 gab[1] es あつた。Augustus アウグストゥスは in den Nachbargassen 近隣の街路の中で fröhlich 嬉々として lief umher 走り廻つた und そして überall 到る處で war willkommen, 歡迎された、er 彼は Nüsse und Birnen 胡桃や梨や Kuchen und Spielsachen お菓子や玩具類[など]を bekam geschenkt,[4] 貰つた、[又] man 人々は ihm 彼に gab zu essen und zu trinken,[5] 食べ物や飲み物を與へた、[又] ihn 彼をば auf dem Knie[6] 膝の上に ließ reiten 乘せた[り] und 又 in den Gärten 庭園の中で Blumen 花を [ließ] plücken 摘みとらせた[りした]、und そして oft 屢々 er 彼は am Abend 晩に erst[7] spät 遲くなつて漸く heim 家 kam wieder へ歸つて來るのであつた、und そして die Suppe der Mutter 母親の[作つた]スープを widerwillig 不機嫌に schob[8] beiseite. 押し除けるのであつた。dann さう云ふ時に sie 彼女が betrübt war 悲しがつて und そして weinte 泣く Wenn と云ふと er 彼は es それを fand langweilig[9] 厭に思ふのであつた und そして mürrisch 不滿顏で ging in sein Bettlein; 自分の寢床へは入るのであつた。und

そして wenn[10] 若し sie 彼女が ihn 彼を einmal 何かの時に schalt und strafte, 叱つたり罰したり [しやうものなら]、er 彼は heftig 烈しく schrie [大聲で] 泣くのであつた und そして alle Leute 總ての人達が mit[12] ihm 彼に對して lieb und nett[11] seien, 親切である [のに]、bloß seine Mutter 彼の母親だけが nicht さうでない daß と [言つて] beklagte sich 不足を云ふのであつた。 Da それで sie 彼女は oft 屢々 betrübte Stunden 悲しい時 hatte があつた。 und そして manchmal 幾度か sie 彼女は über ihren Jungen 自分の息子に對して ernstlich 本氣で erzürnte 怒つた、aber けれども nachher そのあとで er 息子が in seinen Kissen 彼の蒲團の中に schlafend 眠りながら lag 横たはり und そして auf dem unschuldigen Kindergesicht 無邪氣な子供の顏の上に ihr Kerzenlicht[13] 蠟燭の光が schimmerte[14] 反映する wenn と云ふと dann さうすると alle Härte[15] in ihrem Herzen 彼女の心の氣强さはすつかり verging 消え失せるのであつた、und そして sie 彼女は daß er nicht erwache[16] 彼が目覺めない樣に vorsichtig 注意して küßte ihn 彼に接吻するのであつた。 daß alle Leute den Augustus gern hatten, 總ての人々がアウグストゥスを愛するのは Es war ihre eigene Schuld 彼女自身の責任であつた、und そして sie 彼女は manchmal 往々、mit Trauer 悲しみを以て und 又 beinahe mit einem[17] Schrecken, 殆ど一種の恐愕を以て dachte 考へるのであつた、[卽ち] sie hätte[18] jenen Wunsch niemals getan 彼女があの願ひをしなかつた [方が] daß es vielleicht besser gewesen wäre, 恐らく一層良かつたであらうと。

註。【1】 es gibt etwas. 非人稱熟語 (第三卷 271)——【2】 Stunden (時間) は「瞬間」の意に用ひる。冠詞のないのに注目する必要がある。單數なら eine Stunde と不定冠詞をつける筈の場合だからである。(佛語には des といふ不定冠詞の複數があるが、英獨には之れが無いから、その代りに無冠詞にして置く。) 念を入れると gewisse Stunden (或種の瞬間)——【3】 此の場合は「……せざるを得なかつた」の意の müssen. müssen の此の用法が如何にドイツ人に好まれるかに就ては第三卷 250 に詳しく述べた。——【4】 geschenkt bekommen (贈られて手に入れる、卽ち貰ふ) といふ云ひ方の geschenkt に就ては第四卷 313 文例を見よ。その ich habe es zugeschickt erhalten と同じ構造である。——【5】 zu essen geben (食べ物を與へる) zu trinken geben (飲物を與へる)——【6】 auf dem Knie reiten lassen. 子供を膝に乘せて馬の

眞似をして子供を喜ばせるのは西洋の習慣である。——【7】 erst (やつと)「最初」に非ず。「最初」は zuerst.——【8】 schieben, schob, geschoben. (押す) 此處では beiseite schieben (押しのける)——【9】 Langweile, *f.* (退屈) から來た形容詞。退屈といふのは面白くない、厭な、といふ事である。langweilig の反對は kurzweilig (滑稽な、面白い)——【10】 wenn は als と違ふ。als は「或時云々した時に」と、過去に起つた一回きりの事實を述べる接續詞であるが、wenn は、その次に來る動詞が過去であらうと現在であらうと、「もしも……すると」の意になり、從つて過去の場合には、何度もあつたことを指すのである。次に einmal があるから、wenn のさう云ふ意味を知らないと、「或る時彼女が彼を叱つて罰したら」なぞと譯することになつて來る。初步の人にはよく有り勝ちな間違ひである。——【11】 lieb und nett 前述の二語一想なるもの。——【12】 mit ihm = gegen ihn.——【13】 母親が蠟燭を片手に持つて我が兒の寢た樣子を見に來てゐる事がそれとなく叙述されてゐる。——【14】 schimmern は微光が輝やく事で、蠟燭そのものは leuchten すると云ふが、それを反射する小供の顏は單に仄々と明るいに過ぎないから schimmern を用ひたのである。——【15】 酷なことを hart または streng といふ。その名詞 die Härte は「氣の强さ」「氣丈夫さ」位の所か。——【16】 此の第一式接續法に注意。(第三卷 209) エスペラントならば斯ういふ時は斷然命令形を用ひる。ドイツ語では此の場合命令形と第一接續法との間に形の上の區別がなくて曖昧なのである。——【17】 此の場合の不定冠詞は、mit einem gewissen Schrecken (或種の恐怖を以て) といふ意味。——【18】 hätte は接續法故、此の文は前の文の副文章になる。卽ち daß を用ひるのと同じ。

wenn と als とはどう違ふか

16.

Einmal stand sie gerade beim Geranienfenster des Herrn Binßwanger und schnitt mit einer kleinen Schere die verwelkten Blumen aus den Stöcken, da hörte sie in dem Hof, der hinter den beiden Häusern war, die Stimme ihres Jungen, und sie bog sich vor, um hinüberzusehen. Sie sah ihn an der Mauer lehnen, mit seinem hübschen und ein wenig stolzen Gesicht, und vor ihm stand ein Mädchen, größer als er, das sah ihn bittend an und sagte: „Gelt, du bist lieb und gibst mir einen Kuß?“

„Ich mag nicht," sagte Augustus und streckte die Hände in die Taschen.

„O doch, bitte," sagte sie wieder. „Ich will dir ja auch etwas Schönes schenken."

譯。 Einmal[1] 或る時 sie 彼女は gerade 丁度 beim Geranienfenster des Herrn Binßwanger ビンスヴァンゲル氏のジェラニウムの[ある]窓の傍に stand 立つてゐた und そして mit einer kleinen Schere 小さな鋏を以て aus den Stöcken [ジェラニウムの]株から die verwelkten Blumen 萎れた花をば schnitt[2] 剪みとつてゐた、da すると hinter den beiden Häusern 二つの家の後ろに war あつた der ところの in dem Hof[3] 庭の中に die Stimme ihres Jungen 彼女の息子の聲[がするの]を hörte sie 彼女は聞いた、und それで sie 彼女は um hinüberzusehen 其方を見るために bog sich vor 身體を前に曲げた。 Sie 彼女は ihn 息子が mit[4] seinem hübschen und ein wenig stolzen Gesicht 美しい、そして少し高慢な顏をして an der Mauer lehnen 塀に寄り掛つてゐるのを sah 見た、und そして vor ihm 彼の前には größer als er 彼よりも大きな ein Mädchen 一人の少女が stand 立つて居た、das 其の少女は bittend 歎願する樣に sah ihn an[5] 彼の顏を見て und そして sagte: 言つた。 „Gelt,[6]「ねえ、du bist lieb und[7] gibst mir einen Kuß?" 貴方は好い方だから私にキスして下さるでせう?」[と言つた。]

„Ich mag[8] nicht,"「厭だい。」とアウグストゥスは言つて und そして die Hände 兩手を in die Taschen ポケットの中へ steckte 突つ込んだ。

„O doch,[9]「そんな事を言はずに[私の願ひをきいて下さい]、bitte,"[10] どうぞ」[と] sie 彼女は wieder 再び sagte 言つた。 „Ich will dir ja[11] auch[12] etwas Schönes schenken." 私だつて貴方にいゝものを上げてよ。

註。 【1】 einmal [發音、アインまール] ein の方にアクセントを置くと「一回」で、mal の方に置くと「或る時」の意になる。——【2】 schneiden, schnitt, geschnitten (剪る) 此の場合の schnitt は「剪つた」ではなく「剪つてゐた」といふ進行形である。(第二卷 114)——【3】 Hof, *m.* は英語の court で、庭と云つても樹や池のある Garten とはちがふ。 空地、廣つ場といふと少々

大袈裟になる。——【4】 mit. 顏を持つて、といふのは、顏をして、の意。——【5】 ansehen. これは必ず「顏を見る」ことである。たとへば子供が嘘を吐かうとすると、母親が sieh mich an! (私の顏をごらん!) と云ふ等。——【6】 gelt? は nicht wahr? と同じ。詳細は第四卷 385.——【7】 これはかなり重要な現象で、一種の習慣であるが、命令文または願の意の文にあつては、元來ならば主文章副文章の關係に置かれる可き筈の文を、und でつなぐ事がある。その場合は前の方が主文章的なのが普通である。これは二三例を示す必要があらう。(日本語にもその言ひ方はある。)

注意すべき und の一用法

1. Geh und bringe mir eine Flasche Bier! (Geh, um mir eine Flasche Bier zu bringen!) 行つてビールを一本持つて來い。(ビールを一本持つて來るために行け)

2. Kommt und helft! (Kommt, um mir zu helfen!) 來れ而して助けよ! (助けに來てくれ!)

3. Sei so gut und leihe mir dein Messer! (Sei so gut, mir dein Messer zu leihen!) 親切であれ、而して我に汝の小刀を貸し與へよ。(我に汝の小刀を貸し與へる可く親切であれ)

第一第二の場合は日本語にその形式があるが、第三の場合は直譯すると一寸變になるのがわかるであらう。——【8】 mögen は此の場合 wollen と同じ樣な意になる。(第三卷 247 の (4) に詳述す。)——【9】 O doch!——doch は切願の意を表はす言葉である。 O, gib mir doch einen Kuß (おゝ、どうか接吻を與へて下さい) の省略形とも見られる。命令法に nur (まあ) を附け加へるとかなり餘裕のある命令形が出來、doch を加へると切願になる。 Komm nur hierher! (まあ一寸おいでよ) Komm doch hierher! (どうか一寸來て下さい)——【10】 bitte! (どうか!) は ich bitte の ich を略した形で、むしろ間投詞に屬す可きものである。(第四卷 376 (2) の表を見よ。)——【11】 ja も稍 doch と似た役目を持つた助詞で、文章全體に力を入れる時に間に挿む。日本語ならば文章末に「……だよ」「……のよ」「……ちやないか」等を附加する場合に相當する。 das ist herrlich! (それは素敵だ) das ist ja herrlich! (それは實に素敵ちやないか!)——【12】 auch は、日本語にもよくある或種の「また」である。一寸微妙な機能を持つてゐるから二三例をあげて說明する。

auch の用法

1. 泥坊をすれば懲役になる。「だからまた」泥坊なんかする必要はない。 Wenn man stiehlt, so kommt man ins Zuchthaus; man braucht [ja] auch nicht zu stehlen.

2. それは全然間違つてゐる。僕も「また」そんなことを主張しようと云

ふ譯ではない。 Das ist ganz falsch; so etwas will ich auch nicht behaupten.

3. 「彼の男は最近別荘を建てたさうだよ」——「そりやあさうだらう。あいつはまた非常な金持なんだもの。」 „Er hat sich neulich eine Villa bauen lassen, sagt man."——„Kein Wunder! Er ist [ja] auch ein steinreicher Kerl."

4. あいつは自腹を切ると言つてゐる。それがまた當然だらう。 Er will alles selbst bezahlen: so gehört es sich [denn] auch.

要するに、auch は前に一度云つてしまつた事に關する再度の註釋であつて、ja auch, denn auch 等の結合形を以て現れる事が多い。 ja auch は「だからまた」 denn auch は「果して」と譯すれば大抵の場合は間に合ふ。

17.

„Was denn?" fragte der Junge.

„Ich habe zwei Äpfel," sagte sie schüchtern.

Aber er drehte sich um und schnitt eine Grimasse.

„Äpfel mag ich keine," sagte er verächtlich und wollte weglaufen.

Das Mädchen hielt ihn aber fest und sagte schmeichelnd: „Du, ich habe auch einen schönen Fingerring."

„Zeig' ihn her!" sagte Augustus.

Sie zeigte ihm ihren Fingerring her, und er sah ihn genau an, dann zog er ihn von ihrem Finger und tat ihn auf seinen eigenen, hielt ihn ans Licht und fand Gefallen daran.

„Also, dann kannst du ja einen Kuß haben," sagte er obenhin und gab dem Mädchen einen flüchtigen Kuß auf den Mund.

„Willst du jetzt mit mir spielen kommen?" fragte sie zutraulich und hing sich an seinen Arm.

Aber er stieß sie weg und rief heftig: „Laß mich jetzt doch endlich in Ruhe! Ich habe andre Kinder, mit denen ich spielen kann."

譯。 „Was denn?"[1]「一體何を[呉れると言ふの]」[と] der Junge 少年は fragte 尋ねた。

„Ich habe zwei Äpfel,"「私林檎を二つ持つてゐるのよ」[と] sie 彼女は schüchtern おづおづと sagte 言つた。

Aber ところが er 彼は drehte sich um[2] くるりとあつちを向いて und そして schnitt eine Grimasse[3] 侮蔑的な顔をした。

„Äpfel[4] mag ich keine,"「林檎なんか僕は欲しくないよ」[と] sagte er verächtlich 彼は輕蔑する樣に言つた und そして wollte weglaufen 走り去らうとした。

aber 併し Das Mädchen 少女は hielt ihn fest[5] 彼を引留め und そして sagte schmeichelnd: 媚びる樣に言つた。 „Du,「あなた、ich habe auch[6] einen schönen Fingerring." 私美しい指輪も持つてて よ。」

„Zeig' ihn her!"[7]「そいつを出して見せな」[と] sagte Augustus アウグストゥスは言つた。

Sie zeigte ihm ihren Fingerring her, 少女は彼に彼女の指輪を出して見せた、 und すると er sah ihn genau an,[8] 彼は其れをよく眺めた、 dann それから zog er ihn von ihrem Finger 彼は其れを彼女の指から引きぬいて und そして tat[9] ihn auf seinen eigenen, 其れを自分自身の[指]にはめて、 hielt ihn ans Licht 其れを光にあてて und そして fand[11] Gefallen[10] daran. 其れが氣に入つた。

„Also,[12]「ちやあ、dann kannst du ja einen Kuß haben,"[13] そんならお前に接吻を一つしてやらうよ」[と] sagte er obenhin[14] 彼は淺薄に言つた und そして gab dem Mädchen einen flüchtigen Kuß auf den Mund. 少女の口に一寸接吻をしてやつた。

„Willst du jetzt[15] mit mir spielen kommen?"[16]「では貴方は私と一緒に遊びに行つて呉れますか?」[と] fragte sie zutraulich 彼女は慣々しく尋ねた und そして hing sich an seinen Arm. 彼の腕にすがつた。

Aber けれども er stieß sie weg 彼は彼女を衝き除け und そして rief heftig: 激しく叫んだ、 „Laß[17] mich jetzt doch endlich[18] in Ruhe!「もう好い加減に僕の邪魔を止して呉れつてば! Ich habe andre Kinder, mit denen[19] ich spielen kann." 僕は一緒に遊べる子供達が他にもあるんだ[からね]」。

註。【1】 denn. (第四巻 384)——【2】 um-——sich umdrehen, sich umwenden (くるつとあつちを向く事) um- には、くるりと一回轉するといふ意味がある。その際は分離動詞。(第二巻 146)——【3】 Grimasse schneiden. (唇を前へ突き出したり、口をへの字にしたりして、不愉快な、嘲笑的な顏をすること。Gesicht schneiden とも云ふ。)——【4】 Äpfel mag ich keine は Keine Äpfel mag ich または Ich mag keine Äpfel の代りで、Äpfel だけを特に抽出して先頭に据ゑたのである。(所謂 Voranstellung 先置) Äpfel? ich mag keine. または Was die Äpfel betrifft, mag ich keine. と考へればよろしい。——【5】 festhalten (つかまへる) は aufhalten (引留める) zurückhalten (引留める) の意で、別に「しつかり」と捉へるの意ではない。——【6】 この auch は單に「それにまた」の意。前出の auch のやうな微妙なものではない。——【7】 herzeigen. her は自分の方へ近づけること。「出して見せる」とでも云ふところ。Her damit! (出せ、よこせ) なぞとも云ふ。——【8】 ansehen は人に就て云ふ時は顏を見る事だが、物體に就て云ふ時には「眺める」こと。betrachten (觀察する) と同じ。打ち眺める、とでも云つたところ。——【9】 tun といふ動詞は非常に便利で、何でも物體を或る場所に移動せしめる時に使つて好いのである。 etwas in die Tasche hineintun (何かをポケットに入れる) den Faden durch das Öhr (die Öse) tun (針孔に糸を通す) tu mir das Brot her! (パンをこちらへ寄越せ) 其他 wegtun, forttun (片づける、のける) heraustun (出す) 等。——【10】 Gefallen (快感) は gefallen (氣に入る) といふ動詞から來たものであるに拘らず男性。——【11】 an etwas Gefallen finden (或事に愉快を見出す) といふ熟字。その他 Er hatte seine Freude daran. (彼はそれを面白がつた、打ち興じた) もやはり an を支配する。かういふ時には sein (彼の) を附して und fand seinen Gefallen daran と云つても好いのである。——【12】 also は nun または其の次の dann と同じやうなもので、「それでは」「そんなら」の意。——【13】 haben は、物を「やる」とか「貰ふ」とか云ふ際に用ひられる。 Da hast du es! (そらこれをやらう) ich will es haben (僕はそれが欲しい。) Er hat nichts gehabt. (彼は何も貰はなかつた。)——【14】 obenhin (そはそはと、淺薄に、何でもなく、誠意なく) は、分解すると、表面を (oben) 滑つてあつちへ (hin) 行つてしまふ事である。 flüchtig (散慢に、疎略に) nur so (ただ一寸) oberflächlich (皮相的に) leichthin (輕々しく) 等とも云ふ。——【15】 jetzt = nun. (もう、では)——【16】 spielen kommen = spielen gehen. 日本語で「行く」といふ際に kommen を使ふ事がある。Komm mit! (一緒に行かう！一緒に來たまへ。)——【17】 einen in Ruhe lassen (或人を安息に放置する、即ち、邪魔をしない、構はないこと)——【18】 endlich (最後に、即ち、もう好い加減に) は辛抱を切らした時の言

葉。 jetzt endlich で「もう好い加減に」——doch は「……てばよう」位の所。——【19】 denen は關係代名詞、複數三格。 先行詞は Kinder.

18.

Während das Mädchen zu weinen begann und vom Hofe schlich, schnitt er ein gelangweiltes und ärgerliches Gesicht, dann drehte er seinen Ring um den Finger und beschaute ihn, und dann fing er an zu pfeifen und ging langsam davon.

Seine Mutter aber stand mit der Blumenschere in der Hand und war erschrocken über die Härte und Verächtlichkeit, mit welcher ihr Kind die Liebe der andern hinnahm. Sie ließ die Blumen stehen und stand kopfschüttelnd und sagte immer wieder vor sich hin: „Er ist ja böse, er hat ja gar kein Herz."

譯。 das Mädchen 少女が zu weinen begann 泣き出して und そして vom Hofe schlich[1] 庭から澁々歩み去る Während 間 schnitt er ein gelangweiltes und ärgerliches Gesicht; 彼はさも退屈げな、佛頂面をしてゐた。 dann さうしたのち drehte er seinen Ring um den Finger 彼はその指輪を指の廻りを廻した und そして beschaute ihn, それを熟々眺めた、und dann それから fing er an zu pfeifen 彼は口笛を吹き始めた und そして ging langsam davon,[2] ぶらぶらと其處を歩み去つた。

aber 併し乍ら Seine Mutter 彼の母は mit der Blumenschere in der Hand 花鋏を手に持つて stand 立つてゐた und そして mit welcher[4] ihr Kind die Liebe der andern hinnahm (それを以て) 彼女の子供が他人の愛を受け入れた[ところの] über die Härte und Verächtlichkeit 冷酷と侮蔑とに war erschrocken[3] 愕いてゐた。 Sie ließ die Blumen stehen[5] 彼女は花[の方]をほつたらかし und そして stand kopfschüttelnd[6] [嘆かはしげに]頭を搖り乍ら立つてゐた und そして immer wieder[7] 幾度も幾度も sagte vor sich hin:[8] 獨り言を言ふのであつた: „Er ist ja böse,「あの子はたしかに意地惡だ、er hat ja gar kein Herz."[9] あの子はほんとにまるで情けを知らない。」[と獨り言を言ふのであつた。]

註。【1】 schleichen. たとへば馬の歩き方にも並歩 (Schritt) 速歩 (Trab または Trott) 駈歩 (Galopp) の三種があるやうに、人間の歩き方にも色々ある。殊に表情なぞも關係して來る。單に歩むのは gehen 濶歩するのは schreiten 走るのは laufen 疾走するのは stürzen, stürmen ぶらぶら歩くのは wandeln, schlendern てくてく歩くのは wandern ペソッとして澁りながら行くのは schleichen である。在來の獨和辭書を引いて見ると、どれも實感の伴はない譯になつてゐて、「匐ふ」「忍び歩く」「拔足差足で歩く」「潜行する」「人目を忍んで歩く」「こッそり逃げる」等の譯語が附してあるが、それは此の動詞の一つの特殊な場合であつて、それとは明かに別物である所の「澁りつゝ歩く」「消氣て頭垂れた儘一歩一歩と歩む」といふ方の意味は全然書いてない。ところが實際用ひられる場合には此の意味の方が普通なのである。なるほど雙解辭典には langsam (ゆつくりと) といふ注意が附してある。けれどもそれも「ちいつと何物かを覗ひ狙ひながら忍び足で歩く」といふ方にのみ解釋されてゐるらしい。本當にわかつてゐたらもつと何とか具體的な譯語が「忍び歩く」以外に別項をなして出てゐる可き筈である。——schleichen といふ歩き方に對する實感は、たとへば映畫なぞでは盛に出て來る。叱られた子供が家へ歸る時、大威張りで出掛けて行つた男が失敗して恥かしさうにのつそりと元の所へ歸つて來る時、人を殺してしまつた男が萬感交々胸に迫りつつ一歩一歩と其の場を立ち去る時、それらには凡て或種の共通な歩み辭がある。「歩き澁る」とでも云へばよからう。それが schleichen で、極く具體的な、はつきりした概念である。——【2】 davon といふ前綴は von dannen, fort-, weg-, ab- 等と同意で、「去る」意。——erschrecken, erschrak, erschrocken (愕く) の過去分詞を純形容詞的に用ひたもの。——【4】 welcher (女性三格) は die Härte und Verächtlichkeit を先行詞とする關係代名詞。その二つは、所謂聯句と見るが故に、冠詞も一つで間に合せ、次に關係代名詞で受ける時も單數として取扱ふ。——それからその前後一帶の意味であるが、日本語には第一から云つた構造の文がないから、直譯文はどうしても一寸變に聞こえるのは已むを得ないのである。類似の例を二三擧げて見ると、Das ist die Beziehung, in welcher ich mit ihm stehe. (これが私が彼と共に立つてゐる所の關係である。) Das kommt auf die Weise an, auf welche er mich behandelt. (それは彼が私を取扱ふ其の取り扱ひ方次第による) 斯ういふ際の in welcher, auf welche, mit welcher 等は日本語では全然譯し方がない。關係代名詞の無い國語は實に不便である。此の問題の場合も、Ihr Kind nahm die Liebe der andern mit Härte und Verächtlichkeit hin (彼女の子供は他人の愛を無情と侮蔑とを以て受け入れた) といふ文章が基礎となつ

關係代名詞に關する注意

てゐると考へればわかる筈である。——【5】 stehen lassen, liegen lassen (ほつたらかす)——【6】 kopfschütteln はてさて困つたもんだ、とか、こいつはいけない、と云ふ時の表情で、大抵溜息を吐きながら頭をゆるやかに左右に搖る。日本人なら長大息といつた所。——【7】 immer wieder またしてもまたしても、何度も。——【8】 vor sich hin [即ち für sich hin] 第三卷 240 の最後に說明あり。——【9】 心臟を以て情の座とし、頭を以て智の座とするのは洋の東西を問はぬ共通現象で、兩者は常に對照をなしてゐる。Warmes Herz und kalter Kopf sind gut beisammen. (溫き心と冷靜なる頭腦は兩立し得) とか Das Herz geht ihm mit dem Kopf durch. (彼の心が彼の頭を誘拐した) とか云つたやうな事が云はれ、冷酷なのを評して Er hat ein steinern Herz (彼の心は石だ) なぞと云ふのは皆それである。

19.

Aber bald darauf, als Augustus heimkam und sie ihn zur Rede stellte, da schaute er sie lachend aus blauen Augen an und hatte kein Gefühl einer Schuld, und dann fing er an zu singen und ihr zu schmeicheln und war so drollig und nett und zärtlich mit ihr, daß sie lachen mußte und wohl sah, man dürfe bei Kindern nicht alles gleich so ernst nehmen.

Indessen gingen dem Jungen seine Übeltaten nicht ohne alle Strafe hin. Der Pate Binßwanger war der einzige, vor dem er Ehrfurcht hatte, und wenn er am Abend zu ihm in die Stube kam und der Pate sagte: „Heute brennt kein Feuer im Kamin, und es gibt keine Musik, die kleinen Engelkinder sind traurig, weil du so böse warst," dann ging er schweigend hinaus und heim und warf sich auf sein Bett und weinte, und nachher gab er sich manchen Tag lang alle Mühe, gut und lieb zu sein.

譯。 Aber けれども bald darauf, それから間もなく、Augustus heimkam アウグストゥスが家へ歸つて來て und そして sie ihn zur Rede stellte[1] 彼女が彼を詰問した als 時に da その時 schaute er sie lachend

aus[2] blauen Augen an 彼は笑ひ乍ら青い兩眼で彼女を眺めた und そして hatte kein Gefühl einer Schuld, 何等罪の意識を持つてゐなかつた、und dann さうして fing er an zu singen und ihr zu schmeicheln 彼は歌を歌つたり彼女に甘えたりし始めた und そして war so drollig[3] und nett und zärtlich mit ihr,[4] 彼女に對して非常におどけた[眞似をした]り愛嬌を振りまいたり優しくしたりした[ので]、daß[5] それで sie lachen mußte 彼女は笑はずに居られなかつた und そして man 人は bei[7] Kindern 子供達を對手にしては alles 何でも gleich 直ぐに dürfe nicht[8] so ernst nehmen 大眞面目に考へてはならない[ものだと云ふ事が] wohl sah.[6] よく判つた。

Indessen さうかうする中 dem Jungen[9] [此の]少年にとつては seine Übeltaten 彼の惡戯が gingen nicht ohne alle Strafe hin.[10] 何等の罰なしに[ばかりは]濟まなかつた。 Der Pate Binßwanger 教父ビンスヴァンゲルは vor[11] dem er Ehrfurcht hatte 其の人に對して彼が畏敬[の念]を抱いた[ところの] war der einzige 唯一の人であつた、und そして er am Abend zu ihm[12] in die Stube kam 彼が晩に彼(ビンスヴァンゲル)の部屋の中へはいつて行つた[時に] und そして其の時、„Heute brennt kein Feuer im Kamin,「今日は暖爐の中で[少しも]火が燃えない、und そして es gibt[13] keine Musik, 音樂も催されない、weil du so böse warst" お前が餘り意地惡るをしたから die kleinen Engelkinder sind traurig, 小さな天使達は悲しんでゐるのだ」[と] der Pate sagte 教父が語る wenn といふと、dann さうすると ging er schweigend hinaus und heim 彼は默つて[其處から]出て家へ歸つて行くのであつた und そして warf sich auf sein Bett und weinte 自分の寢床の上に身體を投げ[る樣にし]て泣くのであつた、und そして nachher 其の後 gut[16] und lieb zu sein 親切で優しくする樣に、manchen Tag[14] lang 幾日もの間 gab er sich alle Mühe[15] 彼は凡ゆる努力を盡すのであつた。

註。【1】 zur Rede stellen 問ひ詰める、詰問する——詰問を受けるのは Rede stehen 答辯する、といふ。——【2】 aus blauen Augen = mit blauen Augen. aus を用ひるのは、眼を肉體の窓であるやうに見て、その中から本人が首を出してゐると云ふ面白い考へ方である。これは決して作者の發明ではなく、さう云ふ言ひ方があるのである。キョトンとした眼附をしてゐる人に限つて使はれる文句である。——【3】 drollig おどけた、巫山戲た。つまり

眞劍 (ernst) の反對。但し多少可愛いといふ意味が含まれてゐる。大人だつたら närrisch (浮かれた、惡ふざけをする) と云ふところ。——【4】 mit ihr = gegen sie (彼女に對して、彼女を相手に) 何故 mit を使ふかと云ふに、er war so drollig mit ihr は、換言すれば er trieb es so drollig mit ihr 或ひは er ging mit ihr so drollig um. (彼は彼女を相手に馬鹿げた眞似ばかりした) といふ事で、態度ではなく、むしろ行動の事を云はうとしたのである。但しこれは原文よりも註釋の方が難解になつては困るからこれ位にして置く。——【5】 so……daß.——drollig の前の so と一緒になつて、「……事程左樣に」の意になる。——【6】 此の sehen は einsehen (悟つた) の意。英語でも Yes, I see と云へば、「ははあ、わかりました」である。——【7】 bei には「……の場合にあつては」の意がある。即ち wenn man es mit den Kindern zu tun hat (小供を相手にしては、小供が相手では) である。——【8】 nicht は、(定形を打消す時以外は) 必ず打消さる可き言葉の直前に置くと說明して置いた。(第四卷 400 の前半) 此の場合は alles を打ち消してゐるのではなく、dürfe nicht である。それはその次の alles gleich so ernst nehmen (なんでもすぐに大眞面目に考へる) が全體として一つの句に考へられるからである。——すぐ次の行の nicht の位置に關しても同じ事が云へる。ohne alle Strafe hingehen (何等の罰なくしてすむ) は單一なる熟語である。——【9】 三格に Ethischer Dativ, Dativ des Interesses (利害關係の三格) なるもののある事は第四卷 418 に述べたが、これも其の例である。利害の三格は、どうも「……に」で譯するのはまづい。「……に取つては」とでも云はないと日本語にならない。——【10】 ohne alle Strafe hingehen については數行上に述べた。人間を主語にすると Er ging nicht immer ohne alle Strafe aus, または er kam nicht immer ohne alle Strafe davon (彼は必ずしも何の罰もなくして脫出すると云ふわけではなかつた)——【11】 逃げる (fliehen) 畏れる (sich fürchten) 等の意味の句が vor を要求すると云ふ事は既に一回註しておいた。——【12】 zu ihm in die Stube (彼の所へ、部屋へ) といふ副詞的規定の序列についても前に註した事がある。(規則は第四卷 317) 此處では ihm in die Stube 即ち in seine Stube と云つても好い。(第四卷 416)——【13】 此の es gibt の使ひ方は、第三卷 272 es gibt の項を覺えてゐる人には、一見規則に反する如く思はれるであらう。これはあの es gibt ではない別な es gibt である。即ち es wird gegeben (催される) の意である。たとへば、今月は歌舞伎に何が「掛かつて」ゐるか、(Was wird in diesem Monat in Kabuki gegeben?) 曲目は……だ。(man gibt……或は es gibt 或は wird gegeben.)——【14】 manchen Tag に lang がついて四格になるのは何故か? (第四卷 428)——【15】 sich Mühe geben (努力する) = sich bemühen, bemüht

sein, versuchen.——〔16〕 gut には「親切」といふ意味がある。 前に述べた sei so gut und sage es niemand! (どうか後生だからその事は誰にも云つてくれるな) 等の言ひ廻しの gut がそれである。 gütigst (どうか) の事も第三卷 228 で述べた。

20.

Jedoch das Feuer im Kamin brannte seltener und seltener, und der Pate war nicht mit Tränen und nicht mit Liebkosungen zu bestechen. Als Augustus zwölf Jahre alt war, da war ihm der zauberische Engelflug in der Patenstube schon ein ferner Traum geworden, und wenn er ihn einmal in der Nacht geträumt hatte, dann war er am nächsten Tage doppelt wild und laut und kommandierte seine vielen Kameraden als Feldherr über alle Hecken weg.

Seine Mutter war es längst müde, von allen Leuten das Lob ihres Knaben zu hören und wie fein und herzig er sei, sie hatte nur noch Sorgen um ihn. Und als eines Tages sein Lehrer zu ihr kam und ihr erzählte, er wisse jemand, der erbötig sei, den Knaben in fremde Schulen zu schicken und studieren zu lassen, da hatte sie eine Besprechung mit dem Nachbar, und bald darauf, an einem Frühlingsmorgen kam ein Wagen gefahren, und Augustus in einem neuen, schönen Kleide stieg hinein und sagte seiner Mutter und dem Paten und den Nachbarsleuten Lebewohl, weil er in die Hauptstadt reisen und studieren durfte. Seine Mutter hatte ihm zum letzten Male die blonden Haare schön gescheitelt und den Segen über ihn gesprochen, und nun zogen die Pferde an, und Augustus reiste in die fremde Welt.

譯。 Jedoch けれども das Feuer im Kamin 暖爐の火は brannte seltener und seltener,[1] 燃える事が段々稀になつた、 und そして der Pate war

nicht[2] mit Tränen und nicht mit Liebkosungen zu[3] bestechen 教父は涙に依つても、あまえる事に依つても籠絡されはしなかつた。 Als Augustus zwölf Jahre alt[4] war, アウグスト。スが滿十二歳になつた時には、 da 其の時には ihm 彼にとつては der zauberische Engelflug in der Patenstube 教父の部屋に於ける不可思議な天使の飛翔は war schon ein ferner Traum geworden[5] 既に遠い [過去の] 夢となつてしまつてゐた、 und そして wenn er ihn einmal[6] in der Nacht geträumt hatte 彼が夜にたまたまさう云ふ夢を夢みた時には、 dann さう云ふ時には war er am nächsten Tage doppelt wild und laut 彼はその次の日には [常の] 二倍も亂暴で騒々しかつた und そして seine viele Kameraden 彼の多くの仲間達を als Feldherr 將軍として kommandierte über alle Hecken weg.[7] 凡ての生籬を越えて號令引率し去るのであつた。

Seine Mutter 彼の母は von allen Leuten das Lob ihres Knaben 凡ゆる人々 [の口] から自分の息子に對する賞讃を und そして wie fein und herzig er sei, 彼が如何に美しく且つ愛らしいかを zu hören 聞くのには war es[8] längst müde とうの昔に飽きて居た、 sie hatte nur noch[9] Sorgen um ihn. ただもう彼の事を心配するだけであつた。 Und そして eines Tages[10] 或日の事、 sein Lehrer zu[11] ihr kam 息子の先生が彼女の所へやつて來て und そして den Knaben in fremde Schulen zu schicken und studieren zu lassen [此の] 少年を他所の學校へやつてそして勉强させようと erbötig[12] sei 申出て居る der ところの er wisse[12] jemand 或る人に彼は心當りがある [と] ihr erzählte 彼女に物語つた als 時に da その時に hatte sie eine Besprechung mit dem Nachbar, 彼女は隣人 [ビンスヴァンゲル] と相談をした、 und そして bald darauf, 其の後間もなく、 an einem Frühlingsmorgen 或る春の朝 kam ein Wagen gefahren,[14] 一臺の馬車が走つて來た、 und そして Augustus アウグストゥスは in einem neuen, schönen Kleide 新らしい綺麗な着物を着て stieg hinein [その馬車に] 乘り込んだ und そして sagte seiner Mutter und dem Paten und den Nachbarsleuten Lebewohl, 彼の母や教父や近所の人達に別れを告げた、 weil 何故なれば er 彼は in die Hauptstadt reisen und studieren durfte. 首府へ出掛けて行つて勉强する事を許されたのだつた [から]。 Seine Mutter 彼の母は zum letzten Male これを最後と ihm die blonden Haare 彼の金髪を hatte schön gescheitelt

美しく分けてやつたのであつた und そして [hatte] den Segen[15] über[16] ihn gesprochen, 彼の上に祝福の辭を述べたのであつた、und そして nun 今や zogen die Pferde an,[17] 馬共は [馬車を] グッと引いた、und そして Augustus reiste in die fremde Welt. アウグストゥスは異鄕へ旅立つた。

註。【1】 selten (稀な) seltener und seltener = immer seltener. (第三卷 225 の 1.)——【2】 nicht が二個連續して使つてあるのは、weder……noch…… といふのと同じ。(第四卷 307)——【3】 war……zu bestechen. (第四卷 291) ——【4】 zwölf Jahre alt. (第四卷 428)——【5】 war geworden = werden (成る) の過去完了。なつてしまつてゐた。——【6】 einmal = zufällig (たまたま)——【7】 über alle Hecken wegkommandieren. (あらゆる生籬の上を越えて號令引卒し去る) 之れを稱して Lativum (轉動語法) と云つたのである。(第四卷 430) 丁度持つて來いの實例であるから必ず 430 を一讀復習して貰ひたい。——【8】 es.——müde (疲れた) zufrieden (滿足したる) gewohnt (慣れた) はすべて支配が定つてゐて、müde は二格 (ich bin des Schreibens müde 私は書くのに疲れた) zufrieden は mit (ich bin zufrieden mit dir 私はお前に滿足する) gewohnt は an 又は二格 (ich bin an das Rauchen gewohnt, または des Rauchens gewohnt) となつてゐるが、「それ」と云ふ es の場合だけは四格支配になる。(ich bin es müde, ich bin es zufrieden 等)——【9】 nur noch (ただもう……のみ)——【10】 eines Tages (或日の事) 此の二格の形が副詞的になる事に就ては第四卷 329.——【11】 zu については第三卷 239.——【12】 wissen の補足語に人間を意味する字が附くと、それは kennen (顏見知りがある) の際とは違つて、「心當りがある」といふ意になることは既に註で述べた。——【13】 erbötig = bereit. (申し出でてゐる、志がある) erbötig sein で「提議してゐる、申し込んでゐる」の意。das Anerbieten (申し出で) sich erbieten (義俠的に打つて出る) 等と關係がある。——日本語でなら動詞で云ひ表はす所を、形容詞で云ひ表はす事は決して少くない。bemüht sein, bestrebt sein 努力する so frei sein, etwas zu tun. (敢て……する) 等。——【14】 gefahren kommen に關しては第四卷 372.——【15】 den Segen über einen sprechen (ある人の上に祝福の辭を述べる) とは要するに einen segnen (或人を祝福する) ことである。子供が旅行に出ようとでも云ふ時には必ず親が祝福してやる。子は親の前に跪いて合掌し、親は子の頭上に手を置き、天を仰いで神の祝福を乞ふ。たとへば沙翁のハムレットの中のポローニアスが子息レーヤーチーズに與へる祝福、または Dumas (デュマ) の「三銃士」の最初の、ダルタニアンが巴里へ出掛ける時に父から受ける祝福等は人口に膾炙した名場面である。一たいに父母の祝福、父母の呪ひは人の運命を

左右する力を持つものとされてゐる。——【16】 über ihn.——或人の上に (祝福あれ、呪あれ) といふのは、その人の全運命を一瞥の下に集めて、といふ氣持の文句である。über は時々さう云ふ意味を持つことがある。Ein Unglück kommt über mich. (不幸が一身に振り掛かる、頭上に一下する。) Standrecht ist über die Hauptstadt verhängt. (首都に戒嚴令が布かれてゐる。) ——【17】 anziehen は普通の anziehen (着物を着る) といふ方ではなく、全然別字である。馬が鞭打たれてぐつと一引き車を引く、その次にはごろごろと車が動き出すわけであるが、その最初の衝動 (Anstoß) を與へるのを anziehen と云ふのである。an- の此の意味は、諸種の面白い造語を許す。たとへば跳躍 (Sprung) をやるものは、まづスプリングボード (Schwungbrett) の後に引き下つて相當の距離を置き、然る後はつと身がまへして Anlauf nehmen (スタートを切る、機みをつける) をする。それが Anlauf (勢をつけるための走り) である。その他 Anstoß (最初の衝動) Anlaß (動機) Anfang (初め) Ansatz (意志の動き) 等の an- はみんな「初め」といふ意味を持つてゐる。

21.

Nach manchen Jahren, als der junge Augustus ein Student geworden war und rote Mützen und einen Schnurrbart trug, da kam er einmal wieder in seine Heimat gefahren, weil der Pate ihm geschrieben hatte, seine Mutter sei so krank, daß sie nicht mehr lange leben könne. Der Jüngling kam am Abend an, und die Leute sahen mit Verwunderung zu, wie er aus dem Wagen stieg und wie der Kutscher ihm einen großen Koffer in das Häuschen nachtrug. Die Mutter aber lag sterbend in dem alten, niederen Zimmer, und als der schöne Student in weißen Kissen ein weißes, welkes Gesicht liegen sah, das ihn nur noch mit stillen Augen begrüßen konnte, da sank er weinend an der Bettstatt nieder und küßte seiner Mutter kühle Hände und kniete bei ihr die ganze Nacht, bis die Hände kalt und die Augen erloschen waren.

譯。 Nach manchen Jahren, 幾年か後に der junge Augustus [此の]若いアウグストゥスが ein Student geworden war 學生になつて、 und そして rote Mützen[1] und einen Schnurrbart trug[2] 赤い帽子をかぶつたり髭を生やしたりしてゐた als 時に da 其の時に kam er einmal wieder in seine Heimat gefahren,[3] 彼は一度再び自分の故郷へ[馬車で]やつて來た、 weil それは seine Mutter sei[4] so krank, 彼の母の病氣が非常に惡い[ので]、 daß sie nicht mehr lange leben könne[5] 彼女はもはや長く生きて居る事は出來まい[と] der Pate ihm geschrieben hatte 教父が彼[の所]へ手紙を書いてやつたのであつた[からであつた]。 Der Jüngling[6] kam am Abend an, 此の青年は晩に到着した、 und そして wie[8] er aus dem Wagen stieg 彼が馬車から下りる所を und そして又 wie der Kutscher ihm[9] einen großen ledernen Koffer in das Häuschen nachtrug 馭者が彼の後から大きな革製のトランクを家の中へ運んで行く所を die Leute sahen mit Bewunderung zu[7] 人々は讃歎[の心]を以て見物した。 aber[10] ところが Die Mutter 母親は in dem alten, niederen Zimmer 古い天井の低い部屋の中に lag sterbend 死に瀕して横はつてゐた、 und そして der schöne Student [此の]美しい學生が in weißen Kissen 白い蒲團の中に nur noch[11] 今は只 mit stillen[12] Augen 默々たる眼を以て ihn begrüßen[13] konnte 彼に挨拶をする事が出來[るに過ぎなかつ]た das ところの ein weißes, welkes Gesicht liegen sah 白い瘠せ衰へた顏が橫はつてゐるのを見た als 時に da その時 sank er weinend an der Bettstatt nieder 彼は泣き乍ら寢臺の傍に倒れた und そして küßte seiner Mutter[14] kühle Hände 彼の母の冷やかな手に接吻した und そして bis die Hände kalt und die Augen erloschen waren[16] その[母の]手が[全く]冷たくそして眼が光を失つてしまふ迄 kniete bei ihr die ganze Nacht[15] 一夜中彼女の傍に膝まづいてゐた。

註。【1】 Mütze, *f.* (緣のない帽子、英語の cap) が此處で複數になつてゐるのは、一般的に云つたからである。 理屈を云ひ出せば、或る時期の間、一つの帽子を冠り通すと云ふ方が反つて不思議な位である。 要するに單數複數といふ問題は必ずしも形式的には裁き得ない。 たとへば、縱令十人子供のある人でも für Weib und Kind (妻子のためには) 命を投げ出すであらうし、たとへ一人しか子供の無い人でも ich habe auch für Kinder zu sorgen それ

名　詞

複數を用ひるか單數を用ひるかの問題

に子供 (複數) の事も考へなくつちやならないし、と云ふ。 Kinder と云ふから何人ゐるのかと思つて訊ねて見ると實は只今のところ一人きりだと云つたやうな事が有り勝ちである。 要するに一般的に云ふ時には、具體的に考へた數とは必ずしも一致しない。 rote Mützen は日本語でなら「赤帽なんてものを」である。 同樣に、「私が彼と初めて遭つた時には、彼は金時計を持つてゐた」を譯するとすると、これは具體的な一つの金時計を指して云ふのだから、er trug eine goldene Uhr と云ふが、「彼も昔は金時計なんてものをぶら下げたものだ」と一般的に云ふ際には Ehemals trug er goldene Uhren といふ。 (Ehemals trug er eine goldene Uhr と云へば、さて其の時計は其の後どうなつたらう、質屋へ行つたか人に呉れたか？ なんて事が問題になつて來る。「金時計なんぞ」の意の時には goldene Uhren である。) 一時に二個も三個も下げて歩いたのではない事は勿論である。 それに反して、複數の物を一般的に云ふ際には好んで單數を使ふ。 Er hat ein gutes Ohr. (彼奴は仲々耳がさとい) aus dem Auge, aus dem Sinn. (眼を去れば心を去る、去るものは日に疎し。)——【2】 tragen, trug, getragen. 「運ぶ」ことにも云ふが「持つてゐる」「帶びてゐる」「身につけてゐる」ことにもいふ。 Kleider tragen (着物を着る) einen Hut tragen (帽子を冠る) Schuhe tragen (靴を穿く) Brille tragen (眼鏡を掛ける) einen Bart tragen (髭を生してゐる) den Kopf hoch tragen (頭を高く持する) einen Namen tragen (名を有する) 等、身につけて持つてゐるのを何でも tragen と云ふ。——【3】 gefahren kommen. [これも前出の通り]——【4】【5】 名親の手紙の間接引用故第一接續法。——【6】 此の Jüngling (青年) と云ふ言葉で既に彼が子供 (Kind) や少年 (Knabe) ではない事が告げられてゐる。——【7】 zusehen (見物する)——zu には英語の at の意がある。 der Zuschauer (觀衆) zuhören (傾聽する) zulächeln (微笑みかける) zureden (助言する、言つてきかせる) zulaufen (押し寄せる)——【8】「……云々するのを」看る、または聞くと云ふ際、即ち sehen, hören 等の次には、日本語で考へると daß を用ひさうな所で獨逸語は wie を用ひる。別に「如何に……するかを」といふ程 wie の意が强く出るのではなくて、單に「……するのを」または「……する所を」の意に過ぎない。——【9】 ihm は nachtragen と合して意味をなす。 即ち einem etwas nachtragen (或人の後から或物を運ぶ) といふ使ひ方である。 nach- の前綴の附く動詞は大抵三格を要求する。 einem nachsehen (或人の後姿を見送る) einem etwas nachsagen (ある人の陰で或事を噂する。)——【10】 aber といふ接續詞には、一

種の極く輕い意味の用法がある。まあ日本語の「ところが」または「ところで」または「一方」(andererseits) である。時には單に「すると」と云ふ意味だけしかない事がある。それは敍事詩的の文體に多い (epischer Stil)。此處の aber (一方) の妙味がわかつたら獨逸語はもう卒業です。——【11】 nur noch (今はただ) 註 20 の [9] を見よ。——【12】 still = stumm (默した)——【13】 begrüßen は四格を支配する。故に ihn……begrüßen.——【14】 seiner Mutter (二格) が kühle Hände の前に行く構造に就ては第一卷 71.——【15】 die ganze Nacht (四格、副詞的) に就ては第四卷 325.——【16】 日本語では「動作」として云ひさうな所を「狀態」で云ふ事がある。Er ist da! (彼が來た) Da liegt er! (彼は其處に横たはつてゐる、卽ち、彼は倒れた! の意) 殊に bis の後に於ては、最後の活人畫的と云はうか畫面的と云はうか、一つの靜止的效果をねらつて、狀態を以て動作の代りにする事が多い。過去完了はつまり畫面的、狀態的表現である。

Da liegt er 彼は「倒れた」

22.

Und als sie die Mutter begraben hatten, da nahm ihn der Pater Binßwanger am Arm und ging mit ihm in sein Häuschen das schien dem jungen Menschen noch niedriger und dunkler geworden, und als sie lange beisammen gesessen waren und nur die kleinen Fenster noch schwach in der Dunkelheit schimmerten, da strich der kleine alte Mann mit hageren Fingern über seinen grauen Bart und sagte zu Augustus: „Ich will ein Feuer im Kamin anmachen, dann brauchen wir die Lampe nicht. Ich weiß, du mußt morgen wieder davonreisen, und jetzt, wo deine Mutter tot ist, wird man dich ja so bald nicht wiedersehen."

譯。Und そして als sie die Mutter begraben hatten, 彼等が母親を葬つてしまつた時に da その時 nahm ihn der Pater Binßwanger am[1] Arm 敎父ビンスヴァンゲルは彼の腕を取り und そして ging mit ihm in sein Häuschen, 彼を連れて自分の家の中へ入つて行つた、das 其の家は dem jungen Menschen 此の若者にとつては schien noch niedriger und

dunkler[2] geworden [以前よりも] 一層みすぼらしく且つ一層暗くなつた樣に思はれた、und そして sie lange beisammen gesessen waren 彼等 [二人] が長い間一所に坐り und そして nur die kleinen Fenster noch schwach in der Dunkelheit schimmerten[3] たゞ小さな窓のみが尙ほ微かに暗の中で仄白く見えた als 時 da その時 der kleine alte Mann [此の] 小さな老人は mit hageren Fingern 痩せた指で strich über[4] seinen grauen Bart 彼の白髯を撫し und そして sagte zu Augustus: アウグストゥスに向つて言つた、„Ich will ein Feuer im Kamin anmachen,[5] 私は暖爐の中に火を燃やさう、dann さうすれば brauchen wir die Lampe nicht. 吾々はランプがいらない。du mußt morgen wieder davonreisen, お前は明日再び出發しなければならない [と云ふ事を] Ich weiß 私は知つてゐる、und jetzt, wo[6] deine Mutter tot ist,[7] お前の母が死んでしまつたところの今 [となつては]、wird man[9] dich ja so bald nicht[8] wiedersehen." 屹度お前に近い中に再會する事は [出來] ないであらう。

註。【1】「或人の腕を取る」と日本語では云ふが、決して腕だけ取るのではなく、腕と共に御本人そのものをも拉し去るのであるから、ドイツ語では einen am Arm nehmen (或人を腕の所で取る) と云ふ。同樣に泥坊の襟首を掴むのは einen Dieb beim Nacken fassen もしくは ihn an der Kehle fassen である。am Arm の Arm は決して捉まへる方の人の腕ではない。相手 (einen) の方の腕なのである。けれども、事實は、要するに腕を組んで (Arm in Arm) 歩くと云ふ所に歸著する。——【2】 noch niedriger und dunkler [als es früher war 以前さうであつたよりも]——【3】 schimmern は前に一度注意したやうに、輝くのではない、仄かに白く見えることである。——【4】 über と四格 = 或物の表面を傳はつて、の意がある。über das Wasser (水面を渡つて) über die Wangen (双頰を傳はつて)——【5】 an- は aus- と對照して、火や光やその他電氣なぞを「附ける」「消す」といふ時に用ひる前綴である。das Feuer anmachen (火をつける) ausmachen (消す) 水道の栓をねぢて水を出すのは andrehen, とめるのは ausdrehen. (drehen は、ねぢる事) 電氣のスキッチをパチン (knips!) と捻つて附けるのは anknippen, anknipsen, 消す方は ausknippen, ausknipsen と云ふ。(扉や本を開閉するのを auf- と zu- とで現はすのと同じ樣な問題である。——【6】 wo と云ふ接續詞は必ずしも空間的ではなく、時間的にも用ひる。in der Zeit, wo……

an-	點ずる、つける、出す。
aus-	消す、とめる、しめる。

(云々の時に於て) in dem Augenblick, wo…… (……云々の瞬間に於て)——【7】 tot ist. これも日本語なら動詞で云ひさうな所を形容詞を用ひて狀態として云ふ一例で、これは極くわかり易い。——【8】 nicht so bald と云ひさうな所を so bald nicht と云つてある。これは so bald を强めんがためである。第四卷 401「局部强調の目的を以てする nicht の後置」の項を見よ。——【9】 man といふのは、此處では Binßwanger 氏が自分自身の事を指して云つてゐるのである。 wir を使つても構はないが、ドイツ語は、主語を具體的に指したくない時にはよく man を使ふ。 誰かが部屋へ這入つて來ると man kommt hier nicht herein! (這入つて來てはいけません!) 子供が六人もあると仲々樂ぢやないね、と自分の事を云ふ時でも So leicht wird es einem nicht, wenn man sechs Kinder hat. [einem は man の三格、第二卷 183 の注意 1 を見よ] 要するに日本語で主語を省く時には man で云ふと思へば大過はないと知る可きである。

> man の二格三格四格は eines, einem, einen を用ひる。

23.

Indem er das sagte, zündete er ein kleines Feuer im Kamin an und rückte seinen Sessel näher hinzu, und der Student den seinen, und dann saßen sie wieder eine lange Weile und blickten auf die verglühenden Scheiter, bis die Funken spärlicher flogen, und da sagte der Alte sanft: „Lebe wohl, Augustus, ich wünsche dir Gutes. Du hast eine brave Mutter gehabt, und sie hat mehr an dir getan, als du weißt. Gern hätte ich dir noch einmal Musik gemacht und die kleinen Seligen gezeigt, aber du weißt, das geht nicht mehr. Indessen sollst du sie nicht vergessen und sollst wissen, daß sie noch immer singen und daß auch du sie vielleicht einmal wieder hören kannst, wenn du einst mit einem einsamen und sehnsüchtigen Herzen nach ihnen verlangst. Gib mir jetzt die Hand, mein Junge, ich bin alt und muß schlafen gehen."

Augustus gab ihm die Hand und konnte nichts sagen, er

ging traurig in das verödete Häuschen hinüber und legte sich zum letzten Male in der alten Heimat schlafen, und ehe er einschlief, meinte er von drüben ganz fern und leise die süße Musik seiner Kindheit wieder zu hören. Am nächsten Morgen ging er davon, und man hörte lange nichts mehr von ihm.

譯。 Indem er das sagte, 斯う言ひ乍ら zündete er ein kleines Feuer im Kamin an 彼は暖爐の中に小さな火を付けた und そして rückte seinen Sessel näher[1] hinzu, 彼の椅子を[暖爐の方へ]近寄せた、und そして der Student[2] den[3] seinen 學生[アウグストゥス]は彼の[椅子]を[近寄せた] und dann それから saßen sie wieder eine lange Weile 彼等[二人]は再び長い間坐して居た und そして bis die Funken spärlicher[5] flogen 火花の飛び方が一層少くなる迄 blickten auf die verglühenden Scheiter[4] 消えかゝる薪[の火]を眺めて居た、 und da その時 sagte der Alte sanft: 老人は靜かに言つた、 „Lebe wohl, Augustus, 「左樣なら、アウグストゥスよ、 ich wünsche dir Gutes.[6] 私はお前に幸福[がある樣に]祈ります。 Du hast eine brave[7] Mutter gehabt, お前は好い母を持つたのだ、und そして sie 彼女は als du weißt お前が知つてゐるよりも mehr より以上の事を hat an[8] dir getan お前に對して爲したのだ。[若し出來る事なら] ich 私は Gern 喜んで dir お前に noch einmal もう一度 hätte[9] Musik gemacht und die kleinen Seligen[10] gezeigt, 音樂を催ほしそして小さな天使達を見せてやりたいのだ[が]、 aber 併し乍ら du weißt,[11] お前も知つてゐる通り、 das geht[12] nicht mehr. それは最早不可能な事なのだ。 Indessen しかし sollst du sie nicht vergessen お前はそれらのものを忘れてはならない und そして daß sie noch immer singen 彼等が相變らず歌つてゐる[と云ふ]事を und そして wenn 若し du お前が einst 將來いつか mit einem einsamen und sehnsüchtigen Herzen 淋しいそして憧れの心を以て nach[13] ihnen verlangst 彼等を求めるならば daß auch du sie vielleicht einmal wieder hören kannst お前も亦もう一度彼等[が歌ふの]を再び聞く事が出來る[のだと云ふ]事を sollst wissen 心得て居なければならない。 Gib mir jetzt[14] die Hand, では握手をしませう mein Junge, 吾が子よ、 ich bin alt 私は年をとつてゐる und そして muß schlafen gehen."[15] 寢に就かなければならない。

Augustus gab ihm die Hand アウグストゥスは彼と握手をした und そして konnte nichts sagen, 何も言ふ事が出來なかつた、er ging traurig in das verödete[16] Häuschen hinüber 彼は悲しげに［今は］荒寥たる家の中へ入つて行つた und そして legte sich zum letzten Male[17] in der alten Heimat schlafen,[18] 昔なじみの故郷で最後の一夜を明すために身を横へた、und そして ehe er einschlief, 彼が眠り込む前に、meinte[19] er von drüben ganz fern und leise die süße Musik seiner Kindheit wieder zu hören, 彼は遙か向ふの方から（そして）靜かに彼の子供の時代に聞いた美はしい音樂が聞えて來る樣な氣がした。 Am nächsten Morgen ging er davon, その翌朝彼は其處から立ち去つた、 und そして man hörte lange[20] nichts mehr von ihm. ［その後］長い間彼の便りは聞かれなかつた。

註。【1】 näher は nah（近き）の比較級で、それを副詞として用ひたもの。——【2】 und der Student ［rückte］ seinen ［Sessel näher hinzu］ と云ふ可きを、前文に既にある字だけ省いてしまつたのである。 これを省略（Ellipse）といふ。——【3】 den seinen は seinen Sessel の代りであるが、かう云ふ省略の時には大抵定冠詞をつける。但し時には der seine の代りに sein-er と、强語尾で現はすこともある。 また der seinige, des seinigen 等、物主代名詞に -ig の語尾をつけた形容詞を用ひることもある。——【4】 Scheit, *n.*（薪）の複數。 Scheite といふ複數もある。——【5】 spärlicher ［比較級］ つまり、今までよりもより貧弱に、より心細く、の意。——【6】 Gutes. = viel Gutes と云つても好いところ。——【7】 brav は、此處では別に「勇敢な」と云ふ意味ではない。「元氣の好い」といふ意でもない。 そんなのとは全然違つた brav である。「好いお母さん」と云へばよからう。 wacker とも云ふ。 gute Mutter と云へば「親切な母」になり、ehrliche Mutter と云へば「正直な」また時とすると「貞女」のやうにもきこえる。 そこで日本語の「好い」といふ字が別になければならない。 それが brav である。——【8】 an dir = gegen dich, für dich（おまへに對して）——【9】 hätte. これが約束法である。 wenn es sich machen ließe（もしも出來ることならば）を裏に置いて考へればわかる。——【10】 die Seligen. selig は、「眞福なる」の意で、時には死んだ人々の事も云ひ、時には、今の場合の樣に天使の事も云ふ。 つまり天國、天上、神の世界に住むものの謂である。 die seligen Götter（至福の神々）

「彼のそれ」は
{ der seine
{ seiner
{ der seinige

等、ほとんど神、天使、故人等の枕詞（Epithet）だと思へばよろしい。 語根は Seele（靈）から來てゐるから、本當は（靈界の）といふ意味で、幸福な、といふ意はむしろ後から生じたと見るべきである。——【11】 du weißt, Sie wissen 等は、wie du weißt, wie Sie wissen（御存じの如く）と同じ。——【12】 das geht nicht. = das ist nicht möglich. 日本語の「さう云ふ譯に行く」とか「行かない」とか云ふ語法によく似てゐる。 das geht nicht an. と angehen の形を用ひることもある。——【13】 verlangen（憧れる）は nach を支配する。——【14】 jetzt は、今までにも度々あつた通り、「今」ではなく、「では」といふ意のことがある。 卽ち nun（英語の now）と同じである。——【15】 schlafen gehen（就寢する）は熟語。 vor dem Schlafengehen（就寢前）なぞと名詞にすら用ひる位である。——【16】 verödet. öde（荒れた、荒寥たる）と同じ。 das verödete Häuschen といふのは、母が亡くなつて一人きりになつた自分の家。——【17】 zum letzten Male は「遂に」ではない。「これを最後に」卽ち寢おさめをしたわけである。——【18】 sich schlafen legen.（寢るために身を横たへる）——【19】 zu hören meinen = zu hören glauben. 聞くやうな氣がする。 Es war ihm（Ihm war）, als hörte er…… でもよいわけ。——【20】 lange. 長い間といふ時には -e の語尾をつけて lange と云ふ。 lang と云ふ時はむしろ省略した形である。（但し前に數量の規定を附けると必ず lang と云ふ。 zwei Stunden lang 二時間の間、等。）

話の內容に關する註釋。——敏感な讀者は、作者が何を談らんとするかを既に看破された事と思ふが、老婆心までに作品の思想に關する解說を一寸附加へて置く。 例の不思議な音樂と天使の舞とは一たい何の心算であらう？ それは何かの象徵（Sinnbild, Symbol）に違ひない。まだ世の中の惡を知らぬ幼年時代には耳に聞こえ眼に見えるが、もはや一旦世の濁流を浴びて、惡智慧が附き、意識が生じ、一人前になり掛かると云ふともう聞く事も見る事も出來ない。「もう一度お聞かせ申したいが、もう一寸お聞かせする譯にも行かない」と云つた敎父 Binßwanger 氏の言葉は意味深長である。 彼は同時に附け加へる、「しかしその內にまた、あなたが孤獨におなりになつて、本當にもう一度聽きたいと心からお願ひになる事があれば、或ひはまた聞こえないものでもありますまい。」

天使の樂の意味する所は、一言にして云へば「善心」である。 人生の「里心」である。 それは人生の出發點を意味すると同時にまた人生の歸結を意味する。 子供は願はずして天樂を聞き、老人は紆餘曲折の人生を通過した後に於て……（幸ひにして心眼が開け得度の境地に達した曉には）願つて之れを再び聞く事が出來る。 前者はこれを意識前の善心と呼ぶ事が出來、後者は之れを意識後の善心と呼ぶ事が出來る。 die schöne Seele（美しき魂）といふのはつまり斯う云ふ善心を云ふので、善しき魂にも此の二種類がある。 要するに佛敎の思想とちつとも違はない。 人生るるや善、善は惡によつて

揚棄せられ、そのまた惡が必然的に再度の善を胚胎する。目的論的 (teleologisch) に云へば、惡心は最後の善心を生まんがための契機 (Moment) であつて、最後の善心こそ、これ卽ち辯證論的第三者 (dialektisches Tertium) であり、人生窮極の目的であるといふことになつて來る。これが此の童話の敎訓 (fabula docet) である。どうか其の心算で讀んで頂きたい。

24.

Bald vergaß er auch den Paten Binßwanger und seine Engel. Das reiche Leben schwoll rings um ihn, und er fuhr auf seinen Wellen mit. Niemand konnte so wie er durch schallende Gassen reiten und die aufschauenden Mädchen mit spöttischen Blicken grüßen, niemand verstand so leicht und hinreißend zu tanzen, so flott und fein im Wagen zu kutschieren, so laut und prangend eine Sommernacht im Garten zu verzechen. Die reiche Witwe, deren Geliebter er war, gab ihm Geld und Kleider und Pferde und alles, was er brauchte und haben wollte, mit ihr reiste er nach Paris und nach Rom und schlief in ihrem seidenen Bett, seine Liebe aber war eine sanfte, blonde Bürgerstochter, die er nachts mit Gefahr in ihres Vaters Garten besuchte und die ihm lange, heiße Briefe schrieb, wenn er auf Reisen war.

譯。 Bald vergaß er auch den Paten Binßwanger und seine[1] Engel. 間もなく彼はまた敎父ビンスヴァンゲルとその天使達と[の事]を忘れてしまつた。 Das reiche[2] Leben schwoll[3] rings um ihn, 豐富なる人生は彼の周圍に滿ち滿ちた、 und そして er fuhr auf seinen Wellen mit.[4] 彼はその波に浮んで一緒に乘り出した。 so wie er 彼の如くに durch schallende[5] Gassen reiten どよめく街路を馬に乘つて通つて und そして die aufschauenden Mädchen 見上げる乙女達に mit spöttischen Blicken 輕蔑的な眼付を以て grüßen 挨拶する事は Niemand konnte 誰も出來なかつた。[又] so leicht und hinreißend[6] zu tanzen, [彼の樣に] そんなに容易に且つ魅惑的に踊る事、so flott[7] und fein im Wagen zu kutschieren,[8]

[彼の樣に] そんなになだらかに且つ優雅に馬車に乘つて操車する事、so laut und prangend[9] eine Sommernacht im Garten[10] zu verzechen[11] [彼の樣に] そんなに聲高に且つ異彩を放ちつゝ庭園の中で夏の夜を飲み明す事[を] niemand konnte 心得て居る者は誰もなかつた。 Die reiche Witwe, deren Geliebter er war 彼がその戀人であつたところの金持な未亡人は Geld und Kleider und Pferde お金や着物や馬や und それから alles, was er brauchte[12] und haben wollte 彼が必要であり又[彼が]欲しいと思つたところの總ての物を gab ihm 彼に與へた、mit ihr reiste er nach Paris und nach Rom 彼女と一緒に彼は巴里へ又羅馬へ旅行をした und そして schlief in ihrem seidenen[13] Bett, [彼は] 彼女の絹の寢床の中で眠つた、aber 併し乍ら seine Liebe[14] 彼の意中の人は war eine sanfte, blonde Bürgerstochter, 或るおとなしい金髮の町娘であつた、die その娘を er 彼は nachts 夜 mit[15] Gefahr 危險を冒して in ihres Vaters Garten 彼女の父の庭園に於て besuchte 訪ねるのであつた und そして die その娘は wenn er auf Reisen[16] war 彼が旅行に出て居た時には[いつも] ihm 彼に lange, heiße Briefe schrieb 長い熱烈な手紙を書くのであつた。

註。 【1】 seine は勿論 Pater Binßwanger を指すので、主人公の事ではないすぐ前の名詞を受けて und で結びつけられる物主代名詞は西洋語獨特のもので、近頃は大ぶ日本語にも其の口調が輸入されて來た。物主代名詞には大した意味はないと思つてよろしい。 Pater Binßwanger と天使達とを殆んど一體として考へるから seine と云ふので、もし兩者をはつきり區別しようと云ふ時には dessen Engel といふ。——【2】 das reiche Leben. reich (豐富な) といふのは、bunt (多色) vielfältig (多樣な) unerschöpflich (無盡藏な) な事で、斯ういふ式の形容詞は epithetisch (枕詞的) である。卽ち數個ある人生の中で reich なのが、といふ意味ではなく、人生といふものは reich なものであると云ふ、一般的宣言が其處に言ひ現はされてゐるのであるから、枕詞的といふのである。(これに反して、大きな子供とか靑い花とか云ふ際の形容詞を determinierend 限定的)、と呼ぶ事が出來る 枕詞的な例を擧げると、たとへば der große Cäsar, der tapfere Siegfried なぞと固有名詞に附く枕詞を初め、料理術を讃美して die edle Kochkunst といひ、葡萄酒を der kühle Wein (淸冷なる薰酒) と呼ぶのなぞも、みなその部類に屬する。文學書の飜譯によく見

枕詞 [Epitheton] に用ひられる形容詞

る誤譯は、この枕詞を普通の限定的な意味に取つたのがかなり多い。——【3】 schwellen. 辭書の譯語だけでは一寸實感の得られない字である。 schw といふ子音に關する實感が先づ必要であるが、これは英語の sw なんぞよりはずつと豐かな響きを持つてゐて、何でも斯う「ざわざわ」とした「濛々」とした「混沌」たる響きを表はす。たとへば幾千羽の鳥が群 (Schwarm) をなして飛ぶ時の羽音は schwirren すると云ふ。濛々たる蒸氣や毒瓦斯は Schwaden と呼ばれ、胎内に何者かが「むくむく」と滿ちてゐるのは schwanger (妊娠せる) であると云つたやうに、獨逸人は此の schw については或種の定義し難い語感を持つてゐるのである。また schw の次に流動子音 (Liquida) 即ち l, n, m. 等が來ると、或種の軟らかさが加はつて、「脹れる」と云つたやうな運動概念が生ずる。schwellen が其の一例で、「澎湃と」嵩が增すことになる。即ちざわざわ、ぶくぶく、むくむくと無數の雜音を伴ひながら物がその内部から「むくみ」上つて來る事である。此處では水嵩にたとへて云つてあるから、同樣な例をあげて見ると、ゲーテの Der Fischer (漁夫) といふ譚詩 (Ballade) の最初に次のやうな詩句がある。

schwellen の意味

Das Wasser rauscht', das Wasser schwoll,
Ein Fischer saß daran,
Sah nach dem Angel ruhevoll,
Kühl bis ans Herz hinan.

潮はどよめき潮は滿つ、
磯に釣する漁夫ありて、
水冷胸に迫りつつ、
無心に針を眺めたり。

それから漁夫は海の魅惑と水の神秘に誘はれて、入るとはなしに水に入つてしまふと云ふのが筋であるが、此の神秘な「海の氣配」を表現するのに schwoll の一語が如何に效いてゐるか！ 本篇の主人公の場合も、人生を海に譬へるとすれば正にそれである。——【4】 und er fuhr auf seinen Wellen mit. (そして彼はその波に浮かんで一緒に乘り出した。) そして今後は彼もまた人生の怒濤の翻弄する所となる、と云ふ譯である。——【5】 schallende Gassen = lärmende, belebte Gassen. どよめく巷。——現代の日本で云へばまづ銀ぶらと云つた樣なところ、なるべく人出の多い所を選つて馬を驅るなぞと云ふのは、大學生なぞの最も好むところである。その目的は勿論女たちに見

られたいといふ所にある。——【6】 hinreißen は浚つて行くことで、hinreißend は人の氣持を浚つて行く樣に、心も行かむばかりに、思はず見惚れるやうに、の意。——【7】 flott も、泛ぶが如くに、飄乎として、なだらかにの意。輕い華奢(きゃしゃ)な馬車がするすると走るのを形容するには持つて來いの字である。——【8】 Kutsche, *f.* (馬車) Kutscher (馭者) から造つた動詞で、自から操車すること。 das Auto (自動車) だつたら hinter dem Steuerrad sitzen (操輪を執る) とか auteln (ドライヴする) とか云ふところ。——【9】 prangen は元來「光る」ことであるが、それを抽象的に用ひて、「異彩を放つ」ことに云ふ。(prunken ともいふ)——【10】 夏の夜、麥酒を飲みながら、提灯 (Lampion) の滿飾を施した料理屋の園で園遊會をやるのは大學生生活の最も樂しい部分である。彼等は室内の宴を好まない。——【11】 四格を補足語とする ver- の造語に注目する必要がある。 einen Abend verplaudern (一晩を喋舌り明かす) das ganze Leben vertrödeln (一生を無爲にすごす) die Gelegenheit versäumen (ぐづぐづしてゐて機會を逸する) die ganze Nacht vertrinken (一夜を飲み明す)——以上は時間的であるが、Haus und Hof vertrinken (家も邸も飲み果す) sein Geld verspielen (所持金を賭博で費ひ果たす) 等の造語もある。——zechen は飲食すること。だから勘定の事を Zeche といふ。——【12】 brauchen (要する) = bedürfen (二格支配); gebrauchen (使用する) と混同すべからず。【13】 物質名から「……製の」といふ形容詞を作る時には、-en をつけるものと -ern をつけるものとがある。 Gold 黄金 golden 金製の Metall 金屬 metallen 金屬製の Seide 絹 seiden 絹製の Silber 銀 silbern 銀製の Erde 土 irden 土製の——Stein 石 steinern 石製の Glas ガラス gläsern 硝子製の Wachs 蠟 wächsern 蠟製の Eisen 鐵 eisern 鐵製の Stahl 鋼鐵 stählern 鋼鐵製の。——【14】 seine Liebe といふ Liebe は、lieb (親愛なる) といふ形容詞から轉來したものではなく、die Liebe (戀) といふ抽象名詞の方である。それが轉意して Geliebte, Liebchen, Lieb (戀人) の意に用ひられるのである。戀人に向つて、汝は meine Hoffnung (私の希望) meine Sehnsucht (わが憧れ) であると云ふ Anrede (呼びかけ) があるが、さう云ふ風に meine Liebe (我が愛よ) と云つたのが初まりである。 seine Liebe は「彼の意中の人」とでも云ふか。——【15】 mit Gefahr = auf die Gefahr hin, entdeckt zu werden 見附かるといふ危險を冒して。——これが所謂批評の副詞句 (第四卷 330) で、方法の副詞とは具合がちがふのである。たとへば er besuchte sie ungestraft weiter (彼はなほも彼女を訪問し續けたが幸ひ無難にすんだ) といふと、ungestraft (罰せられずに) 等は一寸また變つて結果の副詞になる。(第四卷 331)——【16】 auf Reisen (旅行中) の Reise が複數になつてゐるのも、前の rote Mützen の場合と同じやうに、どの旅行ともなく、一般的に云ふからである。

25.

Aber einmal kam er nicht wieder. Er hatte Freunde in Paris gefunden, und weil die reiche Geliebte ihm langweilig geworden und das Studium ihm längst verdrießlich war, blieb er im fernen Land und lebte wie die große Welt, hielt Pferde, Hunde, Weiber, verlor Geld und gewann Geld in großen Goldrollen, und überall waren Menschen, die ihm nachliefen und sich ihm zu eigen gaben und ihm dienten, und er lächelte und nahm es hin, wie er einst als Knabe den Ring des kleinen Mädchens hingenommen hatte. Der Wunschzauber lag in seinen Augen und auf seinen Lippen, Frauen umgaben ihn mit Zärtlichkeit, und Freunde schwärmten für ihn, und niemand sah — er selber fühlte es kaum —, wie sein Herz leer und habgierig geworden war und seine Seele krank und leidend lag. Zuweilen wurde er es müde, so von allen geliebt zu sein, und ging allein verkleidet durch fremde Städte, und überall fand er die Menschen töricht und allzu leicht zu gewinnen, und überall schien ihm die Liebe lächerlich, die ihm so eifrig nachlief und mit so wenigem zufrieden war. Frauen und Männer wurden ihm oft zum Ekel, daß sie nicht stolzer waren, und ganze Tage brachte er allein mit seinen Hunden hin oder in schönen Jagdgebieten im Gebirge, und ein Hirsch, den er beschlichen und geschossen hatte, machte ihn froher als die Werbung einer schönen und verwöhnten Frau.

譯。 Aber ところが einmal [終に]或る時 kam er nicht wieder.[1] 彼は最早歸つては來なかつた。 Er hatte Freunde in Paris gefunden, 彼は巴里で友達を見付けたのであつた、 und そして die reiche Geliebte ihm langweilig geworden [war] その金持な戀人が彼にとつて興味なくなつてしまひ und そして das Studium 勉學が ihm 彼にとつて

längst ずつと以前から verdrießlich[2] war 嫌で溜らなかつた weil ので、 blieb er im fernen Land 彼は[此の]遠隔の地に留つた und そして lebte wie die große Welt,[3] 上流社會の樣な生活をした、[卽ち] hielt[4] Pferde, Hunde, Weiber,[5] 馬や犬を飼つたり、妾を置いたりした、[そして] verlor Geld und gewann Geld in[6] großen Goldrollen, 莫大な金額を損したり又儲けたりした、 und そして ihm nachliefen 彼の後を追ひ廻し und そして sich ihm zu eigen gaben[7] 彼に己が身を捧げ und そして ihm dienten 彼に仕へる die ところの Menschen 人間が waren überall 到る處にあつた、 und そして er lächelte und nahm es hin,[8] [さう云ふ時には]彼は微笑んであつさりそれを受けるのであつた、 wie er einst als[9] Knabe den Ring des kleinen Mädchens hingenommen hatte. [それは]丁度嘗て彼が小さな少女の指輪を[平氣で]受けとつた事があつた樣に[受けとるのであつた]。 Der Wunschzauber[10] 呪咀の魔力が in seinen Augen 彼の眼の中 und 及び auf seinen Lippen 彼の口唇の上に lag[11] 籠つてゐた、[それで] Frauen 婦人達は mit Zärtlichkeit[12] 情を以て umgaben ihn 彼をとり卷いた、 und そして Freunde schwärmten[13] für ihn 友人達は彼に熱狂した、 und そして wie sein Herz leer und habgierig geworden war 彼の心が空虛にそして貪慾になつてしまつてゐた事を und そして [wie] seine Seele krank und leidend lag[14] 彼の魂が病氣になつて苦しんでゐた事を niemand sah 誰も知らないのであつた —— er selber fühlte es kaum [そして]彼自身すらもその事を殆ど感じないのであつた。 Zuweilen 時々 er 彼は so von allen[15] geliebt zu sein[16] さう云ふ風に總ての人々から愛される事に wurde es müde 飽き々々した。 und それで allein 只一人 verkleidet[17] 變裝して ging durch fremde Städte, 異鄕の都會を遍歷した、 und そして überall 到る處で die Menschen töricht 人間は馬鹿で und そして allzu[18] leicht zu gewinnen [人間達をば]自分の意のまゝにする事の餘りにも容易なる事を fand er 彼は見出した、 und そして überall 到る處で、 ihm so eifrig nachlief 斯くも熱心に彼の後を追ひ廻し und 而も mit so wenigem zufrieden war 僅かで滿足する die ところの die Liebe[19] 愛は schien ihm lächerlich 彼には馬鹿々々しく思はれた。 Frauen und Männer 女達や男達は daß[21] sie nicht stolzer[22] waren 彼等がもつと自尊的でないのが wurden ihm oft zum Ekel[20] 彼に屢々嘔吐を催さしめた、 und そして ganze Tage 數日

間を er allein 彼は唯一人で mit seinen Hunden 彼の犬共と一緒に oder 或は in schönen Jagdgebieten[24] 美しい獵區の中で brachte hin[23] 暮した、und そして den er beschlichen[25] und geschossen hatte 彼がそつと追跡してそして射斃したところの ein Hirsch 一匹の鹿は die Werbung[26] einer schönen und verwöhnten[27] Frau 美しいそしてむつかしい女の求婚 als よりも machte ihn froher 一層彼を喜ばせるのであつた。

註。【1】 旅に出るとある以上は必らず何時かは歸つて來るものである。ところが遂に一度出たつきりになつてしまつた。此の云ひ方が仲々氣が利いてゐて面白い。 碎いて云へば Aber es kam doch die Zeit, wo er nicht wieder zurückkam.——【2】 das Studium war ihm verdrießlich = er war des Studierens müde (geworden) うんざりした。——【3】 die große Welt = die höhere Gesellschaft, die Großen (上流社會、貴顯)——【4】 抱へる、置く、取る、飼ふ、使ふ、等が halten. たとへば Autos halten (自家用自動車を持つてゐる) zwei Hausmädchen halten (下女を二人置く) Zeitung halten (新聞を取る) 等、何でも專用することを云ふ。——【5】 所謂 Konkubine (妾)——【6】 此の in については前に述べた。 卽ち儲けるのも負けるのも、決して in geringeren Summen (少額づつ) ではない。 札で云ふなら in dicken Bündeln または bündelweise (束をなして、束で算へるほど) の取引が行はれるのだが、金貨だから、積んで柱 (棒と云つてもよからう) にして紙で卷いた Rolle, Goldrolle (金貨の棒) を單位にして話すほど話が大きい事を云ふのである。 in は、-weise といふ語尾でも云ひ表はせる。——【7】 sich einem zu eigen geben (我身を或人に、その人の所有物として與へる) 卽ち sich einem widmen 人に身を捧げる。 その人の奴隸 (Leibeigener, Sklave) となつて、その人に顧使される等を云ふ。——【8】 hinnehmen 輕々しく受ける。何でもない事のやうに受け入れる事。——【9】 als Knabe 子供として、卽ち子供の時に。——【10】 Wunschzauber の Wunsch は「願ひ」の意ではなく、呪咀の意である。 さう云ふ意味では、たとへば verwunschen (魔法にかかつた) といふ形容詞がある。「いばら姫」(Dornröschen) の童話では、たとへば城中が魔法に掛かつて凡てのものが眠り込んでしまふが、さう云ふ、魔法にかかつて百年後に目覺めると云つた樣な呪を受けた城を das verwunschene Schloß と云ふ。——【11】 liegen は、斯う云ふ時には「宿る」「籠る」の意。 はつきりと輪廓が見定められ、位置が決まつてゐる時には stehen を使ふが、唯何とはなしにその邊に在る「氣配」がすると云ふ時には liegen がよろしい。——【12】 zärtlich [發音 zä は長] は、「柔しい」の外に、「惚れつぽい」「戀心の」といふ、情愛の方に就て云ふ事が多い。 たとへば Roderich Benedix 作の zärtliche

Verwandten (情愛深き緣者たち) といふ喜劇は非常に名高い大衆的なものであるが、それは「情深い」と「多情の」との二つの概念に掛けた皮肉で、人物としては、大勢の女がゐて、それがみんな一人の男を對象にして自分に惚れてゐると思ひ込んでゐると云ふ滑稽が中心をなしてゐる。要するにどつちつかずな變な形容詞で、略日本語の「醜女の深情」といふ「なさけ」にあたるのが Zärtlichkeit である。(英語の tenderness)——【13】 für etwas schwärmen 或物に熱狂する。 溺愛、感激を Schwärmerei と云ふ。——【14】 狀態を表はす時に、形容詞と主語とを sein で結びつける以外、sein の代用になる繫詞的動詞 (kopulative Verben) が澤山ある。 liegen もその一つである。 Sie ist krank——sie bleibt krank——sie wird krank——sie liegt krank——sie steht gelassen da (悠々としてゐる)——sie sitzt verlassen.——【15】 形容詞の名詞化したものは必ず大書するが、指示詞等の名詞化は小書する。(第二卷 197)——【16】 geliebt zu sein = geliebt zu werden. werden の代りに sein を用ふる例は少くない。 Sei mir gegrüßt! (挨拶されてあれ、よくいらつしやいました) 等。 殊に wollen を伴ふ時には必ず sein で受身を表はす。 Etwas anderes will auch berücksichtigt sein. それと少し違つた點も考慮されねばならぬ。 (soll……werden と同じ)——【17】 verkleidet (變裝して) は、つまり incognito (お忍びで) の意で、別に verkappt, vermummt (假裝して、マスクをつけて) といふ程ではない。——【18】「餘りにも」は zu, allzu, vielzu, viel zu viel, allzu sehr. leicht zu gewinnen は「容易に得べき」または「得べく容易なる」である。 限定と被限定の關係を誤つてはならない。(第四卷 283 及び 291, 292 を見よ)——【19】 玆では die Liebe (愛) が人格化されてゐる。——【20】 wurden ihm oft zum Ekel. Ekel (嘔吐) といふのはつまり Gegenstand des Ekels (嘔吐の對象) である。 Frauen und Männer ekelten ihn an. と anekeln (嘔吐を催さしめる) と云ふ動詞を用ひて言つてもよい。——【21】 daß の前には、glaubend (……と思つて) sagend (と云つて) sich fragend (と不審りつつ) 等の概念が省かれ……ると云ふよりはむしろ飛び踰え (überspringen) られてしまふ事がある。 此處では前の文の主語が er でないから glaubend ではつなぎ得ないが、darin (……といふ點で) を daß の前に置いて考へればわかる。意味は weil sie nicht stolzer waren である。——【22】 stolzer [比較級] 大意は、何故もつと自尊的でないのかと憤慨して、であるが、碎いて云ふと daß sie nicht stolzer waren, als es bei ihnen meistens der Fall war.——der Fall sein は現在さうであるの意。——【23】 hinbringen [暮す] は zubringen, verbringen とも云ふ。——【24】 Gebiet, *n.* は「領地」「領區」——【25】 beschleichen. この schleichen こそは「忍び歩く」といふ意である。 そして、或物を目標にして或る動作をすると云ふ時には、その動詞に be- を附

して他動詞を作るのが慣例である。「或物に就て話す」は von etwas sprechen. 「或物を論ずる」は etwas besprechen 等。——【26】 werben [um 支配] は、物でも人でも好い、何かを「求める」「手に入れんと試みる」事である。英語の to woo) 男女關係では、口說く、言ひ寄る、時には求婚する意味になる。erwerben (獲得する) は、それに er- (目的到達を意味する前綴) の附いたものである。外に似た意の freien といふ動詞もあるが、これは露骨に「緣談を持ち掛ける」、時には、結婚する、事である。——【27】 verwöhnt は、「惡い癖のついた」が第一の意で、それから「氣むづかしい」「好みのむつかしい」「機嫌取りのむづかしい」「氣持の奢つた」といふ意になる。

26.

Da sah er einstmals auf einer Seereise die junge Frau eines Gesandten, eine strenge, schlanke Dame aus nordländischem Adel, die stand zwischen vielen andern vornehmen Frauen und weltmännischen Menschen wundervoll abgesondert, stolz und schweigsam, als wäre niemand ihresgleichen, und als er sie sah und beobachtete und wie ihr Blick auch ihn nur flüchtig und gleichgültig zu streifen schien, war ihm so, als erfahre er jetzt zum allerersten Male, was Liebe sei, und er nahm sich vor, ihre Liebe zu gewinnen, und war von da an zu jeder Stunde des Tages in ihrer Nähe und unter ihren Augen, und weil er selbst immerzu von Frauen und Männern umgeben war, die ihn bewunderten und seinen Umgang suchten, stand er mit der schönen Strengen inmitten der Reisegesellschaft wie ein Fürst mit seiner Fürstin, und auch der Mann der Blonden zeichnete ihn aus und bemühte sich, ihm zu gefallen.

譯。 Da ところが einstmals 或時 auf einer Seereise 或る海上旅行の途上 die junge Frau eines Gesandten[1] 或る公使の若い夫人を er sah 見た、[その夫人は] aus nordländischen Adel 北歐の貴族の系統の eine strenge[2] schlanke Dame 峻嚴なすらりとした婦人で、 die 此の婦人は zwischen vielen andern vornehmen Frauen und weltmännischen[3] Menschen

他の多くの高貴な婦人達や社交にたけた男子達の間に als wäre niemand ihresgleichen,[5] 宛も彼女に肩を並べ得るものは誰もないかの如くに stand stolz und schweigsam 誇らかに且つ沈默勝ちに立つて居た und そして als er sie sah und beobachtete 彼が彼女を見て熟視した時に und そして [その時] wie[6] ihr Blick auch[7] ihn nur flüchtig[8] und gleichgültig zu streifen schien, 彼女の視線が彼をさへもほんのチラリとそして事も無げに擦過する樣に見えたので、 was Liebe sei 戀とは何であるかを als erfahre[10] er jetzt zum allerersten[11] Male, 彼はいま始めて經驗したかの樣な war[9] ihm so [彼は] 氣持がした、und そして er nahm sich vor,[12] ihre Liebe zu gewinnen, 彼は彼女の愛を獲得しようと企てた、und そして von da an[13] その時以來 zu jeder Stunde des Tages 一日中の凡ゆる時間に [er] war in ihrer Nähe und unter ihren Augen [彼は] 彼女の身邊 [を離れず] にそして彼女の眼の屆く所に居た、 und そして er selbst[14] 彼自身 [の方でも] die ihn bewunderten und seinen[16] Umgang suchten 彼を讃嘆し且つ彼の友情を求めてゐるところの von Frauen und Männern 女達や男達に依つて immerzu[15] 何時も umgeben war 取り卷かれて居た weil ので er 彼は mit der schönen Strengen[17] [此の] 美しい峻嚴な婦人と共に wie ein Fürst[20] mit seiner Fürstin 夫人と同道の王侯の如くに inmitten[18] der Reisegesellschaft[19] 一行の人々の眞只中に stand 立つてゐた、und そして auch der Mann[21] der Blonden[22] [此の] 金髮の婦人の良人すらも zeichnete ihn aus[23] 彼を特別扱ひして und そして ihm zu gefallen 彼に氣に入る樣に bemühte sich 努力してゐた。

註。 【1】 第二卷 193.——【2】 女が streng (嚴な) だと云ふのは、峻嚴な、威ある、の意。日本の女にはあまり見かけぬ型である。——【3】 Weltmann とは、社交に長けた、世渡りを心得た、外交官、政治家、銀行家等の型の男である。たとへば Goethe はその戲曲 Torquato Tasso に於て Weltmann 型の冷靜老練な Antonio と、藝術家型の熱烈な純眞の Tasso とを對立比較して表現してゐる。——【4】 vereinzelt (孤立して) abgetrennt (離れて)——【5】 ihresgleichen, seinesgleichen, meinesgleichen, deinesgleichen. (同輩) はみんな格變化をしない。——【6】 wie = da (……だつたので、……だから) weil の意を持つ。——【7】 auch ihn. (彼をも、彼をすらも) auch は前置的接續詞。第四卷 309, 310, 311.——【8】 flüchtig = vorübergehend, leichthin, obenhin. ——【9】 es war ihm [so], als ob…… と同じ。非人稱熟語。第三卷 271

——【10】 前に als ob を用ひれば erfahre はずつと文の最後に來る。 als ob 又は als の次には普通は第二式接續法を用ひるが、此處は第一式になつてゐる。 第三卷 217.——【11】 aller-erst の前綴 aller- に就ては第三卷 224. ——【12】 sich (三格) etwas vornehmen 或事を志す。企てる。——【13】 von da an (その時以來) の an に就ては第三卷 240.——【14】 er selbst (彼自身が)=auch er (彼の方でも)——【15】 immerzu=immer, beständig. (しよつちゆう)——【16】 seinen Umgang=seine Freundschaft.——【17】 mit der schönen Strengen = どちらも形容詞であるから同じ語尾を取つてゐる。——【18】 inmitten [二格支配の前置詞] (……の眞只中に)——【19】 Gesellschaft 「一行」「一同」「一座」の意。——【20】 Fürst, *m.* は元來は侯爵の意であるが、英語の prince と同じく、何でも王侯、支配者ならば Fürst と呼ぶ。——【21】 der Mann (良人)=Gemahl, Gatte.——【22】 die Blonde (金髮の女) も形容詞の名詞化である。——【23】 einen auszeichnen (或人を他の衆と區別すること、即ち特別待遇し、特に引き立てること。 英語の to distinguish である。

27.

Nie war es ihm möglich, mit der Fremden allein zu sein, bis in einer Hafenstadt des Südens die ganze Reisegesellschaft vom Schiffe ging, um ein paar Stunden in der fremden Stadt umherzugehen und wieder eine Weile Erde unter den Sohlen zu fühlen. Da wich er nicht von der Geliebten, bis es ihm gelang, sie im Gewühl eines bunten Marktplatzes im Gespräch zurückzuhalten. Unendlich viele kleine, finstere Gassen mündeten auf diesen Platz, in eine solche Gasse führte er sie, die ihm vertraute, und da sie plötzlich sich mit ihm allein fühlte und scheu wurde und ihre Gesellschaft nicht mehr sah, wandte er sich ihr leuchtend zu, nahm ihre zögernde Hand in seine und bat sie flehend, hier mit ihm am Lande zu bleiben und zu fliehen.

Die Fremde war bleich geworden und hielt den Blick zu Boden gewendet. „Oh, das ist nicht ritterlich," sagte sie leise. „Lassen Sie mich vergessen, was Sie da gesagt haben!"

譯。 [さう云ふわけで] mit der Fremden[1] allein zu sein, [此の] 他國の婦人とたゞ二人きりになる事は Nie war es ihm möglich, 彼には全く不可能であつた、bis[2] [所が] 終に [或時] in einer Hafenstadt des Südens 南國の或る港町で die ganze Reisegesellschaft 一行全部 [の人々] は um ein paar[3] Stunden in der fremden Stadt umherzugehen 二三時間 [此の] 異國の町の中を歩き廻るために und そして [um] wieder eine Weile Erde unter den Sohlen zu fühlen 再び地面をば暫らくの間足の裏に感ずるために vom Schiffe ging 船から出て行つた。 Da すると wich[4] er nicht von der Geliebten, 彼は戀人から離れなかつた、[ので] bis[5] 終に im Gewühl eines bunten[7] Markts 賑やかな市場の雜沓の中で sie im Gespräch zurückzuhalten 彼女を談笑の間に引き止める事が es ihm gelang[6] 彼に成功した。 Unendlich viele, kleine, finstere Gassen 數限りない小さな薄暗い横町が mündeten[8] auf diesen Platz 此の [市場の] 廣場に接してゐた、in eine solche Gasse さう云ふ一つの横町へ sie, die ihm vertraute,[9] 彼を信頼してゐたところの彼女を führte er 彼は連れて行つた、und そして sie plötzlich sich mit ihm allein[10] fühlte 彼女が突然自分が彼と只二人きりである事を感じ und そして scheu[11] wurde 怯氣付き und そして ihre Gesellschaft nicht mehr sah 一行の影を最早見なかつた da 時に wandte er sich ihr leuchtend[12] zu, 彼は眼眸を輝かして彼女の方へ向き直つた、[そして] nahm ihre zögernde Hand in seine 彼女の躊躇する手をば自分の手に握り und そして hier mit ihm am[14] Lande zu bleiben 彼と共に此處で陸地に留まり und そして [mit ihm] zu fliehen [彼と一緒に] 逃げて呉れる樣に bat[13] sie flehend 彼女に嘆願した。

Die Fremde war bleich geworden [此の] 他國の婦人は蒼白になつた und そして hielt[15] den Blick zu Boden gewendet.[16] 眼をば凝乎と地上に向けてゐた。 „Oh,[17] das ist nicht ritterlich,"[18] 「まあ、それは非紳士的ではありませんか」[と] sagte sie leise. 彼女は低い聲で言つた。 „Lassen Sie mich vergessen, was Sie da[19] gesagt haben!"[20] 「貴方が唯今おつしやつた事を私に忘れさして下さい!」

註。【1】 die Fremde [形容詞より轉用した名詞] 作者は「彼女」といふ代りに色々な形容詞を用ひて、或ひは die schöne Strenge, 或ひは die Blonde 或ひは die Fremde と呼んでゐる。——【2】 bis 意味は「……まで」である

が、第四卷 300 に長々と說明した如く、玆では後續的 (konsekutiv) に取つて、後で譯すべきである。 從つて、「すると其のうちに」とか「遂に」とか、副詞のやうに譯する事になる。——【3】 ein Paar は「一對の」ein paar は「二三の」(einige) である。 第四卷 352.——【4】 weichen, wich, gewichen (その場を去る) 三格支配の際は (第四卷 419)「避ける」の意であるが、von を支配すると、sich entfernen (遠ざかる) の意になる事がある。——【5】 此の bis は、限定的に譯しても後續詞に譯しても好いわけ。——【6】 gelingen は非人稱動詞である。 es gelingt mir (私は成就する) または物象を主語にする。——【7】 bunt, *a.* (雜色の、卽ち賑やかな、目まぐるしい。)——【8】 münden (注ぐ) これは Mund (口) から來た動詞で、元來は河が海に「注ぐ」事を云ふ。 (Mündung, *f.* 河口) それから轉じて、路が廣場等に向けて其の端を接する事にも云ふのである。——【9】 einem vertrauen 或人に信賴する。——斯う云ふ風に、日本語と「てにをは」の關係がちがふものがかなり澤山ある。 第四卷 422. 女の方では何も知らずに信賴してゐると、相手は飛んでもない unzuverlässiger Reisegefährte (信用のならない道連れ) だつたわけである。——【10】 allein. [英語の alone] 日本語では「二人きり」「三人きり」と云ふ所でもドイツ語では何時でも「一人きり」all-ein である。 selbander (二人で) selbdritt (三人で) selbviert (四人で) 等の言葉はあるが、普通は使はない。 また nur (ただ) といふ概念が籠らないから、やはり allein が好いのである。——【11】 scheu = (怯えた、怯氣づいた) schüchtern といふ形容詞もあるが、これは別に「あはてる、心配する」の概念が這入らず、むしろ「遠慮勝な」「はにかみ屋の」「內氣な」性質を云ふのであるが、scheu は一時の性質で、心配してまごつく意味が多分に含まれる。 たとへば馬が scheu になれば人を投げ落す、等。——【12】 mit leuchtenden Augen (輝く眼眸を以て) mit strahlendem Antlitz (面に晴々した色を見せて) と云つても好いところ。——【13】 bitten 日本語とは格支配がちがつて、或人「を」願ふといふ使ひ方である。——【14】 am Lande (陸地に) im Lande (國內に) auf dem Lande (田舍に) の三つは前置詞で區別する。——【15】 den Blick zu Boden gewendet halten (視線を地に向けて保つ) halten といふのは、要するに何かを一定不動の狀態のまま持續する時に使ふ言葉で、たとへば手を「翳す」のも die Hände so oder so halten 足を上げた儘にして置くのも die Füße aufgehoben halten 等。——【16】 gewendet = gewandt. wenden の三變形には二種類ある。——【17】「おゝ」といふ間投詞に二つある。 o! の方は、詩的、且つ悲劇的な「おゝ」で、o Götter! (おゝ神々よ) と云つた樣な時に使ふが、oh! の方はもつと散文的で、呆れた時や、否定する時や、「なあに!」と受け流す時などに用ひる。 此の oh! は、發音する時に、大抵同時に顏を橫に向けるのが習

慣である。——【18】 ritterlich, *a.* (騎士的、卽ち紳士的) 西洋人はたとへ現代人と雖も往古の騎士の如き態度を以て婦人を禮遇し、夜晩くなれば腕を取つて家に送り屆け、車の乘降にも手を貸す等、婦人崇拜、女人保護の美風は中世紀と變りがない。 然るに、保護すべき筈の男子が反つて婦人を拐かさんとしたのであるから nicht ritterlich (非紳士的) だと云つたのである。——【19】 da (其處に) は日本語なら「唯今」とでも云ふ可き所であらう。——【20】 Lassen Sie das Gesagte ungesagt sein! とも云ふ。 もし本人が自から取り消す時には ich will das nicht gesagt haben! とも云ふ。

28.

„Ich bin kein Ritter," rief Augustus, „ich bin ein Liebender, und ein Liebender weiß nichts anderes als die Geliebte, und hat keinen Gedanken, als bei ihr zu sein. Ach, du Schöne, komm mit, wir werden glücklich sein."

Sie sah ihn aus ihren hellblauen Augen ernst und strafend an. „Woher konnten Sie denn wissen," flüsterte sie klagend, „daß ich Sie liebe? Ich kann nicht lügen: ich habe Sie lieb und habe oft gewünscht, Sie möchten mein Mann sein. Denn Sie sind der erste, den ich von Herzen geliebt habe. Ach, wie kann Liebe sich so weit verirren! Ich hätte niemals gedacht, daß es mir möglich wäre, einen Menschen zu lieben, der nicht rein und gut ist. Aber tausendmal lieber will ich bei meinem Manne bleiben, den ich wenig liebe, der aber ein Ritter und voll Ehre und Adel ist, welche Sie nicht kennen. Und nun reden Sie kein Wort mehr zu mir und bringen Sie mich an das Schiff zurück, sonst rufe ich fremde Menschen um Hilfe gegen Ihre Frechheit an."

譯。 „Ich bin kein Ritter," 私は紳士[騎士]ではありません、„ich bin ein Liebender, 私は[たゞ]戀をする男です、und そして ein Liebender 戀をする男は weiß nichts anderes[1] als die Geliebte 戀人より以外の何

物をも知りません、und そして hat keinen Gedanken,[2] als bei ihr zu sein.[3] 戀人と一緒に居る事よりほかの如何なる考へも持ちません。 Ach, 噫、du Schöne, [汝]美しき人よ komm mit 我と共に來れ、wir werden glücklich sein." 私達は幸福になるでせう、[と] rief Augustus, アウグストゥスは叫んだ。

Sie 彼女は aus[4] ihren hellblauen[5] Augen 彼女の淡青色の兩眼で ernst und strafend 嚴格に且つ叱る樣に sah ihn an. 彼を視つめた。[そして] flüsterte sie klagend,[6] 彼女は嘆くが如き調子で囁いた、 „Woher konnten Sie denn wissen, „daß ich Sie liebe? 「私が貴方を愛して居ると云ふ事を、一體貴方は何處からお知りになつたのですか? Ich kann nicht lügen: 私は僞を言ふ事は出來ません、ich habe Sie lieb 私は貴方を愛して居ります und そして Sie möchten[7] mein Mann sein 貴方が私の良人であつたらと [ich] habe oft gewünscht, [私は]幾度も希望しました。 Denn と云ふのは Sie 貴方は den ich von Herzen geliebt habe 私が心から愛したところの der erste 最初の人 sind であるの[だから]です。 Ach, 噫、wie kann Liebe sich so weit verirren![8] 愛と云ふものがどうして[此んなに]飛んでもない所へまで迷ひ込み得るのでせう! einen Menschen zu lieben, der nicht rein und gut ist 純潔で且つ善良でないところの人間を愛する事が daß es mir möglich wäre 私にとつて可能であらうなどとは Ich hätte[9] niemals gedacht 私は[夢にも]思ひませんでした。 Aber けれども tausendmal lieber [貴方の傍になど居るよりも]千倍も喜んで will ich bei meinem Manne bleiben, 私は自分の良人の傍に居る事を欲します、den ich wenig[10] liebe, [此の]良人を私は殆ど愛してはゐません、der aber ein Ritter [ist] 併し[此の]良人は紳士[騎士]であり und そして welche Sie nicht kennen 貴方が知らないところの voll[11] Ehre und Adel ist 名譽と品位とに充ちて居ります。 Und そして nun もう reden Sie kein Wort mehr zu mir [これ以上]一言も私に言はないで下さい und そして bringen Sie mich an das Schiff zurück, 私を船へ連れ戻つて下さい、sonst[12] さもないと um[13] Hilfe gegen Ihre Frechheit 貴方の無禮に對する救ひを求めて rufe ich fremde Menschen an. 私は知らない人達を呼びます。」

註。【1】 anderes (他の物、他の事柄) と anders (別樣に) とが似てゐる。

一は名詞的にして他は副詞的、時には形容詞的用法。 且つ nichts Gutes (nothing good) の際は形容詞の名詞化を大書するが、anderes は大書しない。(第二卷 185)——【2】 keinen [anderen] Gedanken.——【3】 als mit ihr beisammen zu bleiben. (彼女と一緒にゐることより……)——【4】 aus ihren Augen = mit ihren Augen.——【5】 hell (明) は dunkel (暗) の反對で、hellblau は淡青色 dunkelblau は濃青色。——【6】 in einem klagenden Ton. (嘆くが如き調子で)——【7】 現在であれば ich wünsche, Sie mögen mein Mann sein. (od.: ich wünsche, daß Sie mein Mann sein mögen.) 過去ではどちらも過去にする、但し mögen の方は mochten でなく、接續法第二式 (過去形) を用ひて、ich habe gewünscht, Sie möchten mein Mann sein. または、過去の場合には wären を用ひて、Sie wären mein Mann. と云つた方が簡單になる。(第三卷 210)——【8】 sich weit verirren といふのは、飛んでもない所へまで迷ひ込んでしまふ事、即ち日本語の所謂「脱線」をする事である。たとへば心理學上の變態現象 (Abnormitäten) 破倫 (Perversitäten) 廢頽 (Dekadenz) 墮落 (Depravation) 等は凡て天然の本性が迷ひに墮したもの (Verirrung der Natur) と考へる。 同じ樣に「愛情」と云ふものも本道を離れて迷誤倒錯 (Irrtümer und Verkehrtheiten) に陷ることがあるものである。 夫人はそれを嘆いて自責したのである。 Liebe に冠詞がないのは、「抑も愛なるもの」と云ふ一般性を强めんが爲めである。——【9】 「まさか斯々であらうとは夢にも思はなかつた」と、日本語でならば事實宣言の直接法で云ふところを、獨逸語では、「まさか斯うであらうとは私は思はなかつたであらう」と約束法で云ふのが例である。 それは、「たとへさう思はなければならない樣な事情が身に迫つたと假定しても、これまでの自分であれば決して斯々斯樣には考へなかつたに違ひない」と云ふ意味だから約束法になるのである。同じ樣に、「汝は左樣な事をすべきではなかつた」 du hattest es nicht tun sollen と云ふ代りに du hättest 云々と云ふ。要するに、過ぎ去つてしまつた事を思ひ出して、想像で云ふ際には必ず約束法を用ひるのである。——【10】 wenig は準否定詞である。 第四卷 397.——【11】 voll (……に充ちた) は二格支配であるが、かういふ形容詞も何も附かない簡單な名詞の場合には、所謂無格 (Nennform 引用形) を持つて來る。 Adels とならないのはその譯である。——【12】 sonst = andernfalls (然らずんば) 時には oder とも云ふ。 oder ならば其の次は倒置を行はない。——【13】 um は前にも度々述べた通り、「何々を求めて」と云ふ意になる場合がある。

29.

Und ob er bat und ob er knirschte, sie wandte sich von ihm und wäre allein gegangen, wenn er nicht schweigend sich zu ihr gesellt und sie zum Schiff begleitet hätte. Dort ließ er seine Koffer an Land bringen und nahm von niemand Abschied.

Von da an neigte sich das Glück des Vielgeliebten. Tugend und Ehrbarkeit waren ihm verhaßt geworden, er trat sie mit Füßen, und es wurde sein Vergnügen, tugendhafte Frauen mit allen Künsten seines Zaubers zu verführen und arglose Menschen, die er rasch zu Freunden gewann, auszubeuten und dann mit Hohn zu verlassen. Er machte Frauen und Mädchen arm, die er dann alsbald verleugnete, und er suchte sich Jünglinge aus edlen Häusern aus, die er verführte und verdarb. Kein Genuß, den er nicht suchte und erschöpfte: kein Laster, das er nicht lernte und wieder wegwarf. Aber es war keine Freude mehr in seinem Herzen, und von der Liebe, die ihm überall entgegenkam, klang nichts in seiner Seele wider.

譯。 Und そして ob[1] er bat 彼が嘆願したにも拘らず und そして ob er knirschte,[2] 彼が齒軋りをしたにも拘らず、 sie wandte[3] sich von ihm 彼女は彼から身を背向けた und そして wenn er nicht schweigend sich zu ihr gesellt[4] [hätte] 若しも彼が默々として彼女に同伴し[なかつたならば] und 且つ [wenn er] sie zum Schiff begleitet[5] hätte. [若しも彼が] 彼女に船迄附いて行かなかつたならば、 [sie] wäre allein gegangen, [彼女は] 唯一人で[船迄歸つて]行つた事であらう。 Dort 其處(船)で ließ er seine Koffer an Land bringen 彼は自分のトランクを陸地へ運ばせた und そして nahm von niemand Abschied.[6] 誰にも別れを告げなかつた。

Von da an[7] 此の時以來 das Glück des Vielgeliebten[8] [此の] 人氣者の幸運は neigte sich 傾いた。 Tugend und Ehrbarkeit 德と品行方正とは waren ihm verhaßt geworden, 彼にとつては憎惡すべきものとなつた、 er trat sie mit Füßen,[9] 彼は其等 [德と品行方正] を足で踏み躙つ

た、 und そして tugendhafte Frauen mit allen Künsten seines Zaubers zu verführen 貞操堅固の婦人達をば魔法の凡ゆる技術を以て誘惑する事 und 及び die er rasch zu Freunden gewann 彼が急に友達に得たところの arglose Menschen 惡を知らぬ人々をば auszubeuten[10] 利用し盡し und dann それから mit Hohn zu verlassen 嘲り棄て去る事[が] es wurde sein Vergnügen, 彼の樂しみとなつた。 Er machte Frauen und Mädchen arm, 彼は婦人達や乙女達を不幸にした、 die さう云ふ女達をば er 彼は dann alsbald 其の後直ぐに verleugnete,[11] 相手にしないのであつた、 und そして er 彼は Jünglinge aus edlen Häusern 高貴な家に生れた青年達を suchte sich[12] aus, 自分のために搜し求めた、 die[13] [そして] さう云ふ青年達をば er verführte und verdarb.[14] 彼は誘惑し且つ墮落せしめた。 den er nicht suchte und erschöpfte 彼が求め且つ汲み盡さなかつたところの Kein Genuß,[15] 如何なる快樂もなかつた。 das er nicht lernte und wieder wegwarf 彼が覺え而して再び投げ捨てなかつたところの kein Laster, 如何なる罪惡もなかつた。 Aber 併し乍ら es[16] war keine Freude mehr in seinem Herzen, 彼の心の中には最早何等の喜びもなかつた、 und そして die ihm überall entgegenkam, 到る處で彼に向つて捧げられるところの von[17] der Liebe 愛の中の nichts 幾分も in seiner Seele[18] 彼の魂の中に klang wider.[19] 反響しなかつた。

註。 【1】 obgleich, ob auch (たとへ……しても) wenn gleich, wenn auch (同意) 等の、所謂認容文意を作る接續詞は、それに附加される gleich, auch を、前半部と離して文章の中途に挿入する事もあり、或ひは全然省略してしまふ事もある。 ここはその後者の場合の好例である。 (認容文章の構成に就ては第四卷 299)——【2】 knirschen (齒軋りする、齒を食ひしばる) kn- で始まる字には、或種の共有な性質がある。それは必ず、何かを手か指か、それとも齒でもつて力强く壓しつける動作である。丁度日本語の「ぎゆッ」とか「きゆッ」とか云ふのに當る。

kn- で始まる語の意味

kneifen	つねる	kneten	捏る
knicken	挫く、折る	knipsen	パチッと彈く
knittern	皺にする	knüpfen	結ぶ
knütschen	犇と締めつける	knoten	結び目を作る

knabbern	ガリガリ噛る	knastern	はぜる（パチパチ云ふ）
knautschen	折目をつける、折る	knebeln	棒で締め上る、しぼる
knarren	ぎしぎし云ふ	knacken	潰す、ひねり潰す

名詞も從つて、何か小さくて同時に「ぎゆつ」としたものが多い。 Knoten（木の瘤） Knolle（球根、結節） Knopf（ボタン、即ち糸の節） Knäuel（絲毬） Knauf（擬寶珠のやうなもの） Knochen（骨） Knie（膝頭） Knospe（蕾）——斯う云ふ symbolische Onomatopöie（象徵的擬音）に對する感じを養ふ事は非常に重要である。——【3】 認容文章の後には普通定形の倒置を行はない。（第四卷 299）——【4】 sich gesellen.（或人に一緒になる、合する、同伴する）故に仲間の事を Gesell（或ひは、職人の意）と云ひ、その集合名詞的な轉形が Gesellschaft（一行、社會、寄り合ひ、會社）——【5】 begleiten（同伴する、附いて行く） gleiten（滑る）に be- が附いたものではない。 leiten（導く）から geleiten（案内する）が生じ、begleiten になつたのである。そんな現象は多い。たとへば Glück は英語の luck である。 Gelücke（Ge- と -e で挾む造語は Gebirge, 山嶽、等澤山ある）から生じたのである。 英語との比較として一寸面白いから序でに紹介して置く。かう云ふ風に連絡を取つて行くと單語を覺えるのが樂になるから、英語を知つてゐる人はなるべく語源的詮索をして、何か因緣を附けて單語を覺えるやうにすると好いと思ふ。——einen begleiten は、或人の行く方へ附いて行くことで、自分が積極的に案内をする時にはむしろ geleiten と云つた方が好い。——【6】 即ち、這々の體で、こつそりと逃げてしまつた譯である。 こんなのを ohne Sang und Klang abziehen（樂隊ぬきで退却に及ぶ、旗を卷いて逃げ出す）といふ。——【7】 此の an に就ては第三卷 240.——【8】 第四卷 427.——【9】 土足に掛けて踏み躪つた、蹂躪した。——【10】 ausbeuten.（利用し盡す） これは資本主義の發達した近代に至つて盛んに用ひられるやうになつた言葉で、人間をまるで牛か豚の樣に心得て、「搾取」することである。「剝ぎ取る」と云つても好い。（佛語の exploiter の移植。）——彼はもはや明らかに pervers, *a.*（破倫的） dämonisch（惡魔的）になつたわけである。 惡のための惡（das Böse um des Bösen willen） 自己目的としての惡（das Böse als Selbstzweck）を營む（betreiben）やうになつたのだ。——【11】 einen verleugnen. 或人を否認すると云ふのは、von ihm nichts mehr wissen wollen（その人をもはや相手にしない）または ihn gar nicht gekannt haben wollen.（その人と知己であつた事實を認容しない）事である。 たとへば、會ひに行つてももう會つて呉れないとか、途中で遭つても知らん顏をするとか、そんな事を一括して云ふのである。 つまり裏切ることである。 聖書の話でよく引用されるのは、Petrus が主を否認した

と云ふ聖徒史上の一暗影である。——verleumden（中傷する）と似てゐて混同する。——【12】 sich（三格）——【13】 die 以下の從屬文も、「後續的」に譯す可きである。（第四卷 300 に「後續的」の說明あり。）——【14】 verderben, verdarb, verdorben.（英語の spoil）——【15】 Es war kein Genuß,（如何なる享樂もなかつた）の省略形。 玆で例の二重の否定（doppelte Negation）といふ語法が現れてゐる。（第四卷 396 の 2） それから玆の所は斯うも云へる Kein Genuß, er suchte und erschöpfte ihn 等。（第四卷 404 kein……doch の項を見よ。） だだその doch を省いたきりである。

> Ich kroch durch alle Krümmen des Gebirgs,
> Kein Tal war so versteckt, ich späht' es aus;
>
> (Schiller, Wilhelm Tell, II. 2.)

> つづら織りなる路づたひ、深山の奥に分け入りて、
> 谷とし云はむ谷々の、里は隈なく訪れぬ。
>
> （シルレル、ウイルヘルム・テル 二幕二場）

——【16】 es war は「それは何とかであつた」に非ず。非人稱の熟語。（第三卷 270, 271 を見よ。）——【17】 Nichts von der Liebe klang in seiner Seele wider. ［他人が自分に捧げる］愛の幾分だに彼の心の中に反響を惹起さなかつた。——斯う云ふ際にはよく Nichts と von の附いた部分とを離してしまつて、まづ von…… を前に抽出するのが普通である。 von……だけを譯するとすれば was die Liebe……betrifft（……の愛となると）とでも考へるより仕方がない。——彼はあまり人に愛され過ぎるので blasiert（鈍つた）になつてしまつて、ちつとも心に反響を感じないのである。 人々の側から云ふと、彼等は何等の Gegenliebe（相手の愛）を以ても酬ひられないのである。 さういふ blasiert な人間を lieblos und kalt であると云ふ。——【18】 Geist, *m.*（精神）は智の座であり、Herz, *n.*（心）は情の座であり、Seele, *f.*（魂）となると、凡そ人間の中樞の最も神祕な奥であると考へる。 その Seele に何の反響も起らないとあれば、その人間はよくよく救はれない、神に見捨てられた者だといふ事になつて來る。 作者はそれを考へて Herz とせずに Seele としたのである。——【19】 wider- といふ前綴は、wieder-（再び）の意の時はかう云ふ風に分離する。 gegen-（反して、抗つて）の意の時には分離しない。 字數は後者の場合の方が多い。（第二卷 146）

30.

In einem schönen Landhaus am Meere wohnte er finster und verdrossen und quälte die Frauen und die Freunde, die ihn dort besuchten, mit den tollsten Launen und Bosheiten. Er sehnte sich danach, die Menschen zu erniedrigen und ihnen allen Verachtung zu zeigen; er war es satt und überdrüssig, von unerbetener, unverlangter, unverdienter Liebe umgeben zu sein, er fühlte den Unwert seines vergeudeten und zerstörten Lebens, das nie gegeben und immer nur genommen hatte. Manchmal hungerte er lange Zeit, nur um doch wieder einmal ein rechtes Begehren zu fühlen und ein Verlangen stillen zu können.

譯。 In einem schönen Landhaus am Meere 海岸の或る美しい別莊に wohnte er finster und verdrossen 彼は陰鬱に且つ不愉快に住んでゐた und そして die ihn dort besuchten 其處に彼を訪うたところの die Frauen und die Freunde 婦人達や友人達をば mit den tollsten[1] Launen[2] und Bosheiten[3] 甚だしく氣狂ひ染みた氣まぐれや意地惡を以て quälte 惱ましてゐた。 Er 彼は die Menschen zu erniedrigen 人間達に屈辱を與へる事 und 及び ihnen allen Verachtung zu zeigen 彼等[人間達]凡てに侮蔑を示す事[を] danach [さう云ふ事を] sehnte sich 渴望してゐた。 von unerbetener,[6] unverlangter, unverdienter[7] Liebe 賴みもしない、望ましくもない、謂はれのない愛に依つて umgeben zu sein,[8] 取り卷かれてゐる事[に]、 er war es[4] satt[5] und überdrüssig, 彼は[その事に]うんざりしてゐた、 er fühlte den Unwert seines vergeudeten und zerstörten Lebens, 彼は自分の浪費され且つ破壞されたる生活の無價値さを感じてゐた、 das 彼の生活は nie gegeben [hatte] [未だ嘗て]與へた事はなく und そして immer nur genommen[9] hatte. いつも唯受けてばかりゐたのであつた。 Manchmal 往々、 er 彼は doch[10] wieder einmal ein rechtes[11] Begehren zu fühlen せめてたまにはまともな欲望を感じ und そして ein Verlangen stillen zu können 一つの欲望を滿足させる事が出來る nur um ためのみに[それだけを目的に] hungerte lange Zeit 長い間腹を減らすことがあつた。

註。 【1】 toll, *a.* 狂染みた、亂暴な、無茶苦茶な。——たとへば向ふ見ずな事を tollkühn といふ。 また、「それはあんまり亂暴だ」は das ist zu toll! ——此處では übermütig (圖に乘つた、附け上つた) と云つても好い所。——【2】 Laune, *f.* は單に「機嫌」ではなく、「吾儘な行動」「突飛な思ひつき」「突拍子もない振舞」の事である。 (英語の caprice) hysterisch な婦人などが時々飛んでも無い事を云ひ出して周圍の人を手挺ずらせる、 それが Laune である。 穩便に云へば Grille (奇想) である。——【3】 Bosheiten. böse (意地が惡い) から來た名詞。 -heit, -keit は抽象名詞の語尾であるが、必ずしも Schönheit (美しさ) Tugendhaftigkeit (德性) のやうに、「……性」を意味する抽象名詞にはならない。 殊に -heiten 等複數語尾を持つてゐる際には、「性質」ではなく「物」そのものである。 Grobheiten (失禮な云ひ草、皮肉) die Öffentlichkeit (公衆、江湖) 等。——【4】 es は、 er war es müde (彼はそれにうんざりした) 等に於けるが如き es で、 müde (倦きる) satt (倦きる) überdrüssig (厭氣を催す) 等の形容詞は、名詞が來れば二格支配であるが、——

> Ach, ich bin **des Treibens** müde!
> Was soll all der Schmerz und Lust?
>
> (Goethe)

> あゝわれ俗事に倦み果てぬ！
> そも何故の苦ぞ樂ぞ？
>
> (ゲーテ)

——單に「その事に」といふ時には dessen (二格) でなく、 es (四格) を用ひる。 ich bin es müde, (または satt, überdrüssig) immer wieder zu lieben und zu hassen. (私は又しても愛したり憎んだりするのが煩はしくなつた。)——【5】 satt und überdrüssig は所謂 Hendiadyoin (二語一想)——【6】 unerbeten これは erbitten, erbat, erbeten (乞ふ、願ふ) とは直接に關係のない形容詞。 (第四卷 375 過去分詞の純形容詞化の項) むしろ Leichenbitter (葬式に招く役) Hochzeitsbitter (結婚式に招待する役) 等に現れた「招待する」といふ bitten と意味上の關係がある。 つまり「賴みもしない」「おせつかいな」の意。——【7】 unverdient (身に覺えのない) 或る事をして、その努力によつて或物を手に入れる資格を帶びるに至る事を etwas verdienen と云ふ。 (英語の merit) Du hast es erworben, aber nicht verdient. (汝はそれを手に入れた。しかし手に入れて宜しい程の事は何もしなかつた。) また、惡い事に關しても用ひる。 Ich habe seinen Haß nicht verdient. (私は彼に憎まれる樣な事をした覺えはない。) さう云ふ時には、相手の自分に對する憎しみは ein unverdienter Haß (身に覺えなき怨) である。 故に此の場合の unverdiente Liebe

と云ふのは、主人公から考へると、人々が何故自分を愛するのか分らない、と云ふ意味を含めた云ひ廻しである。——【8】 umgeben zu werden は「取り卷かれる事」umgeben zu sein は「取卷かれてゐる事」——【9】 人間間の愛の現象を geben（人に愛を捧げること）と nehmen（人から愛を受けること）との對照で一般的に云ひ表はしたので、斯う云ふ言葉使ひは、殊に近代の獨逸人には最も gang und gäbe（普通）なことであり、誰も怪しむものはない、當然（ganz an der Tagesordnung）な抽象となつてゐる。 Geben ist seliger als nehmen（與ふるは受くるよりも幸福なり——使徒行傳 20, 35）といふ聖書の文句も、時には「戀はされる者よりする者が幸である」といふ意味に取られる。この場合が現にさうである。——【10】 doch（せめて）wieder（また）einmal（一度は）=「たまには」と云ふ熟語。——【11】 rechtes Begehren. まともな慾望、即ち、慾望らしい慾望。

31.

Es verbreitete sich unter seinen Freunden die Nachricht, er sei krank und bedürfe der Ruhe und Einsamkeit. Es kamen Briefe, die er niemals las, und besorgte Menschen fragte bei der Dienerschaft nach seinem Befinden. Er aber saß allein und tief vergrämt im Saal über dem Meere, sein Leben lag leer und verwüstet hinter ihm, unfruchtbar und ohne Spur der Liebe wie die graue wogende Salzflut. Er sah häßlich aus, wie er da im Sessel am hohen Fenster kauerte und mit sich selber Abrechnung hielt. Die weißen Möwen trieben im Strandwinde vorüber, er folgte ihnen mit leeren Blicken, aus denen jede Freude und jede Teilnahme verschwunden war. Nur seine Lippen lächelten hart und böse, als er mit seinen Gedanken zu Ende war und dem Kammerdiener schellte. Und nun ließ er alle seine Freunde auf einen bestimmten Tag zu einem Fest einladen; seine Absicht aber war, die Ankommenden durch den Anblick eines leeren Hauses und seiner eigenen Leiche zu erschrecken und zu verhöhnen. Denn er war entschlossen, sich vorher mit Gift das Leben zu nehmen.

譯。 er sei krank 彼が病氣であり und そして bedürfe der[3] Ruhe und Einsamkeit 安靜と孤獨とが必要である［と云ふ］ die Nachricht 消息が Es[1] verbreitete sich unter[2] seinen Freunden 彼の友人達の間に擴まつた。 Es[1] kamen Briefe, 澤山の手紙が來た［が］、 die[4] 其等の手紙を er niemals las 彼は決して讀まなかつた、 und そして besorgte[5] Menschen 心配せる人々は bei der Dienerschaft 召使達に fragten nach[6] seinem Befinden.[7] 彼の健康狀態を尋ねた。 aber[8] ところが Er saß allein und tief vergrämt[9] im Saal über[10] dem Meere, 彼は只獨りで深く憂悶に沈んで海の上に懸る廣間の中に坐してゐた、 sein Leben 彼の生活は hinter[11] ihm 彼の過去に lag leer und verwüstet 空虛にそして荒寥として横はつてゐた、［それは］ wie die graue[13] wogende Salzflut 陰慘な大浪うねる蒼海の如く unfruchtbar[12] und ohne Spur der Liebe 蒔けども實らず又愛の痕跡もない［ものであつた］。 wie er[14] da[15] im Sessel am hohen Fenster kauerte 彼が其處に高い窓の傍で安樂椅子の中に蹲まつてゐる樣子は und そして［wie er］ mit sich selber[18] Abrechnung[17] hielt 自分自身に對して總決算を行つてゐるところは、 Er sah häßlich aus, 彼は醜惡に見えた。 Die weißen Möwen 白い鷗の群が trieben[19] im Strandwinde vorüber, 海濱の風の中を翔り去るのであつた、 er folgte ihnen mit leeren Blicken, 彼はその鷗の後を空虛な眼眸を以て見送つてゐた、 aus denen その眼眸からは jede Freude und jede Teilname[20] verschwunden war. 凡ゆる喜並びに［世事に對する］凡ゆる關心が消滅して居た。 als er mit seinen Gedanken zu Ende[21] war 彼が考察を終へた時に Nur seine Lippen lächelten hart und böse, ただ彼の口唇が冷酷に意地惡さうに微笑したのみであつた、 und［als er］ dem Kammerdiener schellte.[22] そして彼は鈴を鳴らして從僕を呼んだ。 Und そして nun 扨て er 彼は alle seine Freunde 彼の總ての友人達をば auf[23] einen bestimmten Tag 日を定めて zu einem Fest 園遊會に ließ einladen; 招待せしめた。 aber けれども seine Absicht 彼の本意は die Ankommenden 來客達をば durch den Anblick[25] eines leeren Hauses und［den Anblick］ seiner eigenen Leiche 空つぽの家と彼自身の死骸を見せる事に依つて zu erschrecken[26] und zu verhöhnen［來客達をば］驚愕せしめ且つ嘲笑する事 war[24] であつた。 Denn と云ふのは sich[28] vorher mit Gift das Leben zu nehmen［來客達の來る］前に毒を飲んで自殺をしようと er war entschlossen, 彼は決心して居たのだ［からであつた］。

註。【1】 es は文法上の主語、無意味、第三卷 273 文の非人稱化の項を見よ。——【2】 unter (第三卷 237 の 4)——【3】 bedürfen は二格支配故 der Ruhe und Einsamkeit (女性二格) となつてゐる。——【4】 die 以下の副文章は後續的に考へないとわからない。——【5】 besorgt, *a.* 心配したる (*a.* は形容詞の略符)——【6】 nach etwas fragen. (或事を聽きただす、聽き求める)——【7】 sich so und so befinden (斯々の近況である、狀態である、樣子である) から來た名詞。 近況、樣子。 主として健康の樣子の事を云ふ。——【8】 斯う云ふ時の aber が andererseits (一方) seinerseits (彼の方では) 等の意味になる事は既に述べた。——【9】 Gram, *m.* (內心の煩悶) から來た形容詞。——【10】 über と三格は、その上方に靜止してゐる事である。 此處の處の光景は、恐らくは伊太利の Venedig (ヴエニス) が Modell になつてゐるらしい。 さうとすれば海に懸つた樓閣は想像するに難くない。 その下をゴンドラでも通ると云ふ譯であらう。 西洋人は、世を遁れた金持は必ず南歐の海岸 (Monte Carlo, Venedig, Neapel) 等に別莊を構へるものと相場を決めてゐる。——【11】 主人公は今や過去を省みてゐる。 故に lag hinter ihm と云つたのである。——【12】 unfruchtbar (稔らざる、實を結ばざる) 彼の一生は、蒔けども稔らず、照らせども煖まらぬ荒漠たる海洋の如きものであつたといふ比較である。 蒔けども、とは、人々の方からは度々愛して來たけれども、の意。 稔らずとは、彼の心はそれに對して少しの反應も起さず、人間らしい感情を孕んだ事がなかつたの意である。 斯ういふ風に、「荒寥」といふ狀態を海洋の冷たい浪に譬へて云ふのは文學者の常套手段と云つても好い程になつてゐて、たとへば詩人 Lenau は、自分の一生を回顧して、「もつと享樂すべきものを享樂し、人生らしい人生を送つておけば好かつた」といふ悔恨の情を得意の題材にして歌つてゐるが、その中でも、自分の過去を海に比較した詩があるが、それは正に此の場合と同じ觀方である。

Herbst. (Nicolaus Lenau.)

Nun ist es Herbst, die Blätter fallen,
Den Wald durchbraust des Scheidens Weh,
Den Lenz und seine Nachtigallen
Versäumt' ich auf der wüsten See.

Der Himmel schien so mild, so helle,
Verloren ging sein warmes Licht;

Es blühte nicht die Meereswelle,
Die rohen Winde sangen nicht.

Und mir verging die Jugend traurig,
Des Frühlings Wonne blieb versäumt;
Der Herbst durchweht mich trennungsschaurig,
Mein Herz dem Tod entgegenträumt.

秋 (レーナウ)

落葉の音に秋立ちて
森に無常の風滿ちぬ
鶯聞かず春知らず
荒海行きつありし間に

春陽熙々と照せども
冷たき汐を如何にせむ
浪間に花は咲かざりき
風は囀り啼かざりき

かなしく過ぎし青春よ
見事逸せし行樂よ
必滅の秋にものの哀つ
死を想ふ身は夢心地

——【13】 grau, *a.* (灰色の、陰慘な) grau は單に色の名稱ではなく、其處には多分に「恐しい」と云ふ色彩が加味される。 graufig (物凄い) gruselig (氣味惡い) Greuel (慘虐) なぞと云ふ類似の語が gr と共に副音となつて mitklingen (同時に響く、混響する) するからである。——【14】 wie は、「現在……云々してゐるところは」と、ある事實の現場を擧げる接續詞である。これが主文章の er sah häßlich aus の er ともつと密接な關係になると、wie er がそれを先行詞とする關係代名詞ともなるのである。 (第二卷 173 wie と人代名詞で表はす關係文。)——【15】 da (其處に、現在、眼前に、まのあた

り）は上述の wie をなほも强めんがための副詞である。——【16】 kauern は日本人その他の東洋人がやるやうに蹲踞してゐる譯ではなく、猫背を作つて默々と腰掛けてゐることである。「しやがむ」と云ふよりは「うづくまる」と云つた方が好い。——【17】 Abrechnung halten（清算する）——長らく手を入れなかつた爲めに紊亂狀態に陷入つてゐた財政を清算するやうに、個人の頭の中でも時々さうした清算が行はれる。紊亂が行詰ると、最後の大詰といふ奴がやつて來て、其處で人間は一應自己の生活に對する概觀を行ひ、反省を試み、仔細に批判を試みんとする事がある。それを稱して mit sich selbst Abrechnung halten（自分を相手に總決算をする）と云つたのである。それは自己分裂を來たした（mit sich uneinig geworden）人間が、自己に滿足（mit sich zufrieden）である事が出來なくなつて、自我の中に內亂が生じた（mit sich hadern）ために、何とかして安住の心境が見出したい（sich mit sich selbst versöhnen）と思つて努力（an sich selbst arbeiten）する所に生ずる局面である。所謂キリスト敎の Weltgericht（最後の審判）を如實にして、自らを被告とし、自らを裁き手とした、此の世ながらの地獄である……と牧師ならば云ふであらう。まあそんな事はどうでも好い。次を讀めばわかる通り、主人公は一應帳尾を締め括る事（vorderhand einen Abschluß machen）に決心した。——【18】 selber＝selbst.——【19】 treiben［驅る］は元來他働詞であるが、丁度英語の drive を、「自動車を」なぞの補足語を省いて單獨に用ひるやうに、單獨に用ひて自働詞とすることがある。玆では vorübertreiben は vorüberfliegen（前を翔け去る）と同じである。——【20】 Teilnahme「同情」ではなく「關心」である。Anteilnahme とも云ふ。an etwas teilnehmen（或事に關與する、興味を持つ）等。主人公はもはや何を見ても、凡てが無關心（gleichgültig, einerlei, interesselos）になり、彼の興を唆らなくなつてしまつたのである。——【21】 mit etwas zu Ende sein, mit etwas fertig sein（或事を終る）——【22】 schellen, klingeln は、Schelle, *f.* Klingel, *f.*（呼鈴）を鳴らすことである。schallen（響く）に對して schellen（響かす）は他働詞で、e 又は ä の幹母音は、a 又は i に對する自働詞である事が多い。fallen（落ちる）fällen（倒す）——hangen（懸かる）hängen（懸ける）henken（絞首の刑に處する）——haften（附着する）heften（綴ぢる、附ける）——sitzen（坐る）setzen（置く）——liegen（横たはる）legen（横たへる）——sinken（沈む）senken（沈める）——dringen（押し入る）drängen（押す、せき立てる）etc.——【23】 auf einen bestimmten Tag.（一定の日を期して）auf と四格は、時刻について云ふ際には、將來に於ける豫定を云ふ。複數の場合は、ある期間の豫定になる。auf zwei Tage（二日間の豫定で）等。單數の場合は、現在の場合のやうに、ある豫定の一點を指す。auf bald!（ではまたそのう

「將來を期して」の意の auf

ちに!）auf morgen!（ではまた明日にでも）auf Wiedersehen（再會を期して！卽ち、さよなら!）等に現れた auf——【24】 war es の es を省く。——【25】 Anblick（一瞥）は Blick（視線）と嚴重に區別すべきである。anblicken（看る）は他働詞であり、blicken（眼附をしてゐる）は自働詞であるから、第四卷 414 に擧げた規則が適用される。der Blick des Mannes は「男の眼つき」であり、der Anblick des Mannes は、「その男を見ること」である。sein Blick, sein Anblick にも矢張り同樣の區別が存する。丁度好い例だから 414 を復習したわけである。——【26】 erschrecken は「愕ろく」の意の際は三要形は erschrecken, erschrak, erschrocken であるが、此の場合の樣に、「愕ろかす」の際は規則變化である。——【27】 此の場合の entschlossen は、entschließen の過去分詞ではあるが、それが形容詞化したものである。動詞を用ひて云へば denn er hatte sich entschlossen.——【28】 sich（三格）das Leben nehmen.（自分から命を取る、自殺する）——此の sich（三格）は所謂離格で、そのために「……から」といふ譯になる。（第四卷 419）

32.

Am Abend nun vor dem vermeintlichen Fest sandte er seine ganze Dienerschaft aus dem Hause, daß es still in den großen Räumen wurde, und begab sich in sein Schlafzimmer, mischte ein starkes Gift in ein Glas Zyperwein und setzte es an die Lippen.

Als er eben trinken wollte, wurde an seine Türe gepocht, und da er nicht Antwort gab, ging die Tür auf, und es trat ein kleiner alter Mann herein. Der ging auf Augustus zu, nahm ihm sorglich das volle Glas aus den Händen und sagte mit einer wohlbekannten Stimme: „Guten Abend, Augustus, wie geht es dir?"

Der Überraschte, ärgerlich und auch beschämt, lächelte voll Spott und sagte: „Herr Binßwanger, leben Sie auch noch? Es ist lange her, und Sie scheinen wahrhaftig nicht älter geworden zu sein. Aber im Augenblick stören Sie hier, lieber Mann, ich bin müde und will eben einen Schlaftrunk nehmen."

„Das sehe ich," antwortete der Pate ruhig. „Du willst einen Schlaftrunk nehmen, und du hast recht, es ist dies der letzte Wein, der dir noch helfen kann. Zuvor aber wollen wir einen Augenblick plaudern, mein Junge, und da ich einen weiten Weg hinter mir habe, wirst du nicht böse sein, wenn ich mich mit einem kleinen Schluck erfrische."

譯。 nun[1] 扨て Am Abend vor dem vermeintlichen[2] Fest 偽りの園遊會の前の晩に sandte er seine ganze Dienerschaft[3] aus dem Hause, 彼は自分の召使達全部を家の外へ出してやつた[ので]、daß[4] それで es still in den großen Räumen wurde,[4] 大きな部屋々々の中は靜寂になつた、und そこで [er] begab[5] sich in sein Schlafzimmer, [彼は]自分の寢室の中へ這入つて行つた、[そして] mischte ein starkes Gift in ein Glas Zypperwein[6] 一杯のサイプラス葡萄酒の中へ烈しい毒藥を混じた、und そして setzte es an die Lippen. それを[飲まうとして]口唇に附けた。

Als er eben trinken wollte, 彼が今將に飲まんとした時に、wurde[7] an seine Türe gepocht, 扉をノックする音が聞えた、und そして da er nicht Antwort gab, 彼が返事をしなかつた所が、ging die Tür auf, 扉は開いた、und そして es[8] trat ein kleiner alter Mann herein. 小さな年老つた男が[室内へ]這入つて來た。 Der その老人は ging auf Augustus zu,[9] アウグストゥスの傍迄歩いて行き、[そして] nahm ihm[11] sorglich[10] das volle Glas aus den Händen[11] 彼の手から注意深く[毒藥入りの葡萄酒が]一杯入つたコップを取り去つた、 und そして sagte mit einer wohlbekannten Stimme: よく聞き覺えのある聲で言つた、„Guten Abend, Augustus, wie geht es dir?" 今晩は、アウグストゥス、御機嫌は如何？

Der Überraschte,[12] 愕然とした彼は ärgerlich[13] und auch beschämt, 腹立たしくもあり亦恥かしくも思つて、lächelte voll Spott 嘲笑的に微笑して und そして sagte: 言つた、„Herr Binßwanger, leben Sie auch noch? ビンスヴァンゲルさん、貴方も未だ生きて居たのですか？ Es ist lange her,[14] 隨分お久し振りでしたね、und そして Sie scheinen wahrhaftig nicht älter[15] geworden zu sein. 貴方は本當に[以前よりも]年老つてゐない樣に見えますね。 Aber 併し乍ら im Augenblick 只今は

stören Sie hier, 貴方は此處で[私の]邪魔をなさいますよ、lieber Mann, 小父さん、ich bin müde 私は疲れてゐるのです und それで [ich] will eben einen Schlaftrunk[16] nehmen." [私は]今寢がけの一杯を飲まうとしてゐるところなのです。

„Das sehe[17] ich," それは判つてゐるよ、[と] antwortete der Pate ruhig. 教父は悠然として答へた。 „Du willst einen Schlaftrunk nehmen, 君は寢しなの一杯を飲まうとしてゐるね、und du hast recht,[18] そしてそれは尤もな事だ、 es ist dies der letzte Wein, der dir noch helfen[19] kann. 此れは尙ほ君の爲になり得る所の最後の葡萄酒なのだ、 aber けれども Zuvor wollen wir einen Augenblick plaudern, 其の前に一寸の間話をしようではないか、mein Junge, 吾が子よ、und そして da ich einen weiten Weg hinter[20] mir habe, 私は長い道程を旅行して來たのだから、wenn ich mich mit einem kleinen Schluck[22] erfrische[23] 私が一口飲んで自分に元氣を附けても、wirst du nicht böse sein,[21] 君は惡くは思はないだらうね。

註。【1】 nun (さて) は所謂並立的接續詞で、先頭に置く筈だが、斯う云ふ風に後の方へ持つて來る方が口調の好い事がある。(第四卷 306)——【2】 vermeintlich (稱する所の、實はさうでない所の) angeblich, vorgeblich とも云ふ。——【3】 -schaft, *f.* の語尾に終るものは、Sammelnamen (集合名詞) の一種で、名詞の複數の代りである。——【4】 daß……wurde.—— wurde が若し werde (第一式接續法) であつたら daß 以下の文は、「……するやうに」といふ目的を指す意味になる所だが、wurde が直接法過去であるから、daß 以下の意は所謂「後續的」(第四卷 300) になつて、「そのために……云々になつた」と、後で譯する方が好いのである。——【5】 sich begeben. (赴く) 佛語の se rendre. 所謂 rendez-vous [ランデヴー] は獨譯すると Begeben Sie sich (何處其處へ赴け) である。(獨乙語では Stelldichein といふ。 sich einstellen 出頭する、顏を出す、から來た複合名詞)——【6】 Zypern は所謂サイプラス島で、匈牙利の Tokay と並んで葡萄酒の名產地とされてゐる。——【7】 wurde es の es が省かれてゐる。(第三卷 277) 此の非人稱語法については第二卷 117. 第三卷 276 を見よ。——【8】 非人稱語法に於ける文法上の主語 (第三卷 273)——【9】 かう云ふ zu は、gehen の分離前綴と考へる事も出來れば (第二卷 139) 前置詞 auf の追加詞 (第三卷 240) と考へる事も出來る。——【10】 sorglich は一寸 zweideutig (曖昧) な字で、sorgenvoll (心配げに) の意もあれば sorgfältig (細心の注意を拂ひつつ、そーつと)

の意もある。 玆は後者の意に取つた方が自然である。——【11】 ihm .... aus den Händen は aus seinen Händen といふに同じ。 (第四卷 416)——【12】 überraschen は英語の surprise. で「愕ろかす」といふ意も同時に含まれてゐるが、とにかく「不意を襲ふ」ことが主である。それから der Überraschte (吃驚した彼は) といふ形に就ては第四卷 427 を見よ。——【13】 ärgerlich und beschämt は、第四卷 371 に說明した客語的副詞句です。 あの項で分詞に就て述べた事は凡て形容詞にも通用します。——【14】 es ist lange her, (隨分しばらくでしたね) は熟語。——【15】 älter [比較級] は勿論 als damals (あの當時に比べて) である。——【16】 Schlaftrunk は兩意に取れるが、玆では催眠劑の方ではなく、單に寢がけの一杯といふ意である。——【17】 das sehe ich. (それは私が現在拜見してゐる、なるほどさうらしい) 敎父はちやんと主人公の企らみを知つてゐて斯う云ふので、つまり皮肉である。——【18】 recht haben. (英語の to be right) 道理である、もつともである。——此の言葉でわかるが、敎父は der Schlaftrunk の意味を、ちやんと事實通りに解釋して、自殺しようとしてゐると云ふ事を相手の方で自から認めた事にしてしまつてゐる。——【19】 helfen と云ふのは、retten (救助する) とは少し違つてゐる。 命など助けるのは retten であるが、或人の「爲めを」計らふのは helfen である。 從つて、今若し本當に死にたい人がゐて、其の人が自殺しようとしてゐるのを誰かが止めてやつたとすれば、本人は Ich bin zwar gerettet, aber es ist mir dadurch nicht geholfen worden. (私はなるほど助けられはしたが、別にそのために身の爲めが計られたといふのではなかつた) と云ふだらう。 此處の helfen はそれである。——【20】 ある道程を旅行することを einen Weg, eine Strecke hinter sich zurücklegen と云ふ。 從つて或る距離を旅行して來た、は einen Weg hinter sich haben (或る道を己が背後に持つ) である。——【21】 wirst du es nicht übel [auf-] nehmen; wirst du es mir nicht verübeln (惡くは取るまいね) または wirst du es mir gern gestatten (欣んで許してくれるだらうね) と云つても好い。 此の際の böse は、「怒つてゐる」といふ形容詞。——【22】 Schluck, *m.* これは飲み下すといふ schlucken から來た名詞。「一口」の意。 但しそれは飲物に限る。 食べ物ならば ein Bissen と云ふ。——【23】 獨逸人が erfrischen, laben (氣持を淸涼ならしめる) といふのは主として飲み物の事である。 だから淸涼劑の事を Erfrischungen または少し詩的に云ふと Labsale といふ。 sich erfrischen といへば大抵お酒を飲む事である。

33.

Damit nahm er das Glas und setzte es an den Mund, und ehe Augustus ihn zurückhalten konnte, hob er es hoch und trank es in einem raschen Zuge aus.

Augustus war todesbleich geworden. Er stürzte auf den Paten los, schüttelte ihn an den Schultern und schrie gellend: „Alter Mann, weißt du, was du da getrunken hast?"

Herr Binßwanger nickte mit dem klugen grauen Kopf und lächelte. „Es ist Zyperwein, wie ich sehe, und er ist nicht schlecht. Mangel scheinst du nicht zu leiden. Aber ich habe wenig Zeit und will dich nicht lange belästigen, wenn du mich anhören magst.

Der verstörte Mensch sah dem Paten mit Entsetzen in die hellen Augen und erwartete von Augenblick zu Augenblick, ihn niedersinken zu sehen.

Der Pate setzte sich indessen mit Behagen auf einen Stuhl und nickte seinem jungen Freunde gütig zu.

„Hast du Sorge, der Schluck Wein könnte mir schaden? Da sei nur ruhig! Es ist freundlich von dir, daß du Sorge um mich hast, ich hätte es gar nicht vermutet. Aber jetzt laß uns einmal reden wie in der alten Zeit! Mir scheint, du hast das leichte Leben satt bekommen? Das kann ich verstehen, und wenn ich weggehe, kannst du ja dein Glas wieder vollmachen und austrinken. Aber vorher muß ich dir etwas erzählen."

譯。 Damit[1] 斯う言つて nahm er das Glas 彼はそのコップを取り und そして setzte es an den Mund, それをば口に附けた、und そして ehe[2] Augustus ihn zurückhalten konnte, アウグストゥスが彼を引き止める事が出來ない中に、hob[3] er es hoch[4] 彼はそれを高く揚げ und そして

trank es in einem raschen[5] Zuge[6] aus. 大急ぎの一息でそれ[葡萄酒]を飲んでしまつた。

Augustus war todesbleich[7] geworden. アウグストゥスは死の如く蒼白になつた。 Er stürzte auf den Paten los,[8] 彼は教父をめがけてとび附いた、[そして] schüttelte ihn an[9] den Schultern 彼の肩を揺ぶり und そして schrie gellend:[10] 鋭い聲で叫んだ、„Alter Mann, おぢいさん、weißt du, was du da[11] getrunken hast?" 貴方は今何を飲んだのか知つてゐますか?

Herr Binßwanger nickte mit dem klugen grauen Kopf ビンスヴァンゲル氏は悧發な白髪頭で點頭いた und そして lächelte. 微笑んだ。 „Es ist Zyperwein, wie ich sehe, 成程此れはサイプラスの葡萄酒だ、und er ist nicht schlecht. そして此奴は中々良い。 Mangel[12] scheinst du nicht zu leiden. いや、お前さんは實に結構な身分だよ。 Aber ところで ich habe wenig[13] Zeit 私は餘り時間がない und それで wenn du mich anhören[15] magst[16] 若し君が私の言ふ事を聽く氣があるなら、[ich] will dich nicht lange belästigen,[14] 私は長い間君の邪魔をしようとは思はないのだよ。

Der verstörte[17] Mensch 此の血相變へた人間は、sah dem Paten[18] mit Entsetzen in die hellen[19] Augen 驚愕を以て教父の眼の中をまざまざと眺めた und そして ihn niedersinken zu sehen 彼が倒れ臥すのを見るのを erwartete von Augenblick zu Augenblick[20] 今か今かと期待してゐた。 indessen[21] さうしてゐる間に、 Der Pate setzte sich mit Behagen[22] auf einen Stuhl 教父は好い氣持で一つの椅子の上に腰を下した、und そして nickte seinem jungen Freunde gütig zu.[23] 彼の若き友達に向つて慈愛深く點頭いた。

„Hast du Sorge, der Schluck Wein[24] könnte mir schaden? 君は葡萄酒を一口飲んだ位の事が私の身體に害になるかも知れぬと心配してゐるのか? Da[25] sei nur[26] ruhig! そんな事ならまあ安心して居給へ。 Es ist freundlich von[27] dir, daß du Sorge um[28] mich hast, 君が私の事を心配して呉れるとは御親切な事だ、 ich hätte[29] es gar nicht vermutet. 私は其う云ふ事を[夢にも]想像しなかつた。 Aber ところで jetzt 今度は laß[30] uns einmal reden wie in der alten Zeit! まあ二人で昔時の樣に話をしようではないか。 Mir scheint,[31] du hast das leichte Leben satt bekommen?[32] 察するところ、君は此の淺薄な生活がつくづく厭になつ

のだね。 Das kann ich verstehen, それは私に[よく]判る、und そして wenn ich weggehe, 若し私が[此處を]立ち去れば kannst du ja dein Glas wieder vollmachen und austrinken. 君は再び君のコップに[毒藥入りの葡萄酒を]充たして飲み乾す事も出來るではないか。 Aber けれども vorher 其の前に muß ich dir etwas erzählen." 私は君に話さなければならない事があるのだ。

註。【1】 damit = mit diesen Worten; 斯く云つて。——【2】 ehe = bevor (第四卷 298)——【3】 heben, hob [又は hub], gehoben (揚げる)——【4】 hoch [發音ホーホ、ホホに非ず]——【5】 rasch = schnell, geschwind (速き)、hastig, eilig (大急ぎの)——【6】 ein Zug (一息) は ziehen (引く) から來た名詞。文字通りに云へば「一引き」である。——【7】 bleich wie der Tod (死の如く眞青に) = totenbleich (死人の如く眞青に) とも云ふ。——【8】 此の los も、losstürzen (飛びかかる) の前綴と見てもよし、auf……los (或ものをめがけて) と云ふ語法の、前置詞の後曳する追加詞と見ても好い。——【9】 或人の肩を揺ぶる、と云はないで、或人を肩の所で揺ぶる、と云ふ。 さういふ時の前置詞 (局部を指す) が an である。——【10】 gellen は、耳が聾せんばかりの、鋭い聲について云ふ。 grell と云ふ形容詞もある。 (eine grelle Stimme 癇高い聲、絹を裂くやうな聲) schrill, *a.* も同意。——【11】 此の da も、「現在」の色彩を强調する副詞である。——【12】「困つてゐる」事を Mangel leiden (缺乏をなやむ) といふ、不自由な生活をする事。——ドイツ人は概して斯ういふ Litotes (弱化語法) を好む。 それによつて文句がみんな多少の Humor を帶びて來るから面白い。 Litotes については第三卷 247.——wenig は「大して……しない」と云ふ準否定詞 (第四卷 397) であるから、此處は ich habe nicht viel Zeit または露骨に ich habe keine Zeit と云ふのと大體同じ意味である。——【14】 belästigen は Last, *f.* (荷) から來たもの。 stören (邪魔する、厄介をかける) と同じである。——【15】 einen anhören (或人の云ふ事を聽く) einem zuhören (或人に傾聽する) auf einen hören (或人の言を耳にとめる、或人の言に從ふ) はそれぞれ色彩がちがつてゐる。——【16】 此處の mögen の意味に就ては第三卷 247 の (4) を見よ。 (wollen と同意)——【17】 驚愕恐怖等のために顏相が物凄くなつてゐる事を verstört といふ。——【18】 此處は、日本語でならば in die hellen Augen des Paten (教父の眼をぢつと) と云ふ所であるが、第四卷 416 に述べた語法に從つて、dem Paten と三格になつて前に離して置かれてゐるのである。——【19】 hell (明らかな) は、初學の人には一寸理解し難いかも知れないが、此處では決して「淡色の眼」とか「明るい眼」とか云ふ意味なのではなくて、或種の Pleo-

贅語 [Pleonasmus]

nasmus (贅語) なのである。贅語と云つても決して全然無意義なのではなく、謂はば Augen を「まざまざと」想像せしめんが爲めの强調的贅語なのである。換言すれば mitten in die Augen (眼の眞唯中へ) と云ふに等しい。斯う云ふ種類の贅語を Veranschaulichungspleonasmen (具體的想像を助成する贅語) と云ふ事が出來る。hell の外になほ leicht (明るい) schön (美しい) leibhaftig (具體的) 等、諸種の形容詞を以て之れに充てる事が出來る。

1. Er hat sich hundert harte Taler geben lassen. 彼は百枚の固いターレル銀を受け取つた。(夢や影には非ずの意。)
2. Ich habe einmal mit einem wirklichen kalten Schwert gefochten. 私は曾て本物の冷たい劍で勝負をしたことがある。
3. Er hat sogar einige Schritte von der hellen lichten Polizeibude gestohlen. あいつと來た日には、現にまざまざと交番の立つてゐる所から二足三足の所で泥坊をしやがつた。
4. Es hat durchgeregnet und das helle Wasser steht mitten auf dem Zimmer. 雨洩りがして、部屋の眞中に無遠慮に水がたまつてゐる。
5. Der, den ich tot geglaubt hatte, stand leibhaftig vor mir. 死んだかと思つてゐた男がだしぬけにぬつと私の前に立つてゐた。
6. In ihren Augen standen helle Tränen. 彼女の眼にはあきらかに涙がたまつてゐた。

上例でわかる通り、hell なぞは必ずしも好い日本語にはならない。直譯しようとするとどうしても副詞か何かで間に合せなければならなくなる。上例はまあ成る可く判り易い例を並べたのであるが。——【20】 von Augenblick zu Augenblick (瞬間から瞬間へ、卽ち、今か今かと) 「彼は何時なんどき來ないとも限らない」と云つた樣な際には Er kann jeden Augenblick da sein と云ふ。その jeden Augenblick と同じやうなものであるが、用ひ所が一寸違ふ。下の場合に上の句を使つても好いが nicht umgekehrt (その反對は不可。) ——【21】 indessen または indes, währenddessen. (さうしてゐる間に、さるほどに)——【22】 mit Behagen = behaglich, gemütlich, ruhig, gelassen. (好い氣持で、打ち寬ろひで、悠々と)——【23】 einem zunicken (或人に向つて點頭く) といふのは、「よしよし、好いよ好いよ」といふ親愛の意を表はす表情 (Gebärde) である。日本人は斯う云ふ時に斯う云ふ事はしないが。——【24】 ein Schluck Wein (葡萄酒の一口) eine Tasse Kaffee (一杯の珈琲) eine Prise Tabak (一服の煙草) ein Glas Bier (コップに一杯の麥酒) 等は時には定冠詞

で云ふ事がある。すると、「只今の一杯」とか、「例の一杯」等の意になる。ein paar Fehler (二三の誤り) が die paar Fehler になると、(それつ位な誤り、少々の誤りぐらゐで) 等の意になるのと同じである。——【25】 此の da は、「其の儀ならば」「その點に關しては」「其處は」といふ用法である。Da sei mir Gott vor! (其の儀ならば御免を蒙る) Da verkennst du meinen Vater! (そりやあ我輩の親父を大いに見違へてゐるよ) Da wäre ich von ganz anderer Meinung! (其處へ來ると我輩の意見は大いに違ふ) Da kannst du dich auf mich verlassen! (其の點なら我輩が引き請けた)——【26】 ゆとりのある命令には nur (まあ) を用ひ、切望的な命令には doch (是非) を用ひる。その中間にはなほ俗語の mal または方言の man といふのがある。Gehen wir mal spazieren! (一寸散步に行かうよ)——【27】 freundlich von..... といふのは一種の熟語で、Du bist freundlich といふ代りに es ist freundlich von dir,——Er ist freundlich といふ代りに es ist freundlich von ihm といふだけの話である。云ひかへると、Du warst so liebenswürdig, Sorge um mich zu haben. (おまへさんは親切にも私の身を氣づかつて呉れた) である。——【28】 um は Sorge (心配) の要求する前置詞であるが、一たい或物が關心の對象になる時には um を用ひるのが例である。um jemandes willen (或人のために) の um もさうだし、sich um etwas [be-] kümmern (或事を氣にかける) の um もさうである。——【29】 斯う云ふ hätte に關しては既に註で述べて置いた。——【30】 laß uns reden は reden wir! と同じである。(第四卷 364)——【31】 es scheint mir [非人稱句] の es は、倒置の場合には省く事がある。(第三卷 277)——【32】 etwas satt bekommen. [熟語] 或物にうんざりする。換言すれば des leichten Lebens satt geworden.

34.

Augustus lehnte sich an die Wand und horchte auf die gute, wohlige Stimme des uralten Männleins, die ihm von Kinderzeiten her vertraut war und die Schatten der Vergangenheit in seiner Seele wachrief. Eine tiefe Scham und Trauer ergriff ihn, als sähe er seiner eigenen unschuldigen Kindheit in die Augen.

„Dein Gift habe ich ausgetrunken," fuhr der Alte fort, „weil ich es bin, der an deinem Elend schuldig ist. Deine Mutter hat bei deiner Taufe einen Wunsch für dich getan, und

ich habe ihr den Wunsch erfüllt, obwohl er töricht war. Du brauchst ihn nicht zu kennen, er ist ein Fluch geworden, wie du ja selber gespürt hast. Es tut mir leid, daß es so gegangen ist, und es möchte mich wohl freuen, wenn ich es noch erlebte, daß du einmal wieder bei mir daheim vor dem Kamin sitzest und die Englein singen hörst. Das ist nicht leicht, und im Augenblick scheint es dir vielleicht unmöglich, daß dein Herz je wieder gesund und rein und heiter werden könne. Es ist aber möglich, und ich möchte dich bitten, es zu versuchen. Der Wunsch deiner armen Mutter ist dir schlecht bekommen, Augustus. Wie wäre es nun, wenn du mir erlaubtest, auch dir noch einen Wunsch zu erfüllen, irgendeinen? Du wirst ja wohl nicht Geld und Gut begehren, und auch nicht Macht und Frauenliebe, davon du genug hast. Besinne dich, und wenn du meinst, einen Zauber zu wissen, der dein verdorbenes Leben wieder schöner und besser und dich wieder einmal froh machen könnte, dann wünsche ihn dir!"

譯。 Augustus lehnte sich an die Wand アウグストゥスは壁に倚り掛り und そして horchte auf[1] die gute, wohlige[2] Stimme des uralten[3] Männleins 此高齢の倭人の親切な氣持の好い聲を傾聽してゐた、die その聲は ihm von Kinderzeiten her[4] vertraut war 彼の幼い時代以來彼に親しみ深いものであつた und そして [その聲は] die Schatten der Vergangenheit in seiner Seele wachrief. 彼の魂の中に過去の影を喚び醒ました。 als sähe er seiner eigenen unschuldigen Kindheit in die Augen[5] 宛かも自分自身の無邪氣なりし幼年時代をば凝乎と正視したかの如く、 Eine tiefe Scham und Trauer ergriff ihn, 深い慚愧と愁嘆とが彼 [の心] を捉へた。

„Dein Gift habe ich ausgetrunken," 私はお前の毒藥を飲み乾したのだ、 fuhr der Alte[6] fort [と] 老人は言葉を續けた、 „weil ich es[7] bin, der[7] an[8] deinem Elend schuldig ist. 何となればお前の不幸に責任があるのは私だからだ。 Deine Mutter hat bei deiner Taufe einen Wunsch für

dich getan, お前の母はお前の洗禮式に際してお前のために一つの願ひをした、 und そして obwohl er[9] töricht war その願ひは愚なものであつたけれども ich habe ihr den Wunsch erfüllt, 私は彼女にその願ひを叶へてやつたのだ。 Du brauchst ihn nicht zu kennen, お前はその願ひを知る必要はない、[が] er ist ein Fluch geworden, その願が呪ひとなつた [事は] wie du ja selber gespürt hast. お前が確かに自ら感じ [經驗し] た通りだ。 daß es so gegangen[11] ist, 此んな廻り合せになつた事を Es tut mir leid,[10] 私は氣の毒に思ふ、 und そして daß du einmal wieder bei mir daheim[13] vor dem Kamin sitzest お前がもう一度故鄕に於て私の許で暖爐の前に坐し und そして [daß du] die Englein singen hörst 小天使達が歌ふのを聞く [と云ふ事を] wenn ich es noch erlebte, 若し私が更に [もう一度] 經驗したならば、 es möchte[12] mich wohl freuen, 私は大變喜ばしいであらう。 Das ist nicht leicht, それは容易な事ではない、 und そして daß dein Herz je[15] wieder gesund und rein und heiter werden könne お前の心が何時か再び健全に且つ純潔に且つ快活になり得ると云ふ事は im Augenblick[14] 目下の所、 scheint es dir vielleicht unmöglich. それは恐らくお前には不可能と思はれるだらう。 Es ist aber möglich, けれどもそれは可能なのだ、 und そして es zu versuchen それを試みるやうに ich möchte[16] dich bitten. 私はお前に願ひ度いのだ。 Der Wunsch deiner armen[17] Mutter お前の憐れな母の願ひは ist dir schlecht bekommen,[18] お前の不爲めになつた、 Augustus. アウグストゥスよ。 auch dir noch einen Wunsch zu erfüllen, お前にも亦更に一つの願ひを叶へてやる事を wenn du mir erlaubtest, 若しお前が私に許して呉れるとしたら Wie[19] wäre es nun, 扨てどんなものだらう、 irgendeinen[20] 何か一つの願ひをだよ。 Du wirst ja wohl[21] nicht Geld und Gut begehren, お前はまさかお金や品物などを望みはしないだらう、 und auch nicht Macht und Frauenliebe, 又權力や婦人の愛なども [望みはしないだらう]、 davon[22] du genug hast. そんなものはお前は飽きゝゝしてゐる [筈だ]。 Besinne dich, よく考へて見なさい、 und そして dein verdorbenes[24] Leben wieder schöner und besser [machen könnte] お前の駄目になつた生活をば再び一層美しく且つ一層良くする事が出來 und そして dich wieder einmal froh machen könnte, お前をもう一度愉快にする事の出來る der ところの einen Zauber zu[23] wissen, [さう云ふ] 魔法を知つてゐると

wenn du meinſt, 若しお前が思ふならば、 dann さうしたら wünſche ihn[25] dir!" さう云ふ魔法を所望するが好い！

註。【1】 horchen (傾聽する) hören (聽く) aufmerkſam ſein (注意する) richten (向ける) 等、ある方向に集中する動作を表はす動詞には、その對象に auf を附するのが常である。その際の auf は「何々の方に向つて」の意になる。(方向を現はすから從つて四格支配である。第三卷 236)——【2】 wohlig, *a.* 好い氣持の (柔らかな好い氣持のことをいふ)——【3】 ur-alt, *a.* 元來は「往古の」の意であるが、此處では單に greiſig (非常に年老いた) の意。ſteinalt とも云ふ。——【4】 her は von の後曳する追加詞である。(第三卷 240)——【5】 einem in die Augen ſehen (或人の眼をぢつと瞶める)——此處では Kindheit (幼年時代) を人間のやうに考へて、それを正視することを云ふのである。——【6】 第二卷 189, 190.——【7】 es は der の先行詞である。(詳細は第三卷 279)——【8】 an は次の ſchuldig の支配する前置詞。an etwas ſchuldig ſein (何々に責任がある。)——【9】 er は前の Wunſch を受ける。Wunſch が男性故 er である。次の文の ihn, er 等も同樣。これが性といふもののあるドイツ語の特長で、その單語が男女中のいづれであるかに從つて er, ſie, es を用ひるのである。——【10】 es tut mir leid (氣の毒だ) は非人稱の熟語。【11】 daß es ſo gekommen iſt と云つても好い。es geht, es kommt は共に「……な廻り合せになる」といふ非人稱熟語である。(第三卷 271)——【12】 此の möchte は würde (……であらう) と同意。——【13】 daheim は da と heim (英語の home) との結合形。in deiner Heimat の意。——【14】 in dieſem Augenblick, augenblicklich (目下では)——【15】 je=einſt, eines Tages (何時か、そのうちに、一度)——【16】 此の möchte は普通の möchte で、第三卷 218 に說明がある。——【17】 arm, *a.* には意味が二つある。「貧乏な」と「可哀相な」とである。(つまり英語の poor) ところがその他に微妙な第三の用ひ方がある。それは、親愛の意を現はす arm である。單に「親愛なる」と云ふ意味を云はうとする時に、その誠意を或種の同情の如きものにまで誇張して armer Vater! armer Freund! と云ふので、その氣持がわからずに「可哀相なお父さん！」なんて譯するから、どうも少し變になつて來て、さう云ふ飜譯小說を讀む讀者が、「西洋人といふ奴は變なところで同情するもんだ」といふ感じを抱く。また「可哀相なお父さん」なぞと面と向つて云はれたお父さんそのものが、不思議がりもせず、怒りもせず、元來ならば「可哀相だ？何が可哀相だ！」とでも反問しさうな所を、當然の事のやうにして聞いてゐる。要するに西洋人といふのは變なものだと云ふ感じを與へてしまふ。——これは決して arm 一字の問題ではないが、arm に於て殊に甚だしいと云つて好い。飜譯者の內で arm に對する實感を以て譯してゐる人が果して何人ゐるだらう？實に心細い次第である。——今問題になつてゐる此の個所では、arm にはなほ多少憐憫の意も含めてあるとも云へよう。けれどもたとへば次のやうな場合にはどうだらう。たとへば自分の娘が歌なぞ歌つて大勢のゐる前で喝采される。列席してゐる父親が、これも大いに得意になつてしまつて、自分の娘を改めて見直ほしたやうな氣持になり、その嬉しさに堪へずして思はず口にする文句が meine arme. arme Tochter! である。これをしも「おゝ私の可哀相な可哀相な娘よ！」と譯す可きであらうか？私にはどうしても娘の可哀相な譯がのみ込めない。——これはドイツ語ばかりの問題ではなく、英語でも佛語でも、その他の大抵の西洋語には共通の現象である。佛語は殊に甚だしくて、mon pauvre petit père! (私の可哀相な小さなお父さん) とまで云ふ。可哀相も小さいも決して文字通りの意ではない、みんな單に親しく馴れ馴れしい感じを出すための贊語である。そんなものを文字通りに譯すると滑稽になつてしまふ。滑稽な個所ではよからうが、滑稽でも何でもない所で直譯するのは、それこそ滑稽である。(參考のために、かういふ語法に興味を持たれる人は、Molière 作 Le Tartuffe の第一幕の、Orgon なる人物が何遍も繰り返す le pauvre homme! [der arme Mann!] といふ名高い文句に注目せられたい。好個の例である。)——【18】 ſchlecht bekommen (身の不爲めになる) wohl bekommen (身の爲めになる) は熟語。bekommen は、他働詞として用ひる場合は erhalten (手に入れる) の意になるが、助動詞 ſein と共に完了形を作る自働詞として用ひる際は英語の become とまづ同じ樣な意味と思へば好い。——【19】 wie wäre es nun, wenn…… (「云々して見てはいかが？」と勸める意味の文句) は、所謂約束法的語法であるから第二式接續法が二つ用ひてある。(wäre と erlaubteſt) 約束法については第三卷 212, 213, 214 を見よ。——簡單な云ひ方に wie wenn (又は wie, wenn) といふのがある。wie, wenn du gingeſt? おまへ行つてはどうだらう？——【20】 irgendeinen 又は irgend einen Wunſch——此の irgend に關しては第二卷 184.——【21】 ja wohl nicht=doch nicht, (まさか) gewiß nicht, ſicherlich nicht, natürlich nicht (勿論……はしまい)——【22】 此の davon は、代名詞ではなく關係代名詞である。即ち wovon と同じである。(第二卷 175)——此の von だけに關していふと、これは genug の支配する前置詞である。即ち「そんな書物はもう充分讀んだ」は Von dieſen Büchern habe ich ſchon genug geleſen.——それから原文の von etwas genug haben (……には慊きた、もう澤山だ) は熟語である。——【23】 zu を伴ふ不定法の文章は往々にして daß…… の文

arm [英語の poor] に關する知識

と同じ意になる事がある。此處がその例で、wenn du meinst (glaubst でもよい), daß du einen Zauber weißt.——【24】 verderben, verdarb, verdorben (英語の spoil) これは必ずしも墮落した事を指すのではなくて、駄目になつた、の意に用ひられる事がある。むしろそれが第一義である。たとへば einem den Spaß verderben (或人の樂しみをぶつこはす) 等。——【25】 ihn (男性) は Zauber を受ける。

35.

In tiefen Gedanken saß Augustus und schwieg, er war aber zu müde und hoffnungslos, und so sagte er nach einer Weile; „Ich danke dir, Pate Binßwanger, aber ich glaube, mein Leben läßt sich mit keinem Kamm wieder glattstreichen. Es ist besser, ich tue, was ich zu tun gedachte, als du hereinkamst. Aber ich danke dir doch, daß du gekommen bist."

„Ja," sagte der Alte bedächtig, „ich kann mir denken, daß es dir nicht leicht fällt. Aber vielleicht kannst du dich noch einmal besinnen, Augustus, vielleicht fällt dir das ein, was dir bis jetzt am meisten gefehlt hat, oder vielleicht kannst du dich an die früheren Zeiten erinnern, wo die Mutter noch lebte, und wo du manchmal am Abend zu mir gekommen bist. Da bist du doch zuweilen glücklich gewesen, nicht?"

„Ja, damals," nickte Augustus, und das Bild seiner strahlenden Lebensfrühe sah ihm fern und bleich wie aus einem uralten Spiegel entgegen. „Aber das kann nicht wiederkommen. Ich kann nicht wünschen, wieder ein Kind zu sein. Ach, da finge doch alles wieder von vorne an!"

譯。In tiefen Gedanken[1] 深き物思ひに沈んで saß Augustus und schwieg, アウグストゥスは坐してそして沈默してゐた、aber けれども er war zu müde und hoffnungslos, 彼は餘りに疲れ而して希望を失つてゐ

た、und so それで sagte er nach einer Weile; 暫らくの後に彼は言つた、„Ich danke dir, Pate Binßwanger, ビンスヴァンゲル先生、私は貴方に感謝します、aber けれども ich glaube, mein Leben läßt[2] sich mit keinem Kamm wieder glattstreichen.[3] 私の生活は如何なる櫛を以てしても[最早や]綺麗に撫で直される事は出來ないと思ひます。 als du hereinkamst 貴方が[此の室へ]這入つて來た時に was ich zu tun gedachte,[5] 私が爲さうとしてゐた事を Es ist besser, ich tue,[4] 爲した方が良いのです。Aber けれども daß du gekommen bist 貴方が來て下さつた事を、ich danke dir doch,[6] 何れにせよ私は貴方に感謝します。

„Ja," 成程、[と] sagte der Alte bedächtig,[7] 老人は思慮深げに言つた、„ich kann mir denken,[8] daß es dir nicht leicht fällt.[9] それがお前にとつて容易な事ではないと云ふ事は私にも想像がつく。Aber けれども vielleicht kannst du dich noch einmal besinnen 恐らくお前はもう一度考へ直したがいゝ、Augustus, アウグストゥスよ、was dir bis jetzt am[11] meisten gefehlt hat 今迄お前に最も缺乏してゐたもの[が] vielleicht fällt dir das ein,[10] ひよつと思ひ泛ばぬとも限るまい、oder 或は vielleicht kannst du dich an[12] die früheren[17] Zeiten erinnern, 恐らくお前は昔[幼い頃]の時代を想ひ起す事が出來る[だらう]、wo[13] その頃には die Mutter noch lebte, 母がまだ生きてゐた、und そして wo その頃には du manchmal am Abend zu mir gekommen bist.[14] お前は幾度も晩に私の所へ來たものであつた。Da[15] その當時には bist du doch zuweilen glücklich gewesen, お前は矢張り時々は幸福であつた、nicht?"[16] さうだらうね?

„Ja, damals," さうでした、あの頃は、[と] nickte[18] Augustus, アウグストゥスは點頭いた、und そして das Bild[19] seiner strahlenden[20] Lebensfrühe[21] 彼の麗朗たる幼年時代の光景が sah ihm[22] fern und bleich[23] wie aus einem uralten Spiegel entgegen. あたかも古色蒼然たる鏡の中からの如く遙かに遠く且つぼんやりと彼の方を眺め[てゐる樣に思はれ]た。„Aber das kann nicht wieder kommen. 併し乍らさう云ふ時代は二度と來る事は出來ません。Ich kann nicht wünschen, wieder ein Kind zu sein. 私は再び子供になりたいと願ふわけには行きません。Ach, 噫、da 若しそんな事を願つたら、finge[24] doch[25] alles wieder von vorne[26] an!"[27] それこそ總てが初めから繰り返される事になるだらう!

註。【1】 或種の抽象名詞の複數にはよく注意する必要がある。といふのはたとへば der Gedanke (考へ、思ひつき) die Gedanken (物思ひ＝Grübelei) die Zeit (時、時間＝空間の反對、または暇の意) die Zeiten (時代) das Mittel (方法) die Mittel (資本＝Kapital) die Kraft (力) die Kräfte (力量、體力、精力、意志の力、精根) Gott (キリスト教の神——冠詞なし) die Götter (神々、——主としてギリシヤの)——【2】 läßt sich に就ては第三卷 251 の 3 を見よ。——【3】 etwas glattstreichen (或物を撫でて glatt 滑らかにする) の glatt なる形容詞は、所謂結果的客語である。(第四卷 423)——此處に用ひてある修辭 (rhetorische Figur) を Metapher (譬喩話法) といふ。「阿呆につける藥はない」とか、「其處は上手に舵を取らねばいかん」とか「あいつには全く兜をぬいだ」とか云ふ日本語も、それぞれ病氣、船、仕合等にかこつけた Metapher である。此處では mein Leben を宛も亂れた髪の毛のやうに見立てたので、大變面白い言ひ方である。——【4】 ich tue 以下は、主文章の形にはなつてゐるが、daß ich tue の意で、本當は前の es ist besser を主文章としてゐるのである。たとへば Du weißt, ich bin sehr vergeßlich (御存じでもあらうが私は大變物を忘れる性分で) Ich denke, ich muß es tun. (思ふに、それをしない譯には行くまい) 等と同じ關係にある。——【5】 gedenken (……するつもりである) は一種の助動詞の如きもので、第三卷 253 にあげた助動詞的動詞に屬する字である。——【6】 doch (やはり、いづれにせよ、それはさうとして、それにも拘らず。)——【7】 bedächtig＝mit Bedacht (深く慮りつつ) 日本語の所謂「じつくりと」である。——【8】 sich [三格] denken＝sich [三格] vorstellen 想像する、想像がつく。所謂三格の再歸代名詞を支配する再歸動詞 (第二卷 155) であつて、單なる denken とは區別すべきである。——【9】 leicht fallen, leicht werden＝leicht sein, schwer fallen, schwer werden＝schwer sein. は各々熟語。fallen, werden 等の意味をあまり文字通りに考へると分らなくなる。——【10】 einfallen (思ひ浮ぶ)、故に Einfall (落想、着想) といふ名詞もある。——【11】 am meisten の am には別に意味はない。副詞の最高級である。(第三卷 227) am——sten の形については第三卷 226.——【12】 sich [四格] eines Dinges erinnern 又は sich an etwas [四格] erinnern. (或事を思ひ出す)——【13】 wo は Zeiten を先行詞とする關係代名詞的なもの。(即ち in welchen の代り) 一寸斷はつて置くが、wo の如きものを何が故に關係代名詞と呼ぶかといふに、接續詞と區別するために、先行詞を有するものを關係代名詞と呼び、先行詞なくして單に文と文とを結びつけるものを接續詞と呼ぶのが合理的である。先行詞は勿論名詞かそれとも代名詞でなければならぬ。wo については第二卷 174.

譬喩話法
die Metapher

先行詞の概念については第二卷 162.——【14】 會話體に於ては、過去を用ひる可き筈のところに現在完了を用ひるのが常である。その儘を文語體で眞似しては勿論いけない。此處の個所なぞも、教父の打ちとけた話だからみんな現在完了で述べられてゐるが、もしこれを、教父の口を借りないで著者自から叙述するとすれば gekommen bist は kamst, bist gewesen は warst と改めなければならないのである。——たとへば、惡童日記と云つたやうな自叙體の談話の調子 (Gesprächston) で書かれたものは、元來半過去でなければならない筈の所がみんな現在完了で書かれる。所謂半過去になると、いやに改まつた客觀的な叙述になつてしまふからである。——【15】 da は damals (あの時は、當時は)——【16】 nicht? または nicht wahr? 俗語では gelt? ja? 等も用ひられる。(第四卷 376)——【17】 früher (以前の) später (今後の) は各々 früh (早き) spät (晩き) に對する比較級であるが、その比較級に特殊な意味が生じたもので、實は殆んどその比較級である事を意識せず、一つの特別な單語として用ひてゐる。所謂絶對比較級 (第三卷 223)——【18】 斯ういふ挿入句に倒置法を用ひる事は第二卷 133 に於て述べたが、「……と彼は云つた」の代りに、即ち sagen の代りに色んなものが用ひられる。fuhr er fort, (と話を續けた) entgegnete er, erwiderte er, antwortete er (と答へた) versetzte er (と遣り返した) nickte er (と點頭いた) なぞは普通の部類であるが、lenkte er ein (と話題を外した) brauste er auf (といきり立つた) rettete er sich (と巧みに逃げた) seufzte er auf. (と吐息をついた) なぞと、其の言葉と同時に行はれる動作や、第三者の下馬評を以て「云つた」に代へることが珍らしくない。——【19】 Bild といふのは、何でもよろしい、肉眼または心眼の前に現はれたところの現象を指すので、ドイツ人の最も好む詞の一つである。光景、有樣、圖、體たらく、場面、おもかげ、狀景、片影、心像、想像、面目、等、その場合によつて色々に譯される。かう云ふ字の應用法を會得すれば、それが直ちに以てドイツの心理學、美學、哲學等の重要な問題に乘り込む手引きとなるのであるから、特にその用法に注意せねばならぬ。——【20】 strahlend は heiter (朗らかな) または「麗らかな」事を指すのであつて、同じ「輝く」といふ字でも glänzend (赫々たる) とは根本的に違ふ。——【21】 die Frühe は früh (早い) から來た名詞で、早朝の事である。(-e の語尾については第二卷 191) 人生を一日に譬へて、Kindheit (幼時) を人生の早朝と云つたのである。——【22】 ihm は entgegensehen (或人の方を迎へて見る) が三格を支配するからである。——【23】 bleich は必ずしも青ざめたと云ふ意ではなく、色褪せて、朦朧としてゐること。——【24】

談話體では、現在完了を以て過去に代へる事がある

finge an は anfangen (始まる) の第二式接續法を約束法に用ひたもの。即ち da といふ一字が wenn ich wünschte, wieder ein Kind zu sein (もし私が再び小供になることを望むとすれば) といふ前提文の代りになつてゐるのである。finge と云ふ形は fangen, fing, gefangen の fing から來てゐる。(第三卷 205) ——【25】 doch は間投形の文を强めるために用ひられる。「それこそ」とでも譯するか。——【26】 von vorne (始めから) また元に歸つてやり直しになる時にのみ使はれる。同意の da capo (始めより繰り返す) といふ伊太利語は音樂の術語として名高い。da は von (から) capo はドイツ語の Kopf (頭) である。——【27】 また小供になり歸るといふことは望まれない、そんな事をすればまたやり直しになる！此處には深い意味が含まれてゐる。Entwicklung (進化) dialektische Bewegung (辯證論的な動き) に關する重要な反省が窺はれる。主人公の一生はたしかに失敗ではあつた。「萬人に愛されるやうに」といふ願の成就はたしかに彼の一生を不幸に陷入れた。けれどもそれを否定して進步の過程を逆行しようとするのは愚である。主人公が此の次に取る可き方向は、今までの方向の全然的否定であつてはならぬ。今までの方向を取り入れ、今までの方向が何等かの意味に於て生きて來るやうな種類の方向でなくてはならぬ。それが時間的發展、即ち歷史の眞義である。第一のものに歸るのではなくて第三のものに進むのだ。それがたとへ第一のものに歸るが如き外觀を呈するにしても！——歷史に反覆なし、進化あるのみ。自己の進む路を選ぶ時にはよろしく此の精神を體す可きである。(一案を立てた後に、他の案へ他の案へと考へが進み、結局また廻り廻つて最初の第一案に歸ると云つた樣な場合なぞもそれで、それは決して謂ふ所の「復歸」ではない。第一案そのものが一段上へ登つてゐるのである。人がそれを意識するとせざるとに拘らず。)

ドイツ哲學の一常識

36.

„Nein, das hätte keinen Sinn, da hast du recht. Aber denke noch einmal an die Zeit bei uns daheim und an das arme Mädchen, das du als Student bei Nacht in ihres Vaters Garten besucht hast, und denke auch an die schöne blonde Frau, mit der du einmal auf dem Meerschiff gefahren bist, und denke an alle Augenblicke, wo du einmal glücklich gewesen bist und wo das Leben dir gut und wertvoll schien. Vielleicht kannst

du das erkennen, was dich damals glücklich gemacht hat, und kannst dir das wünschen. Tu es mir zuliebe, mein Junge!"

譯。 „Nein,[1] さうだ、das hätte[2] keinen[3] Sinn, そんな事は無意義な事だ、da[4] その點に就ては hast du recht. お前の言ふ事は尤もだ。Aber けれども an die Zeit bei uns daheim[5] 故鄕で私達の傍に居[て過し]た時の事を、und 又 das du als Student bei Nacht[6] in ihres Vaters Garten besucht hast, お前が學生時代に夜間その父の庭園の中で訪問してゐたところの an das arme Mädchen, [あの]憐れな少女の事を denke noch einmal もう一度考へて御覽、und 又 mit der du einmal auf dem Meerschiff gefahren bist, その人と共にお前が嘗て船に乘つて旅行したところの an[7] die schöne blonde Frau, [あの]美しい金髮の婦人の事を auch も亦 denke 考へて御覽、und 又 wo du einmal glücklich gewesen bist [その時に]お前が嘗て幸福であつたところの und そして wo das Leben dir gut[8] und wertvoll schien 生活がお前にとつてまんざらでもないと思はれてゐたところの an alle Augenblicke 凡ゆる場合の事を denke 考へて御覽。was[9] dich damals glücklich gemacht hat, 其の當時お前を幸福にしたところの das[9] その事を Vielleicht kannst du erkennen,[10] 認め und そして kannst dir das wünschen. その事を自分のために願ふ事が出來ないものでもあるまい。Tu[11] es mir zuliebe,[12] どうかさうしておくれ、mein Junge!" 吾が息子よ。

註。【1】 Nein は、自分がこれから云はうとする文句が否定文である時に前に置かれる事がある。決して相手の言に反對を打つたのではない。(第四卷 377 ja と nein の使ひ分けの項を見よ。)——【2】 hätte [約束法] これも前の finge an と同じ意味に於ける約束法である。——【3】 keinen Sinn haben (何の意義も持たない) 即ち Unsinn (英語の nonsense) である。Das hätte keinen Zweck (無駄だ) Das wäre eine verlorene Mühe (草疲れ損だ) と云つても好いところ。——【4】 此の da も一寸前に述べた da. (註 33 の [25] を見よ) darin hast du recht, damit hast du recht とも云へる。——【5】 an die Zeit bei uns daheim は續いた一句である。即ち daheim に於ける bei uns の Zeit と考へればよい。——【6】 bei Nacht (夜間) は熟語である。それは第一 Nacht に冠詞がないのでもわかる。(第三卷 244) 晝間は bei Tag. ——【7】 an etwas denken. 或物の方に注意を向けて考へることである。だ

から Andacht (默禱) といふ字が出來てゐる。精神を統一し、邪念を去つて、專ら神に念を向ける、卽ち an Gott denken する、それが Andacht である。口で文句を唱へる Gebet (お祈り) とはちがふわけである。——【8】 gut und wertvoll は二語一想である。gut といふのは、所謂積極的な「善い」「良い」ではないが、「惡くはない」卽ち「用ひるに足る」「取り柄がある」「まんざら貶したものでもない」と云ふ時に使はれる。Mein Schwert ist gut. (某儀の一刀もまんざら錆刀ではござらぬ、——とでも云つた所) die Ware ist gut (此の品は確實だ)——つまり gut und wertvoll は、捨てたものではないの意。wo dir das Leben lebenswert schien. (人生が生き甲斐ありと思はれた時代) と云つても好い。——【9】 das は was の先行詞。dasjenige……was でもよい。(第二卷 168 を見よ)——此の das は、別に何を指すといふ事なしに、極く抽象的に言つたものである。例——Das Wesen ist das, wodurch ein Ding das ist, was es ist. 本質とは、或る物が依つて以てそれが現在さある所の其の物であり得る所の物である。——斯うなると日本語が如何に不便な國語であるかが露骨にわかる。——【10】 kennen は「知つてゐる」と云ふ狀態動詞、erkennen は「さとる、認識する」といふ動作動詞。かういふ區別を學者は Aktionsart (動作樣式) の相違と呼んでゐる。erkennen は、一瞬間、一點の動作を指すが故に punktuelle Aktion (點動) を指すと謂はれ kennen は時間のある長さを占めるから lineare Aktion (線動) を指すと云はれてゐる。lineare Aktion を持つてゐる動詞 (schlafen, stehen, schreiten) と、punktuelle Aktion を持つ動詞 (fallen, einschlafen, sterben, ankommen) との區別は非常に重要である。その他 Aktionsart に關する區別は、文法の最も重要な部分であつて、かういふ點に注目するとしないとで語學の精確さに非常な差異を生ずるものである。たとへばギリシヤ語を習はうといふ野心のある人は、此の Aktionsart の區別に注目しないと、ギリシヤ語の動詞の變化した諸種の形は絕對にわからないであらう。——【11】 Tun (なす) の命令法。tue または e を略して tu. (第四卷 362) ——【12】 mir zuliebe = mir zu Liebe. zuliebe は「或人に免じて」「或人に對する好意から」「或人を欣ばせるために」と云ふ三格支配の前置詞である。

Lineare Aktion [線動]
と
Punktuelle Aktion [點動]

37.

Augustus schloß die Augen und sah über sein Leben zurück, wie man aus einem dunklen Gange nach jenem fernen Lichtpunkt sieht, von dem man hergekommen ist, und er sah wieder, wie es einst hell und schön um ihn gewesen und dann langsam dunkler und dunkler geworden war, bis er ganz im Finstern stand und nichts ihn mehr erfreuen konnte. Und je mehr er nachdachte und sich erinnerte, desto schöner und liebenswerter blickte der ferne Lichtschein herüber, und schließlich erkannte er ihn, und Tränen stürzten aus seinen Augen.

„Ich will es versuchen," sagte er zu seinem Paten. „Nimm den alten Zauber von mir, der mir nicht geholfen hat, und gib mir dafür, daß ich die Menschen liebhaben kann!"

註。Augustus schloß die Augen アウグストゥスは眼を閉ぢて und そして sah über[1] sein Leben zurück 自分の生涯を顧みた、wie それは恰も aus einem dunklen Gange 暗い通路の中から von dem man hergekommen ist [先に] 其處から自分が出て來たところの nach jenem fernen Lichtpunkt[2] 向ふの遙か離れた明るい一點の方を [wie] man sieht, 眺める樣なものであつた、und そして wie es[3] einst[4] hell und schön um ihn[5] gewesen 嘗ては彼の身邊が明るく且つ美しかつた事、und dann 而してその後 langsam[6] dunkler und dunkler geworden war, 漸次に段々と暗くなつた bis[7] 終に er ganz im Finstern[8] stand 彼が全く暗黑の中に立ち und そして nichts ihn mehr[9] erfreuen konnte 最早や何物も彼を喜ばす事が出來なくなつた [事を] er sah wieder 彼は再び見た。Und そして je[10] mehr er nachdachte[11] und sich erinnerte, 彼が熟考し且つ回想すればする程、desto schöner und liebenswerter[12] und begehrenswerter 益々美しく且つ好ましく且つ望ましく blickte der ferne Lichtschein herüber,[13] 彼方の光明は此方の方を眺めた、und そして schließlich erkannte[14] er ihn, 終に彼は其の光明 [の何物なるか] に思ひ當つた、und そして Tränen stürzten aus seinen Augen. 涙は彼の兩眼から瀧の如く流れ出た。

„Ich will es versuchen,[15] 私は [願ひを] 試みませう、[と] sagte er zu seinem Paten. 彼は彼の教父に向つて言つた。„Nimm[16] den alten Zauber von mir, der mir nicht geholfen[17] hat, 私の身の爲めにならぬ

なかつたところの古い魔法を私から取り去つて下さい、und そして gib[18] mir dafür,[19] daß ich die Menschen liebhaben kann![20] 其の代りに、私が人間を愛する事が出來る樣にして下さい！

註。【1】 über と四格は、ある物の表面を渡つて此方から彼方へ、または彼方からこちらへである。日本語では「海を」見渡すと云つたやうに、單に「を」で云ひ表はすより仕方がない。（第三卷 236 über の部を見よ。）——【2】 nach jenem fernen lichten Punkt と、licht, *a.* (明るい) を使つて云つても好い所である。——【3】 此の es については第三卷 270.——【4】 einst は、未來の意に用ひて「そのうちに何時か」の意味に用ひる事もあり、現在の場合の如く「曾て」と過去の意になる事もある。——【5】 um ihn her とも云ふ。（四圍、身邊の意）——【6】 langsam＝allmählig, nach und nach (追々、徐々に、漸次、段々と)——【7】 bis は後續的の意。（第四卷 300）——【8】 das Finstre は finster (暗黑な) から作つた名詞。＝Finsternis, Dunkelheit.——【9】 nichts……mehr (第四卷 394 mehr の用法)——【10】 je……desto (第四卷 307, 308)——【11】 nachdenken (熟考する) は、或物を追究して (nach etwas) 考へる、の意。 nachforschen (調査する) nachsetzen (追ふ) nachjagen (追ひかける) 等の nach.——【12】 wert, würdig はいづれも「……の價値ある」といふ二格支配の形容詞である。愛する價値ある、ならば lieben (愛する) を中性名詞 das Lieben (第四卷 282) として、その二格をつけて Liebens wert, Liebens würdig それが一字となつて liebenswert, liebenswürdig といふ字が出來るわけである。 liebenswerter はその比較級。——【13】 herüber (こちらへの方へ) 反對は hinüber (彼方の方へ)——【14】 erkennen は、此處では wiedererkennen の意に用ひられてゐる。故に別に所謂「認識する」の謂ではない。たとへば、昔の友人なぞに途中で遭つて、それが友人だとわかるのが erkennen または wiedererkennen である。「わかる」「思ひ出す」「內心によみがへる」「心當る」ことである。もつと詳しく定義すれば、昔馴染を識別する事である。たとへば Schiller 作の Wallenstein の中の詩句でよく引用されるのに——

erkennen の意味

Daran erkenn' ich meine Pappenheimer!

其の言あつてこそ我がパッペンハイム聯隊の兵士なるぞ。

Pappenheim と云ふのは Wallenstein の部下の名譽聯隊の隊長であるが、その兵士達を褒めて、「それでこそ我がパッペンハイム聯隊所屬者がわかる」と云つたのである。また他の例を云ふと、墺國の詩人 Nepomuk Vogl の

Das Erkennen と云ふ詩が有名である。久しく故鄕を去つてゐた流浪の青年が、ひよつこりと故里の町に歸つて來る。昔親友であつた稅關吏が町の入口に立つてゐるが彼の顏があまり日に燒けてゐるので、遂に彼を erkennen しない。次に戀人に遭ふ。戀人すら變り果てた彼の姿を不審さうに打ち眺めるきりである。最後に腰の曲つた彼の母が敎會から出て來る。するとどうだ、母は一瞥の下に彼を erkennen した。

Wie sehr auch die Sonne sein Antlitz verbrannt,
Das Mutteraug' hat ihn doch gleich erkannt.

彼の面は縱令如何に日に燒けて居ようとも、
母の眼は遉がに一瞥の下に彼が何人たるかを見拔いた。

日本語には此の erkennen または wiedererkennen に對する正確なる直譯語が無いから、こんなのはよく意味を覺えておく必要がある。敢て長註を附した所以である。——問題の個所なぞも、「そして遂にそれが、あゝ、あれだな、と合點が行つた」とか、「そして遂にそれが元來自分が元つから知つてゐた筈のものだつた事に氣づいた」とか、或ひは又「そして遂に、磯と胸に思ひ當るところがあつた」とか云つた樣な複雜な事實を、此の erkennen と云ふ動詞の持つてゐる意味を應用して、うまく、簡單に言ひ現はしたのである。彼には暗闇の中に一道の光明が閃めいた。彼は最初その何なるかを知らなかつた。そのうちに段々と、それを見つめてゐるうちに、その瞬間に於ける彼の心理狀態は、その光が何者であるかははつきりしないが、とにかくそれが何か斯う故里の如く溫い、物悲しく慕はしい何者かである事だけはわかり出したのだ。そのうちに、磯と手を打つて、さうだ、自分が求めてゐたのは之れだつたのだ、と、あたかも舊知の友に逢つたかの如き欣びを經驗した。だから何等の規定もなく、意味深長に此の erkennen を用ひたのである。——彼が認めたのは勿論幼時の純朴なる幸福である。居ながら神の意に合することである。けれども前に斷はつたやうに、それは決して過去への復歸を意味するのではなく、一見過去への復歸にの如くにして其の實第三の何者か、(卽ち Verklärung 聖化、大悟徹底) への向上である。此處が此の作品の頂點である。戲曲ならば斯ういふ個所を Höhepunkt (クライマックス) の一番最後に持つて來 此處から Umkehr der Handlung (急轉直下、ねり戻し、翻轉) が初まつて、これから一息に大詰まで落として行くのである。——【15】 試みよう、といふのは、敎父が前に、何か望みを云つて見ろ、と云つたのに對して云つたのである。 ich will es doch (やはり) versuchen と云へばなほよく

Höhepunkt [頂點]

わかる。——【16】 主人公は、「萬人に愛される」といふ Zauber に取り憑かれてゐるのだから、先づ以て其の Zauber を取り除くのが正當の手續である。——【17】 helfen [助ける] が retten [救ふ] と違ふ事は一度註で詳しく說明して置いた。 der mir nicht geholfen hat = der mir nicht wohl bekam. (一向私の身の爲めにはならなかつた)——【18】 geben, daß..... と云ふのは一つの熟語のやうなものである。「.....することを得せしめる」「.....することを許す」の謂である。 たとへば Gott gebe mir, daß ich ihm begegne! (希くば神我に彼と邂逅することを得せしめ給へかし。) 等。——【19】 dafür = an dessen Statt (その代りに)——【20】 此處に此の一篇の中心思想が暗示されてゐる。Geben ist glückseliger als nehmen (與ふるは與へらるるよりも幸なり) といふ聖書の文句は、Lieben können ist glückseliger als geliebt werden. (愛し能ふは愛さるるよりも幸なり) と解釋して見れば益々意味が深刻になる。

Geben ist glückseliger als nehmen. 與ふるは受くるよりも幸なり (聖書)

38.

Weinend kniete er vor seinem alten Freunde und fühlte schon im Niedersinken, wie die Liebe zu diesem alten Manne in ihm brannte und nach vergessenen Worten und Gebärden rang. Der Pate aber nahm ihn zum Lager, da legte er ihn nieder und strich ihm die Haare aus der heißen Stirn.

„Es ist gut," flüsterte er ihm leise zu, „es ist gut, mein Kind, es wird alles gut werden."

譯。 Weinend kniete er vor seinem alten Freunde 彼は泣き乍ら彼の年老いた友達の前に膝まづいた、und そして wie die Liebe zu diesem alten Manne in ihm brannte 此の老人に對する愛が彼の[心の]中に燃え上がり und そして [wie die Liebe] nach[1] vergessenen Worten und Gebärden[2] rang.[1] 忘れられた言葉と身振りとを求めてもがいてゐるのを fühlte schon im Niedersinken, [彼が]身を投げた瞬間に既に感じた。 aber ところが Der Pate nahm ihn sanft, der kleine Mann,[3] auf seine Arme 教父は彼を靜かに——此の小男が——腕に抱き上げた und

そして trug ihn zum Lager,[4] 彼をば臥床へ運び、da legte er ihn nieder 其處に彼[教父]は彼[アウグストゥス]を寢かし und そして strich ihm[5] die Haare aus der heißen Stirn. 彼の髪をば熱せる額から撫で除けた。

„Es ist gut," よしよし、[と] flüsterte er ihm leise zu, 彼[教父]は彼[アウグストゥス]に靜かに囁いた、„es ist gut, mein Kind, よしよし、吾が子よ、es wird alles gut werden."[6] [今に]凡てが良くなるよ。

註。 【1】 ringen, rang, gerungen (もがく)——nach etwas ringen は「何物かを求めてもがく」事である。——老人に對する愛が、既に忘れられてしまつた言葉と科[シグサ]とを求めてもがくと云ふのは、彼は既に長い間他人から愛されるばかりで、自分の方から愛した事が無かつたから、今愛の氣持が急に起つても、その表現樣式がみつからないのである。——【2】 Gebärde は英語の所謂 gesture である。 Gebärde は、日本人と西洋人とでは大いに違つてゐる。 日本人は失敗すると頭を搔くが、西洋人が hinter den Ohren kratzen (耳のうしろを搔く) のは何か「じれつたい」困難に面した時である。と云つた樣に、大變違つてゐる。 けれども概して云ふと、日本人は Gebärde の貧弱な國民で、西洋人の方が多くの Gebärde を持つてゐる。 Wundt が檢べて發表してゐる所なぞに依ると、凡そ世界中で一番 Gebärde の發達してゐるのは Italien の Neapel [Napoli] で、ナポリ人は一口も口を利かないでも、單に Gebärden だけで色々な會話が出來る位ださうである。 一たいに西洋でも南歐の人種ほど Gebärdenspiel が激しい。——【3】 (第四卷 427 を見よ) 此の der kleine Mann の一句は一體どう云ふ風にして文章全體の一部分を成してゐるのだらう？ 文法的には一たい全體の文章とどんな關係に立つてゐるのだらう？——これは所謂 eingeschaltetes Prädikat (挿入された客語) なるもので、謂はば主語の繰り返しである。 大抵の場合は、代名詞を以て繰り返しつつ、同樣に關係代名詞の文がその次に續くのが例である。 或種の奇異な對照を試みる時に專ら用ひられる。 たとへば、「縱の物を横にするのも厭がる横着者が、飯だと聞くと急いで起ち上る」 Beim Ruf: das Essen ist fertig! steht der niederträchtige Taugenichts immer hastig auf, er, der sonst um nichts in der Welt einen Finger rühren will. (直譯。——食事が出來た、と云ふ呼聲に際しては、横着千萬な役立たず奴が大急ぎで起ち上る、何時もならばたとへ世界中の如何なる事柄のためにも指一本動かさうとしない彼が。)——現在の個所に關して云へば、der kleine Mann なる挿入句は、so klein er war (小柄であるにも拘らず) の意である。——【4】 das Lager 又は die Lagerstätte は、liegen (臥す) する場所の意で、das Bett (床) に對する

詩的な言葉である。臥床とでも云ふ可きであらう。少し調子の高尚な文では、Bett なぞと云ふ普通の言葉を使ふと、いやに事務的になつて滑稽になる。日本語でも、そんな現象はむしろドイツ語よりも甚だしい。時まさに秋冷の候、天高く馬太るの秋なぞと云つては大笑ひだ。馬が「太る」のに對しては何等の異議はない、むしろ非常に結構なことで、痩せて貰つては困るのであるが、天高くして馬がふとるのは甚だ困る。天高ければ馬は肥えなくてはいけない、太つたりふくれたりしてはならぬと云ふのが日本語の規則である。いやにやかましい樣だが、Wortgefühl (語感) と云ふものだけはどうにも致し方がない。同じ寢床が或る時は Bett たらざるべからず、或る時は Lager たらざる可からず、これがのみ込めて來ればドイツ語は卒業である。——【5】 ihm die Haare = feine Haare.——【6】 es ist gut! (よしよし、わかつたよ、の意。) mein Kind (子供をなだめる樣に云つたから思はず此の言葉が出たのである。) es wird alles gut werden. (es は文法上の主語、alles が意味上の主語、今に凡てがよくなる、安心しておいでの意)——此處を誰か涙ぐまずして讀む事が出來よう! 斯ういふ個所に於て讀者は、いはば作者の靈に觸れることが出來るのである。敎父は mein Kind! と云つてゐる。その言は蓋し無意味ではない。かくの如き立場に立てば世に憎む可き者は一人もない。如何となれば人間はみんな小供なのだから。

39.

Darüber fühlte Augustus sich von einer schweren Müdigkeit überfallen, als sei er im Augenblick um viele Jahre gealtert, er fiel in einen tiefen Schlaf, und der alte Mann ging still aus dem verlassenen Hause.

Augustus erwachte von einem wilden Lärm, der das hallende Haus erfüllte, und als er sich erhob und die nächste Tür öffnete, fand er den Saal und alle Räume voll von seinen ehemaligen Freunden, die zu dem Fest gekommen waren und das Haus leer gefunden hatten. Sie waren erbost und enttäuscht, und er ging ihnen entgegen, um sie alle wie sonst mit einem Lächeln und einem Scherzwort zurückzugewinnen; aber er fühlte plötzlich, daß diese Macht von ihm gewichen war. Kaum sahen sie ihn, so begannen sie alle zugleich auf ihn einzuschreien,

und als er hilflos lächelte und abwehrend die Hände ausstreckte, fielen sie wütend über ihn her.

譯。Darüber[1] 此れを聞くと Augustus アウグストゥスは als sei[4] er im Augenblick um[5] viele Jahre gealtert, 宛も彼は一瞬間に幾年も年老いたかの如く、fühlte sich[2] von einer schweren Müdigkeit überfallen,[3] 甚だしい疲勞に襲はれるのを感じた、[そして] er fiel in einen tiefen Schlaf, 彼は深い眠りに落ちた、und そして der alte Mann ging still aus dem verlassenen[6] Hause. 老人はその寂寞たる家から靜かに出て行つた。

Augustus erwachte von einem wilden Lärm, アウグストゥスは烈しい喧騷のために目覺めた、der das hallende[7] Haus erfüllte その喧騷は家中を鳴り響かし [家中を] 充たしてゐるのだつた、und そして als er sich erhob und die nächste Tür öffnete, 彼が起き上つて一番近い扉を開いた時、fand er den Saal und alle Räume voll von seinen ehemaligen Freunden, 彼は廣間及び總ての部屋々々に彼の以前の友人達が充滿して居るのを見出した、die その友人達は zu dem Fest gekommen waren 園遊會に來たのだつた und そして das Haus leer gefunden hatten. その家が空虛なのを發見したのであつた。Sie waren erbost[8] und enttäuscht[9] 彼等は憤慨し且つだまされた事に氣付いてゐた、und そして um sie alle wie sonst mit einem Lächeln und einem Scherzwort zurückzugewinnen[10] 彼等凡てをいつもの樣に微笑と冗談とで再び手なづけようとして er ging ihnen entgegen, 彼は彼等の方へ歩いて行つた。Aber ところが daß diese Macht von ihm gewichen[11] war さう云ふ力が彼から去つてしまつた事を er fühlte plötzlich, 彼は急に感じた。Kaum sahen[12] sie ihn, 彼等が彼 [アウグストゥス] を見るや否や、so begannen sie alle zugleich auf ihn einzuschreien,[13] [忽ち] 彼等は皆同時に彼 [アウグストゥス] に向つて罵りかけ始めた、und そして als er hilflos[14] lächelte und abwehrend[15] die Hände ausstreckte, 彼が途方に暮れて微笑んでそしてさゝへ止める樣に兩手を差し延ばした時、fielen sie wütend über ihn her.[16] 彼等は怒り猛つて彼に襲ひ掛つた。

註。【1】既に度々出て來た darüber. (その言葉を聞くと)——【2】 sich so

und so fühlen（自分を斯々に感ずる）といふ語法である。——【3】 überfallen, überfiel, überfallen（襲ふ）は非分離動詞。不定法と過去分詞とが偶然同形であるが、現在の個所の überfallen は勿論後者である。——【4】 als の次に接續法の定形が來れば、その als は als ob（宛も……なるが如くに）の意。sei は第一接續法だが、普通は第二式を用ひて wäre とするのが例である。（第三卷 217）——【5】 um は、現在の場合の如く、數量的規定に用ひることがある。er ist um zwei Jahre älter als ich（彼は私より二年だけ年上だ）等。「……だけ」「……分」とでも譯すれば大抵の場合には當てはまる。——【6】 verlassen は、元來は verlassen, verließ, verlassen（見捨てる）の過去分詞である、がそれが純形容詞化して、「淋しい」の意になつたものである。——【7】 das hallende Haus. hallen（反響する）といふのは、人聲のために起る結果であるが、それを斯ういふ風に形容詞的に用ひるのは、詩によくある語法である。——【8】 erbost＝böse, zornig.——【9】 täuschen［騙す］enttäuschen［幻滅に陷入れる］從つてその過去分詞は getäuscht［騙されてゐる］enttäuscht［騙されてゐたことがわかつた、がつかりした］——【10】 gewinnen（獲得する）はつまり das Herz gewinnen（心を獲得する）die Gunst gewinnen（寵愛を獲得する）ことで、zurückgewinnen は「とり戻す」「再びなづける」——【11】 einem weichen（或人を避ける）と von einem weichen（或人の許を去る、einen verlassen）とを混同する勿れ。——【12】 Kaum hatten sie ihn gesehen と過去完了にするのが普通である。玆ではその文法を無視してゐる。しかし別に間違ひといふ程ではない。——【13】 auf einen ein（或人をめがけて、或人を引つとらへて）といふ句には色々な動詞が附けられる。或人をめがけて打ち掛かる、＝auf einen einhauen 或人に向つて荐りに喋舌り掛ける、＝auf einen einreden 等。——【14】 ratlos（爲す所を知らず）と云つても好い。——【15】「まあまあ怒り給ふな」と、宥めながら手を突き出して堰きとめたわけである。——【16】 über einen her も、今述べた auf einen ein と同じ。auf einen los とも云ふ。斯ういふ風に、動詞の前綴（ein, her, los）は、その意味に從つて auf, über 等の前置詞と密接な關係を持つてゐるものである。

ein; her; los.
云々をめがけて「どしどし」「ぐんぐん」「かまはず」「やたらに」「まつしぐらに」「一目散に」

40.

„Du Gauner," schrie einer, „wo ist das Geld, das du mir schuldig bist?" Und ein anderer: „Und das Pferd, das ich dir geliehen habe?" Und eine hübsche, zornige Frau: „Alle Welt weiß meine Geheimnisse, die du ausgeplaudert hast. O wie ich dich hasse, du Scheusal!" Und ein hohläugiger junger Mensch schrie mit verzerrtem Gesicht: „Weißt du, was du aus mir gemacht hast, du Satan, du Jugendverderber?"

Und so ging es weiter, und jeder häufte Schmach und Schimpf auf ihn, und jeder hatte recht, und viele schlugen ihn, und als sie gingen und im Gehen die Spiegel zerschlugen und viele von den Kostbarkeiten mitnahmen, erhob sich Augustus vom Boden, geschlagen und verunehrt, und als er in sein Schlafzimmer trat und in den Spiegel blickte, um sich zu waschen, da schaute sein Gesicht ihm welk und häßlich entgegen, die roten Augen tränten, und von der Stirne tropfte Blut.

譯。„Du Gauner," 此の騙兒め、［と］schrie einer,[1] 一人が叫んだ、„wo ist das Geld, das[2] du mir schuldig bist?" 貴樣が俺から借りた金は何處にあるのか？ Und ein anderer: するともう一人が［叫んだ］、„Und das Pferd, das ich dir geliehen habe?" それから俺がお前に貸して置いた馬は［どうした］？ Und eine hübsche, zornige Frau: それから一人の綺麗な怒つた婦人が［叫んだ］。„Alle[3] Welt weiß meine Geheimnisse, 世間の人が皆私の秘密を知つてゐます、die du ausgeplaudert hast. 私の秘密をお前が喋り散らしたのです。O wie ich dich hasse, まあ、なんて憎らしい奴でせう、du Scheusal!" 此の化物め！ Und それから ein hohläugiger[4] junger Mensch schrie mit verzerrtem[5] Gesicht: 一人の眼の凹んだ若い人間が顏を引きつらせて叫んだ、„Weißt du, was du aus[6] mir gemacht hast, 貴樣は私をどんなものにしてしまつたかを知つてゐるか、du Satan, 此の惡魔め、du Jugendverderber?"[7] 此の少年たらしめ。

Und そして so ging es weiter,[8] さう云ふ風[な具合]に續いた、und そして jeder häufte Schmach und Schimpf[9] auf ihn, どの人も皆彼に向つて侮辱と罵詈とを浴せかけた、und そして jeder hatte recht, どの人も皆[言ふ事が]道理であつた、und そして viele schlugen ihn, 多くの人が彼を毆つた、und そして als sie gingen 彼等が行つてしまつた時に und そして [als sie] im Gehen die Spiegel zerschlugen und viele von den Kostbarkeiten[10] mitnahmen, [彼等が] 行きがけに鏡を破壞し、且つ貴重な品を澤山持ち去つた時に、erhob sich Augustus vom Boden, geschlagen und verunehrt,[11] 毆打され且つ屈辱を與へられた[のであつた]ところのアウグストゥスは床上から立上つた、und そして als er in sein Schlafzimmer trat und in den Spiegel blickte, um sich zu waschen, 彼が顏を洗ふために彼の寢室の中へ這入つて行つて、そして鏡の中を覗いた時、da その時 schaute sein Gesicht ihm[12] welk und häßlich entgegen, 彼の顏は萎びて且醜惡に睨んで彼を待ちかまへてゐた、[そして] die roten Augen tränten, 赤い兩眼は涙を流し、und そして von der Stirne[13] tropfte Blut. 額からは血が滴つてゐた。

註。【1】「一人」と「他」または「甲」「乙」と云つたやうな際には ein に强語尾を附けて einer, 時には (二人ゐる中の一方の時には) der eine とする。(第二卷 183)——【2】 借りがある、といふ意の schuldig sein は、まるで他動詞の樣に四格を採る。——【8】 all はよく ganz の代りに用ひる。 alle Welt は一種の熟語で、佛語の toute le monde (直譯——世界中、——憲——みんな、皆の者) の直譯である。 Alle wissen (みんなが知つてゐる) と云ふのと同じで、別に「世界」とは何の關係もない。——【4】 hohl, *a.* (凹んだ) と Auge, *n.* (眼) との複合形。——【5】 zerren は「引つ張る」事。 verzerrt は「引つぱり曲げた」卽ち、痙攣 (Krampf) のために引き釣つた、の意。——【6】 aus A B machen と云へば、A を化して B にする事である。同樣に A が B になる、と云ふ事を aus A wird B と云ふ。 Aus ihm wird nichts は、「あんな奴は碌なものに成りつこない」の意。 此の aus の用ひ方は特に注目すべきである。——【7】 此の最後の、若い青年に關する事實は、歐洲の社交界の暗黑面に關するかなり甚い事實を考へないとわからない。 die Inversion (性の錯倒) と、それから生ずる Knabenschänderei, Päderastie 等の事實は、現在の歐洲に於て最もはびこつてゐる事實である。(佛國の超現實派の巨匠と云はれてゐる Marcel Proust は、其の長篇の一部 Sodome et Gomorrhe (經都ソドムとゴモラ) と稱する三部を、此の變態現象の叙述に費

して、Charlus なる面白い人物を描いてゐる。) ここでは勿論極く曖昧に云つてあるに過ぎない。——【8】 weitergehen (英語の to go on) 此處では非人稱的熟語をなしてゐる。——【9】 Schmach und Schimpf (恥辱と罵詈) は所謂二語一想。——【10】 -keit, -heit の抽象名詞が複數になる時には大抵具體名詞化する。——【11】 Ehre, *f.* (名譽) から Unehre (不名譽) が出來、その次に verunehren (辱かしめる) が出來たのである。——【12】 entgegen- の前綴を有する動詞は必ず名詞の三格を要求する。 einem entgegenschauen＝或人を睨みつつ待ち構へてゐること。 einem entgegenlächeln＝微笑みつつ或人を待つてゐる。 einem entgegenrufen＝或人を迎へて呼ばはる。——【13】 Stirne は Stirn の別形。(die Tür 扉、を Türe と云ひ、gern (好んで) を gerne と云ふが如し。)

41.

„Das ist die Vergeltung," sagte er zu sich selber und wusch das Blut von seinem Gesicht, und kaum hatte er sich ein wenig besonnen, da drang von neuem Lärm ins Haus, und Menschen kamen die Treppen heraufgestürmt: Geldleiher, denen er sein Haus verpfändet hatte, und ein Gatte, dessen Frau er verführt hatte, und Väter, deren Söhne durch ihn verlockt ins Laster und Elend gekommen waren, und entlassene Diener und Mägde, Polizei und Advokaten, und eine Stunde später saß er gefesselt in einem Wagen und wurde ins Gefängnis geführt. Hinterher schrie das Volk und sang Spottlieder, und ein Gassenjunge warf durchs Fenster dem Davongeführten eine Handvoll Kot ins Gesicht.

Da war die Stadt voll von den Schandtaten dieses Menschen, den so viele gekannt und geliebt hatten. Kein Laster, dessen er nicht angeklagt war, und keines, das er verleugnete. Menschen, die er lange vergessen hatte, standen vor den Richtern und sagten Dinge aus, die er vor Jahren getan hatte; Diener, die er beschenkt und die ihn bestohlen, erzählten die Geheimnisse seiner Laster, und jedes Gesicht war voll von Abscheu und von

Haß, und keiner war da, der für ihn sprach, der ihn lobte, der ihn entschuldigte, der sich an Gutes von ihm erinnerte.

譯。 „Das ist die Vergeltung," 此れは罪の酬ひだ、[と] sagte er zu sich selber 彼は獨り言を言つた、und そして wusch das Blut von seinem Gesicht, 自分の顏から血を洗ひ落した、und そして kaum hatte er sich ein wenig besonnen, 彼が少しく我れに歸る遑もなく、da drang von neuem[1] Lärm ins Haus, [忽ち]又しても喧騷が家の中へ押し寄せて來た、und Menschen kamen die Treppen[2] heraufgestürmt:[3] そして人々が階段を狂奔して上つて來た、[卽ち] Geldleiher, denen[4] er sein Haus verpfändet hatte, [その人達に對して]彼が自分の家を抵當にして置いたところの金貸共、und 及び ein Gatte, dessen[5] Frau er verführt hatte, その人の妻を彼が誘惑したのであつたところの良人、und 及び Väter, deren[6] Söhne durch ihn verlockt[7] ins Laster[8] und Elend gekommen waren, その人達の息子達が彼に誘はれて罪惡と悲慘とに陷つてしまつたところの父親達、und 及び entlassene Diener und Mägde, 解雇された下男達や下女達、Polizei[9] und Advokaten, 警吏達や辯護士達、[等がやつて來たのであつた]、und そして eine Stunde später 一時間後には saß er gefesselt in einem Wagen 彼は縛られて馬車の中に坐してゐた、そして wurde ins Gefängnis geführt. 牢獄へ連れて行かれた。 Hinterher schrie das Volk 人々は後から附いて來て罵り騷ぎ und そして sang Spottlieder, 嘲弄の歌を歌つた、und そして ein Gassenjunge warf durchs Fenster dem Davongeführten eine Handvoll[10] Kot ins Gesicht. 一人の惡戲つ兒が、窓から其の引き去られる囚人の顏へ一掴みの泥を投げ付けた。

Da 扨て die Stadt 此の町は den so viele gekannt und geliebt hatten [その人間を]非常に多くの人々が知つて居り且つ愛して居たところの war voll[11] von den Schandtaten[12] dieses Menschen, 此の人間の醜行に滿ち滿ちてゐた。 Kein[13] Laster, dessen[14] er nicht angeklagt war, 彼が[その罪に依つて]告發されなかつたところの如何なる罪惡もなかつた、und そして keines,[15] das er verleugnete. 如何なる罪惡をも彼は否認しなかつた。 Menschen, die er lange vergessen hatte, 彼が長い間忘れてゐたところの人々が standen vor den Richtern 判官達の前に立つて und そして sagten Dinge[16] aus,[17] die er vor Jahren[18] getan hatte;

彼が數年以前に行つたところの事柄をば供述した。 Diener, die er beschenkt[19] und die ihn bestohlen,[19] 彼から贈り物を受け且つ彼の物を盜んだのであつたところの召使達は、erzählten die Geheimnisse seiner Laster, 彼の罪惡の秘密を物語つた、und そして jedes Gesicht war voll von Abscheu und von Haß, 凡ゆる[人の]顏は嫌惡と憎しみとに滿ちてゐた、und そして der für[20] ihn sprach, 彼を辯護したところの、der ihn lobte, 彼を讃めたところの、der ihn entschuldigte, 彼を赦したところの、der sich an Gutes von ihm erinnerte 彼から受けた良い仕打を思ひ出すところの、keiner war da, [人は]誰も其處に居なかつた。

註。【1】 von neuem Lärm (新たな騷音から) と讀んではいけない。 von neuem (新たに、復々、又候) といふ熟語。——【2】 die Treppen が四格なる事に關しては第四卷 324.——【3】 gestürmt の過去分詞形に關しては第四卷 372.——【4】 denen は關係代名詞複數三格 (第二卷 163, 164.——特に 165 に述べた事を想ひ出されたし。)——【5】 dessen については第二卷 166.——【6】 deren に就ても同上。——【7】 durch ihn verlockt. なる句に就ては第四卷 371.——【8】 das Laster (罪惡) と Sünde (罪業) とは、元來宗教上の術語であつて、Laster は習慣的になり、その人の性格の一部になつてしまつた惡癖を謂ひ (たとへば Trunksucht 酒癖) Sünde は過失、出來心で犯す罪を謂ふ。——【9】 Polizei, *f.* (警察) と云ふのは、つまり Polizisten (警吏たち) の事である。——【10】 eine Hand voll (第四卷 428) が eine Handvoll となつたのである。——【11】 voll von etwas (何々で滿ちたる) voll は二格支配の事もあれば、また斯う云ふ風に von を伴ふ事もある。——【12】 Tat, *f.* (行ひ、業) の複合名詞。 Wohltat (慈善) Missetat (犯行) Schandtat (醜行) 等。——【13】 Kein Laster きりで切つてある主文章だが、Es war kein Laster (如何なる罪惡もなかつた) と考へて見ればわかる。 また、少し難かしいが、Es war kein Laster, er war dessen angeklagt と云つても好い。(第四卷 404) また第四卷 396 に、此種の二重否定を說明した項がある。——【14】 anklagen は二格支配 (第四卷 429 の 1 を見よ。)——【15】 kein Laster を繰りかへす代りに、kein に中性語尾を附したのである。——【16】 Dinge は Ding, *n.* (事、事柄) の複數であるが、次に關係代名詞が來る時に、その先行詞 (第二卷 162) を强めんとして冠詞を省く事がある。——【17】 aussagen (供述する) は法廷の術語である。 名詞は Aussage, *f.* (供述)——【18】「數年」とか「數日」なぞと云ふ際には、生じつか viele Jahre, viele Tage なぞと云ふよりは、全然無冠詞、卽ち不定冠詞の複數を用ひた方が言葉に力が這入る。——

【19】 schenken と beschenken, stehlen と bestehlen はどう違ふか？ be- なる前綴は一たいどんな機能を持つてゐるか？ 次の用法に注意するとわかる。 er schenkt mir eine Uhr (彼は私に時計を贈る) er beschenkt mich mit einer Uhr (彼は私を時計で贈り惠む) er stiehlt mir eine Uhr (彼は私から時計を盜む) er bestiehlt mich um eine Uhr (彼は私を時計のために盜み欺く)——um は本當は「ために」の um ではないが、さうでも云はないと譯が出來ない。——

前綴 be- の一機能
(動詞を四格支配になす)

要するに各々同じ事を云ふのだが動詞の用ひ方が違つてゐる。 be- は、元來「間接補足語」(三格、または前置詞を伴ふ名詞) だつたものを「直接補足語」(四格) に變へる機能を持つてゐる。——beschenkt 及び bestohlen の次に hatte と hatten とが省かれてゐる。第四卷 374 を見よ)——【20】 für ihn (彼のために、彼に味方して) 第三卷 239 を見よ。 辯護者、庇護者の事を Fürsprecher と謂ふ。

42.

Er ließ alles geschehen, ließ sich in die Zelle und aus der Zelle vor die Richter und vor die Zeugen führen, er blickte verwundert und traurig aus kranken Augen in die vielen bösen, entrüsteten, gehässigen Gesichter, und in jedem sah er unter der Rinde von Haß und Entstellung einen heimlichen Liebreiz und Schein des Herzens glimmen. Alle diese hatten ihn einst geliebt, und er keinen von ihnen, nun tat er allen Abbitte und suchte bei jedem sich an etwas Gutes zu erinnern.

Am Ende wurde er in ein Gefängnis gesteckt, und niemand durfte zu ihm kommen, da sprach er in Fieberträumen mit seiner Mutter und mit seiner ersten Geliebten, mit dem Paten Binßwanger und mit der nordischen Dame vom Schiff, und wenn er erwachte und furchtbare Tage einsam und verloren saß, dann litt er alle Pein der Sehnsucht und Verlassenheit und schmachtete nach dem Anblick von Menschen, wie er nie nach irgendeinem Genusse oder nach irgendeinem Besitz geschmachtet hatte.

譯。 Er ließ alles geschehen, 彼は凡てを起るがまゝに委せて[凡てを甘受して]居た、[そして] ließ sich[1] in die Zelle und aus der Zelle vor die Richter und vor die Zeugen führen, 檻房の中へ、次で檻房から判官達の前へ或は證人達の前へと [甘んじて] 連れて行かれた、[そして] er 彼は verwundert und traurig 不思議さうに且つ悲しげに aus kranken Augen 病氣の眼で blickte in die vielen bösen, entrüsteten, gehässigen Gesichter, 澤山の惡意ある、激怒した、憎惡に滿ちた顏を見詰めた、und そして in jedem [Gesicht] どの顏の中にも unter der Rinde[2] von Haß und Entstellung[3] 憎惡と恐ろしい形相の外皮の下に einen heimlichen Liebreiz und Schein des Herzens glimmen[4] 人知れぬ魅力と眞情の反映とが隱見するのを sah er 彼は見た。 Alle diese hatten ihn einst geliebt 此等の人々は皆嘗て彼を愛して居たのだつた、und そして er [hatte] keinen von ihnen [geliebt], 彼は彼等の中の誰をも愛した事はないのだつた、nun tat er allen Abbitte[5] 今や彼は總ての人に對して謝罪をした und そして suchte bei[6] jedem sich an etwas Gutes zu erinnern. 凡ゆる人に就いて何か善事を思ひ出さうと努めた。

Am Ende wurde er in ein Gefängnis gesteckt, 終に彼は牢獄の中へ入れられた、und そして niemand durfte zu ihm kommen, 誰も彼の傍へ來る事は許されなかつた、da すると er 彼は in Fieberträumen 熱病の夢の中で mit seiner Mutter und mit seiner ersten Geliebten, 彼の母と又は彼の最初の戀人と、mit dem Paten Binßwanger und mit der nordischen Dame vom Schiff, 教父ビンスワンゲルと又は船に乘つてゐた北國の貴婦人と、sprach [彼は] 話をした、und そして wenn er erwachte und furchtbare Tage[7] einsam und verloren[8] saß, 彼が目覺めそして恐ろしい幾日かを淋しく且つ世塵を離れて坐して居た時に、dann さう云ふ時には litt[9] er alle Pein der Sehnsucht und Verlassenheit 彼は憬がれと寂寥との凡ゆる苦しみを惱んだ、und そして schmachtete nach dem Anblick von[10] Menschen, 人間を見る事を渴望した、wie[11] er nie[11] nach irgendeinem[12] Genusse oder nach irgendeinem Besitz geschmachtet hatte. [それは] 未だ嘗て彼が如何なる享樂に [向つて] も又如何なる所有に [向つて] も [それ程] 渴望し [憧れ] た事が無かつたほど。

註。 【1】 sich führen lassen. (自分を導かせる、即ち導かれる) 第三卷 251.

——【2】 Rinde, *f.* (外皮) は元來樹皮の事である。——【3】 Entstellung, *f.* 元來は、形狀が變はること、變り果てた形相、卽ち凄い顏附き、恐ろしい容貌。——【4】 自分に對して憤激しつつある人々の顏の裡に、人知れぬ魅力 (heimlichen Liebreiz) と眞情の反映 (Schein des Herzens) とが隱見するのを見るに至つたら、それはもう生きながらの佛である。——glimmen は、schimmern (微光を發する) よりももつと微かな見え方をするものに就て用ひる字で、たとへば灰の被さつた炭火は glimmen する、朽ちた木の燐光が glimmen する。あるかあらぬか、ほんのりと、ぼーッと見えるのが glimmen である。——【5】 Abbitte tun (謝罪する、わびる) は熟語。冠詞なきは熟語の徵。——【6】 bei jedem (彼等の各々に就て) bei の特殊な用法。——卽ち、「此の人間から何か恩を受けた事は無かつたか？」なぞと、惡を忘れて善を想つたのである。——【7】 副詞句 (第四卷 326)——【8】 verloren [失はれた、迷つた] はまづ einsam, verlassen (孤獨の、見捨てられた) と同じやうな意である。たとへば舵の緖絕えて絕海を漂ふ舟は、ein verlorenes Schiff であり、絕海の孤島は eine verlorene Insel である。einsam und verloren は二語一想。——【9】 leiden, litt, gelitten (惱む、具さに嘗める)——【10】 Anblick に相當する動詞は anblicken [他動詞] で、從つて次の von Menschen は補足語二格 (第四卷 414) に相當するものである事は旣に註で述べた。故に、人間「を」見る事に憧れた、の意。——【11】 wie……nie の語法に關しては第四卷 405 を見よ。——【12】 irgend einem とも書く。irgend に就ては第二卷 184.

43.

Und als er aus dem Gefängnisse kam, da war er krank und alt, und niemand kannte ihn mehr. Die Welt ging ihren Gang, man fuhr und ritt und promenierte in den Gassen, Früchte und Blumen, Spielzeug und Zeitungen wurden feilgeboten, nur an Augustus wandte sich niemand. Schöne Frauen, die er einst bei Musik und Champagner in seinen Armen gehalten hatte, fuhren in Equipagen an ihm vorbei, und hinter ihren Wagen schlug der Staub über Augustus zusammen.

譯。 Und そして als er aus dem Gefängnisse kam, 彼が牢獄から出て來た時、da 其の時は war er krank und alt, 彼は病氣で且つ年老

つてゐた、und そして niemand kannte ihn mehr. 最早誰も彼を知る者は無かつた。Die Welt ging[1] ihren[2] Gang,[1] 世間は己が歩みを歩んでゐた、man fuhr und ritt und promenierte in den Gassen, 人々は車に乘り或は馬に乘り或は歩いて往來の上を歩いてゐた、Früchte und Blumen, Spielzeug und Zeitungen wurden feilgeboten,[3] 果物や花や玩具や新聞などが賣られて居た、nur an Augustus wandte sich niemand. 只アウグストゥスに [だけ] は誰も注意する人が無かつた。Schöne Frauen, die er einst bei[4] Musik und Champagner[5] in seinen Armen gehalten hatte, 彼が嘗て音樂を聽き、三鞭酒を飲み乍ら彼の腕に抱いた事があつたところの美しい婦人達が、fuhren in Equipagen[6] an ihm vorbei, 馬車に乘つて彼の側を通り過ぎた、und そして hinter ihren Wagen schlug der Staub über Augustus zusammen.[7] 彼女達の車が去つた後で砂塵がアウグストゥス [の姿] をとち込めてしまつた。

註。 【1】 Gang gehen といふ一見妙な語法については第四卷 425「所謂 inneres Objekt」の項を見よ。——【2】 ihren といふ變な物主代名詞の用法については第四卷 417 Er trinkt seinen Kaffee の項を見よ。——【3】 feilbieten, bot feil, feilgeboten = verkaufen (賣る) zum Verkauf ausstellen (賣るために並べて置く)——【4】 此の bei は「同時」を意味する前置詞。つまり音響を聽き、三鞭酒を飲みながら、である。——【5】 シャムぱーニエルと發音する。——Equipage [エキぱージュ] 佛語。ドイツ語は Wagen.——【7】 über einen zusammenschlagen (或人をとち込めてしまふ、或人を呑み込んでしまふ) は非常に面白い言葉だが、少し詳しく分解して考へないと其の妙味がわからない。これは主として水の中へ飛び込んで水中に姿を沒する時の叙述に使はれる文句である。Er fällt kopfüber ins Wasser hinein, und die Wellen schlagen über ihn zusammen. (彼が眞逆樣に水の中へ飛び込む、すると浪が彼の上に打ち合はせる) 卽ち、人間が飛び込めば、まづ波が分れる、そして彼を水中へ吸ひ込む、その次には水の表面にどんな現象が起るか？ 分れた水が元の位置に歸らんとしてお互に鉢合せをし、其處に zusammenschlagen と云ふ現象が起るであらう。海戰の際砲彈の落下に伴ふ水烟、水柱 (Wasserfäule) もその類である。——その用法から一轉して、何でも或物が人の頭上に一下して彼を取り卷いてしまふ時に此の熟語を用ひる。Das Wetter (Gewitter) schlägt über sein Haupt (時には über seinem Haupte) zusammen = 彼の頭上に嵐が舞ひ降る。Die Schmach schlägt über ihn (又は ihm) zusammen. (汚辱が彼に一下する、卽ち、彼は一夜の內に世間に顏向けが出來なくなる) 等。

44.

Die furchtbare Leere und Einsamkeit aber, in welcher er mitten in seinem prächtigen Leben erstickt war, die hatte ihn ganz verlassen. Wenn er in ein Haustor trat, um sich für Augenblicke vor der Sonnenglut zu schützen, oder wenn er im Hof eines Hinterhauses um einen Schluck Wasser bat, dann wunderte er sich darüber, wie mürrisch und feindselig ihn die Menschen anhörten, dieselben, die ihm früher auf stolze und lieblose Worte dankbar und mit leuchtenden Augen geantwortet hatten. Ihn aber freute und ergriff und rührte jetzt der Anblick jedes Menschen, er liebte die Kinder, die er spielen und zur Schule gehen sah, und er liebte die alten Leute, die vor ihrem Häuschen auf der Bank saßen und die welken Hände an der Sonne wärmten. Wenn er einen jungen Burschen sah, der ein Mädchen mit sehnsüchtigen Blicken verfolgte, oder einen Arbeiter, der heimkehrend am Feierabend seine Kinder auf die Arme nahm, oder einen feinen, klugen Arzt, der still und eilig im Wagen dahinfuhr und an seine Kranken dachte, oder auch eine arme, schlecht gekleidete Dirne, die am Abend in der Vorstadt bei einer Laterne wartete und sogar ihm, dem Verstoßenen, ihre Liebe anbot, dann waren alle diese seine Brüder und Schwestern, und jeder trug die Erinnerung an eine geliebte Mutter und an eine bessere Herkunft oder das heimliche Zeichen einer schöneren und edleren Bestimmung an sich und jeder war ihm lieb und merkwürdig und gab ihm Anlaß zum Nachdenken, und keiner war schlechter, als er selbst sich fühlte.

譯。 aber[1] 併し乍ら Die furchtbare Leere und Einsamkeit かの恐ろしき空虛と寂寥、mitten[3] in seinem prächtigen Leben 彼の華やかな生活の眞只中に於て in welcher[2] 其の[空虛と寂寥の]中に er erstickt war, 彼が

[嘗て]息が詰まつて[苦しんで]ゐた[ところの其の空虛と寂寥]、die[4] 其は hatte ihn ganz verlassen, 全く彼[の心]から去つてゐた。 um sich für Augenblicke[5] vor der Sonnenglut zu schützen, 一寸の間太陽の熱光を避けるために Wenn er in ein Haustor trat, 彼が[何處かの]門の中へ這入つて行つた場合、oder 或は wenn er im Hof[6] eines Hinterhauses[6] um einen Schluck Wasser bat, 彼が[何處かの]後屋の中庭で水を一口乞うた場合、dann さう云ふ時に、wie mürrisch und feindselig[7] ihn die Menschen anhörten, 如何にも無愛想に且つ憎々しげに人々が彼の言葉を聞くのを、darüber 其の事を wunderte er sich 彼は驚くのであつた、dieselben,[8] die ihm früher auf stolze und lieblose Worte dankbar und mit leuchtenden Augen geantwortet hatten. [而も其の人々と云ふのは] 以前には彼の尊大な且つそつけない言葉に對して感謝し且つ眼を輝かして答へてゐたところの、其の同じ人々であつた。 Ihn aber freute und ergriff[9] und rührte jetzt der Anblick jedes Menschen, 併し乍ら今はどの人間を見ても[人間を見る事が]彼を喜ばせ、彼に深い感動を與へ、且つ彼をほろりとさせるのであつた、er liebte die Kinder, 彼は子供達が好きであつた、die er spielen und zur Schule gehen sah, [その]子供達が遊び又は學校へ行くのを彼は見て居た、und 又 er liebte die alten Leute, 彼は老人達が好きであつた、die vor ihrem Häuschen auf der Bank saßen [その]老人達は自分等の家の前で腰掛に坐し、und そして die welken Hände an der Sonne[10] wärmten. 萎びた手を日向で温めて居るのだつた。 Wenn er einen jungen Burschen sah, der ein Mädchen mit sehnsüchtigen Blicken verfolgte, 彼が、一人の少女をば憧憬的な眼付で見送つてゐるところの若い青年を見ると、oder 或は [wenn er] einen Arbeiter [sah], der heimkehrend am Feierabend[11] seine Kinder auf die Arme nahm, 仕事を畢へて、家への歸り途に自分の子供達をば腕に抱き上げてゐるところの勞働者を見ると、oder 或は [wenn er] einen feinen,[12] klugen Arzt [sah], der still und eilig im Wagen dahinfuhr und an seine Kranken dachte, 靜かに而も急いで馬車に乘つて走りつゝ自分の患者の事を考へてゐるところの、上品な敏腕な醫者を見ると、oder 或は am Abend in der Vorstadt[15] wartete 晩に場末の地で[通行人を]待つてゐて und そして sogar ihm, dem Verstoßenen, ihre Liebe anbot, [世間から]追放された人間なる彼に對してさへも愛を提

供する die ところの [wenn er] auch eine arme, schlecht[13] gekleidete Dirne[14] [sah], 哀れな、情ない着物を着た娼婦を見てすらも、dann さうすると waren alle diese[16] seine Brüder und Schwestern, 此等の人々は皆彼の兄弟であり姉妹であつた、und そして jeder どの人も an eine geliebte Mutter 親愛なる母親に對して und 又 an eine bessere Herkunft[18] ヨリ良き素性に對し oder 若しくは [an] das heimliche Zeichen einer schöneren und edleren Bestimmung ヨリ美しく且つヨリ高尚なる使命の匿れたる印(しるし)に對して die Erinnerung 聯想[せしむるもの]を trug[17] an sich[17] 身に帶びてゐた、und そして jeder どの人も war ihm lieb und merkwürdig 彼にとつて愛すべく且つ注意すべき[もの]であり、und そして gab ihm Anlaß[19] zum Nachdenken, 彼に深慮の機緣を與へるのであつた、und そして keiner war schlechter, als er selbst sich fühlte.[20] 誰も、彼が自ら自分を考へてゐるよりも、以上に惡い人は[一人も]なかつた。

註。【1】 aber の變な位置に關しては第四卷 306.——【2】 日本語の悲哀！この in welcher といふ句はどうしても餘り好い直譯は出來ない。(第二卷 165「日本語の悲哀」の項を見よ)——【3】 mitten in＝英語の amidst.——【4】 指示代名詞が殆んど冠詞と同形である事を忘れた人は第二卷 178 を復習せよ。——【5】 Augenblicke, *pl.* なる複數形を用ひたのは für einige Augenblicke (數瞬間) と云ふことで、別に單數の際と意味は變らない。——【6】 西洋の町では、大抵の建築はみんな四角に建て廻らされてあつて、中央には中庭 (Hof, Hofraum) がある。表の街道に面した方は大抵商店、事務所等になり、左右と裏の方とは住宅用である。そして Vorderseite (前側) の一個所には、車でも何でも通れる Haustor (門) があつて、そこの (上には勿論二階が渡つてゐる) 通路を Torweg と云ふ。其處と、中へ這入つた所の中庭とは、その建築の Hinterhaus (中庭に面した部分、即ち裏家) に住む多くの家族に共通の通路であるから、誰でも無斷で這入れるわけである。Haustor に入れば、それは表家の下の道だから、日蔭になるわけである。(Haustür 玄關の扉、と混同する可からず。Tor, *n.* は門で Tür, *f.* は扉。)——【7】 feindselig (敵意ある) glückselig (幸福な) 等の -selig は Seele, *f.* (魂、靈) から來たもの。——【8】 第二卷 181.——【9】 ergreifen (摑む) は、「悚然たらしめる」事。もつと強い言葉には packen といふのがある。——【10】 Sonne (太陽) はよく「日向」の意に用ひる。例の樽聖人 Diogenes が Alexander der Große から、「何でも汝の望みを叶へてやらうほどに、願ひの趣きを申せ」と

云はれて、Geh mir aus der Sonne! (日向を退いて呉れ) と云つたのは名高い逸話 (Anekdote) である。——【11】 feiern は休息すること。Feiertag は「休日」Feierabend は「休日の前の日」または「その日その日の仕事仕舞」である。ここは、むしろ後者の意であるが、うつかりすると「祭の夜」とか「祭の晩」とかいふ意味に取られがちであるから注意を要する。——【12】 fein は、人間に就て云ふ際には、上品な事である。ein feiner Herr (風采の上品な紳士)——【13】 schlecht は、往々にして「不充分に」「手落ち多く」の意がある。ich habe schlecht geschafen (私はよく眠れなかつた) 等。故に schlecht gekleidet は、碎な着物を着てゐない事。——【14】 Dirne 元來「娘つ兒」の意味だつたのが、近頃では非常にさげすんだ名稱になつて、所謂 Straßenmädchen [street girl] Prostituierte [prostitute] の意に用ひるやうになつた。西洋は今なほ街頭の私娼がはびこつてゐる。——【15】 Vorstadt. vor der Stadt liegen, 即ち、町の手前、又は町外れに在る、といふ意で、元來は近郊、市外町村の事を云ふのだが、東京で云へば、山の手の方を考へてはいけない、板橋や、北郊、隅田川の東の區域等を考へると Vorstadt (場末) の意がわかる。主として勞働者が住み、工場がある。故に貧民苦を稱して Vorstadtelend (場末苦) と謂ふ。——【16】 alle diese で切れる。alle diese seine u.s.w. ではない。——【17】 an sich tragen (身に備へる、帶びる)——それらの人間は、自から意識せると否とに拘らず、どこか矢張り人間らしい神聖な方面を身につけて持つてゐる、の意である。——【18】 Herkunft, *f.* (由來) と云ふのは、因緣、素性、お里、の事。即ち元を洗へばと云ふ意味である。——【19】 深慮の機緣を與へるとは、一般的考察の材料を提供する事。——【20】 彼は、己れ自身を反り見て、いやいや、彼等と雖も決して俺より以下の人間ではない、と思つた譯である。

45.

Augustus beschloß, durch die Welt zu wandern und einen Ort zu suchen, wo es ihm möglich wäre, den Menschen irgendwie zu nützen und ihnen seine Liebe zu zeigen. Er mußte sich daran gewöhnen, daß sein Anblick niemanden mehr froh machte; sein Gesicht war eingefallen, seine Kleider und Schuhe waren die eines Bettlers, auch seine Stimme und sein Gang hatten nichts mehr von dem was einst die Leute erfreut und bezau-

bert hatte. Die Kinder fürchteten ihn, weil sein struppiger grauer Bart lang herunterhing, die Wohlgekleideten scheuten seine Nähe, in der sie sich unwohl und beschmutzt fühlten und die Armen mißtrauten ihm als einem Fremden, der ihnen ihre paar Bissen wegschnappen wollte. So hatte er Mühe, den Menschen zu dienen. Aber er lernte und ließ sich nichts verdrießen. Er sah ein kleines Kind sich nach der Türklinke des Bäckerladens strecken und sie mit dem Händchen nicht erreichen. Dem konnte er helfen, und manchmal fand sich auch einer, der noch ärmer war als er selbst, ein Blinder oder Gelähmter, dem er ein wenig auf seinem Wege helfen und wohltun konnte. Und wo er das nicht konnte, da gab er doch freudig das wenige, was er hatte, einen hellen, gütigen Blick und einen brüderlichen Gruß, eine Gebärde des Verstehens und des Mitleidens. Er lernte es auf seinen Wegen den Leuten ansehen, was sie von ihm erwarteten, woran sie Freude haben würden: der eine an einem lauten, frischen Gruß, der andere an einem stillen Blick und wieder einer daran, daß man ihm auswich und ihn nicht störte. Er wunderte sich täglich, wieviel Elend es auf der Welt gäbe und wie vergnügt doch die Menschen sein können, und er fand es herrlich und begeisternd, immer wieder zu sehen, wie neben jedem Leid ein frohes Lachen, neben jedem Totengeläut ein Kindergesang, neben jeder Not und Gemeinheit eine Artigkeit, ein Witz, ein Trost, ein Lächeln zu finden war.

譯。 Augustus アウグストゥスは、durch die Welt zu wandern 世界中を遍歷し und そして den Menschen irgendwie zu nützen und ihnen seine Liebe zu zeigen 何等かの方法で人々のために役立ち、且つ彼等に彼の愛をば示す事が wo es ihm möglich wäre, 彼にとつて可能であらうところの einen Ort zu suchen, 或る場所を探し求めようと beschloß, [アウグストゥスは] 決心した。 Er mußte sich daran

gewöhnen, daß sein Anblick niemanden mehr froh machte; 最早誰も彼を見て喜ばないと云ふ事に彼は先づ慣れねばならなかつた。 sein Gesicht war eingefallen, 彼の顏は痩せ凹んでゐた、 seine Kleider und Schuhe waren die[1] eines Bettlers, 彼の着物や靴は乞食の其れ[の樣]であつた、 auch seine Stimme und sein Gang 彼の聲や彼の歩き振りも亦 hatten nichts mehr von dem,[2] was einst die Leute erfreut und bezaubert hatte. 嘗て人々を喜ばし且つ魅惑した[ことのある]ところのもの[の中]の何ものをも最早持つてはゐなかつた。 weil sein struppiger grauer Bart lang herunterhing, 彼の剛い白髮の髯が長くぶら下つてゐるので、 Die Kinder fürchteten[3] ihn, 子供達は彼を恐れた。 die Wohlgekleideten[4] scheuten seine Nähe, いゝ着物を着た人達は彼の身邊を忌み嫌つた、 in[5] der 彼の身邊では sie sich unwohl und beschmutzt[6] fühlten, 彼等は不愉快に且つ汚される樣に感じるのであつた、 und そして die Armen[7] 貧乏な人達は der ihnen ihre paar[10] Bissen wegschnappen wollte[11] 彼等の僅かばかりの食物を彼等から引つたくらうと欲してゐるところの als[8] einem Fremden,[9] 見知らぬ人として mißtrauten ihm [貧乏人達は] 彼を疑ふのであつた。 So それ故 den Menschen zu dienen, 人々[のため]に役立つには、 hatte er Mühe,[12] 彼は骨が折れた。 Aber 併し乍ら er lernte und ließ sich nichts verdrießen.[13] 彼は修行して而して何ものにも辟易しなくなつてゐた。 Er 彼は ein kleines Kind 一人の小さな子供が sich nach der Türklinke des Bäckerladens strecken パン屋の店の戸の把手の方へ身を延ばして und そして sie mit dem Händchen nicht erreichen 小さな手で其れに屆かないで居るのを sah [彼は] 見た。 Dem konnte er helfen, さういふ子供になら手助けをする事が出來た、 und そして manchmal 往々にして、 der noch ärmer war als er selbst, 彼自身よりももつと哀れであるところの fand[14] sich auch einer,[15] [或る] 人もあつた、 ein Blinder oder Gelähmter, [即ち] 盲目の人や身體の利かない人[があつた]、 dem er ein wenig auf seinem[16] Wege helfen und wohltun konnte. さう云ふ人に對して彼は少しばかり其の人の行く道を助けてやりそして親切を盡してやる事が出來た。 Und そして wo[17] er das nicht konnte, 彼がさう云ふ事が出來ない場合には、 da 其の時には、 er 彼は doch 矢張り、 das wenige, was er hatte, 彼が持つてゐるところの僅かのものを、[すなはち] einen hellen,[18]

gütigen Blick und einen brüderlichen Gruß, 朗らかな、好意ある一瞥と親しみある挨拶とを、[それから] eine Gebärde des Verstehens und des Mitleidens 理解と同情との身振りを、gab freudig [彼は] 喜んで與へるのであつた。 Er lernte es auf seinen Wegen den Leuten ansehen,[19] was sie von ihm erwarteten,[20] woran sie Freude haben würden: 彼は道を歩いてゐる時、人々を一瞥して彼等が彼から何を期待してゐるか、彼等が何を喜ぶであらうかを、看取し得る樣になつた。[卽ち] der eine[21] an einem lauten, frischen[22] Gruß, 或人は聲高な輕快な挨拶を [喜び]、der andere[21] an einem stillen Blick 或人は物言はぬ一瞥を [喜び] und そして wieder einer daran,[23] daß man ihm[24] auswich[25] und ihn nicht störte.[26] 又或人は、人が自分から避けて自分を邪魔しない [で與れる] 事を [喜ぶのであつた]。 wieviel Elend es auf der Welt gäbe[27] 如何に多くの不幸が世の中に存在するか und そして wie vergnügt doch die Menschen sein können, それにも拘らず人間は如何に滿足して居る事が出來るか [と云ふ事を見て]、Er wunderte sich täglich, 彼は毎日驚くのであつた、und そして neben jedem Leid ein frohes Lachen 凡ゆる惱みと同時に喜ばしき笑ひが、neben jedem Totengeläut ein Kindergesang, 凡ゆる葬禮の鐘の音と同時に子供の歌が、neben jeder Not und Gemeinheit eine Artigkeit, ein Witz, ein Trost, ein Lächeln 凡ゆる困窮醜行と同時に親切さや機智や慰さめや微笑が zu[29] finden war[30] 見出される wie と云ふ事を immer wieder zu sehen 幾度も見て er fand es[28] herrlich und begeisternd 彼はそれを絶妙で且つ感激的であると思つた。

註。【1】 die は指示代名詞 (第二卷 178) 卽ち diejenige といふに同じ (第二卷 180)——【2】 一格は das (指示代名詞の中性) 中性は、「事」「物」「點」「側」「方面」等の意を有す。——【3】 fürchteten sich vor ihm と云ふに同じ。——【4】 形容詞を複數にして、しかも大書してあれば必ず人間を意味す。(第二卷 198 の規則は非常に重要)——【5】 in der の代りに wo でもよし。(第二卷 174)——【6】 beschmutzen (汚す) の過去分詞。——【7】 註 4 を見よ。——【8】 als の次に einem Fremden が前の ihm と同じく三格になつてゐる現象に關しては第四卷 309 に詳しき說明あり。——【9】 第二卷 190 に述べた形容詞 fremd (外國の、他所の) の名詞化。——【10】 ein paar (僅かの) は、冠詞、物主代名詞、指示詞等、所謂定語尾屬 (第一卷 94 の眞中邊に說明あり) の次には ein を除いて用ひる。——【11】 wollte は所謂時稱の一致

(consecutio temporum) といふ現象のために過去になつてゐる故、譯語は現在形である。——【12】 Mühe haben (骨が折れる) は sich Mühe geben (努力する) とはちがふ。——【13】 sich (三格) nichts verdrießen lassen (直譯——自分に何も不快ならしめて置かない——卽ち、へこたれない) 斯くの如く、非人稱語法 es verdrießt mich [第三卷 268] を、例の sich lassen [第三卷 251] を用ひて受身的にしたのである。こんなのは熟語として覺えるのが早道である。——【14】 sich finden (自らを見出す) は sein (ある、有る) と同じである。——【15】 einer は jemand と略同意。——【16】 此の sein は「誰の」事を云ふのだらう? 微妙な語感を無視すれば Augustus 自身でも好ささうだが、さうではなく、助けられる方の人を指すのである。普通は in, bei を用ひる。(Ich helfe dir in deinem Studium＝おまへの勉强の手助けをしてやる) Weg は動作ではないから in, bei は用ひられない。(in seinem Gehen, bei seinem Gehen と云つても構はないが) それ故 auf を用ひたのである。——【17】 wo は「場合」の意。(falls と同じ——第四卷 298 の表中にあり)——【18】 此處の hell＝heiter (朗らかな、明るい)——【19】 或人を一瞥して直ちに或事を看取することを einem etwas ansehen と云ふ。——【20】 これも時稱の一致故、譯語が現在になる。——【21】 der eine……der andere (或者は……或者は……) は對立して用ひる。——【22】 frisch (新鮮な、水々しい、すがすがしい、——卽ち景氣の好い輕快な)——【23】 daran——an etwas Freude haben (或事に愉快を感ずる) といふ故、an といふ前置詞は一々繰返さなければならないのである。——【24】 此の ihm は離格 (第四卷 419)——【25】【26】 時稱の一致に注意せよ。——【27】 es gibt etwas (或物が存在する) 第三卷 272.——【28】 此の es は、下の immer wieder zu sehen の先行詞である。(第四卷 284)——【29】 zu finden は「見出すことが出來る」の意 (第四卷 291 を見よ。)——【30】 此の童話の作者 Hermann Hesse は、その處女作 Peter Camenzind といふ自叙傳的な物語に於て、彼が例の乞食僧の元祖聖フランシスの崇拜者であつた事を告白してゐる。故に此の個所は作者自身の憧れてゐる理想を實現させてゐるのである。

46.

Das Menschenleben schien ihm vorzüglich eingerichtet. Wenn er um eine Ecke bog und es kam ihm eine Horde Schulbuben entgegengesprungen, wie blitzte da Mut und Lebenslust und junge Schönheit aus allen Augen, und wenn sie ihn ein wenig hänselten und plagten, so war das nicht so schlimm; es war

sogar zu begreifen, er fand sich selber, wenn er sich in einem Schaufenster oder beim Trinken im Brunnen gespiegelt sah, recht welk und dürftig von Ansehen. Nein, für ihn konnte es sich nicht mehr darum handeln, den Leuten zu gefallen oder Macht auszuüben, davon hatte er genug gehabt. Für ihn war es jetzt schön und erbaulich, andere auf jenen Bahnen streben und sich fühlen zu sehen, die er einst gegangen war, und wie alle Menschen so eifrig und mit soviel Kraft und Stolz und Freude ihren Zielen nachgingen, das war ihm ein wunderbares Schauspiel.

譯。 Das Menschenleben 人生は vorzüglich eingerichtet 立派に攝理されてゐる[と] schien ihm 彼には思はれた。 Wenn er um eine Ecke[1] bog[2] und es[3] kam[4] ihm eine Horde Schulbuben entgegengesprungen, 彼が何處かの街角を曲つて而して學校生徒の一群が彼の方へ向つて走つて來た[樣な]時に、 wie blitzte da[5] Mut und Lebenslust und junge Schönheit aus allen Augen, 其の時に總ての少年達の眼からは如何に勇氣と生の欣びと若き美しさとが閃めき出たか、 und そして wenn[7] sie ihn ein wenig hänselten[6] und plagten, 假令彼等が彼をば少し愚弄したり苛めたりしたにしても、 so war das nicht so schlimm;[8] それは大した事ではなかつた。 wenn er sich in einem Schaufenster oder beim Trinken im Brunnen gespiegelt sah, 彼が陳列窓の中に、或は水を飲む時井戸の中に自分の姿が映つてゐるのを見た時に、 er fand sich selber recht welk und dürftig von[9] Ansehen 彼は自分自身の容貌が甚だ萎びて居り且つみすぼらしい事を見出すのであつた[それ故子供たちの惡戯は] es war sogar zu begreifen, 勿論理解し得べき事であつた。

Nein, 否、 den Leuten zu gefallen oder Macht auszuüben, 人々に氣に入られたり或は權力を振つたりする事は für ihn konnte[11] es sich nicht mehr darum handeln,[10] 彼にとつては最早[重要な]問題とはなり得なかつた、 davon[12] hatte er genug gehabt. さう云ふ事には彼は[既に]うんざりしてゐたのであつた。 die er einst gegangen war, [其の道を]彼が嘗て歩いて行つた事のある所の、 auf jenen Bahnen 其の道の上で andere[13]

streben und sich fühlen[14] zu sehen, 他の人達が努力し且つ得意を感じてゐるのを見る事は、 Für ihn war es jetzt schön und erbaulich, 彼にとつては今やそれは美しく且つ教訓多き事であつた、 und そして wie alle Menschen so eifrig und mit soviel Kraft und Stolz und Freude ihren Zielen[15] nachgingen, 總ての人間が斯くも熱心に而して斯く多くの力と自尊と喜びとを以て彼等の目的を追うて進んでゐる事、 das war ihm ein wunderbares Schauspiel.[16] それは彼にとつては驚嘆すべき光景であつた。

註。【1】 Straßenecke 町の角。——【2】 biegen, bog, gebogen (曲がる)——【3】 非人稱の無意主語——【4】 kam は、前に wenn があるから文の最後に行く可きであるが、副文章に於ては、その二度目の定形は後置しない事がある。それは殊に wenn の場合に多い現象である。——【5】 da は時間的な意味である。——【6】 hänseln は Hans (人名、第四卷 353 の表にあり) から來てゐる。 der dumme Hans (ハンスの馬鹿) とか云つて、あんまり好い意味にならない。日本の「太郎」に似てゐる。其處で人を揶揄ふ事を hänseln (ハンス扱ひにする) と云ふ譯である。——【7】 wenn auch (たとへ……にせよ) の auch は省く事がある。第四卷 299 で述べた通り。——【8】 これが本篇の最初の註で云つた Praeteritum mimikum (扮役の過去) である。「大した事はなかつた」「大事ない」「なに構やせぬ」の意。——【9】 von Ansehen = was sein Ansehen betraf (彼の外貌に關しては) im Ansehen (外貌の點では) かう云ふ von の使ひ方の例をあげると、——Ich kenne ihn nicht von Gesicht, sondern nur von Namen. 私は彼を顏では知らない、ただ名前だけで知つてゐる。 Sie ist schön von Gesicht. (彼女は、顏は美しい。)——【10】 es handelt sich um etwas (或事が問題である、重要である、關心の對象である) は非人稱熟語である。(第三卷 271)——【11】 此の können は、能力を指す können ではない。理屈の上の可能性を指すものである。 es war ihm unmöglich と考へて見ればわかる。——【12】 von etwas genug haben (或事について充分を持つ、滿足する、うんざりする)——【13】 第三卷 255.——【14】 sich fühlen (自分を感ずる) 得意の感を味ふ、意を得る、力を意識する、志を得る、fühlen, was einer eigentlich kann 自己の實力を發揮して見て、己れが元來如何なる力を持つてゐたかを改めて意識する。—— 近代ドイツ人の beliebter Ausdruck (好む言葉) である。——【15】 nachgehen 等、nach- の前綴を有する動詞は大抵三格の補足語を取る。——【16】 Schauspiel には「芝居」の意もあるが、英語の sight, spectacle (壯觀、奇觀、みもの、光景、場景) の意にも用ひる。 Bild (光景) と云つてもよからう。

斯くの如く人生を全然客觀視してしまへば、其處にはもはや憎む可き何物もないに違ひない。すべては一つの芝居の筋の如きものだ。惡人も善人も、富めるも貧しきも、爭へるも親しめるも、彼等はすべて神から命ぜられた自分の役を忠實に演じてゐるにすぎないのだ。——我々もその喜劇役者中の一人の端役である。そして同時に觀衆にもなり切る事は出來ないものか？ これが作者 Hesse の憧憬的なる問ひである。

47.

Indessen wurde es Winter und wieder Sommer, Augustus lag lange Zeit in einem Armenspital krank, und hier genoß er still und dankbar das Glück, arme, niedergeworfene Menschen mit hundert zähen Kräften und Wünschen am Leben hängen und den Tod überwinden zu sehen. Herrlich war es, in den Zügen der Schwerkranken die Geduld und in den Augen der Genesenden die helle Lebenslust gedeihen zu sehen, und schön waren auch die stillen, würdigen Gesichter der Gestorbenen, und schöner als dies alles war die Liebe und Geduld der hübschen, reinlichen Pflegerinnen. Aber auch diese Zeit ging zu Ende, der Herbstwind blies, und Augustus wanderte weiter, dem Winter entgegen, und eine seltsame Ungeduld ergriff ihn, als er sah, wie unendlich langsam er vorwärts kam, da er doch noch überall hinkommen und noch so vielen, vielen Menschen in die Augen sehen wollte. Sein Haar war grau geworden, und seine Augen lächelten blöde hinter roten, kranken Lidern, und allmählich war auch sein Gedächtnis trübe geworden, so daß ihm schien, er habe die Welt niemals anders gesehen als heute; aber er war zufrieden und fand die Welt durchaus herrlich und liebenswert.

譯。 Indessen wurde es Winter und wieder Sommer, さう斯うする中に冬となり又夏となつた、Augustus lag lange Zeit in einem Armenspital[1]

krank, アウグストゥスは長い間病氣で施療院の中で［病床に］横はつてゐた、und そして arme, niedergeworfene Menschen mit hundert zähen Kräften und Wünschen am Leben hängen und den Tod überwinden zu sehen 哀れな、打ち倒された人間達が數限りない强靱な力と希望とを以て生に執着し且つ死に打ち勝つのを見る［と云ふ］das Glück[2] 幸運をば hier genoß er still und dankbar 此處で彼は靜かに且つ感謝を以て味はふのであつた。in den Zügen[3] der Schwerkranken die Geduld 重病者の相貌の中に忍耐を、und 而して in den Augen der Genesenden[4] die helle Lebenslust gedeihen 復しつゝある人の眼の中に明朗な人生の喜びが咲き出るのを zu sehen, 見るのは Herrlich war es, 愉快［な事］であつた、und そして schön[5] waren auch die stillen, würdigen Gesichter der Gestorbenen,[6] 死んだ人達の靜寂な、品位ある顏も亦美しかつた、und そして schöner als dies[7] alles war die Liebe und Geduld der hübschen, reinlichen Pflegerinnen.[8] 美しい、純潔な看護婦達の愛と辛抱とは是等凡てよりも美しかつた。Aber けれども auch diese Zeit ging zu Ende, 此う云ふ時も亦過ぎ去つてしまつた、der Herbstwind blies, 秋風が吹いた、und そして Augustus wanderte weiter, dem Winter entgegen,[9] アウグストゥスは冬に向つて更に旅を續けた、und そして da[11] er doch[11] noch überall hinkommen und noch so vielen, vielen Menschen in die Augen sehen[12] wollte 彼は是から凡ゆる所へ行つてそして更に、甚だ多くの、多くの人間の眼を見る事を欲してゐたのであるのに、wie unendlich langsam er vorwärts kam,[10] 如何に甚だしく緩漫に彼の［業］が捗るかを、als er sah, 彼が氣付いた時に、eine seltsame Ungeduld ergriff ihn, 或る不思議な焦燥が彼［の心］を捉へた。Sein Haar war grau geworden, 彼の髮は白髮になつてゐた、und そして seine Augen lächelten blöde[13] hinter roten, kranken Lidern,[14] 彼の眼は、赤い、病んだ眼瞼の後で愚鈍に微笑してゐた、und そして allmählich war auch sein Gedächtnis trübe geworden, 彼の記憶も亦次第に朦朧となつてゐた、so daß[15] 其れ故に er habe[17] die Welt niemals anders[18] gesehen als heute[19] 彼は未だ嘗て現在と異つた樣に世の中を見た事はない［と］ ihm schien[16] 彼には思はれた。aber けれども er war zufrieden 彼は滿足して居た、und そして［er］ fand die Welt durchaus[20] herrlich und liebenswert. 彼は此の世の中を全く立派で且つ愛すべきものであると考へるのであつた。

註。【1】 Spital は Hospital を省略した形で、專ら施療院の意に用ひる。——【2】 das Glück は、それより以下の長い zu を伴ふ不定法の文を附加語とする先行詞で、第四卷 285 に說明した語法に相當する。——【3】 Zug は、その複數 Züge を顏相の意に用ひる。 Zug は ziehen (引く、卽ち線を引く) から來て居り、一線一劃の事を云ふので、その綜合が Züge である。——【4】 der Genesende に關しては第二卷 194 を見よ。——【5】 schön は、少し前の Herrlich と同じく、主語を定形の後に置いて、形容詞を先置したものである。——【6】 第二卷 193 を見よ。——【7】 dieses を dies と略するのが普通である。——【8】 Pflegerin = Krankenpflegerin, Krankenwärterin. 大戰中は單に Schwestern とも云つて居た。 pflegen (世話する) から作つたもの。——【9】 三格支配の後置詞 (第三卷 233)——【10】 vorwärts kommen (前へ進む) = von der Stelle kommen (歩みが捗取る)——道程のことばかりでなく、同時に彼の努力をも指してゐる。——【11】 da……doch (……云々であるのに) は熟語的な接續詞。——【12】 多くの人間の眼を見る、と云ふのは、多くの人間に親しく面して其の喜怒哀樂の實狀を見聞する事を云つたので、作者は、その意味の深長にして重大なるに拘らず、努めて天眞爛漫な、何氣なくすつとした言葉を用ひようとして努力してゐるのが見える。こんなのが反つて初學者には骨が折れる。——【13】 blöde (愚鈍に)——彼の眼からは凡ての小ざかしさ、鋭どさが消えてゐる。末梢神經はもはや手術して取り除けられたかの如くである。おお、その愚鈍さの中に如何に貴き叡智が輝ける事よ！ 大賢は愚に似たり。——【14】 Lied, *n.* = Augenlid, *n.* (まぶた)——【15】 so daß を「そのために」と譯するのは、第四卷 300 の所謂後續的なるによる。——【16】 es が省かれてゐる。 入れるとすると、so daß es ihm schien——【17】 hat に對する第一式接續法。 これが所謂間接話法である。(第三卷 210)——【18】 anders = auf andere Weise (他の方法で、別樣に、ちがつて、これ以外の樣子に)——【19】 heute = jetzt, in diesem Augenblick (只今、此の瞬間)——卽ち heute は「こんにち」であつて「けふ」の意ではない。——【20】 durchaus = durch und durch, in allem und jedem, in jeder Beziehung (徹頭徹尾、凡てに於て、凡ゆる點から見て)

48.

So kam er mit dem Einbruch des Winters in eine Stadt; der Schnee trieb durch die dunkeln Straßen, und ein paar späte Gassenbuben warfen dem Wanderer Schneeballen nach, sonst aber war alles schon abendlich still. Augustus war sehr müde,

da kam er in eine schmale Gasse, die schien ihm wohlbekannt, und wieder in eine, und da stand seiner Mutter Haus und das Haus des Paten Binßwanger, klein und alt im kalten Schneetreiben, und beim Paten war ein Fenster hell, das schimmerte rot und friedlich durch die Winternacht.

Augustus ging hinein und pochte an die Stubentür, und der kleine alte Mann kam ihm entgegen und führte ihn schweigend in seine Stube, da war es warm und still und ein kleines, helles Feuer brannte im Kamin.

譯。 So kam er mit dem Einbruch[1] des Winters in eine Stadt; 斯くして彼は冬の始めに或る町の中へとやつて來た。 der Schnee trieb[2] durch die dunkeln Straßen, 雪は暗い街路の中を[風に]吹き捲られてゐた、 und そして ein paar späte[3] Gassenbuben warfen dem Wanderer[4] Schneeballen nach, 晩く迄遊んでゐる二三人の街童達が此の旅人の方へ雪つぶてを投げつけた、 aber 併し sonst その他は war alles schon abendlich still. 凡てが既に晩らしく靜かであつた。 Augustus war sehr müde アウグストゥスは甚だ疲勞してゐた、 da と其の時 kam er in eine schmale Gasse, 彼は或る狹い横町の中へやつて來た、 die その横町は schien ihm wohl bekannt, 見慣れたものゝ樣に彼には思はれた、 und そして [er kam] wieder in eine [Gasse], 彼は更に亦一つの横町の中へ入つた、 und すると da stand seiner Mutter Haus[5] und das Haus des Paten Binßwanger, 其處には彼の母の家と、それから敎父ビンスヴァンゲルの家が立つてゐた、 klein und alt im kalten Schneetreiben,[6] [其等の家は] 小さく且つ古く寒い吹雪の中に [立つてゐた]、 und そして beim Paten 敎父の家では war ein Fenster hell, 窓が一つ明るかつた、 das その窓は schimmerte rot und friedlich durch die Winternacht. 冬の夜[の暗]を貫いて赤く且つ平和に輝いて居た。

Augustus[8] ging hinein アウグストゥスは這入つて行つた und そして pochte[7] an die Stubentür, 部屋の戸を叩いた、 und すると der kleine alte Mann kam ihm entgegen その小さな老人は彼の方へやつて來た und そして führte ihn schweigend in seine Stube, 默つて彼を自分の部

屋の中へ案内した、da war es warm und still 其處は溫かで靜かであつた und そして ein kleines, helles Feuer brannte im Kamin.[8] 小さな明るい火が煖爐の中で燃えてゐた。

註。【1】 der Winter bricht ein (冬が初まる) Einbruch=Anfang.——【2】 treiben は、雪について云ふ時には、風に吹き捲られて散り交ふことである。——【3】 spät (晩き) は、人間や物體にも形容詞として附けることがある。 späte Läden (夜晩く開いてゐる店) später Gast (夜晩く居殘つてゐる、もしくはやつて來る客)——späte Gassenbuben は、他の子供達がもうとつくに家へ歸つてしまつてゐるのに、まだ表で遊び殘つてゐる街の兒である。——【4】 Augustus の事を云つたのである。 こんなにして、人の名の代りに普通名詞を用ひるのは、Periphrase (換語) の一種である。——【5】 seiner Mutter Haus に就ては第一卷 71 を見よ。——【6】 第四卷 282 の規則によつて、Der Schnee treibt (雪が吹き捲る) を名詞化したのである。(故に「吹雪」)——性は、第一卷 48 の規則に從つて、Treiben が中性故全體が中性になる。——【7】 pochen=klopfen. poch! poch! と云ふ音響から來た Onomatopöie (擬音)——【8】 Augustus の毒藥を飲んだ筈の Binßwanger 氏がまだ生きてゐる。これがつまりお噺 (Märchen) で、神秘的存在 (mystisches Wesen) として扱つてあるのである。 だから、嘘みたいな事を märchenhaft と云ひ、馬鹿々々しい! といふ事を Das ist ja ein Kindermärchen! といふ。

擬音詞 [Onomatopöie]

49.

„Bist du hungrig?" fragte der Pate. Aber Augustus war nicht hungrig, er lächelte nur und schüttelte den Kopf.

„Aber müde wirst du sein?" fragte der Pate wieder, und er breitete sein altes Fell auf dem Boden aus, und da kauerten die beiden alten Leute nebeneinander und sahen ins Feuer.

„Du hast einen weiten Weg gehabt," sagte der Pate.

„Oh, es war sehr schön, ich bin nur ein wenig müde geworden. Darf ich bei dir schlafen? Dann will ich morgen weitergehen."

„Ja, das kannst du. Und willst du nicht auch die Engel wieder tanzen sehen?"

„Die Engel? O ja, das will ich wohl, wenn ich einmal wieder ein Kind sein werde."

„Wir haben uns lange nicht mehr gesehen," fing der Pate wieder an. „Du bist so hübsch geworden, deine Augen sind wieder so gut und sanft wie in der alten Zeit, wo deine Mutter noch am Leben war. Es war freundlich von dir, mich zu besuchen."

譯。 „Bist du hungrig?" お前はお腹が空いてゐるか、[と] fragte der Pate. 教父は訊ねた。 Aber 併し Augustus war nicht hungrig, アウグストゥスは空腹ではなかつた、 er lächelte nur und schüttelte den Kopf. 彼は唯微笑んでそして頭を振つた。

„Aber müde wirst[2] du sein[1]?" でもお前は疲れて居るだらうねえ? [と] fragte der Pate wieder, 教父は再び訊ねた、 und そして er breitete sein altes[3] Fell auf dem Boden aus, 彼は彼のおなじみの毛皮を床の上に擴げた、 und そして da 其處に kauerten die beiden alten Leute nebeneinander, [此の] 二人の老人は並んで蹲まつた、 und そして sahen ins Feuer. 火の中を眺めた。

„Du hast einen weiten Weg gehabt,"[4] お前は長い道を歩いて來たね、[と] sagte der Pate. 教父は言つた。

„Oh,[5] es war sehr schön, なあに、非常に愉快でした、 ich bin nur ein wenig müde geworden. 私は唯ほんの僅かばかり疲れたのです。 Darf ich bei dir schlafen? 私は貴方の所で眠つても宜しいでせうか? Dann will ich morgen weitergehen." さうしたら私は明日更に旅を續けようと思ふのです。

„Ja, das kannst du. さうだ、さうするが好い。 Und そして willst du nicht auch die Engel wieder tanzen sehen?" お前は亦天使達が踊るのを再び見たいとは思はないか? „Die Engel? 天使達ですつて? O ja, 勿論です、 wenn ich einmal wieder ein Kind sein werde 若し私が

もう一度子供になれるなら、das will ich wohl 勿論私はそれ[天使を見る事]を欲します。

„Wir haben uns lange nicht mehr gesehen," 私達は長い間ちつとも會はなかつたね、[と] fing der Pate wieder an. 教父は再び[語り]始めた。„Du bist so hübsch[6] geworden, お前は非常に綺麗になつた、deine Augen お前の眼は wo deine Mutter noch am Leben war お前の母親が未だ生きて居たところの wie in der alten Zeit, 昔時の樣に sind wieder so gut und sanft [geworden] 再び大變善良で且つ穩和になつた。 Es war freundlich von[7] dir, mich zu besuchen."[8] お前が私を訪ねて呉れたのは親切な事であつた。

註。【1】 Aber du wirst müde sein? といふ代り。——müde が先置されると du wirst が wirst du になる。(第一卷 74)——【2】 werden と不定法は、未來を意味する外、「だらう」といふ想像の意に用ひる事もある。——【3】 alt=altbekannt (おなじみの)——【4】 haben (持つ) といふ字の volkstümlich (平俗な) な自由な使用に注目せよ。——【5】 o! と oh! とはちがふ。(第四卷 376 の表の初めを見よ)——【6】 hübsch [pretty] と schön [beautiful] とは違ふ。——【7】 此の von dir といふ語法については既に度々述べた。——【8】 これが愈々大詰 (Schlußszene) である、筋 (Handlung) は辿り着く可き所へ辿りついた。Augustus は不滿と幻滅と焦慮との人生を通過して、遂に「美しき魂」(schöne Seele) を實現した。淨化 (Katharsis) 聖化 (Verklärung) の心境に入つた。Der Dichter hat nur noch sein letztes Wort zu sagen 作者はもはや結論さへ下せば好いのである。——勿論、論文の結論のやうな結論でなくつても好いが。

大詰 [Schlußszene]

50.

Der Wanderer in seinen zerrissenen Kleidern saß zusammengesunken neben seinem Freunde. Er war noch nie so müde gewesen, und die schöne Wärme und der Feuerschein machte ihn verwirrt, so daß er zwischen heute und damals nicht mehr deutlich unterscheiden konnte.

譯。 Der Wanderer in[1] seinen zerrissenen Kleidern [此の] ぼろぼろの着物を着た旅人は neben seinem Freunde 彼の友の傍に saß zusammengesunken[2] がくりと崩折れて坐つた。 Er war noch nie so müde gewesen, 彼は未だ嘗て此んなに疲れた事はなかつた、 und そして die schöne Wärme und der Feuerschein machte ihn verwirrt, 氣持の好い溫かさと [煖爐の] 火の光とが彼 [の心] を昏迷せしめた、so daß 其故に er 彼は zwischen heute und damals 現在と當時 [昔] との間に nicht mehr deutlich unterscheiden konnte.[3] 最早明確に區別をする事が出來なくなつた。

註。【1】 illustrierendes Attribut (註解的添辭) に用ひる前置詞には mit が一番多い。 Das Gebirge mit seinen stummen Schrecknissen (山嶽とその無言の恐怖、——沈默裡に多くの危險を藏する山嶽) Der Philosoph mit seinen Methoden und Schlüssen (方法だの結論だののやかましい哲學者) 等。——けれども in その他の前置詞を用ひると、具體的描寫の效果が得られる。 Der Arbeiter in seiner Fabrik (工場にある職工) Der Priester in seinem Ornat (式服の僧) Der Kutscher auf seinem Bock (馭者臺上の馭者。——いづれにしても、illustrierendes Attribut の特徵は、勿主代名詞を必ず使用する所にある。——in は着物と人との關係を指す普通の云ひ方である。 日本語では人が着物の中に居るなぞとは云ひもしなければ考へもしないが。——【2】 zusammen- なる前綴の持つてゐる特殊な機能 (Funktion) に注目して貰ひたい。 元來は「一緒に」の意であるが、斯う云ふ場合は mit allen Gliedern zusammen (四肢五體偕に) の意である。即ち、或る動作が、身體總體を以て行はれる事を意味する。 zusammenbrechen (がくりと立ち崩れる) zusammenfahren (はつとする) zusammenbrechen (はつとする、縮み上る) zusammenschaudern (身の毛がよだつ)——また物體に就て云ふ際には、物體が、總體的に變化する際云ふ。 zusammenrühren (攪拌する、上を下へと掻きまぜる) zusammenschrumpfen (收縮する) zusammenschmelzen (融けて無くなる) zusammenziehen (凝縮する)——故に zusammengesunken は、力なく其の場にだらりと腰を下ろして、の意。「がくりと」「だらりと」「ぺそつとして」「やれやれと云つた樣に」「力が拔けて」「がくりと頭垂れて」——【3】 何十年か前にゐた事のある場所に辿りついて、おまけに「とろん」としたひだるい甘い疲勞を感じた樣な瞬間には、ある種の錯覺が起る。作者はそれを巧く利用してゐる。次の一節はこれを念頭に置かないとわからない。次の個所は、全篇の結論であると同時に、比類のない傑作である。其處には深き理念の飛躍がある。

51.

„Pate Binßwanger," sagte er, „ich bin wieder unartig gewesen und die Mutter hat daheim geweint. Du mußt mit ihr reden und ihr sagen, daß ich wieder gut sein will. Willst du?"

„Ich will," sagte der Pate, „sei nur ruhig, sie hat dich ja lieb.

譯。 „Pate Binßwanger," ビンスヴァンゲル小父さん、[と] sagte er, 彼は言つた、 „ich bin wieder unartig[1] gewesen 僕は又お惡戲をしました und そして die Mutter hat daheim geweint. お母さんが家で泣いたんです。 Du mußt mit ihr reden [だから]貴方がお母さんと話して下さい und そして [du mußt] ihr sagen, daß ich wieder gut sein will. 僕はもう是からはおとなしくする積りだと[云ふ事を]お母さんに言つて下さい。 Willst du?" ねえ。

„Ich will," あゝさうしてやるよ、[と] sagte der Pate, 教父は言つた、„sei nur ruhig, 安心してゐなさい、 sie hat dich ja lieb."[2] お母さんはお前を本當に愛してゐるのだよ。

註。 【1】 unartig sein. (いけない、おいたをする)「おとな」な事を artig と云ふ。 sein と狀態的に云つてあるが、實は何か惡い事をしたことを unartig gewesen sein といふのである。 此のあたり一帶の、極く子供らしい言葉遣ひに注目する必要がある。——【2】 此の短かい對話が作者が言はんとする最後の詞であり、謂はば全篇の落ちである。——Augustus にとつては、或種の光學的錯覺 (optische Täuschung) の如きものに依つて、今までの長い長い人生が、まるで二三十分間に起つた一寸した挿話の如く思はれたのである。その二三十分間の間に彼は何をしたか？ はつきりとは覺えてゐないが、何かかう自分でも不愉快な事をして來たことだけは感じでわかつた。それ故「僕はまた一寸いけない事をしちやつて、おつ母さんを泣かせちやつた、おちさん、おつ母さんの所へ行つて謝まつておくれよ」と云つたのである。 daß ich wieder gut sein will (僕はもうお利口になるからつて)——斯う云ふ風にお利口になるためには人間は一生を費さなくてはならないのである。けれども神の眼から見れば二三十分と五六十年との間にいくばくの差があらう！ それは丁度我々人間の感じを以てすれば一秒の百萬分の一も十分の一も大して變りがない樣なものである。 Augustus の氣持は決して錯覺ではない。二三十分と五六十年位の取り違へ位はままある事だ。彼は本當に一寸おいたをして來たにすぎない。大したおいたではない。人間と云ふ子供は何かさう云ふおいたをしたがるものだ。そんな事を眞面目に取り上げる必要はない。それに、もうおいたはしないと云つてゐるし、第一もう人生といふ晝間の騷ぎに疲れてしまつて、今はもう寢るより外に樂しみがないのだから、實に全く罪のないものである。——と云つたやうに、作者はその筆の飛躍を以て、神の如き立場に立つて人間の一生に結論を下してゐる。此處の妙味がわかつて初めて此の一篇の深き構造が見通せるのである。 此の一見馬鹿馬鹿しい樣な、子供の如き對話、そして同時にその言葉を口にするのが白髮の老人であつて、その言葉の中には彼の數十年の人生が意味されてゐる事を想ひ給へ。誰か涙なしに讀み得ようか？ それは決して同情と嘆きの涙ではない。 斯うした作者の物の觀方に對する共鳴の喜びと、感激の涙である。

52.

Nun war das Feuer kleingebrannt, und Augustus starrte mit denselben großen schläfrigen Augen in die schwache Röte, wie einstmals in seiner früheren Kindheit, und der Pate nahm seinen Kopf auf den Schoß, eine feine, frohe Musik klang zart und selig durch die finstere Stube, und tausend kleine, strahlende Geister kamen geschwebt und kreisten frohmütig in kunstvollen Verschlingungen umeinander und in Paaren durch die Luft. Und Augustus schaute und lauschte und tat alle seine zarten Kindersinne weit dem wiedergefundenen Paradiese auf.

Einmal war ihm, als habe ihn seine Mutter gerufen; aber er war zu müde, und der Pate hatte ihm ja versprochen, mit ihr zu reden. Und als er eingeschlafen war, legte ihm der Pate die Hände zusammen und lauschte an seinem stillgewordenen Herzen, bis es in der Stube völlig Nacht geworden war.

譯。 Nun war das Feuer kleingebrannt,[1] 今や火は燃え切つて小さくなつて居た、 und そして Augustus アウグストゥスは wie einstmals in seiner früheren Kindheit, 嘗て彼の幼い子供の時代に於て［さうした］様に mit denselben großen schläfrigen Augen その同じ大きな睡たげな眼で starrte in die schwache Röte, その幽かな赤み［赤い火］の中を凝視した、 und そして der Pate nahm seinen Kopf auf den Schoß,[2] 教父は彼［アウグストゥス］の頭をば膝の上に置いた、［すると］ eine feine, frohe Musik 美妙な、陽氣な音樂が klang zart und selig durch die finstere Stube, 暗い部屋を貫いて優しく且つ喜ばしく鳴り響いた、 und そして tausend kleine strahlende Geister kamen geschwebt[3] 幾百の小さな、輝やく靈物がふわりふわりと宙に浮んで［飛んで］來た und そして reisten frohmütig in[4] kunstvollen Verschlingungen[5] umeinander[6] und in[4] Paaren durch die Luft. 巧妙なる纏繞となつてお互の周圍をめぐりつゝ且つ二人づゝ組になつて空中を快活に輪舞するのであつた。 Und そして Augustus アウグストゥスは schaute und lauschte 眺め且つ傾聽し und 且つ alle seine zarten Kindersinne[7] 彼の凡ての子供らしい感能をば weit すつかり dem wiedergefundenen Paradiese 再び見出されたる樂園に向つて tat auf.[8] 開いた。[9]

Einmal war[10] ihm, als[11] habe ihm seine Mutter gerufen; フト彼は母親が自分を呼んだ様な氣がした。 aber けれども er war zu[12] müde, 彼は餘りに疲れて居た、 und そして der Pate hatte ihm ja[13] versprochen, mit ihr zu reden. 教父が——さうだ——彼女と話をして呉れると彼に約束したのだつた。 Und そして als er eingeschlafen war, 彼が眠り込んでしまつた時に、 legte ihm der Pate die Hände zusammen[14] 教父は彼の兩手を重ねて［腹の上に置いて］やつた und そして lauschte an seinem stillgewordenen[15] Herzen, 彼の靜かになつた心臟の鼓動を耳をすまして聽いた、 bis そして終に es in der Stube völlig Nacht geworden war. 部屋の中は眞の闇になつてしまつたのであつた。

註。【1】 kleinbrennen は、小さく燃える事ではなく、燃えて小さくなる事である。これは他働詞ではないが、第四卷 423 に說明した結果的客語に相當するのが此の klein である。——【2】 Schoß［發音ショース］膝とは云つても、Knie とはちがふ。 人間が腰掛けた際、または坐つた際に、たとへば子

供を抱く時などに用ひる大腿部と腹部との總稱としての膝である。——【3】 schweben は、ふわりふわりと虛空を浮沈すること。 過去分詞になつてゐるのは既に度々あつた通り、kommen に附くからである。（第四卷 372）——【4】 此の in も、すつと前に in Kreisen（圓を描いて）を說明する時に問題になつた in である。——【5】 verschlingen は、「纏はる」「絡まる」意。 故に複雜な曲線の事を Verschlingung（纏繞）と云つたのである。——【6】 umeinander＝einer um den andern（お互ひの周圍をめぐつて、纏はり合つて）einander に就ては第二卷 159.——【7】 Sinn は複數の時（die Sinne）には五感、感能の事を云ふ。單數の時には必ずしもさうでない事もあるが、五感とは Gesicht（視覺）Gehör（聽覺）Geschmack（味覺）Geruch（嗅覺）Gefühl, 又は Tatsinn（觸覺）——【8】 auftun（開く）の auf に就ては第二卷 144.——【9】 彼のいたいけな天眞爛漫の感能を心行くばかり此の再び見出された樂園に向つて開いた——は實に巧く云つてある。 或物に向つて己が五感を開放すると云ふのは、惘然自失の狀態で見惚れること、恍惚奪魂の體でうつとりと己が視聽を外界に曝すこと。 一たい子供といふものはそんなものである。彼の物に感じ易い（zart, empfänglich）耳目は、外界の印象の前には、自我を沒却して見とれ聽きとれる。——【10】 war es ihm といふ代り。 es の省略に關しては第三卷 277.——【11】 als ob. 第三卷 217.——【12】 zu müde, um ihr zu antworten とでも補へば zu がわかる。（zu……um の形式に就ては第四卷 287）——【13】 ja のかうした用法は、日本語の「さうだ！」といふ自分で云つて自分で首肯する語法を考へてみるとわかる。「それに、さうだ、おちさんがお母さんに口を利いて呉れると約束したぢやないか」の意。——【14】 die Hände zusammenlegen と云ふのは、手を重ね合して腹の上に置いてやることで、臨終の床に立ち會ふものの死人に對する務めである。——【15】 still werden を分離動詞と見た故、過去分詞を一字に書いたのである。

正　誤

【第四巻 326 頁】

「ドイツ語または英語では、かういふ曖昧は決して起りません」以下の表は、

[獨]

wollen können　　欲する事を能ふ
will can

können wollen　　能ふ事を欲する
can will

[英]

[to] be able to be willing　　欲する事を能ふ
can will

[to] be willing to be able　　能ふ事を欲する
will can

と訂正す。